
神を喰らう者～夜明けの開花～

白レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神を喰らう者〜夜明けの開花〜

【Nコード】

N9966X

【作者名】

白レン

【あらすじ】

神を喰らう者たちの戦いは今日も続いていた……そんな中、激戦区と呼ばれる極東支部に初の新型神機使いが誕生した。

人類が全てを取り戻すための戦いが今始まる…。

一喰・贖罪の街（前書き）

初めまして、白レンと申します。

人生初の小説ということで、素人丸出しの内容となってしまう
が、温かい目で読んで頂ければ幸いです。

一喰・贖罪の街

えぐられた様な大地、風穴を開けられたビル群：かつて多くの人が生活していたとはにわかにも信じ難い町並み。

そして、その荒廃した世界を我が物顔で徘徊する異形達の姿があった。

鬼のような顔と模様のある尻尾：人々の間で「オウガテイル」と呼ばれるその化物は今、集団で息絶えた獲物を捕喰していた。

しかし、近くの建物から重く響いてくる足音に、彼らはすぐに食事をやめる。

やってきたのはオウガテイルよりも遥かに大きい、獅子のような姿をした化物「ヴァジュラ」だ。

獲物を見つけたヴァジュラは一気に距離を詰めて、オウガテイルたちの命をあっさり奪う。

仕留めたオウガテイルの群れを、誰の邪魔も無く夢中で貪るヴァジュラ。

だが、その近くにそそり立つ廃ビルに、巨大な武器を担いだ人間が三人：ヴァジャラの命を狙っていた。ヴァジュラの様子を影から窺い、その剣で切り掛かるタイミングを狙っている。

やがて…その内の一人の男が、剣を構えてヴァジュラへ向かって駆け出した。

そして、わずか数分後…その戦いに決着がついた。

力尽きたヴァジュラに三人の内の一人在近づくと、武器を上へ持ち上げる。

すると、武器のパーツがゴソゴソ動き出し、中から黒い大きな口が出てきた。それを向けられたヴァジュラの肉体はあっという間に食いちぎられ、咀嚼されて飲み込まれた。

スルスルっと黒い口を武器に収めた男が、柄の近くで輝く黄色い球体を見て口を開く。

「おっと！レアモノだな〜」

捕喰を通して武器から手に入った素材を見て、雨宮リンドウが呟く。

「戦果は上々…ってやつね」

リンドウの武器を覗き込んでそう口にするのは、この部隊の紅一点、橋サクヤ。

リンドウは頭を掻いて「またサカキのオッサンがはしゃぎそつだ」とぼやく。

「さ、帰りましょ。お腹すいちゃった」

細長い大砲のような銃を肩にヒョイと担いだサクヤのその一言で、一行はその場から引き上げる。

「今日の配給なんだったかしら？」

ふと気になってサクヤが尋ねると、リンドウが口を開いた。

「うん？確かこの前の食糧会議で何か言ってたな……ああそうだ！新しい品種のトウモロコシだ」

「えーまたあのでかいトウモロコシ？あれ食べづらいんだよね」

……」

「このご時世だ、食べるだけでもありがたいと思えよ」

やれやれと、リンドウはサクヤをたしなめる。

先程の異形たち…通称「アラガミ」が闊歩するこの世界で、人類は絶滅の危機に晒されていた。

「絶対の捕喰者」、「世界を破壊するもの」など、様々な呼び方をされるアラガミたち。

彼らの手によって、世界中の都市の交通機関や機能は完全に麻痺し、動植物の生態系まで破壊された。

当然、様々な問題が浮上し、かつて餓死の心配がほとんど無かったこの国ですら、重大な食糧不足に悩まされている。

先程リンドウが口にした『新しい品種のトウモロコシ』とは、質よ
り量を優先して改良した末に生まれたもので、味はともかく量は稼
ぐことができた。

しかし、大きくなったらなつたで今度は食べづらくなる…。

人類にとってはジレンマの一つとなっていた。

「ねえソーマ、何かと交換しない？」

「……断る」

ソーマと呼ばれた青年は、たった一言でサクヤの申し出を拒否した。

「おいお前ら！おいてくぞー！」

リンドウの呼ぶ声で再び二人は歩きだし、今となつては数少ない安
息の地、「アナグラ」へと帰還するためにヘリの待機地点へ向かっ
た。

一喰・贖罪の街（後書き）

次回は主人公の登場、そして適合試験となります。

二喰・適合試験（前書き）

適合試験の話です。印象深かった方も多い場面だと思います。

二喰・適合試験

帰投中のヘリの中でソーマはイヤホンで音楽を聴き、リンドウとサクヤは他愛のない会話をして時間を潰していた。

やがてヘリは、人類最後の砦「フェンリル」…その極東支部に到着した。

日夜アラガミと命のやり取りを繰り返す、人類の生命線となっているこの支部で、リンドウたちは戦っている。

アラガミと戦うために作られた兵器、「神機」を保管庫に収納した後、ミッシヨンの報告を行うためエントランスにいるオペレーターのもとへ向かっている途中、サクヤが軽いグチをこぼした。

「それにしても、やっぱり人手が足りないのよね〜」

生きるか死ぬかの戦いを繰り返す彼らは、常に人員不足に悩まされていた。

「早く新しい人が来てくれるとありがたいんだけど……」

「そういうことならとっておきの情報があるぞ、サクヤ」

サクヤの言葉にリンドウが反応する。

「え？まさか新人さんが入ってくるの!？」

「ああ二人な……一人は旧型銃身神機、もう一人の方は…なんと

新型神機の適合試験を受けるらしい」

「新型神機！うちの支部では初めてね」

サクヤは「素直な子だといいわね」と顔を綻ばせて言った。が、一歩後ろを歩いていたソーマは正反対の事を考えていた。

(チツ……面倒が増えそうだ)

「ようこそ……人類最後の砦フェンリルへ……今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める」

演説で多くの人々を魅了するであろう美声が、円形の広い空間に響き渡る。

ここは、フェンリル極東支部の訓練場。壁にはあちこちに傷や弾痕などがついており、その中央には台座が置かれていた。

普通ではなかなか目にしない光景に少々気圧されている青年を見て、その声の主「ヨハネス・フォン・シックザール」は再び声をかける。

「少しリラックスしたまえ。その方がいい結果が出やすい……心の準備ができたら中央のケースの前に立ってくれ」

「…はい」

青年はそう答えると部屋の中央へゆっくりと向かっていく。

ケースは上下半分に分かれており、それぞれに半円型の赤い物体がはめられていた。その物体がある場所は、あいだに置かれた剣の柄の部分……。

……なんだかものすごく嫌な予感がしながらも、青年は柄に手を伸ばす。

すると案の定、上の蓋がギロチンのように落ちてきて腕をバクンと挟まれた。

「ぐっ……うおおおおああああっ……!!」

グチャグチャと不快な音をたて、手首に堪えがたい激痛が走る。

そしてケースの上蓋が開くと赤い腕輪をつけた青年の腕と、その手に柄をしっかりと握られた剣が出てきた。

青年はその剣を持ち上げ、まじまじと見つめる。

と、その時、柄のすぐ上にある黄色い球体から黒い触手が伸びてきて腕輪に刺さった。

手に黒い筋のような模様が浮かび上がるが、それはすぐに消えた。

「おめでとう。君がこの支部初の新型ゴッドイーターだ」

シクザールの声が響く。どうやら終わったようだ。青年は緊張が解けて安堵の表情になる。

「次に、適性試験後のメデイカルチェックが予定されている。後ろの扉から出て、指定された場所まで行って待機していてくれ。尚、気分が悪い」など症状がでた場合は即座に申し上げるように。期待しているよ、神霧ハイド君。」

「はいっ！」

『神霧ハイド』と呼ばれた青年は、これから始まる激しい戦いに身を引き締め、これから自分の上司となるシクザールにしっかりと返事をして部屋を出ていった。

二喰・適合試験（後書き）

あの試験方法、うっかり手首が潰されたらどうなるんだと見る度に
思います。

三喰・挨拶回り(前書き)

サブキャラ登場回です。大分字を打ったつもりだったんですが以外と量が少なくて「まだまだだな」と思いました。

三喰：挨拶回り

待機スペースに着いたハイドは、自分と同年くらいの男の子がソファに座っていることに気づいた。

オレンジと黒のツートンカラーで統一されたボトムスと靴。シャツには、蜘蛛の巣の模様がプリントされている。

背中には蜘蛛のトライバルマークがあしらわれ、被っている帽子やマフラーはストライプ柄で揃えられている。

（あの服：確か外部居住区で人気のブランドだったっけ…同年…いや、一つか二つくらい下かな？）

そんな思考を巡らしながら自分もソファに腰掛けると、その男の子が話し掛けてきた。

「ねえ、ガム食べる？」

ハイドが「あ、うん」と言っただけでガムを貰おうとする前に、少年がすくに訂正した。

「あ、切れてた。今食べてるので最後だったみたい。ゴメンゴメン」

「え？ああ、そう…」

ハイドはそう答えると少しの沈黙が訪れる。それを先に破ったのは少年の方だった。

「あんたも適合者なの？」

「うん、まあね」

ハイドが頷くと、少年は彼をジロジロと見た。

「俺と同じか少し年上っぽいけど…でもまあ、一瞬とはいえ俺の方が先輩ってことで！」

無邪気な顔でそんなことを言う少年に、自然とハイドも笑顔になる。

「俺、藤木コウタっていうんだ。よろしくう！」

「俺は神霧ハイド。よろしくな、コウタ」

互いの自己紹介が終わったとき、ハイヒールの鳴る音が近づいてきた。

音のする方へ顔を向けると、見る者を圧倒するような真っ白い服に身を包んだ女性がこちらへやってくる。多分上司…それも厳しいタイプののだと悟ったハイドはソファから立ち上がる。

やがてその女性は自分達の前で足を止めるとまだ座ったままのコウタに顔を向けた。

「立て」

「へ？」

「立てと言っている。立たんか！」

そう言われてコウタは素早く立ち上がり姿勢を正す。

「時間がないので手短かに話す。私の名は『雨宮ツバキ』：お前達の教練担当者だ。今後の予定はメデイカルチエックを受けた後、基礎体力の強化、戦術理論の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらおう。今までは守られる側だったかも知れんが、これからは守る側だ：つまらないことで死にたくなければ私の命令にはすべてYESで答える。いいな？」

「はい！」

「分かったら返事をしろ！」

「はいっ！！」

またもやコウタが怒られ、若干恐怖の入り混じった返事をする。

（俺たちこの先大丈夫かな？）

とハイドは思う。一通りの説明が終わったところで、ツバキが手に持っていたファイルを確認した。

「まずは神霧ハイド、お前からだ。榊博士の研究室に一五　までに集まるように。それまでこの支部を見回っておけ。今日からお前達が世話になる、通称『アナグラ』だ。挨拶の一つでもしておくように」

「はい！」

するとツバキの後ろから声がした。

「あ、ツバキさん！ちょうどよかった。ミッションの報告書の件で話が…」

そう言ったのは赤いジャケットに白いチノパンの二十歳くらいの男性だった。隣に青いジャケットを着た男性と、緑のワンピースを着た薄桃色の髪の女の子もいる。

「ああ、お前達か…ちょうどよかった。今日から極東支部に配属になった新人を二人紹介する。」

「新人ですか！じゃあ名乗るときは自分から！俺は第二部隊、防衛班班長の大森タツミだ。よろしくな！」

爽やか、かつ快活な声でタツミは自己紹介する。

「俺はブレンダン・バーデル。同じく第二部隊に所属している。頼りにしてるぞ」

と、ブレンダンは挨拶する。低くてしつかりしている声は、逆にいざという時本当に頼りになりそうなイメージを与える。

「あの、私台場カノンっていいますっ！お菓子作ったりするのが好きなので、二人にも作ってあげますね。」

カノンは可愛らしい挨拶で二人に（この時だけは）いい印象を与えた。

「本日付けで入隊となりました、神霧ハイドです。皆さんに少しでも早く追いつくために一生懸命頑張ります」

「おう！頼むぜ。新戦力はいつでも大歓迎だ」

ハイドの挨拶にタツミが答える。本当に気さくな人なんだな、とハイドは思った。

「俺、藤木コウタ！よろしくお願いしまっす！」

「フ、明るく元気だな。今時珍しい」

ブレンダンは穏やかな表情でコウタを見る。

確かに今、人類は窮地に立たされている。死ぬ可能性が高いこの世界で、これだけ明るい人間は逆に珍しいだろう。

「まあとにかく死ぬなよ？絶対生き残るんだ！いいな？」

『ハイ！』

二人が返事をしたのを見てツバキが口を開く。

「よし。ところで書類に関する話とはなんだ？」

「ああ、そうでした！今日のアラガミとの戦闘で破損した外壁のことなんですけど……」

なんだか難しい話になってきたのでハイドとコウタはその場を離れた。

「はあ〜…怖かった〜…」

ツバキから離れた場所でうなだれるコウタ。

「大丈夫か？」

「まあね。でもよかつたよ…厳しい人ばかりってわけじゃないみたいだし」

「ああ、タツミさん達のことか…確かにね」

「でもさ…やっぱり後輩いびりとかする先輩もいると思うんだよな」

「あれ？お前から見ない顔だな？」

「え？」

二人が振り返ると、帽子を斜めに被ってパーカーを着た少年と、首に直接ネクタイを巻いた金髪の青年、そして胸元を大胆に露出させ、眼帯を装着した銀髪の女性の三人が立っていた。

「お前から新人か？」

金髪の青年が質問したのでハイドが答える。

「本日付けで入隊した、神霧ハイドです」

「俺、藤木コウタ！よろしく！」

二人が挨拶したところでコウタの挨拶を聞いた帽子の少年が一步前

に出てコウタと向き合う。

「お前先輩に対する口の聞き方がなってねえな。」

「え？」

「先輩に対して今の口の聞き方が馴れ馴れし過ぎるっつってんだよ！」

「やめなさい…シユン。あなた本当は後輩ができて嬉しいんでしょ？素直じゃないわね…」

横から入ったのは眼帯の女性だった。シユンと呼ばれた少年は苛立たしげに女性を睨む。

「うるせえっ！…ったく、まあいいや。俺は第三部隊所属の小川シユンだ。ま、せいぜい死なねーように気をつけな！」

そう言っつてシユンは行っつてしまった。

「まったく、生意気なのはお前も同じだろつての…。同じく第三部隊所属のカレル・シユナイダーだ。よろしくな…言っつておくが、俺より活躍するのはやめるよ？配給の低い任務しか回っつてこなくなるからな」

そう言い残しカレルも行っつてしまった。

「な…なんなんだあの二人…」

二人…特にコウタの方は啞然とした表情で固まっつていた。

「気にしないで。あの二人はいつものことよ…。私はジーナ・デイ
キンソンよ。ジーナってよんでちょうだい」

「は、ハイ」

大人の女性らしい色っぽい声にコウタは思わず緊張してしまう。

「あ、あの…ジーナさん…」

「何？」

「失礼なこと聞きますけど…あの…その…どうしてそんなに胸を開
いてるんですか…？」

「ああ、これね…私なりの価値観ってやつかしら…戦っているとき
はこの世に私とアラガミだけ…私はアラガミと命で向き合っている
だけ…その間を隔てるものは私には必要ないのよ…」

ジーナの独特の感性に二人は呆気に取られていた。

「あ…二人共行っちゃったからミッシヨンの報告私がいなくちゃい
けないのね…悪いけどもう行かなくちゃ。じゃああなたたちも頑張
ってね」

そう言い残しジーナは立ち去って行く。

「なんていうか…すごいね」

ジーナの後ろ姿を見ながらハイドは思わず口にした。

「…ホントだよな」

コウタも同感であった。

「…ハイド、そろそろ時間じゃないか？」

「ああ、そうだな。じゃあ行ってくるよ」

(一五　までに集合だったな…少し急いだ方がいいか?)

時間を確認したハイドは足早に、榊博士の研究室へと向かった。

三喰・挨拶回り（後書き）

ジーナ姉さんは色っぽいですよね〜声優さんもけっこうエロい感じで演じてましたね（笑）

四喰：検査と責務と訓練（前書き）

シツクザールの眠くなる話とサカキの怪しい検査と鬼教官ツバキの訓練の話です。

四喰：検査と責務と訓練

ハイドは榊博士の研究室があるという「ラボラトリ」の区画へエレベーターで移動し、表示を見ながら廊下を歩いていた。

研究室へ向かう途中、すれ違う他のゴッドイーター達がみな物珍しそうな目で見てきた為、ハイドは少々むず痒い思いをしながらも、なんとか目的の場所へと到着する。

中に入ると、モニタやキーボードなど、機械に囲まれてせわしなく指を走らせる狐目の男、そしてその隣に白いロングコートを着た、端正な顔立ちの男がいた。

「ふむ…予想より726秒も早い…よく来たね、神霧ハイド君！私は『ペイラー・榊』…アラガミ技術開発の統括責任者だ」

榊はハイドに名乗ると、休めていた指を再び走らせる。

「さてと…見ての通り、まだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

彼はそう言っつて隣の男を見た。

「榊博士…そろそろ、公私のけじめを覚えていただきたい。先程の適合テストではご苦労だった…私の名は『ヨハネス・フォン・シツクザール』…この地域一帯のフェンリル支部を統括している」

シツクザールは名乗った後も、後ろで手を組んだまま話を続ける。

「…さて、我々フェンリルの目標を改めて説明しよう。君に課せられた責務は、この地域周辺のアラガミの撃退と、その素材を持ち帰ることだ」

キーボードを叩く音と共に説明が続く。

「そして、それらは全てここ…前線基地の維持と、来るべきエイジス計画の資源として使われる…」

「この数値はっ…！」

突然榊の声が横から割ってきて説明が中断される。

ハイドは驚いて顔を榊に一瞬向けるが、すぐに姿勢を正しシッケザールと向き合う。

「エイジス計画…外部居住区のメディアでもよく取り上げられているあの…」

「そう…『人類の楽園を作る』という理念のもとに進められている計画だ。正確には、旧日本海付近に…外部居住区のものとは比べものにならないほど強固な、対アラガミ装甲壁を展開した人工の島を作り、そこに人々を住まわせるというものだ」

「ほほー…！」

また榊の声が割って入るがシッケザールは無視する。

「この計画が成就すれば…少なくとも人類は当面の間、絶滅の危機を遠ざけることが出来るはずだ」

「すごいっ！！！！これが新型かあゝ！！！」

「ペイラー…説明の邪魔だ」

ついに堪えられなくなり、シックザールが榊に注意する。

「ああ、ゴメンゴメン！ちょっと予想以上の数値に舞い上がっちゃったんだゝ」

榊の様子にため息を漏らすシックザール。

「…ともあれ、人類のためだ。尽力してくれ。では、私はこれで失礼する…ペイラーは検査が終わったら、私にデータを送っておいでくれ」

シックザールはそう言って、部屋を出て行った。

「よし！準備は完了だ！そのベッドに横になってくれ。少し眠くなるけど心配はいらない…次に目が覚めたときは自分の部屋だ！戦士のつかの間の休息というやつだね…予定では10800秒だ…ゆっくりおやすみ…」

何されるんだろうと若干…いや、かなり不安になりながらハイドは横になり検査が始まった。

眠ったハイドを部屋へ送った後、柙は自分専用のターミナルにアクセスし、ハイドの計測データを見ていた。

（ふむ…ただでさえ適合しにくい新型神機に選ばれ、なおかつソーマ並の適合率の高さ…間違いないなく即戦力となる逸材だね…）

現在世界に新型神機使いは数えるほどしかない…その中でもハイドの潜在能力の高さは群を抜いていた。

「指導方法や成長次第では世界最強のゴツドイーターになるかもしれないな…」

そう呟いた彼は、比較的まずいコーヒーを口にした。

やがてハイドは、新人区画の一室で目が覚めた。ぼやけている視界が鮮明になってくると、自分がいる部屋を見回す。

「…ここが、俺の部屋か…？」

まだ新しいのか、小綺麗な部屋だった。外部居住区にいた頃とはえらい違いである。

「そういえば眠ってる間は検査があったんだっけ？」

そこでハイドは自分がいつの間にか寝巻きに着替えていることに気づく。

(あれ…？いつ着替えたんだ…？まさか神博士が？いやいやまさかそんな…)

と思いつつも、言い知れぬ不安が積もる…。

(……………っ！)

突然ガバツと上着を脱いで、上半身裸になるハイド。

両手で身体中をぺたぺた触り、切られたり縫われたりされていないか確認する。

「…ふう…」

なんともないことがわかり安堵するハイド。おもむろにベッドから起きて伸びをしたあと、クローゼットに向かって歩いていく。

中にはやはり、昨日着ていたフェンリル支給の隊員服が掛けられていた。(それも同じデザイン、同じ色が何着も)

他の服は駄目なのか？と疑問に思いつつ服を着替える。まず右手を通して…。

「…んっ？…あれ？」

やはりというか…右手についている大きくて無骨な腕輪が引っ掛か

っていた。

「ふん！この…！ちょ…おまつ…！往生際がっ…悪いぞ…！」

ひたすら腕輪と格闘するハイド。10分ほど時間をかけてようやく袖が通った。

「っだあ…着づらいな…！」

頑張りすぎて腕が痛い…。

とりあえず服を着替えることができたハイドは、部屋の外に出た。すると、正面のエレベーターの近くにシュンが立っていた。隣にコウタもいる。

「おう、やっと目覚めたか」

シュンは待ちくたびれたぞ、といった口調でハイドに言う。

「小川さん？どうしたんですか？」

「俺達を迎えに来てくれたらしいよ？今日から訓練が始まるからさ」

ハイドの問いにコウタが答える。

「おら、さっさと行くぞ！早くしないと俺がツバキさんにどやされるんだからな！」

シュンの呼びかけで一行はエレベーターに乗り、エントランスへと向かった。

三人がエントランスに到着すると、階段を降りた先を指差してシュンが言った。

「あそこにオペレーターがいるんだ。その人に話し掛けて、『訓練ミッション』を受注してこい。受注が完了したらあそこの出撃ゲートから出て、案内表示に従って行けば訓練場に行けるぜ」

「わかりました」

ハイドがにこやかにそう言うとシュンは「フン」とそっぽをむいた。

「じゃあ俺は部隊の方に戻るからな！訓練でいきなり死ぬなよ」

ひらひらと手を振って、シュンはゴッドイーター用ターミナルへと向かっていった。

それを見て頷きあつたハイドとコウタは階段を降りて行く。するとそこには…。

「やあヒバリちゃん、今日もかわいいねえ」

「もう、タツミさん！他の方々の邪魔になるのでそういつことはやめてください！」

……いきなりナンパ現場に遭遇……。

「どうする？ハイド」

コウタはタツミの新たな一面を見せられて少し引いている。

二人はなんとかオペレーターらしき人に話し掛けようと試みるが、タツミが一瞬たりとも間を空けずに話し掛けるのでなかなかタイミングが掴めない。

(タツミさんには悪いけど、こっちも急がないといけないしな……)

「あの！すいません！」

ハイドの大きな声でタツミとヒバリが振り返った。

「おう、ハイドにコウタじゃねえか！」

「……ああ！新人さんの方々ですね！はじめまして、オペレーターの『竹田ヒバリ』といます！」

ヒバリと名乗った女性は、綺麗なお辞儀で挨拶した。

「ミッションの受注や報酬の受け渡しなどは私が行いますので、これから関わることも多くなると思いますが、よろしくお願いします！それで、どういったご用件でしょうか？」

ヒバリの質問にコウタが答える。

「えっと…訓練ミッションを受注したいんだけど…」

「了解しました！ツバキさんが用意されたミッションが届いています
…準備ができましたら出撃ゲートから指示に従って第一訓練場へ移
動してください」

そう言っつてヒバリは、同性でも惚れ惚れするような笑顔を二人に向
ける。

「わかりました。よし…行こうかコウタ」

「おう！」

そして二人は来た道を戻って出撃ゲートへ向かう。その途中「でさ
くヒバリちゃん…」とか「ああっ！いつの間にかこんなに並んで
る！！」という声が聞こえたが…。

ゲートから出たハイドとコウタは、壁に設置されてるインフォメー
ションに従って進んでいく。

「最初は基礎体力の強化とか言っつてたけど、なにやらされるんだろ
う？ハイド、なんか聞いてる？」

歩きながらコウタはハイドに聞いてみる。

「いや、何も聞かされてないけど…」

「そっかぁ…まあなんとかなるっしょ！」

コウタはニカツとして言っつた。それを見てハイドは「ふふっ」、と

笑った。コウタの笑顔が怪訝な顔に変わる。

「なーに笑ってるんだよ……」

「いや、ゴメンゴメン……コウタは前向きだなって思ってた」

とハイドは言った。

良く言えば前向き、悪く言えば楽観的……戦場では危うい要素かもしれない。

だが今は、エイジス計画というわずかな希望しかないこの世界で、コウタの前向きな言動は非常にありがたい。

戦いの前の緊張を程よくほぐしてくれそうだった。

「後ろ振り返ったって仕方ないだろ？それに過去にこだわってたらいつまでたっても前には進めないしさ……だったら俺は常に前向いていこうって決めてるんだ！」

そう言ってまた笑顔になるコウタ。

「さ……て……今日の訓練とやらを片付けるか！」

「ああ、そうだな！」

たどり着いた訓練場の入口の前で気合いを入れ直す二人。シュツと自動ドアが開き二人は中に入った。

（この部屋……適合試験を受けた部屋に似ているな……ひょっとしていくつか同じ部屋があるのかな？）

そんなことを思いながら部屋な中央に進むハイドとコウタ。そして二人の向かう先にはツバキがファイルボードを持って待っていた。

「ふむ、時間通りだな…よく来たな二人共」

ツバキが二人に向かってそう言うと、ファイルを見ながら説明を始めた。

「では早速トレーニングを開始するが、その前にまず簡単な説明をしよう。お前達二人やその他の者達、私のような現役を引退したゴッドイーターまで、皆腕輪からオラクル細胞を投与している…オラクル細胞についての詳しい説明は、近いうちに榊博士が講義を行うので、そこで学ぶように。そしてそのオラクル細胞は、人体への投与に成功すれば、身体能力を爆発的に引き上げてくれる。筋肉の瞬発力や持続力、反射神経や動態視力、聴力など身体中のほぼ全ての器官が強化される。よってそれに比例したトレーニングメニューとなるのでそのつもりで」

『は…はあ…』

なんだかよくわかってなさそうな二人を無視してツバキは話を続ける。

「ではまず腕立て伏せからだ！回数1500回！一秒に一回のペースでこなしてくれ」

…………え…………？今この人なんて言った…？1…500？桁がひと

「違うような気がする……。」

「あ……あの……ツバキさん……。」

「コウタが控えめに手を挙げる。」

「なんだ？」

「なんか……桁がひとつ違うような気が……。」

「そうか……お前は15000回やるんだな……訓練熱心な奴だ。」

「15000回！やらせていただきます！」

「フツ、冗談だ……まあ、心配するな。たとえ仮にまったく腕立て伏せができない者でも、オラクル細胞を投与すれば700くらいは出来るようになる。」

「さらっととんでもないことを言ったツバキ。」

「さあ、さっさと終わらせないと次のメニューがいつまでたっても消化されんぞ！」

「こうして鬼教官ツバキの『楽しい新人クッキング』がスタートした。」

四喰：検査と責務と訓練（後書き）

ツバキがちょっと鬼すぎたかな…と書き終わったあとに思いました。

五喰・睡眠と食事を知る者（前書き）

トレーニングを受けて疲れて飯食ってシャワー浴びて寝るといっ話です。

まるで部活です。

五喰・睡眠と食事をする者

「……………コウタ……………生きてるか……………？」

「……………へっ…へへっ……………全然…大丈夫だあ……………」

(全然大丈夫じゃないな……………)

ツバキ教官のもとでひたすらトレーニングに励んでいた二人は、もはや立ち上がる気力すらなかった。

何せ腕立て伏せのあと……………。

- ・背を預ける場所がない状態で腹筋
- ・腹がつかない状態で重りを背負つての背筋
- ・高さ3m70cmに設置されたマーカーにタッチしなければなら
ないジャンピングスクワット
- ・剛速で飛んでくるボールをフェイスガード無しで避ける

…等のメニューを消化していたのである。シユンが「訓練で死ぬなよ」と言っていた意味がよくわかった二人である。

「しかし驚いたな…全てこなしてしまうとは……………」

『……………へ？』

「大概是トレーニングのあまりの密度の濃さに途中でリタイアしてしまうのだが…全てのメニューを消化した新人はいつ以来だったか…まあいい。二人とも今日は本当によく頑張った。ゆっくり休め」

「……………てことは無理して全部やらなくてもよかったってこと？」

コウタが落胆の悲鳴をあげる。

ハイドも大声をあげて不満を漏らしたかったが余計疲れるのでやめた。

そもそも彼ら二人が、何故メニューを全てこなしてしまったのか？

それは、ハイドがペースを乱さずに黙々とメニューをこなしていくのを見ていたコウタが、「負けられない！」と張り合ったせいなのである。

そしてハイドもそんなコウタの気配を肌で感じ取り、「そうはいくか！」と同じく張り合ってしまったのだ。

そんないきさつで、二人は己の筋肉と体力の限界に挑んでしまった。

「…戻ろうかコウタ？なんなら手を貸すぞ？」

ハイドは気力を振り絞って立ち上がり、床でへばっているコウタに手を差し延べる。

「ふ、ナメるなよ…このコウタ様の底力をお！」

そう言っ腕に力を込めるが…立てない…。

「…ハイド…立ち上がるのだけ手伝って…」

言われてハイドはコウタの手を引き、立ち上がらせる。

なんとか自力で立っているが、生まれたての動物のようにコウタの膝はガクガクしている。

やがてバランスを崩し尻もちをついた。

「悪い……手え借りるわ……」

ハイドはコウタの右腕を自分の肩にまわして、歩きだす。

「帰れそうか？」

ツバキは自分もフラフラなはずなのに他者に手を貸すハイドに言った。

「……なんとか頑張ります…失礼します」

そう言つてハイドとコウタは訓練場を出た。

なんとか根性でエントランスに戻った二人は、ヒバリのもとへ向かった。「あ、ハイドさんにコウタさん……大丈夫ですか？」

「まあ……なんとか……」

ボロ雑巾のような二人を見てヒバリは頬をひくつかせた。

事情を知らぬ通行人は「何があったんだ？」という目で二人を見ている。

「とにかく、ミッションは完了しました」

ハイドはとりあえずミッション完遂報告をする。

「了解しました！では、こちらの書類にミッションの参加メンバーと任務地、ミッション中に行ったこと、それからミッション完了後の自分を含めた部隊員の状態を記入して下さい！『環境及び建造物の破損状況』の項目は、今回の任務には該当しないので記入の必要はありません…何かわからないことはありますか？」

と、ヒバリは書類をカウンターの下から取り出して説明をする。

「いえ、大丈夫です」

力なくハイドはそう言うと言った書類を受け取り、コウタに持たせた。自分はコウタを支えることに両手を使ってしまっているからである。

「原則として、ミッションの報告書の提出は、『そのミッションの完遂報告を行った時刻から24時間以内』となっております」

「わかりました」

（24時間か…今すぐに書いてゆっくり休まないと身体がもたないな…）

そのとき左肩がズシツと重くなった。そして自分の足元に、さつき受け取った書類が落ちている。

ハイドがコウタの方を見ると、彼はすーすーと寝息を立てて眠って

いた。

(眠っちゃったのか…)

ハイドは書類を拾うと口にくわえた。そしてコウタを手近なソファに寝かせる。そして、テーブルの上に書類を置くと改めてヒバリの方へ戻った。

「コウタさん、今日は頑張ったんですね…立ってても眠っちゃうなんて…」

「そうですね…まったく同じメニューこなしてた僕が言うのもなんですけど…」

そう言っつて二人はコウタの方を見る。横向きだった体勢が仰向きになり、安らかな寝息はいびきに変わっていた。

「熟睡してますね」

「クスクス…それではこちらが今回の任務の報酬です」

ヒバリは二つの袋と10と刻まれたfc『フェンリルクレジット』
硬貨12枚(二人分)を手渡す。

「袋の方には、戦闘で使われる消費アイテムが入ってます!これからたくさん使うことになるので、持っていて損はないと思います。
…ちなみに本来はこの袋に、討伐したアラガミの素材が封入されます」

「ありがとうございます」

礼を言ってハイドは報酬を受け取ったが、もう全身が笑ってしまったので少しでも気を抜けば落しかねなかった。

「お疲れ様でした！ ゆっくり休んで下さいね？」

「はい…」

ようやく報告が終わったハイドは、眠っているコウタの横に腰を下ろす。

(…明日筋肉痛で動けないとかないよな…)

勤務初日でこの疲労感…まさにお先真っ暗である。

(さて…ペンも満足に握れないけど、さっさと報告書片付けるか…早く身体洗って寝たいし)

そんな思考をしてハイドは報告書にペンを向けた。

「……………ウタ……………」
「コウタ！」

「……………んあ？」

ハイドの呼び声にコウタは目を覚ます。

「…あれ？俺は…」

「誰？…とか言つなよ？お前、報告書の説明受けている最中に眠っちゃったんだ。1時間くらい寝てたよ」

「…そつかあ…じゃあ、あと10時間…」

「寝るなよっ！報告書はもう片付けたから、あとは食事とってシャワー浴びるだけだ」

ハイドの言葉にコウタが反応する。

「食事…飯…メシ！」

言われて急に空腹を覚えるコウタ。

「ほら、食堂いくぞ」

「おう！」

いきなり元気が出てきたコウタであった。

食堂にたどり着くと、中には食事をしているゴッドイーターたちが何人かいた。

が、皆任務に駆り出されているのか人数は少ない。二人が食堂の中を見回していると後ろから配膳係のおばちゃんに話し掛けられた。

「おや、見ない顔だね…新人さんかい？」

「ええ、まあ」

ハイドはおばちゃんに返事をする。

「勤務何日目なの？」

「まだ初日だよ」

今度はコウタが返事をする。

「そうかい…新人の初日の訓練といえば『あれ』だからねえ…二人とも大変だったでしょ？」

（大変なんてレベルの話じゃないなあれは…）

などとハイドとコウタは静かに思う。

「じゃあ、そんな二人にはこのメニューだね！『フェンリル特製栄養特化定食』！」

おばちゃんは、どん！とカウンターに定食の載ったトレイを置いた。

「何それ…」

コウタが怪訝な顔をする。明らかに怪しい…名前が。一步引いてしまっても仕方がない。

「フェンリルはもともと生科学の研究をしていた会社だったんだけど、大きくなるにつれて様々な事業に手を出すようになってね」

『サカキ博士！』

二人はいつの間にか自分たちの後ろに立っていたサカキに驚くが、彼はまったく気にせず説明を続ける。

「その中でも特に力を入れていたのが、製薬や栄養に関する研究で、その技術を結集したこの定食は、完食すれば一日に人体に必要な栄養素を全て、無駄なく摂取出来るのさ！」

「マジっすか!？」

コウタは驚いた後、おばちゃんが出した定食をまじまじと見つめる。

「しかも、フェンリル独自の科学技術で、全ての栄養素それぞれを身体に吸収しやすくする成分も入ってるんだよ。勤務初日の新人くんは朝から何も食べてないからね…おまけに筋肉をメタメタに痛め付けるし…だから味の保証は出来ないけど、今まで新人くんには例外なくこのメニューを出しているというわけさ」

味の保証はできればしてもらいたいのだが、腹に収まれば何でもいいやとハイドは思った。このご時世だ、贅沢は言ってられない。

「わかりました」

ハイドの返事を聞いたおばちゃんは、片手を差し出した。

「じゃあ一人50fcね！」

「……………」

今二人の所持金はそれぞれ60fc……ここで50fc払えば残りは……。

「コウタ……………」

「……………何？」

「……………無駄遣いは禁物だぞ…………？」

「……………了解……………」

二人は泣く泣くお金を払い、定食が載ったトレイをテーブルまで持っていった。

「大丈夫かな……………味……………」

定食とはよくいったもので、コップに注がれた飲み物はオレンジ色の液体で、皿に盛りつけられたものも全て『レーション』という栄養食品である。

「……………いただきます」

覚悟を決めて二人はフォークを手を取った……………。

食事が終わったあと、二人はシャワールームに来てシャワーを浴びていた。

「なあ、ハイド」

頭を洗いながらコウタが隣の個室にいるハイドに尋ねた。

「何？」

「あの定食割と美味かったよな？」

「ああ、そうだな」

予想に反して味は普通だった…いや、それどころかむしろおいしかった。空腹の度合いがその味を助けているのかもしれない。

勤務初日の新人しか食べられない貴重な定食は、また食べたいと思う人が何人もいるとおばちゃんも言っていた。

ハイドが背中をタオルでわしわし洗っていると、コウタが愚痴をこぼす。

「な…やっぱりココしんどくね？トレーニングは量多いし、収入は

少ないし……」

「収入が少ないのはアラガミを倒してないからだと思っけど……」

「ていうかさ……やっぱりこの腕輪邪魔なんだよね……身体洗う途中でゴツゴツ当たって痛いし……」

「……確かに」

実際ハイドも頭を洗っているとき、何度か腕輪をぶつけていた。

「これって肉体と完全に融合してるから一生取れないんだろ？」

「らしいね……まあそのうち慣れるよきつと」

二人は何とか一通り身体を洗い終わりシャワールームを出た。

「じゃあ、お互い明日も頑張ろうぜ！」

新人区画の自室の前でコウタが言った。

「うん。……あ、コウタの部屋って隣なんだ！」

朝はすぐにシユンについてエントランスに移動したため確認していなかったが、コウタの部屋がハイドの部屋の隣に位置している。

「おう！いつでも遊びに来ていいからな！んじゃっおやすみ」

「ああ、お休み」

笑顔でハイドはそう答えると自分の部屋に入る。

改めて見ると本当に綺麗な部屋だった。

「外部居住区の皆…どうしてるかな…」

ゴッドイーターとなった自分は今、（この時代にしてはだが）随分と優遇された立場にいる。

配給や報酬もあるし、寝床もしっかりしている…その上、アラガミと戦える力まで手にした。

外部居住区の皆と別れるとき、一部の人間から羨望と嫉妬の眼差しで見られ、ハイドはそのことに申し訳なさを感じていた。

「……………寝るか」

ハイドはベッドに潜り込み、明日以降の生活に思いを馳せる。

休みになったら皆にお土産をいっぱい持っていこう…それがゴッドイーターになった俺に出来ることだから…。

そんなことを思っていたが、目を閉じた瞬間に疲労しきった肉体がすぐさまハイドを眠りの海に引きずり込んでいった。

五喰・睡眠と食事を貪る者（後書き）

フエンリルに食堂ってあるんでしょうか？…あるハズ…きつとあるハズ…。

六喰・兵装訓練（前書き）

ハイドが神機の扱いと強化方針について悩みます。そしてようやくリツカの姐御登場です。

六喰：兵装訓練

あの地獄の特訓から一週間が経過した…。

すでにハイドとコウタは、オラクル細胞と適合して強化された身体に慣れており、引き出す力も理論上はほぼ100%という、計測器からの結果も得ていた。

今二人は神機の扱い方について学んでいるが、それもすでに最終過程となっていた。

「……以上のように、異なるオラクル細胞を捕喰した神機はそれを解体、生成することでバレットを入手できる。それは『アラガミバレット』と呼ばれ、どんな弾が手に入るかは捕喰したアラガミによって異なる」

ツバキの声がスピーカーを通して訓練場に響き渡る。

「このバレットは、アラガミに対して撃つことも可能だが、仲間の神機へ撃ち渡すことでその神機使いを強化することができ、更にその神機の中でアラガミバレットを解体、生成することで『濃縮アラガミバレット』を入手できる。通常のアラガミバレットより強力なうえ、そのバレット、及び神機使いのバーストレベルを二段階まで引き上げることができるようになる…」

真剣な表情でツバキの説明を聞くハイド。コウタも『ツバキの話』とあって、いつも襲ってくる睡魔が今日は来なかった。

「これが新型神機使いの新しい戦術、『リンクバースト』だ。なお

『リンクバースト』は、使用者の身体的ダメージが大きくなるのを防ぐためにLV3までしか発動できないよう調整されている…ここまでの説明は理解できたか？」

「はい！」

ハイドはツバキの長い説明を理解しハッキリと言いつつ切った。

「よろしい！では、早速演習を始めよう！」

そう言つてツバキが合図を送ると、床から牙が片方欠けた大きな獅子が競り上がってきた。

「うわあっ！」

横にいたコウタがビックリして飛びのき、ハイドは身構えたが、その獅子はぴくりとも動かない。

『……………？』

「安心しろ…それは訓練用のダミー模型だ」

ツバキの言葉に二人は安心する。それはそうだろう…いくら鬼教官ツバキだからといって、なんの実戦経験もなくこんなアラガミと戦わせたりするはずがない。

「ハイド！その模型の中には、オラクル細胞の詰まったパックが埋められている…模型を捕喰してバーストした後、コウタにアラガミバレットを受け渡せ！」

そういうことが、とハイドとコウタは理解した。

「了解！」

ハイドは神機に意識を集中する。すると神機のパーツがモゾモゾと動き出し、中から黒い大きな口が出てきた。

それを模型に向けて突き出すと捕喰が始まり、模型の外殻とともに中に詰まったパックが口に飲み込まれた。

その瞬間、ハイドは身体の奥底から膨大な力が湧き出てくるのを感じた。

「これが…バーストか…！すごい力だ…！」

オラクル細胞が活性化した影響で身体中が発光し、ありとあらゆる感覚が研ぎ澄まされていく。

続いてハイドは、神機を剣形態から銃形態へと変形させるため、神機を握っている右手に意識を集中させる。

神機は捕喰形態に加え、剣、銃、装甲の展開など、ほぼ全ての動作を神経伝達によって行うことが出来る。いわば体の一部だ。

剣が収納され、収納されていた銃が顔を出した。そして入手したアラガミバレットを装填し、コウタの神機に向けて発射する。

光を纏ったアラガミバレットはコウタの神機にまっすぐに飛び、命中した。

「うおおおおお！！すっげえ！！」

コウタもまた溢れ出す力に驚いた。神機からはまがまがしいオーラまで出ている。

「よし！バーストの演習はこれで終了だ…コウタ、お前は先に戻れ！ハイドにはいくつか言っておかねばならんことがある」

「え？あ…はい！わかりました。じゃあハイド、俺先に戻ってるからな」

「ああ…」

コウタが訓練場を出たのを確認して、ハイドはツバキの方へと体を向ける。

「お前だけ残してすまん…」

「いえ…話つてなんですか？」

ハイドはツバキが自分をこの場に残した理由を聞いた。

「お前には特に、努力してもらわねばならないんだ…」

「？はい、もちろん頑張りますが…」

ハイドはツバキが何を言いたいのか、いまいち掴みかけていた。

「チームに一人投入するだけで…ミッションの成功率の向上や隊員の生還率の向上…ミッションに要する時間の短縮にまで貢献すると

言われている新型神機使い…それにお前は選ばれてしまった…」

「……………」

「一人で遠距離、近距離それぞれをこなすという戦法…戦闘中に神機を変形させるといふ今までにない動作…剣、銃、装甲、それぞれ三種…計九種類の兵装を扱うなど、新型神機使いにかかる負担は大きい…それゆえお前には、通常の神機使いよりもやらなければならぬことが山ほどあるんだ…」

ああ、そういうことかとハイドは納得する。

「それにこの極東支部の連中は、新型神機使いを見たことがない…お前にかかる期待も大きくなるはずだ」

「ツバキさん…」

ハイドが口を開いたので、ツバキは一旦話を止めた。

「選ばれてしまった以上仕方ないことですよ…それに拒否権もないんでしょう？まあ『嫌だ』とか『やめたい』とか言う気もありませんが…。ただ、僕が努力することで皆の負担が軽くなるのなら…どんなに沢山のことをこなすことになっても構いません！」

そう言い切ったハイドの瞳には強い意志が宿っていた。

「…そうか…つまりんことと呼び止めてすまなかつたな」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

「私から言いたいことはそれだけだ。戻っていいぞ」

「はい！」

そしてハイドも訓練場から出ていった。

ガラス越しに訓練を見ていたツバキの横で、データを取っていた研究員が彼女に話しかけた。

「強い子ですね……」

「フ……ああ……そうだな」

ハイドは神機を『神機保管庫エリア』に格納したあと、整備場へと向かった。

聞いておかなければいけないことがある……その話の内容的に、ツバキよりも実際に整備している人に聞いた方がいいと判断したからだ。整備場の中は、汗と白いタンクトップとゴーグルの男達の巣窟だった。その中の一人がこちらに気づいて近づいてきた。

(……随分と華奢な人だな……というより……女の子?)

男ばかりだと思っていた整備場には女の子が一人だけいた。

顔に少し黒い汚れがついているが、そのせいで元々の肌の白さが際立ち、つぶらで大きな瞳は幼さを残している。

セミロングの銀髪の上にゴーグルをのせ、手に大きな手袋をはめている。

「あれ？見ない顔だね…新人さん？」

女の子は腕を組み、小首を傾げて聞いた。

「はい、先週入隊した神霧ハイドです」

ハイドは「今更だけどまだ挨拶してない人がいたんだな…」と思った。

この一週間で一通りは済ませたはずだったが、四日目あたりまでは神機に口々に触っていなかった為、神機整備をしている人に挨拶するのをすっかり忘れていた。

「私はリック！『楠^{くすのき}リック』っていうんだ。第一から第三部隊までの神機の整備担当者だよ！よろしくね」

リックは作業用手袋を外してハイドと握手した。……………意外と力強い。

「それで何の用？確か君が新型神機使いなんだよね？新型神機について何か分からないことがあって、それを聞きに来たって感じかな？」

「あ、はい…新型神機の変形時間の短縮方法と、パーツの制作方針です」

「あゝ新型神機特有の悩みってやつか…」

リツカは首を捻って考え込むが、少しの間をおいて口を開く。

「神機の変形については…残念だけど慣れるしかないね。神経伝達で変形してるから、慣れれば動作も速くなると思うよ？ただ、変形機構のパーツが摩耗したりすると、少しだけタイムロスが出るから、神機の変形に違和感を感じたらすぐに教えてね！」

「慣れ…ですか。わかりました」

「あとはパーツの制作と強化の方針だね。『この方がいい』みたいな定義は特にないけど…最初は属性値の高さよりも、その人の扱い易い武器を優先して強化した方がいいと思うんだ。どの武器や装甲も、満遍なく強化出来ればそれが一番いいんだけど…そんなことしたら手持ちの素材もお金も無くなっちゃうしね。まずは君にとって使い易い武器の組み合わせを探してみたらどうかね？」

と言った後、リツカは人差し指で頬をポリポリと掻いた。

「…まあこれは私の個人的見解だから、あまり参考にはならないかも知れないけど…」

「いいえ、すごく参考になりました！ありがとうございます！」

「ふふっ…どう致しまして…ところで君って、いくつなの？」

リツカはふと興味が出てハイドに質問する。

「え？…18ですが…」

「ダメじゃん！敬語はやめてよ〜」

「いや、リツカの年齢知らなかったし…」

「順応はやっ！」

「……………ぷ……………ぷ……………」

「…ふ……………あははっ」

二人はひとしきり笑ったあと…。

「んじゃ、改めてよろしくねハイド」

「こちらこそ、世話になるよリツカ」

「リツカの姐御お〜！！ちょっと来て下さ〜い！！…」

その時、リツカの後ろから若い整備士が叫んだ。

「じゃあ、もう戻るね」

「うん」

リツカは軽く手を振って職場に戻って行った。

(姐御…けっこうキャリアあるのかな？見た感じ年上の整備士にまで指導してるし…)

ややあつてハイドも整備場を出た。

(そうだよな…まずはたくさん神機に触れてからだ…パーツも全部試して一番やりやすい組み合わせを探して…)

廊下を歩きながらあれこれ考えているうちに、いつの間にかハイドはエントランスに戻って来ていた。

「あつ！ハイドどこ行ってたんだよ！探したんだぞ！」

コウタがぶーぶーと文句を言う。

「悪いな…整備場に行ってた」

とハイドは詫びる。

「整備場？神機もう壊したのか？」

「違うよ、ちよつとな…」

「ぶ〜ん…まあいいや！飯食いに行くこうぜ！」

腹減ったしさ、とコウタはハイドを誘ったが…。

「いや、先に行つてくれ」

ハイドはあっさり断る。

「ちょっと用事ができた」

「ちえ〜…わかったよ。けどあんまり遅くなるなよな。明日もあるんだし」

「ああ、わかってる」

そう言ってハイドは訓練場へと向かった。

「ふう〜……………よつとー!」

ハイドは呼吸を整えて神機を変形させる。

「だいたい2秒くらいか……………まだまだだな」

ハイドは1秒内での変形を目標としていた。戦闘中にもたついている暇などない。

「まあ少しずつ速くはなっているかな…あとは扱い易い武器パーツの組み合わせ探しか…何回訓練ミッションを受注しないといけないのかな…」

気が遠くなるような話だが悩んでいるよりもまず実行だと、再び変形

練習を繰り返した。

「では神霧ハイド・藤木コウタ両名は、第一部隊に配属してよろしいのですね？」

支部長室でツバキは、新人二人の所属部隊についてシッケザールに確認をとった。

「そうだ…新人の実戦指導はいつも通り、リンドウ君で頼むよ。彼が率いる部隊の生存率は極東支部においてもトップだからね…貴重な人材を無駄にしたいくはない」

「わかりました」

そう言っつてツバキは支部長室を出た後、人事部へと足早に歩いていった。

翌日、朝一で呼び出された二人は、第一部隊部隊配属の知らせをツバキから聞き、いよいよアラガミと戦うのだということを実感していた。

「いよいよだな」

「ああ…母さん、ノゾミ…見ててくれよな…」

家族に誓うコウタを見てハイドも気を引き締める。

「明日はハイド、お前が先に任務に出撃することになっている。私の弟がマンツーマンで戦いを教えるから心配はいらない」

「わかりました！」

「その後にコウタが同じような内容の任務に出る。こちらにも私の弟を出させる」

「了解です！」

「最後にこれだけは言つが…死ぬなよ…必ず生きて帰ってこい！」

『はい！』

明日は二人の初陣だ。

六喰・兵装訓練（後書き）

次の話でようやくリンドウとの初陣です。ここまで来るのが長かった…。

次の話はバトルパートになります。まだ書いたことのない領域なので、たとえばまらなくても大目に見てあげてください。

七喰・リンドウとの初陣（前書き）

ようやくバトルパートです。久々のリンドウ登場です。

七喰・リンドウとの初陣

ハイドはエントランスのソファに腰掛けて人を待っていた。これから出撃する任務に同行してくれる人…ツバキ教官の弟と言っていたが…。

考えにふけっていると、カウンターの方からヒバリの声が聞こえた。

「あ、リンドウさん！支部長が見かけたら、顔を見せにこいつて言ってますよ？」

「オーケー、見かけなかったことにしといてくれ」

ハイドはなんだか適当そうだなと思った。

「いよいよ新入り」

（この人が、ツバキさんの弟であり、世界各地の支部や本部を合わせても五指に入るほどの力をもつゴッドイーター…）

「俺は『雨宮リンドウ』。形式上お前の上官にあたる…が、まあめんどくさい話は省略する。とにかく、とつとと背中を預けられるくらい育ってくれな？」

「あ、もしかして新しい人？」

その時、たまたま通りかかった、やたらと露出度の高い綺麗に切り揃えたおっぱいの女性が声をかけた。

「お、そういえば名前聞いてなかったな」

二人の視線を受けハイドは姿勢を正す。

「昨日付けで第一部隊配属となりました、神霧ハイドです」

と名乗り、ハイドは一礼する

「俺は名乗ったからあとはお前だけだ」

「はいはい。私は橘サクヤよ。同じ部隊なのね…助かるわ」

とサクヤはニコニコしながら言う。

「さて、自己紹介も終わったことだし…あゝ今厳しい規律を叩き込んでるんだから、あっち行ってなさいサクヤくん」

「了解です、上官殿」

なんだか慣れた様子の二人だ。

(付き合い長いのかな?)

サクヤはハイドに軽く手を振って去って行った。

「とまあ、そういうわけで…早速お前には実戦に出てもらうが、今回の緒戦の任務は俺が同行する……っと、時間だ。そろそろ出撃するぞ」

「はい」

二人は神機保管庫エリアに移動し、自分の神機が納められたケースを持ち、ヘリに飛び乗る。

さほど時間はかからずにヘリは任務地「贖罪の街」へと到着した。かつて人々が生活していた大都市だったが、アラガミの出現直後に崩壊し、無惨に食い破られたビル郡が今も残っている。

「ここも随分荒れちまったな…おい新人、実施演習を始めるぞ。…命令は3つ」

「命令」という単語を聞いてハイドは身をかたくする。

「死ぬな。死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運が良ければ不意をついてぶつ殺せ。…あ、これじゃ4つか…」

リンドウの数え間違いにハイドは思わず吹き出してしまった。それを見てリンドウは微笑む。

「そうそう、肩の力を抜いてな。とにかく生き延びることだけを考えろ。生きてさえいりゃ、あとは万事どうにでもなる」

「はい！」

リラックスしたハイドの返事に満足したリンドウは街へと向き直る。

「さあて…おっはじめるか！」

そして二人は夕暮れの街へと駆け出した。

「お！お前の神機のパーツ『ショートブレード』に『アサルト銃身』に『バツクラ』か…また随分とスピード重視の組み合わせにしたものだな…」

ショートブレードはリーチは短い、軽くて振りやすく、攻撃の手数が多い。アサルト銃身は扱い易い「弾丸」という種類のオラクルバレットを得意とする銃身で、撃つた後の隙も少なく割と軽い。バツクラは防御力こそあまり高くないが、全装甲の中で最も展開スピードが早い。ハイドの今日の神機は超高機動セッティングである。

「今日の討伐対象はオウガテイル一体だぞ？そこまで徹底する必要なかったんじゃないか？」

「戦闘中の神機の変形にどのくらい時間がかかるのか分からないんですよ」

走りながらハイドはリンドウの方を見てそう話す。

「なるほどな…そのタイムロスのカバーってことか。新型神機ってのは何かと面倒だな」

「最初のうちはこの装備でいきます。戦いに慣れていったら違う装備も使って、どんな戦いにもメンバーにも対応出来るようになります」

「ははっ…頼もしいこった」

そんな話をしていたら、二人は討伐目標を発見した。オウガテイルが歩きながらこちらに向かって来る。二人は建物の影に隠れ飛び出すタイミングを窺う。その時リンドウが小声でハイドに後ろから言っ

た。

「一発、ブチかましてやれ」

ハイドは頷くと、物影から勢いよく飛び出す。

突然飛び出してきたハイドにオウガテイルは警戒態勢になるが、ハイドは素早く横に回り込み五回の斬撃を入れる。

オウガテイルが怯んで倒れ込み、ハイドは素早く神機を構える。

中から黒い口が出現し、それをオウガテイルに突き出す。

「隙だらけだな！」

ブシュッと血の吹き出る音がして、オウガテイルの血肉を噛みちぎられた。

「うおおおおお！！！」

身体に力がみなぎりハイドはバーストした。その間にオウガテイルが立ち上がり、ハイドに噛み付こうとする。ハイドはバックステップで後ろに下がりがりながら神機を剣から銃へと変形させる。

（まだ2秒か…）

更にバックステップで距離をとるハイド。するとそれを見たオウガテイルは、尻尾を一度振り、もう一度ハイドに向けて大きく振る。

オウガテイルの尻尾から放たれたのは、三方向へ飛ぶ刺だった。し

かし刺が放たれるまでの一瞬の間に、ハイドは距離を詰めてその銃口をオウガテイルに向けていた。

「喰らいな！」

その言葉とともにアラガミバレットが放たれた。

近距離で強力なアラガミバレットを撃たれたオウガテイルは苦悶の声をあげる。

「これで終わりだっ！！！」

神機をすぐさま剣へと変形させたハイドがとどめの一閃。

「おーおー…俺の出る幕なしか…」

「リンドウさん！」

影で見守っていたリンドウが出てきた。

「ああ、そうそう。倒したアラガミは捕喰して素材を回収しとけよ」

「あっはい！」

そしてハイドはオウガテイルを再び捕喰し、素材を回収した。

「んじゃ、引き上げるか」

「そうですね。行きましょっ」

二人はヘリの待機地点へと向かって歩いていく。その後ろでは残されたオウガテイルの肉片が黒く霧散し地面に引きずり込まれるように消えていった。

「しかしなかなかやるな…この分だと小型アラガミ程度なら俺がいなくても大丈夫か？」

「なに言ってるんですかリンドウさん。僕はまだ一度しかミッシェンに出撃していませんですよ？」

「はは…冗談だ」

帰投する途中のヘリの中で、ハイドとリンドウは言葉を交わしていた。

「まああれくらい動けば問題ないだろう…だがなんにしても、生き残れよ」

「はい…」

何となくだがハイドは、リンドウが世界屈指のゴッドイーターと言われるわけがわかる気がした。何よりも生き延びることを大切にし、彼自身もその言葉を守って今、こうして生きている。

リンドウは後に、ハイドの憧れであり…目標となるが、それはまだ先の話である。

二人を乗せたヘリは風に揺られながらアナグラへと帰っていった。

七喰・リンドウとの初陣（後書き）

リンドウを空気にしてしまいました。リンドウファンの方ごめんなさい…。

バトルを読みやすく書けたか不安です。これから先のバトルも不安です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（前書き）

ちよつと短めですが会話が一方的に長い話です。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』

「やあ〜来たね〜」

初任務が完了した後、ハイドとコウタは榊博士の部屋を訪れていた。「講座を開くから研究室に来てほしい」と呼びがかかったのだ。

「さあ、適当なところに掛けてくれ」

言われて二人は手近なソファに腰掛ける。それを見て榊が咳ばらいし、講座が始まった。

「さて、いきなりだけど…ハイド君はアラガミってどんな存在だと思っ？」

「アラガミの存在…ですか…？」

「『人類の天敵』、『絶対の捕喰者』、『世界を破壊する者』…まあ、こんな所かな？これらは認識としては間違っていない。むしろ、目の前にある事象を素直に捉えられていると言えるだろうっね…」

『……………』

「じゃあ、何故どうやってアラガミは現れたのか…って考えたことあるかい？…君たちも知っている通り、アラガミはある日突然現れて、爆発的に増殖した…そう…まるで進化の過程をすっ飛ばしたようにね」

「ふあ〜……………」

とあくびをしたのはコウタだ。

「なあ…この講義ってなんか意味あんのかな？アラガミの存在意義なんてどうでもよくね？」

とコウタは小声でハイドに話す。

「そうかね？」

いつの間にか榊がコウタの後ろに立っていた。コウタがビックリしてすぐさま振り返る。

「アラガミには脳がない。心臓も脊髄すらもありません。私達人間は、頭や胸を吹き飛ばせば死んじゃうけど、アラガミはそんなことでは倒れない。アラガミとは考え、捕食を行う一個の単細胞生物…『オラクル細胞』の集まり…そう、アラガミは群体であり…それ自体が数万、数十万の生物の集まりなのさ。そしてその強固でしなやかな細胞同士の結合は、既存の兵器では全く破壊出来ないんだ。じゃあ私たちはアラガミとどう戦えばいいんだろっかね？」

「え、え〜と…とにかく神機で斬ったり撃ったり…」

焦りながらもコウタが榊の質問に答える。

「そう…結論で言えば、同じオラクル細胞が埋め込まれた生体武器『神機』を使って、アラガミのオラクル細胞結合を断ち切るしかない…。だが、それによって霧散した細胞群も、やがては再集合して…また新たな個体を形成するだろう…。彼らの行動を司る指令細胞群である、コアを抽出するのが最善だけど…これは中々困難な作業

なんだ。『神機』を持つてしても、我々には決定打がない。いつの間にか人々は、この絶対の存在をここ極東地域に伝わる八百万の神にたとえて『アラガミ』…と呼ぶようになったのさ」

(アラガミはそんな生命体だったのか)

ハイドは自分が戦っている敵の強大さを思い知らされた。

「さて、今日の講義はここまでとしよう。なお、アラガミについてはターミナルにあるノルンのデータベースを参照すること。いいね？」

榊が講義の終了を宣言するとコウタは伸びをして立ち上がる。ハイドも立ち上がり、二人は部屋を出た。

「俺たちが倒したあのアラガミも、また別の形で復活するってことなのか……」

「なんか…やだよな…折角の努力が水の泡になるのって…」

アラガミについての講義を聞いた二人は、彼らの脅威に打ちのめされた気分だった。

「…でも…」

「…うん…戦うしかないんだよな」

そう。それ以外に生き残れる方法は、今のところはエイジス計画くらいしかない。しかも計画が成功する保障もない。エイジス計画など簡単に打ち砕く強大なアラガミが出現する可能性だってある。結

局のところ、人間は神を語る単細胞生物と戦いつづける運命にある。

「エイジス島が完成するまでは気が抜けないな！」

とコウタは言う。

(エイジス計画にちょっと依存してるのかな？俺が心配し過ぎなだけなのか？)

などと考えていたハイドは、すぐに思考を断ち切る。

(あれこれ考えていても仕方ない…今はまず生き延びることだ。)

「ああ、そうだな」

とハイドはコウタに返事した。そして二人は、明日以降も続く終わりになき戦いに備えるため、自室に戻り身体を休めた。

八喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座』（後書き）

神博士：無駄なく話してますがそれでも長いです。

書いててコウタばりに眠くなりました。

九喰：サクヤとの合同任務（前書き）

サクヤ姉さんが華麗に戦います。書けたかどうかは別として、自分の中では華麗なんです。………すみません、やっぱり華麗じゃないかも。

九喰：サクヤとの合同任務

榊の講義から一夜明け、ハイドはノルンのデータベースを調べていた。まだキーボードの扱いに慣れていないため、そのタイピングは端からみると微笑ましい。

（アラガミ…オウガテイル…）

少し調べればすぐに目的の項目は見つかった。

『オウガテイル…鬼の顔のような巨大な尾を持つ小型アラガミ。主に他のアラガミの死骸などを捕喰し、様々な地域でその数を増やしている。発生地はアメリカ大陸だが、現在では世界で最も個体数が多いアラガミとされている。』

「ふう…」

倒してもやがては復活するアラガミ達…これではまるでいたちごっこだ…というより我々人間の方は、やがてはじり貧になっていくだろう。

（アラガミを完全に討ち滅ぼす方法は本当にあるのか…？）

まだ見つかるはずのない答えを探すことを止めたハイドは、ターミナルを立ち下げた後、エントランスへ向かった。

今日はサクヤとの合同任務だ。聞いた話では、サクヤは旧型銃身神機使用のようだ。

（おそらく自分は前線で陽動、サクヤさんは後方でバックアップと
いったところだろうな。）

ハイドの今日の神機は、先日リンドウと行ったミッションでの装備
とまったく同じ『超高機動セッティング』である。今日の討伐目標
は『コクーンメイデン』だ。その場を全く動かないこのアラガミは、
頭部からレーザー…開いた胴体からは無数の鋭い刺…視覚の広さを
利用して敵を見つけることができる。現在世界に広く生息し、一つ
の場所に集中して大量発生することもある…などという特徴がある
アラガミだ。

ハイドがエントランスのソファでデータベースから仕入れた情報をお
さらしている、サクヤがやって来た。先日と同じ露出度の高
い格好である。

（みんな他の服持っていないのかな？）

服に対する疑問が頭に浮かぶがすぐに打ち消し、ハイドはサクヤに
挨拶した。

「おはようございます。サクヤさん」

「はあ、い。おはよう」

明るい挨拶で「気さくなお姉さん」の雰囲気を出しているサクヤ。

「今日の任務ではよろしくね！」

と、サクヤは微笑みながらハイドに言った。

「はい！こちらこそ、よろしくお願いします！」

二人の今日の任務地は「嘆きの平原」だ。常に雨が降り続けている地域で、丸く広い平原となっているこの場所は、かつてはビルが建ち並ぶ都市の一部だった。今となってはアラガミの徘徊ルートになつており、その中心に吹き荒れる巨大な竜巻は、実はアラガミが引き起こしているのではないかと言われている。因果関係があるのかは不明だが、この近辺は巨大なアラガミも目撃されている。

サクヤはアラガミの声が辺りに響いたのを聞くとすぐに表情を変え、さっきまでとは打って変わって真剣な空気を漂わせた。

「早速ブリーフィングを始めるわよ。」

ここに来るまで聞いていた優しい声、それが今はただただ凜々しい。

「今回の任務ではハイドは前線で陽動、私は後方でバックアップします。遠距離型の神機使いとペアを組むときは、これが基本戦術だからよく覚えておいて。くれぐれも先行しすぎないように。後方支援の射程内で行動すること…OK？」

「はい！」

ハイドの声を聞いたサクヤは「ふふ…」と微笑んだ。

「ちょっと緊張してる？」

「あ…はい…」

「肩の力抜かないといざという時身体が動かないわよ？」

サクヤはそう声を掛け、ハイドの緊張をほぐす。

「…わかりました！」

やはり経験と生きた歳月の違いか、リンドウもサクヤも緊張のほぐし方が上手だ。リンドウは冗談で、サクヤはギャップで隊員の気持ちを落ち着かせる。この辺り「さすがだな」と思うハイドである。

「ん！素直でよろしい！頼りにしてるわ。…さあ、始めるわよ」

再び声と表情を戦闘モードに切り替えるサクヤ。それに頷いたハイドは、待機地点から飛び降りて今日の討伐目標…コクーンメイデン3体の索敵を始めた。

そしてハイドはまず一体目のコクーンメイデンを発見した。向こうはこっちより先に気づいたらしく、レーザーを放ってくる。ただ目標に向かってまっすぐに飛ぶレーザーはホーミング性能がない…そのことを知っていたハイドは横にスライドしてかわす。続けてレーザーを撃ってくるがそれもかわし、大きくジャンプしてコクーンメイデンの後ろを取った。コクーンメイデンがこちらを向いた瞬間に、その頭をレーザーが貫いた。サクヤが後ろから、コクーンメイデンの頭を狙ってくれていたのだ。

ハイドは怯んでぐったりと身体を倒し、だらし無く開いたコクーンメイデンの胴体に捕喰形態の神機を突っ込んだ。

「これでどうだ！」

バーストしたハイドは一気に斬撃を叩き込み、一体目のコクーンメ

イデンを撃破する。

(さすがね…今日は余り補助しなくて済みそうかな?)

なんて不謹慎なことを思うサクヤ。もちろんそんなことするつもりは彼女にはないが。

そうこうしているうちにハイドは地を駆け、二体目のコクーンメイデンに向かっていた。ハイドとコクーンメイデンの距離が20mほどになったときサクヤはレーザーを放った。レーザーはハイドの脇をすり抜けるように飛び、コクーンメイデンの頭にまた命中した。バーストが続いていたハイドは再び斬りかかり、あっという間にコクーンメイデンを倒す。

「(…あと一体か)サクヤさん！」

そしてハイドは剣形態から銃形態へと神機を切り替え、サクヤに光の弾を三発発射する。

「え!?なに!?!」

突然のハイドの行動に驚くサクヤ。そしてその弾はサクヤの神機に命中し、『リンクバースト』が発動した。力がどんどん溢れてくる身体にサクヤが驚く。

「なんなのこれ…すごい力…!」

サクヤはゴッドイーター人生で初のバーストを発動した。それは旧型銃身神機は捕喰機能が備わっていないのと、機能が備わってる旧型刀身神機にアラガミバレットを受け渡すのに必要な銃身がついて

いないことが関係している。

(これがリンドウヤソーマがいつも発動しているバーストなのかしら…？だとしたらちよっとズルイわね…後で文句言おうかな)

そしてサクヤは自分の神機に装填した覚えのないバレットがあることに気づく。

「…そういうことね！」

サクヤがバーストした変わりに、ハイドのバースト時間が切れた。二人は最後のコクーンメイデンへ向けて駆け出す。

コクーンメイデンは二人を見つけるとすぐさまレーザーを放つが、二人はそれをかわし、まずハイドが地を蹴り飛んだ。ショートブレードを突き出して空中から一気に突進する。コクーンメイデンはその剣に切り裂かれたのち…。

「終わりよー!!」

サクヤの濃縮アラガミバレットLV3の直撃を受け、最後のコクーンメイデンはその活動を停止させた。

九喰：サクヤとの合同任務（後書き）

旧型銃身神機使いは大変ですよねホント。オラクル細胞の補充は飲料物のみ。バーストは新型がないと不可。不便過ぎます。

十喰・ソーマとの合同任務（前書き）

ソーマファンの皆さんお待たせしました。ソーマ登場回です。

十喰：ソーマとの合同任務

アラガミを一通り殲滅し終えた後、ハイドとサクヤはアナグラへと向かっていた。

「それにしてもさっきのアレ…なんだったの？」

「アレ…？」

「私を強化した、アレ」

ああ、とハイドは納得した。サクヤが言った「アレ」とは…

「『リンクバースト』のことですね。」

「『リンクバースト』…？」

サクヤは聞き返す。リンクバースト？『バースト』ではなく？なにか違うのだろうか？

「新型神機使い専用の新しい戦術です。アラガミを捕喰した際に入ると、アラガミバレットを他者の神機に撃ち渡すことで、その者を半ば強制的にバーストさせる方法です。通常のバーストより威力の増大が激しいため、バーストLVは3までしかあげられません。バーストLVは、撃ち渡されたアラガミバレットの弾数によって決まるので、今日サクヤさんが発動したのはLV3のリンクバーストということになります」

ハイドは以前ツバキにされたのと同じ説明をする。

「へえ〜…確かにすごい力だったわ…」

サクヤは先程の感覚を思い出す。身体の内から強大な力が、まるでマグマのように吹き出たようなあの感覚を…。

「…これからはこの戦術の重要性がどんどん増してくると思います。メンバー全員を見渡して、なおかつその時の状況に応じて、最も助けを必要としている人をバーストさせないといけませんし…捕喰攻撃もなるべく増やして、アラガミバレットを確保して、いつでも仲間をリンクバーストできるようにしなければいけません。新型神機使いは本当にやる人が多いです」

と、ハイドは力無く笑った顔で言った。

(そっか…いつの日か、誰よりも大変な戦いをしなければならぬのね、この子は…)

サクヤはそう思う。新型神機は、剣も銃も盾もバーストもリンクバーストもできて便利…というわけではない。使える戦術が多いために、やらなければならぬことがたくさん出てくるのだ。サクヤはハイドに励ましと労いの言葉をかける。

「まあ何はともあれ、今日はお疲れ様！あなたが一人前になるまでは、私もリンクバーストもできる限りサポートするから、安心して」

ハイドはサクヤにそう言われると…

「サクヤさん………ありがとうございます…！」

ニツコリ笑って感謝した。

サクヤとの任務があつた次の日、ハイドは任務で『鉄塔の森』と呼ばれる場所に來ていた。この場所は、近隣の都市に電力を供給していた発電施設の跡だ。環境の急激な変化による緑化と、乱立する鉄塔によって、その景観は森林の様相を呈している。アラガミによる地下施設の侵喰によって大部分が水没しており、かつての喧噪が絶えたあとは、水の流れる音だけが悲しく響き渡っている。

今日の任務は自分を含めて三人の部隊で臨むことになっている。

ハイドが神機を持ってヘリから降りると、少し離れたところで青いモッズスコートのフードをかぶった白髪褐色肌の青年と、胸、腕、腹、背中に書いてタトウが入っている、赤髪でサングラスをかけた青年がなにやら話をしていた。

ハイドが近づくとサングラスの青年が手を振りながらこっちにやつてきた。

「ああ、君が例の新人クンかい？噂は聞いているよ。確か神霧ハイド…だったかな？僕はエリック。エリック・デア…フォーゲルバイデ。君もせいぜい僕を見習って、人類のため華麗に戦ってくれたまえ」

「は…はあ…」

(なんか…ちょっと変わってる人だな…)

そんなことを思っていた次の瞬間…。

「エリック！上だ！」

その言葉についハイドは、反射的に後ろに飛びのいてしまった。

「しまっ…！」

「え？」

時すでに遅し…頭上から飛び降りてきたオウガテイルがエリックに襲い掛かった。

「うっ、うわああああ…！」

とエリックが叫んだときにはすでに彼の上半身が無かった。一気に人間の半身を捕喰したオウガテイルは下半身もあつというまに喰らい尽くしてしまった。

「ボーっとするな！」

そう叫び青年は巨大な刀身、『バスターブレード』を振るう。

倒れているオウガテイルを尻目に、青年はハイドにぶっきらぼうな口調で言った。

「ようこそ…クソツタレな職場へ…俺はソーマ。別に覚えなくてもいい。言っとくが、ここじゃこんなこと日常茶飯事だ。」

そう言つてソーマは神機をハイドに向ける。

「お前はどんな『覚悟』を持ってここに来た…？なんてな………時間だ。行くぞルーキー。…とにかく死にたくなければ、俺にはなるべく関わらないことだ…」

一方的にハイドにそんなことを言つたソーマは一人で先に行つてしまつた。

ハイドの心臓の鼓動はまだ高鳴つたままだつた。目の前で人が死んだ…アラガミの手によつて。『あの日』の記憶が脳裏をよぎる…。だがハイドは「今だけは忘れよう」と頭を切り替えた。『過去』も…エリックも…。まだこれから任務もあるのだ。悲しんだり落ち込んだりするのには任務が終わつた後ですればいい。

瞳をキツク閉じて、頭をブンブンと左右に振つたハイドは、先に行つてしまつたソーマのあとを追つた。

ハイドはソーマと合流できたが、すでに彼はアラガミと交戦中だつた。

(…来たか)

戦いながらソーマは思う。

今日の任務の討伐目標は、『オウガテイル』二体と『コクーンメイデン』二体の計四体だ。慣れていなければ、二人で相手どるのは難しい。動き回るオウガテイルを狙えば、コクーンメイデンがホーミング性のあるレーザーでこちらを狙ってくる。コクーンメイデンを

先に潰そうものなら、背後からオウガテイルが狙ってくる。

だがソーマは敵の攻撃などもとせず、たった一人で対等以上に渡り合っていた。

(すごい…)

ハイドはソーマの戦いの上手さに半ば見とれていた。

(そういえばソーマは俺と同じ歳だけど、神機使いとしては古株なんだよな…)

弱冠12歳で神機使いとして戦場に出たソーマ。すでに6年のキャリアがあるが、協調性がない上、軍規違反が多いため階級はあまり高くない…そんな話をリンドウから聞いたことがある。

(それよりどうするかな)

見るとソーマは現在オウガテイル二体と戦っていた。

そのソーマを近い方のコクーンメイデンが狙っていた。

(まずは…あいつからだ！)

そしてハイドはコクーンメイデンの死角から入り込み神機を喰らわせる。不意打ちを食らったコクーンメイデンは後ろに振り向くが、その瞬間にハイドに斬り伏せられた。

「ソーマ！」

ハイドはソーマにアラガミバレットを三発撃ち渡す。ソーマの旧型
刀身神機はバレットこそ撃てないが、LV3の剣撃もかなりのダ
メージを与えることができるはずだ。

「……………ほっ」

強化された肉体に多少は感心したのか、ソーマは声を漏らす。そし
てソーマは自分の前後から向かってくるオウガテイルを斬り倒して、
残った一体のコクーンメイデンへと駆けた。

そしてソーマは大きく飛び、神機を振りかぶった。横からはハイド
も詰めてきていた。

「くらえ！」

「死ね！」

ハイドの横一闪、ソーマの縦一闪がほぼ同時に交差し、コクーンメ
イデンは四分割された。

倒したアラガミの素材を回収し終えたハイドは、ソーマの方へと戻
った。

「終わったか…なら戻るぞ」

またもぶつきらぼくにソーマは言ったが、その手にはそれぞれ神機
が入ったケースが一つずつ持たれていた……。

(ソーマ……………あんな性格だけど、もしかして人には優しいのかな……………?)

ソーマの背中を追って歩くハイドはそんなことを思っていた。そして同時に……………。

(エリック……………すまない。…俺が気づいていれば…驚いて後ろに飛びのいたりしなければ…)

後悔と自責の念は曇り空へと消えていく…。二人を乗せたヘリは、アナグラへと向かって飛び立って行った。

十喰：ソーマとの合同任務（後書き）

やはりソーマはカッコイイです。ハイ。そして……

エリックく~~~~~!!!死なせてゴメ~~~~ン!!!きっと何かの形で出番作るから~~~~~!!!

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（前書き）

ハイドが落ち込む話です。……………え？サブタイトルが某作品に似てる？……………気のせいではないでしょうか。アハハ

十一喰：神霧ハイドの落ち込み

「……………」

ソーマとのミッションの報告が終わったハイドは、エントランスのソファに腰掛けて一人感傷に浸っていた。

彼の身体から発する暗いオーラに、周りの人達はなんだか声を掛けづらかった。

理由はみんなわかっている。ハイドが今日行ったミッションで、ゴッドイーターが一人、殉職した。それも目の前で…。

いつまでも動き出さない自分に踏ん切りをつけ、一人がハイドに向かって歩いていく。それを見た二人も彼についていく。ハイドの前で立ち止まったのは、第二部隊の面々だった。

ハイドが人の気配に気づき、伏せていた顔をあげる。

「ようハイド！最近バリバリやってるそうじゃないか！」

最初が肝心だと努めて明るい声で話し掛けるタツミ。

「お前が戦術や訓練に熱心に取り組んだからこそその結果だな」

なるべく今日のことに関する話題からそらそうとするブレンダン。

「あ、あのソーマさんともいきなり連携がとれるなんて凄いですよね〜あはは〜！」

……いきなり爆弾をほつり込むカノン。

「ばっ…バカ！カノン！」

「……………あつー！ー！」

タツミに言われてようやく気づくカノン。三人が恐る恐るハイドを見ると、そこにはまた顔を伏せたハイド……………。

「ほらっー！！また落ち込んだじゃねえかっー！！」

「すっ、すみませんごめんなさい！！！」

「弁解の余地がないな……………」

「はづー……………」

「あきらめるなっ！！なんか考えろっ！！」

「ありがとうございます……………」

『え？』

ギヤイギヤイと騒いでいた第二部隊は、突然横から割って入ったハイドの声に静まり返る。

「皆さんは、僕を励まそうとして声をかけてくれたんですよ？その気持ちだけでも…充分ありがたいですよ」

そういつて上げたハイドの顔は、涙こそ流していないものの、無理矢理作った感満載のボロボロの笑顔だった。

「ま、まあ今日のことは気にすんなよ。な？」

「そ、そうですね。切り替えて明日からも頑張りましょう！」

「明日は我が身かもしれんからな。今日はゆっくり休め。あまり根を詰めると身体が持たんぞ。」

三者三様の励ましの言葉を受けたハイドは…。

「はい。わかりました…」

と答えただけだった。三人はハイドから離れた後で、もう一度彼をみたがやはり、まだ辛そうだった。

「どうする？あまり効果が無かったような気がするが…」

「カノンのミスさえなけりゃなあ…」

「はづ…すいません…」

「どうしたんだお前ら？」

突然野太い声が後ろから響き、それに驚いた三人が振り返る。

『ゲ…ゲンさん！』

身体のうちこちに傷のついた、腕用のバンドで片腕をささえている60代の男性が立っていた。

三人は「助かった」と思った。

この男は百田ゲン。かつてはゴッドイーターとして戦っていた人物であり、ゴッドイーターを経験した数少ない生き残りである。現在はフェンリル極東支部神機使い相談役となっている。

彼は元正規軍出身であるため、様々な近接格闘術の心得がある。また、始まりの神機『ピストル型神機』が開発された際に、正規軍としては初めて自らその使用者に立候補し、適合者に選ばれる。

などなどの武勇伝があるうえ長い歳月を生きているこの人なら、ハイドにいいアドバイスを与えられるはずだ。

「ゲンさん、実はハイドのやつが…」

タツミはゲンに事の成り行きを話した。

「……なるほどな。やれるだけはやってみよう。」

そう言っただけでゲンはハイドの方へと歩いていく。ゲンに気づいてすぐさま立ち上がるハイド。

「ゲンさん！」

「ああ、楽しんでる。隣いいか？少し話したいことがある」

「どつぞ」

そしてゲンは腰を下ろし、少しの間を置いて話しはじめた。

「ハイド…エリックの事は残念だったな…。」

「……………はい」

ハイドはゆっくり時間をかけて答えた。

「…なあハイド。あの時、もっと自分が動けたら…なんてこと考えてないか？」

ゲンはハイドの思考を推測し、それはほぼ正解だった。

「……………」

「あまり自分を責めるな。俺は二十歳で正規軍に入隊したんだが…軍に在籍していた時も、ゴッドイーターになってからも…俺の周りではたくさんのやつが死んでいった。」

ハイドはただ静かに話を聞いている。

「こんな俺でも人並みに『悲しむ』ことはできたんだ。…だが、人が一人死ぬごとに、そういった感情は少しずつ奪われていった」

「……………」

「そのおかげで逆に今、俺は生きている…もしそうだとしたら、俺はそれでも構わん…だが俺は、今ハイドが感じているその感情もまた大切なものだとも思うんだ…」

「ゲンさん…」

「だからなハイド…『強く』なれ。お前はやがてみんなを守る盾となる。お前の仲間を守るために…お前自身を守るために…そしてその大切な感情を失う前に、『強く』なれ」

ゲンは、静かだが…熱く力強さを感じさせる瞳でハイドに言う。

「……………わかりました！」

ハイドは今日初めて心から笑顔になった。

とその時、カウンターから小さい女の子の怒声が聞こえてきた。

「エリックに会えないってどういうこと！？なんでみんなエリックは死んだなんて嘘つくの！？」

カウンターを見たら裕福そうな女の子と紳士がいた。

女の子は涙を零しながらヒバリに怒鳴りちらす。ヒバリはその対応に困っていた。

その横にいた五十代くらいの紳士が目をギョツとつむりながら…。

「あの馬鹿息子め、先に逝きおつて……………！！！」

その肩は激しく震えていた。

二人を見ていたゲンは再びハイドに視線を戻す。

「まあ、とにかく死ぬなよ…お前とはいつか酒を飲み交わしたいかならな」

「……………はい」

穏やかな声でハイドは答えた。

ゲンは先程の二人の会話を聞いて、ハイドがまた落ち込むのではと思っていたが…どうやら大丈夫そうだ。ハイドの瞳は様々な感情が渦巻き、複雑そうな色だったが、ゲンが伝えたいことはしっかり伝わっていたようで、彼の返事からかすかに覚悟と決意を感じ取れた。それがわかったゲンはハイドの肩に手を置き、軽く頷いたあと、立ち上がってタツミたちの方へと歩いていった。

「あ、ゲンさん！どうでしたか？」

戻ってきたゲンにタツミが聞いてみた。

「あいつのことなら心配いらない…大丈夫だ。」

「そうですか…すみませんわざわざ」

そう謝るのはブレンダン。

「気にするな。何せ今は相談役だからな」

そう返したゲンはエレベーターに乗って別のフロアへ移動した。

タツミたちはハイドを再び見るが、その顔にはいくらか明るさが戻っていた。それは先程の、上から糊で貼付けたような笑顔とはちがう笑顔だった。

部屋に戻ったハイドはターミナルを開いた。するとコウタからメールが届いていたことに気づく。ノルンには過去のデータを引き出すだけでなく、ゴッドイーター同士でメールのやり取りができるようになっていてる。

ハイドらキーボードを操作し送られてきたメールを開いた。

『藤木コウタ

今日行ったミッションで隊員が死んだって聞いたよ。エリックって人には失礼だけど、俺死んだのがお前じゃなくてよかったって思った。

明日の任務はハイドと一緒になんだぜ！初めて一緒に戦えるな！よろしく頼むよ！』

(……………ああ。俺からもよろしく頼む)

ハイドは明日に向けて早めにベッドに潜り込む。次の任務ではコウタと…つまりは、極東支部に来て初めてできた『友』と一緒に戦うことになる。そう思うと不思議な高陽感少しと、大きな恐怖が込み上げる。

だがハイドは、ゲンの言葉ですでに心に決めていた。救える限りの人を…みんな救おう。そして自分は何があっても生き続けよう。コウタのように後ろばかりに捕われず、前をしっかりと見つめよう。

そんなことを考えていると、やはりリンドウの凄さを改めて認識させられる。

(本当に…リンドウさんは…凄いや…)

飄々としながらもリーダーとしての責務をこなし、ゴッドイーターとして長く生き残っている。ハイドはリンドウに憧れと尊敬の念を抱きはじめた。

(…今はまだ無理でも、いつか俺もリンドウさんのように…)

などと色々思考してる内に、ハイドは忍び寄る睡魔によって夢の世界へと引きずり込まれていった。

十一喰：神霧ハイドの落ち込み（後書き）

サブキャラのゲンさん登場となりました今回の話ですが、ゲンさんが実際に言いそうなアドバイスを想像して書きましたが、如何せん自分がまだ20代なので、ちゃんと書けてるか不安です。

十二喰・コウタとの合同任務（前書き）

ようやくコウタとのミッションです。リンドウさんを少しだけ登場させた結果、容量が大きくなりそうだったので、急遽コンゴウのミッションを『コンゴウ一体オウガテイル三体』から『コンゴウ一体』に変更しました。

十二喰：コウタとの合同任務

ソーマとの任務から一夜明けた。

ハイドは目を擦りながらベッドから起き上がると、今日の任務の仕度始める。今日はコウタとの合同任務だ。ハイドは念入りに神機と戦術をチェックする。

そしてノルンのデータベースを開き今日の討伐目標『コンゴウ』について調べはじめた。

『コンゴウ：逞しい猿人の姿を持つアラガミ。俊敏な動きと力任せの打撃が特徴であり、人間を発見すると群れを成して襲ってくる。発生地はユーラシア大陸極東。背中のパイプ状器官から放たれる真空波は要注意』

一通り確認を終えたハイドは、エントランスへと向かうため、エレベーターがある廊下まで歩いていった。するとその途中で、リンドウトはったり会ってしまった。リンドウは「たまには奢ってやる」と半ば無理矢理ハイドを自販機のある場所まで引っ張っていった。

「コーヒーでいいか？」

「あ、はい」

リンドウはコーヒーを貰うとそれをハイドに投げ渡す。そしてベンチに座っているハイドの横に腰かけた。しばしの沈黙を破ってリンドウが口を開く。

「エリックのことは残念だったな…って、もう皆から言われてるか？」

「……………はい」

ハイドは静かに答えた。

「いや、隊長として何か言わないとなって思ってたさ…まあエリックはちいとばかり変わり者だったが、妹さん想いのいいやつだった。そこは皆から評価されてた…」

「……………」

「それからソーマのことなんだが…あんまり悪く思わないでやってくれるか？」

「わかっていますよ、リンドウさん」

ハイドの返事にリンドウは首を傾げる。

「?わかってるってどういうことだ？」

「ソーマはそれほど悪い人間じゃないと…いえ、いい人間だと思っています」

ハイドは穏やかに答えた。

「ほお…よければ理由を聞かせてもらえるか？」

リンドウはハイドに聞き返す。彼が「ソーマはいいやつだ」と言う

た理由が気になったのだ。リンドウはソーマのことをハイドに弁解するつもりだったため余計に気になるのである。

「昨日のミッションが終わったあと、エリックの神機が入ったケースをソーマが持ち続けてたんです。回収班に渡せばいいのに…ヘリがフェンリルに着くまでの間、ずっとそうしてました」

「なるほどな…」

「それだけじゃありません…昨日の戦闘中のソーマの行動でも、彼の優しさを感じ取れました。」

「具体的にいうと？」

まだ理由があることに驚き、リンドウは興味津々だった。

「昨日の任務では、ソーマが先に行ってしまったって僕はあとから合流して戦闘に参加したんですが…彼はオウガテイル二体の相手をしてました。その時、僕が戦闘に参加するのを見たソーマは、突然動きを変えたんです。彼は、常にオウガテイルの視界に入るよう動き続けてくれたんです…彼が作ってくれた隙のおかげで、僕はコクーンメイデンをほとんど背後に気を配ることなく攻撃出来ました。ソーマはきつと、他者が傷つくのを恐れている…ただの優しい人間なんだと思っっています」

「…ははっ。どうやら…いい仲間にも恵まれたようだなあいつは」

リンドウは、ここまでソーマを見ていたハイドに感謝の気持ちを感じていた。ソーマは第一印象の悪さとその後のことも全て含めて、ほとんど誰にも好かれていなかった。だが、感情表現がとことん下

手な彼を、これだけ見てくれる人間が現れた。

(ソーマのやつは…もう心配いらないな)

リンドウは立ち上がって、さっきまで吸っていたタバコを近くのテーブルにあった灰皿に捨てる。

「ま、引きずってないようで何よりだ。今後も頑張ってくれ、以上」などと適当に終わらせるリンドウ。

「はい！ありがとうございます」

そんな彼にハイドは感謝の言葉を述べる。それを聞いたリンドウは背をむけ、手を背中越しにヒラヒラさせて立ち去った。

ハイドがエントランスに着くと、すでにコウタが待っていた。コウタはハイドを見つけるといつもの明るさで挨拶した。

「おっす！ハイド」

「おはようコウタ」

ここ何日か任務時間の違いで会っていなかったが、相変わらずのコウタの明るさにハイドは安堵する。

「お互いちゃんと生きてるみたいだね！命あつてのこの商売だしね。…俺が死ぬと、母さんも妹も路頭に迷っちゃうから、気をつけなく

「ちやな〜」

昨日メールで自分を励ましてくれたコウタ。彼はエリックの一件から自分の気楽さを少しは見直そうとしているのだろうか。その言葉には人生経験の少ないハイドにもわかるほど感情がこもっていた。

「そうそう、サクヤさんって知ってる〜よね？」

「?…ああ」

「あの人ってさ…なんかいいよね。美人だし感じいいし強いしさ…戦うお姉さんって感じてさあ…たまらないよな〜!!」

そういうことかと理解するハイド。確かにサクヤは誰が見ても美人の部類に入るだろう。おまけに銃型神機の制動力の高さは、極東支部でもずば抜けており、気さくな性格で打ち解けやすい。普通なら男は放っておかない存在だろう。

「あ、ああ」

「いよーうしっ!なんつかテンション上がってきた〜!!今回の任務、どっちが多く倒すか勝負しようぜ!」

「は?」とハイドはコウタの言動にポカンとしている。

「サクヤさんにいいとこ見せてやるぜ〜!」

………やっぱりコウタはコウタだった。

相変わらず緊張感がない…もとい、明るい性格にハイドは思わず吹

き出した。

「な〜に笑ってるんだよ〜」

コウタはジト目でハイドを睨む。ぶーぶーと不機嫌そうな彼の口は、数字の三みたいな形になっていた。本当に表情豊かな少年である。

「今日の任務はコンゴウー体だけだぜ？」

笑いながらハイドは的確にツツコミを入れる。

「んじゃあ『どっちが先に倒すか』の勝負だな！」

とコウタは返す。

「仮に俺がトドメをさしても『コウタがやった』って言うておくよ」

ハイドは勝負にこだわるコウタに大人っぽい対応をする。

「それじゃあ勝負の意味がないっての！」

やはり勝負にこだわるコウタ。まだまだ子供っぽい。

「わかったわかった！さっさと行くぞ…時間がもったいない」

「おう！」

あまりにしつこいのでついに折れたハイドは、コウタを連れて今日の任務地「鎮魂の廃寺」へと向かった。

鎮魂の廃寺…かつて神仏にすぎる人々が静かに暮らしていたかくれ里であり、生活の中心にあった御堂はアラガミの襲撃によって半壊し、屋内には雪が降り積もっている。建物が多いため道が細く入り組んでいるこの場所は複数のアラガミを討伐するのには苦勞すると言えるだろう。

「ふう〜…寒い…」

コウタは寒さでガタガタと震えていた。仕方ないことだ。コウタの服はかなり薄く、寒い場所での任務には向かない。

「大丈夫か？」

ハイドは上下長袖なので別に寒くはなかった。

「ほら、これでも着て体を温めろ」

そういつてハイドが手渡したのは袖にファーのついたロングコートだった。予想をこえる寒さだった時のことを考えて、ハイドは前もって防寒用の私服を用意していた。それがどうやら役にたったようだ。

コウタは急いで袖を通しジッパーを閉めると防寒素材のおかげで体が温まるのを感じた。

「ふう〜…助かった〜…いよっし！もう大丈夫だ！」

コウタはハイドのコートのおかげで、再び明るさを取り戻した。

「そうか…じゃあまずは索敵についてだ。」

ハイドはコウタに弱冠呆れ笑いをして早速ブリーフィングを始める。

「まずは俺とコウタが二手に別れて索敵を始める。コンゴウは聴覚が鋭いから隠密行動で頼む。目標を発見次第、広域信号弾を使ってから交戦する。それでいいか？」

「OK！」

コウタは親指を立て、ケースから神機を取り出す。ハイドも肩に神機を担ぎ、準備する。

「よし、行こうか」

二人は静かにそれぞれの方向へ進み出した。コウタは少しずつ、音を立てないように進み、やがて道の曲がり角に近づいた。壁に背を預け、ゆっくりと壁の向こうを見る。その視線の先にあるのは、白い雪に彩られた階段……。目標との接触はまだないようだ……。

「もう少し先の方を調べてみるか……」

コウタは少し先の方にある二つ目の階段を上って行き、また壁から様子を窺う。すると……。

（あいつだな……）

一体のコンゴウがあぐらをかいていた。

（……信号弾、信号弾……って！？しまった！！）

信号弾に火をつけたはいいが手からうっかり滑り落としてしまった。

そのまま信号弾は真横に進んでコンゴウの背中にぶつかった。

コンゴウが何事かと後ろを振り返ると無防備なコウタ。

「ゲアアアアアアアア！！」

コウタ目掛けて突進するコンゴウ。

「やっべえ！！！！」

慌てて神機を構えるが間に合わない。だがコンゴウの牙がコウタに突き刺さるうとした次の瞬間…。

ヒュツと何かが横切り、コンゴウの口から「ガチンッ！」と牙の鳴る音が響いた。

コンゴウが辺りを見回すと、コウタを脇に担いだハイドが立っていた。

「大丈夫か！？コウタ！！」

ハイドの険しい表情に驚きながらもコウタは「ああ」と答える。

「そつか…じゃあこっちも反撃開始だ！！」

「了お〜解いっ！！！！」

そしてハイドは剣でコンゴウに斬り掛かり、コウタは後ろに回り込んで銃撃を浴びせる。

「！」

ハイドはコンゴウがとっさに丸太のような拳を振り上げたのを見て距離をとる。そのまま拳はハイドに向けて振り下ろされたが、それが届く前に背中に銃弾を受けてバランスを崩し、コンゴウが転倒する。

「今だハイド！！！」

「もらったぁ！！！」

ハイドはすぐさま神機でコンゴウを捕喰し、バーストした。

筋力が上がったハイドはコンゴウのとある箇所を重点的に攻撃する。やがてコンゴウが立ち上がると、うつつしいとばかりに拳を振り回して自分と敵との距離を取ろうとする。

「おとなしくしやがれっ！！！」

そうやってコウタが投げたのは対アラガミ用閃光手榴弾「スタングレネード」だ。眼前でそれは炸裂したため、コンゴウは目を押さえ、少しの間うずくまる。

「コウタ！一気に崩すぞ！！！」

ハイドのやるうとしてることを理解するコウタ。

「任せときなっぺ！！！」

ハイドはアラガミバレットをコウタに三発撃ち渡す。神機に命中し

たコウタ、リンクバーストレベル3を発動した。

「おっしやあああ！！！！」

ハイドはコンゴウに光速の連撃を浴びせ、コウタは背中に濃縮アラガミバレットを撃ち込む。

するとコンゴウの背中のパイプ状器官が破壊された。これがハイドが徹底的に痛め付けた場所である。これで真空波はまともに使えないはずだ。

すでにボロボロのコンゴウだが、それでもハイドに向かって右腕を振りかぶる。

だがコンゴウのパンチなど、バーストした今のハイドにはスロー再生のように見えた。必要最低限の動作でかわし、ハイドは懐に飛び込む。そして…。

「これで終わりだ！」

コンゴウの脇腹をハイドの剣が切り裂き、大量の血を吹き出した。コンゴウはついに倒れ、その生命活動を停止させた。

十二喰・コウタとの合同任務（後書き）

なんとなくですがコウタは戦場でなんかしらのへマをやってしまっ
気がするんです。

……でめちっぴり憎めない、いいやつです。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（前書き）

なぜなに講座第二弾です。最近コンスタントに投稿を続けていたの
で、週刊誌の漫画家の気持ち少しずつわかってきました。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』

コンゴウの素材を回収したあと、ハイドとコウタは帰投する途中での会話に花を咲かせていた。

「いやあく今回も生き残れたねえ〜」

「そうだな。互いに大した怪我もなくてよかったよ」

ハイドは今日の任務の結果に満足していた。「コウタを死なせず、自分も死なない」。自らに課したその約束を今日は守ることが出来たのだ。文句は今のところない。

「それにしても俺達の相性すごくね？コンゴウのやつよろけまくってたしさ〜」

コウタは意気揚々と話す。実際ほとんど反撃の隙も与えず勝利したし、ハイドもやりやすいと感じていた。

「俺達二人が組めば無敵だな！」とコウタは笑顔で話す。「あんまり調子に乗らないでくれよ？」とたしなめるハイド。二人を乗せたへりはアナグラへと飛び立った。

「ミッション完了しました。確認をお願いします。」

ハイドはエントランスでヒバリにミッションの完遂報告を行う。もうこの作業にもすっかり慣れたものである。

「…はい、確認が取れました！では、報告書をどうぞ。……………あ、ハイドさん、コウタさん！」

報告書を受け取りカウンターから離れて行く二人をヒバリが呼び止めた。

「榊博士が呼んでましたよ。ミッションが完了したら研究室に来てくれとのことですよ」

「あ、わかりました」

ハイドとコウタは何だろうか？と榊の研究室へ向かった。

「やあ、よく来たね。あ、ミッションお疲れ様。さあ、前の時のように自由に腰掛けてくれ」

ハイドとコウタは榊の研究室に入るなり、榊にマシンガンのように話されて少し戸惑った。やがて二人が腰を下ろすと、目の前にあるモニタに電源が入る。その画面に映しだされたのは…。

「ペイラーサカキのなぜなに講座」

やっと自分達は榊の講義に呼び出されたのだと理解する二人。榊は軽く咳ばらいすると講義を始めた。

「今日はこのフェンリルについて少し話をしようと思う。さて、突然だが君達は『アーコロジー』という言葉聞いたことはあるかい

？」

『いえ…』

二人は聞いたことのない単語にクエスチョンマークを浮かべる。

「『アーコロジー』とは、それ単体で生産、消費活動が自己完結している建物を指す言葉なんだ。実はアナグラを中心とした世界各地のフェンリル支部も、一種のアーコロジーだと言えるんだ。これって極端な話、ある支部を除いた全てのフェンリル組織が減んでも、残った支部は単独で生産、消費活動を行い、今まで通り生き残ることが可能ってことなんだよ」

と、榊は『アーコロジー』について説明する。ハイドは真剣に聞いていたがコウタはすでに眠そうだった。

「なるほど…このシステムなら、荒廃した世界でも生き残れるというわけですね？」

とハイドは話す。

「そうだ。アナグラは地下に向けて食糧や神機、各種物資の生産を行うプラントがあり、外周部には対アラガミ装甲壁や、君達優秀なゴッドイーターをはじめとした、高い防衛能力もある。それがフェンリル支部であり、人類を守るために最適化されたアーコロジーなんだよ」

ここまで説明した時点で、コウタの目は完全に閉じようとしていたが、次に榊が発した言葉に意識が戻る。

「ただそこにも問題はあつてね。それは…収容可能な人口に限りがあることなんだ」

(！)

コウタの表情が一転して真面目なものに変わる。ハイドはこんなに真剣なコウタを見たことがなかった。

「君達も知つての通り、ここ『アナグラ』の周囲には、広大な外部居住区が形成されている。だが、彼ら全てを受け入れるだけの容量は、まだこの支部にも無い。対アラガミ装甲壁を張り巡らすことが、今できる最大限の防衛作なんだ」

「それだけで足りるのかな…現に装甲は頻繁に突破されてるんじゃない…」

コウタは対アラガミ装甲壁に対する不安を漏らす。

「だからそのために、ゴッドイーターによる防衛班も配備されている…いや、すまない。コウタ君のご家族は外部居住区にいるんだつたね。軽率な物言いを許してくれ」

榊はコウタに先程の発言を詫びる。

「いや…俺はただ…」

「本当はアナグラを地下に向けて拡大して、内部居住区を増やす計画もあつただけどね…」

「でも、その計画をより安全で完璧にしたのが『エイジス計画』な

んだよね！」

コウタは明るく振る舞って言った。

(かなりエイジス計画を信頼しているな…確かに、家族を助けたいコウタにとってこの計画は頼みの綱だけど…)

ハイドは、その期待を裏切られた時のコウタを心配した。過剰な期待はその分反動も大きいのだ。もし『エイジス計画』が水泡に帰したとき、コウタは堪えられるだろうか…。

「…そうだね。現状極東支部の地下プラントの多くの資源リソースは、『エイジス計画』に割り当てられている。…その話は、また今度にしようか。今日の講義はここまで」

榊が講義の終了を告げ、二人は部屋を出て行った。

「ヨハン…君はいったい何人の期待を裏切るつもりだい？」

榊は旧友を頭に思い浮かべ、つぶやいた。

十三喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座2』（後書き）

ちよつと短くなってしまいました。最近程よい長さの話作りに悩んでいます。

十四喰・上司の品格（前書き）

ハイドの成長回です。二回に分けて書くのですごく長く感じてます。

十四喰：上司の品格

ハイドは訓練場で神機を構えていた。額やこめかみから汗が伝い落ちてきている。

「はあっ…はあっ…！」

息もすでに上がっていた。しかし彼は訓練をやめない。同じ動作を繰り返し過ぎて、手の平の皮が痛みに悲鳴をあげる。

ふう…と息を整えて、神機に意識を集中させる。

(もう何回目だろ…？500から先は忘れちゃったな…)

「そろそろ訓練場が閉まる時間だし…ラストワン！」

ハイドは神機を変形させた。ガシャンと神機の変形機構が唸る。

そしてハイドは、ガラスを隔てて神機の変形スピードを計測している研究員に聞いた。

「タイムはどうでした？」

「1秒32だ。どんどん速くなってきてるな」

研究員がそう答えた。ハイドは少し表情を曇らせる。

「そう落ち込まなくていいよ。神機の変形スピードは以前に比べ格段に速くなった。おまけに今のタイムは最高速度だよ？これもひと

えにハイド君の努力の成果だよ！」

別の研究員がハイドに話かける。しかしハイドは首を横に振り、口を開く。

「確かに速くはなっていますが、あくまで目標は1秒以内での変形です。昨日のコウタと行ったミッションで、彼は危うくアラガミにやられるところでした。ギリギリ間に合いましたが、あとコンマ数秒遅れていたら…」

ハイドは死に物狂いで走って、限界まで手を伸ばしてコウタを掴んだあの瞬間を思い出していた。

「だが焦りは禁物だハイド君。今日はもう休んだほうがいい」

「……………はい」

ハイドは渋々頷くと訓練場を出た。エントランスへと続く通路を歩きながら、一人思い詰めるハイド。

(根を詰めるな…か…みんなから言われるけど、あんなことがあれば無理しても強くなりたいてって思うよ…)

二日前にはエリックが死に、昨日はコウタが死にかけた。

どちらも不運が重なったに過ぎないのだが、どちらも「運が悪かった」で済ましてはいけないのだ。たとえ運が悪くても、勝てるようにならないければ…。

たとえばリンドウは長い間ゴッドイーターとして戦っている。その

戦いの中には、不運の重なった不利な状況に立たされた時もなくさ
んあるはずだ。だが、どんな逆境からでもリンドウは切り抜け、今
も生き残っている。

ハイドは自分とリンドウを比べて、その不甲斐なさに打ちのめされ
る。だが、それはずいぶんなお門違いであり傲慢な思考であった。

まずリンドウはハイドとは立場が違いすぎる。キャリアの長さ、戦
闘経験の多さからして大きな差があった。そしてハイドは、リンド
ウは「たとえ一人でも逆境を切り抜けられる」と思っている。確か
に今、リンドウ自身にその力はあるが、彼だって今までずっと一人
で戦ってきたわけではない。

リンドウも多くの人に支えてもらってここまで生き残ってきたのだ。
いくら彼でも全てを一人でこなすことなどできないのだ。自分を使
い、仲間を使う。そうしてリンドウは信頼を勝ち取って今の立場に
いるのだ。

そのことにハイドは気づけない。なかなか思考の迷路から抜け出せ
ない、ちょっとめんどくさい性格をしている。

一夜明け、ハイドは任務の手続きをするためエントランスに来た。
するとカウンターの隣にあるモニターからニュースの音声が流れてき
た。

「次のニュースです。今年も抗議デモが行われました。本日未明、
外部居住区生活者を中心とした団体による、フェンリルに対する抗
議集会が世界各地の支部前に行われました。フェンリルに対して、
主に食糧供給の増量と防衛の強化、雇用枠の増大を訴えたもので、
参加者は2時間ほどデモ行進をしたのちに大きな混乱もなく解散し
た模様です……」

といった内容のニュースが女性アナウンサーによって読み上げられる。ハイドは階段を下りてカウンターのところまで行くと、サクヤに呼び止められた。

「あつ…こつちこつち！」

呼ばれてハイドはサクヤに近づく。

「すごく活躍してるらしいじゃない！期待以上だって、評判いいわよ？」

「いえ…俺はまだまだですよ」

ハイドは謙遜して答える。

「…でも…あまり無茶はしないでね…。神機使いはすごい人ほど早死にするから…」

「…てゝことは、俺はまだまだってことか…」

いきなり後ろから会話に入ってきたのはリンドウだ。頭をポリポリ搔いて、残念そうに言う。

「は…相変わらず重役出勤ね」

サクヤはため息混じりにリンドウに言う。

「重役だからな。さーて、今日も楽しいお仕事だ。今日の任務は俺達三人で動く。俺が陽動でサクヤがバックアップ」

「了解」

サクヤは即座に答える。

「お前は遊撃だ。新型らしく状況に応じて動いてくれ」

とリンドウはハイドを見て言った。

「了解！」

とその時、リンドウの携帯電話が鳴った。リンドウがポケットから取り出し内容を確認すると表情が少し真剣になったような気がした。

「…ほかに何か…ある？」

と、サクヤが聞いた。

「ん？…まあ死ぬなっでこと…」

リンドウはいつもの調子でサクヤに返す。

「大雑把な命令承りました。上官殿」

三人は贖罪の街に来ていた。ハイドがこの街に来るのは約一週間ぶりとなる。

「よし！ミッションスタートだ」

リンドウの号令でミッション開始された。

「今日のミッションはザイゴート三体とコンゴウ一体だ！まずはザイゴートの駆除から始めるぞ！」

リンドウは作戦をハイドとサクヤに伝える。リンドウは今回の任務ではザイゴートを処理してからコンゴウを倒す作戦を取った。

その理由は、ザイゴートの索敵能力にある。体内で精製した特殊なガスでフワフワと飛び回り、一際大きい一つ目玉によって遠くの敵を発見できる。おまけにこのアラガミは他のアラガミを呼び寄せる習性がある。だからこそ先に潰す作戦に出たのだ。が…

（まあ…失敗するだろうな）

そう、討伐対象にはコンゴウがいる。聴覚が鋭いコンゴウならばザイゴートと交戦したときの音に気づいてやって来るだろう。

だが、それでもコンゴウだけは一対一で集中して戦いたいため、体力が低いザイゴートを先に叩くというのがこの作戦の本当の狙いだ。

やがて三人は朽ち果てた教会にやってきた。リンドウは「ふむ…」と少し考えた後…。

「ハイド！すまんがお前はあっちの建物の中を調べといてくれ。念のため俺とサクヤは教会の中を調べとく」

「了解！」

リンドウの命令を了承したハイドは教会の反対側に入って行った。

その後ろ姿をリンドウが静かな眼差しで眺めていた。

十四喰：上司の品格（後書き）

初の分割回を執筆しました。今後もこのやり方をちよいちよい挟んでいくんだろうなあ…と思うと気が遠くなります。

十五喰・部下の変革（前書き）

前話の続きです。愚かなハイドを笑ってやって下さい。

十五喰：部下の変革

ハイドは建物の中をゆっくりと進んでいた。奥の方からぐしゃとか、バキツとか、何かをかみ砕く音が響いてくる。

(いたか……………)

コンゴウが建物の奥にいた。こちらに背を向けて、様々な物資が入った箱を捕喰していた。

ハイドは音を立てないようそっと背後から近づき、捕喰の体勢に入った。

「喰らいつくせ！」

ハイドがそう叫んだ瞬間コンゴウはそれにきづいたが、すでにハイドの神機がその血肉を引きちぎっていた。突然の攻撃にコンゴウは全く準備が出来てなかった。

ハイドはバーストすると素早い動きでコンゴウを翻弄し、確実に剣撃を与えていく。時折アラガミバレットの射撃も交えながら攻撃の手を緩めない。

堪えられなくなったコンゴウは一目散に逃げ出した。

「逃がすか！」

ハイドは見失わないように全力で追いかける。そしてコンゴウは教会の中へと逃げ込んだ。

(教会の中にはリンドウさんとサクヤさんがいるはず…少し作戦と違うけど、挟み撃ちにできる！)

ハイドは教会の中へと突入していくが、違和感を覚え足音を小さくする。リンドウやサクヤが中にいれば銃声など、戦闘中の音で多少は騒がしいはず。

疑問に思ったハイドが中をこっそり覗くと、コンゴウが体力回復のために物資が詰まった箱をあさっていた。そして教会の中にリンドウとサクヤの姿はなかった。

(二人はもうここから出たのか?)

とにかく無防備なコンゴウを放っておく手はない。

ハイドはまた捕喰をするためコンゴウの背後に忍び寄る。ところがその更に後ろから思いもよらぬ攻撃が飛んできた。

「グうつ!!」

間一髪でハイドは装甲を展開し、攻撃を受け止める。

その攻撃が飛んできた方を見るとザイゴートがいた。どうやらこの近くを徘徊していて、運悪く教会の中に入って来てたようだ。

「ちょっとまずいな…」

ザイゴートの攻撃によってコンゴウにも気づかれた。

「グアアアアアアアア！」

「くっ！」

コンゴウの攻撃をかわし、ザイゴートの脇をすり抜けて、ハイドー
旦教会の外に出る。いくらなんでもあの狭さは分が悪い。

ハイドは外に出たら左右を見渡す。

（よし！あっちだ！）

ハイドは向かって左側の開けた場所に出る。…が、更に不運が重なる。

（くそっ！こっちもか！）

向かった先からやってきた新しいザイゴートに見つかるハイド。戦況は極めて良くない。

後ろからコンゴウとザイゴートも追いついてきた。

（こっとなったらまずはザイゴートからだ！）

混戦となりハイドは苦戦を強いられた。コンゴウとザイゴート二体それぞれの攻撃をなんとかかわしながら少しずつザイゴートを削っていく。が、やはりハイドの方が劣勢だった。

（くそっ！どうしたらいい！？）

ハイドはなんとかこの状況を打破する方法を考えるが、思い付かな

かった。一番いいのはリンドウとサクヤを信号弾で呼ぶことだがハイドはそれを良しとはしなかった。

ハイドはこんな状況に置かれても、誰かに頼ろうとはしない。それはリンドウに対する憧れからきている、ハイドのつまらないこだわりだった。

(リンドウさんならきつとなんとかできるはずだ…！俺だって…！)

誰の目にも明らかかな、愚者の行為。ここまでハイドがもつたのは、ほとんど奇跡に等しい。ハイドは今や、「ただの死に損ない」といっても過言ではない。

「っ！…何っ!？」

さらに一体ザイゴートが増え、ハイドは今日の討伐対象をたった一人で相手をしていた。

このままじゃ殺される…。

……………もう、限界か…………。

ハイドはポケットに手を伸ばし、信号弾を点火すると空に撃ちあげた。やむなくハイドは応援要請をだしたのだ。すると信号弾をあげた直後に、一本のレーザーが二体のザイゴートを貫いた。

何事かとハイドもコンゴウもザイゴートも、レーザーが飛んできた方を見る。

そこにはリンドウとサクヤが立っており、サクヤの神機の銃口から煙があがっていた。

「や〜れやれ…やっと呼んでくれたか」

「リンドウさん！」

「説明はあとだ。こいつらを片付けるぞ」

そう言つてリンドウは神機を構え、コンゴウに向かって行く。コンゴウの右パンチをかわして、リンドウはその脇腹を切り裂く。大量の血を吹き出しながらうずくまるコンゴウ。

次にリンドウはザイゴートへと切り掛かる。二連撃を入れたあと、空中で前方へと回転しながらの縦斬りを叩き込む。そして地に落とされたザイゴートを捕喰しにかかるリンドウ。

しかしそのリンドウを他のザイゴートが狙う。が、サクヤがレーザーを二発撃ち込み、邪魔をさせない。

「そら、喰らつとけ」

そしてザイゴートは捕喰攻撃を受けて絶命した。

「うおおおおお！ー！」

リンドウはバーストするとコンゴウを再び斬り刻む。

「これで…終わりだあっ!!」

トドメとなる一撃でコンゴウはついに倒れた。

「次はどいつだ〜?…つと、あらら…」

リンドウが目を向けた先には、地に横たわるザイゴート二体…。その間には血塗られた神機をもつハイド。

ハイドの表情は暗く俯いていた。

「……………」

リンドウはハイドの側まで行くと、彼の肩にポンと手を置く。

「おう、お疲れさん」

明るい声でリンドウはハイドを労う。そこにサクヤもやってきた。

「お疲れ様ハイド。」

サクヤも優しく声をかける。

「お前が信号弾を使ったあと、俺達がすぐに合流した。…この意味がわかるか?」

リンドウはハイドに問い掛けた。

「……………はい」

ハイドはなおもくらい表情で答える。そう、あの場面………リンドウとサクヤは、ハイドが信号弾を使ってすぐに現れた。つまりはすぐ近くにいて、ハイドの戦いを見ていたのだ。

「なら…俺達が何を伝えたいのか…わかるよな？」

「………はい」

そう、リンドウはハイドにあることを伝えようとしていた。そのためワザとハイドに単独で索敵を頼んだ。戦場にでてまだ間もない人間を一人で索敵させるなど………普段のリンドウの口からは出ない命令と言えよう。

リンドウを知る者から見れば、それは誰の目にも明らかだった。

「あ………実は俺研究員からな、お前が俺に憧れてるって話を聞いたんだ」

「え？」

リンドウの発言にハイドは顔を上げた。

時は遡り、昨日の夜。研究員がハイドの訓練で計測したデータをフアイリングして、研究部署へと持っていくために廊下を歩いている時のことだった。

研究員の一人がハイドについて話し合っていた。

「それにしても、ハイド君の成長スピードは凄まじいな。ロシア支部の新型も、変形スピードが1秒以下になるのに一年近くかかったのに…」

その言葉に別の研究員が反応する。

「ほんとほんと。訓練始めてまだ一ヶ月経ってないのに…。彼は本当にすごいよ……………一体なにが彼をそうさせるのかね？」

また別の研究員が口を開く。

「なんでもリンドウさんに憧れてて、一刻も早く追いつきたいらしいよ?」

「その話詳しく教えてくれんか？」

『!』

突然脇から入った聞き覚えのある声に三人が驚く。

『リンドウさん…』

「……………てー訳だ」

リンドウは昨夜の出来事を話す。ハイドはそれをただ聞いていただけだった。

「お前さんが俺に憧れてる…それは俺にとっちゃあ嬉しい限りなんだがな？いくら俺だからってたった一人で今まで生き延びてきた訳じゃないぜ？」

リンドウはハイドに大切なことを教えた。

「俺は…いや、人間は皆一人で生きてる訳じゃないんだ。俺も今まで色んな人たちに支えられてきた。姉上にサクヤ、ソーマもだな。フェンリルの職員やロシアの道端であつた医者見習い…そしてお前やコウタ」

「俺も…？俺もリンドウさんを支えてるんですか？」

「そうだ。人はみんな知らないうちに、良かれあしかれ誰かを支えてるんだ。俺はたまたま運が良かっただけなのさ。お前を始めとした多くの人間に支えられて、今こうして俺は生きている。そのことにいつも感謝してるんだぜ？俺はな」

とリンドウは珍しく真剣に話す。

「感謝してるなら声に出して言って欲しいものよね」

サクヤがリンドウに笑顔で言う。

「男は言葉より行動で表すんだよ」

とリンドウは反論した。「はいはい…」とサクヤが半ば呆れる。

「とにかくだ…あゝなんつーか…お前さんはもうちつと肩の力抜けや。確かに』とつと背中を預けられるくらいに育ってくれ』とは

言ったが、『焦つてでも強くなる』ってこととは違うからな。それにお前は俺じゃねえ。お前はお前らしく生きればいいんだ。いいな？」

リンドウの言葉でハイドはようやく気づかされた。当たり前過ぎるが大切なことに…。暗かったハイドの表情に明るさが戻る。

「…ハイ！」

そんなハイドを見てやれやれとリンドウは溜め息を漏らす。

「そんじゃハイドには、人生の授業料として『配給ビール』でも払ってもらおうか？」

リンドウはハイドにニヤリとしながら言う。

「呆れた……………」

サクヤはリンドウを残念な人を見るような目で見た。

「取れるときに取つとかなきゃもったいねえだろ？」

リンドウはあっけらかんと言う。

「んで…どうなんだ？」

改めて彼はハイドに聞く。

「ふふ…俺はまだ18なのでビールは配給されてません。なので『予約』って形ならいいですよ？」

「おし！ビール五本確保つと！」

喜びリンドウを尻目にサクヤが溜め息をした。そして三人はへりに乗って、フェンリルへと帰っていった。

十五喰：部下の変革（後書き）

初の前後編に分けた話は作るのにすごく苦労しました。ミッション中の話が長くてどんな展開にしようか悩みましたし、ハイドに対するリンドウからのアドバイスは、彼の性格面を考慮してすごく短くテキストにするつもりだったのですが、結局長くなってしまいました。

普段、面とむかって話すのが苦手なリンドウがやたらと饒舌に……リンドウのクオリティを追求している方々には誠に申し訳ないです。

十六喰：フォー・マン・セル・デート（前書き）

四人任務の回です。話の編集の都合でバトルをオールカットしました。

十六喰：フォー・マン・セル・デート

「ハイド、ガム食う?」

移動中のヘリの中でコウタはハイドに尋ねた。

「いや、俺はいいよ」

「そっか」

今日はハイド、コウタ、サクヤ、ソーマの四人組でのミッションである。ハイドとコウタは初めて四人で動く任務に少し緊張していた。今日はコクーンメイデンの掃討任務だ。贖罪の街で八体確認されたので、急遽四人での出撃となったのだ。

「よっつ」

コウタは着陸したヘリから飛び降りた。それに続いてハイド達も降りる。

待機ポイントまで移動すると、そこにはリンドウが待っていた。

「あれ、リンドウさん?なんでこんなところに?」

疑問に思ったコウタが聞いてみる。

「この近くで任務があつたんだが…もう終わったことだし、後からやってくる自分の部隊に命令でも残しておこうと思つてな」

四人がリンドウに注視するとリンドウは命令を出した。

「あゝ本日も仕事日和だ無事生きて帰ってくるように以上」

一箇所も句切らずにリンドウが言った。

「え？それだけ…？」

コウタががっかりする。

「いちいちツツコンでると身が持たないわよ？」

「くだらん…」

サクヤとソーマはいつものことだと気にしない。

「一人を除いて、心が一つになっているようで何よりだ」

リンドウがそういうとみんながハイドを見た。ハイドは「リアクシヨンしとけば良かったかな」と思い、一人困る。

「ハハ、冗談だ。そんな悲しい顔すんな。このメンツでは初の四人任務だが、まあいつもどおりやれってことで」

「リンドウさんはこのあとは…？」

今度はハイドが聞いてみた。

「俺はこのあとチヨイとお忍びのデートにさそわれているんだ。今から働くのはお前らだけ……っ」と

リンドウはポケットから呼出し音がなっていて携帯電話を取り出す。その画面を確認したリンドウは……。

「はやく来ないと拗ねて帰っちまうとさ……ったくせっかちなヤツだ。命令はいつも通り『死ぬな、必ず生きて戻れ』だ」

その言葉を聞いたソーマがリンドウに呟くように言った。

「自分で出した命令だ。せいぜいあんたも守るんだな……」

「リンドウもあんまり遅くならないように……ね……」

サクヤは心配そうに言った。リンドウは軽く相槌をうつと、アナグラへと帰っていった。

「さあ、行きましょ！」

サクヤが合図すると今日の仕事が始まった。

四人がミッションから戻ると出撃ゲートの向かいにあるソファにリンドウがドツカリと腰掛けていた。

「先に帰ってたのね。お疲れ様」

サクヤがリンドウに労いの言葉をかける。

「ああ、なんとか早めに切り上げられた。そっちはどうだった？」

「ご命令にしたがって『いつも通り』だ」

ソーマがぶっきらぼうに言う。

「そうね。任務は滞りないし、人も欠けてないわ」

「俺達の華麗な連携プレーを見せたかったよ〜！」

サクヤとコウタはミッションの様子を報告する。

「お前そんなに役立ってたか？」

ソーマがコウタに冷徹にツッコむ。実際に討伐数はそれぞれ…ハイドが2、ソーマは3、サクヤが2、コウタが1だった。

「んなっ…!？」

ガツクリとうなだれるコウタ。

「ふふふ……」

「ははは……」

ハイドとサクヤが笑い声をあげる。

「そうか。これならこっちももう少しデートの回数を増やしても良

「さそうだな」

と、リンドウが言ったのを聞いてコウタが指摘する。

「まず俺に女の子紹介するのが先じゃないツすかね？」

「ふっ、お前の手には負えないと思うぞ？」

リンドウは笑いながらそう返す。と、その時アナグラ内にアナウン
スが流れた。

『業務連絡。本日第七部隊がウロヴォロスのコアの剥離に成功。技
術部員は第五開発室に集合して下さい。繰り返します……………』

そのときエントランスには様々な声が飛び交った。

「ウロヴォロス！どこのチームが仕留めたんだ！？」

「しかもコア剥離成功かよ…！ボーナスすげえんだろっな…」

「おい！おごってもらおうぜ」

「やめときなさいよ、みつともない」

コウタはソーマに聞いてみる。

「ウロヴォロス…って何？強いのか？」

ソーマは答えるのが面倒だったので軽くをツツぱねる。

「ターミナルを調べりゃ出てくる…たまには自分で調べる」

「そうね…今の私たちじゃ、まだ無理じゃないかな…」

サクヤはコウタにウロヴオロスの強さを語る。

「マジでっ！？このメンツでも！？」

「一人二人は死人がでるだろ…」

驚いてるコウタも含めて全員にリンドウが口を開く。

「まあアレだ、生き延びてればいつかは倒せるだろ。今は余計なこととは考えず、とにかく生きることだけ考えろ」

それを聞いたソーマはリンドウに文句を言った。

「その台詞…いい加減聞き飽きたぜ…」

そしてリンドウはソーマの方を向いて更に一言。

「ああ特にお前には何度でめ言つとくぞ。放つといたら一人で死に行っちゃうようなやつにはな」

「チツ…だまれ…」

「さあて…俺は次のデートに備えて、精のつくものでも食ってくるかな？」

そう言ったリンドウはソファから立ち上がり、食堂の方へ向かった。

その時ハイドは、何気なくサクヤとソーマを見た。二人は何となくだが、どこか心配そうだった。

(第七部隊…そんな部隊あったっけ…？それに、リンドウさんを見るサクヤさんとソーマのこの表情……まさかウロヴオロスを倒したのは…「お忍びのデート」っていうのは……)

ハイドは、自分達が任務を遂行している間にリンドウがやっていたことをおおよそ察した。

シャワーを浴び終わったハイドは自室のターミナルでウロヴオロスについて調べてみた。

「……………なんだコリヤ……………」

映しだされた情報はとにかくすごかった。

『ウロヴオロス…無数の触手と眼を持つ、異形の超弩級アラガミ。平原の覇者とも呼ばれ、山のように巨大である。触手を用いた攻撃の他に、大口径のビームを放つ。発生地は不明。』

(すごいな…こいつをリンドウさんは、たった一人で倒したのかも知れないんだよな…)

そうだとしたら、つくづくリンドウの強さには驚かされる。

(全身画像見たけど…軽く10mくらいあったよなアレ…)

ハイドはベッドに寝転がる。

「まあサクヤさんやソーマがいるメンツでも、今はまだ無理だって言ってたし…焦らず一日ずつ強くなっていけばいいよな…」

思いたすは、先日リンドウに言われた言葉。

『お前はお前だ』

(そう、俺はリンドウさんじゃない。どんなに憧れてもリンドウさんにはなれない…当たり前のこと。だから、俺は俺らしく…)

そう思いながらハイドは目をつむり、明日の戦いに備えた。

十六喰：フォー・マン・セル・デート（後書き）

リンドウさんはホントに凄いです。銃が備わってない旧型刀身神機でウロヴォロス討伐って…

十七喰・もう一人の新型神機使い（前書き）

アリサファンの皆様お待たせしました。ついにアリサ登場です。ここまでくるのが異様に長く感じました。

十七喰：もう一人の新型神機使い

時刻は午前10時…ハイド達第一部隊はエントランスに集められていた。

(…なんだか今日はエントランスが騒がしいような…?)

ハイドが疑問に思っただけを見渡す。すると誰かの話が聞こえてきた。

「ねえ聞いた？新型がまた配属されるって話…」

「あ、聞いた聞いた…ここにきて『新型ラッシュ』だね」

「ロシア支部から支部長が連れて来たらしいよ？」

「あ、噂をすれば…かな」

ツバキが一人の女の子を連れてエントランスに入ってきた。ツバキとその女の子は第一部隊の前に行ってくると向き直り、話を始めた。

「紹介するぞ。今日からお前たちの仲間になる、新型の適合者だ」

「はじめまして。『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』と申します。本日一二 付けで、ロシア支部からこちらの支部に配属になりました。よろしく願います」

アリサと名乗ったその女の子は事務的な声色で挨拶をする。

「女の子ならいつでも大歓迎だよ」

コウタはかなりテンションが上がっているが、それはあっという間に下げられた。

「よくそんな浮ついた考えで、ここまで生きながらえてきましたね」

アリサはコウタを完全に見下した声で冷たすぎる発言をした。

「へ？」

それを聞いたコウタは間抜けな声を漏らす。

「彼女は実践経験こそ少ないが、演習では抜群の成績を残している。…追いていかれぬよう精進するんだな」

ツバキはアリサについて簡単な説明をし、ハイドとコウタ：特にコウタ：いや、完全にコウタを見てさらなる努力をするよう言った。

「りょ…了解つす」

コウタが返事したのを聞いたツバキはアリサに視線を向ける。

「アリサは以後、リンドウについて行動するようじ。いいな？」

「了解しました」

アリサはまた事務的な口調で言った。

「リンドウ、書類等の引き継ぎがあるので、私とくるようじ。その

他の者達は持ち場に戻れ。以上だ」

そういうとツバキとリンドウはエレベーターの方へ歩いて行った。

「ね、ねえ君！ロシアから来たの？あそこってすげえ寒いんでしょ？あ、でも最近異常気象で温度が高くなってきたって言ってたっけ？…」

なんとか悪いイメージを払拭しようと話すコウタは空回りするばかり。

アリサはまったく相手にしてなさそうだった。と、ここでサクヤが喋りまくるコウタを抑制してアリサに向き直る。

「自己紹介がまだだったわね？私は橘サクヤよ、よろしくね！」

「よろしくお願いします」

サクヤはいつもの感じで挨拶したが、アリサの反応は変わらなかった。

(これは…ソーマタイプね…)

サクヤはそう分析した。つんけんした性格や、必要最低限のことしか話さないところが何となく似ている。

「じゃあ次はソーマね！」

サクヤはソーマにいきなり振った。振られた以上答えないわけにはいかず、少し間を置いてソーマが口を開く。

「ソーマ・シックザール…別に覚えなくていい…」

「……………」

さらにアリサは寡黙になった。

(振る人間を間違えたかしら…まあいつか)

「じゃあ次は俺だな！」

コウタが名乗り出た。

「俺、藤木コウタっていうんだ！よろしく！」

「…よろしくお願いします」

アリサは先程のコウタの言動からか、まだ見下していた。が、これから一緒に戦っていく人間なので一応挨拶はする。

「じゃあ最後はハイドね！」

ハイドは一步進み出た。アリサの顔を見て口を開く…が、言葉が出なかった。

綺麗に整った顔立ち、大きな瞳は深い蒼、少し癖のあるローズグレイのしなやかな髪、大人びた言動に、子供を感じさせる学生服に近い服装によって生まれる不思議な魅力…

「…あの、何をジロジロ見てるんですか？」

アリサに怪訝な顔で指摘されハイドは現実復帰した。

「お？どうしたハイド？まさか一目惚れ？」

コウタがニヤニヤしながらからかってきた。

「まさか…コウタじゃあるまいし」

ピシヤリと言うハイドにコウタはうなだれる。だがアリサの容姿は誰も思わず見とれてしまうほど美しかった。惚れた云々はともかく、コウタに悟られないように平静を装う。

「はじめまして。俺は神霧ハイド。一応君と同じ、『新型神機使い』だ。よろしくね」

ハイドは優しい笑みで手を差し延べる。

「あなたがそうですか…噂は聞いてます。まだ入隊して間もないんですよね？…言っておきますけど、いくら同じ新型だからって、私と同じラインに立っているとは思わないことです。ミッションではくれぐれも、私の足を引つ張るようなマネはしないでくださいね」

アリサはハイドの手を軽く握ってすぐ放すと、またも冷たい台詞を言い放つ。

「ハハ…努力するよ。ところで呼び方は『アリサ』でいいのかな？」

ハイドがそう言うとアリサは呆れたように言葉を返す。

「別にどう呼ぼうとあなたの勝手です…」

どうでもいいことだと適当にあしらうアリサ。

「じゃあ、よろしくアリサ」

ハイドはそう言つと下側のエントランスへ歩き出した。

「ハイド？どこ行くんだよ？」コウタが尋ねた。

「訓練場だけど？」

ハイドが一言で返す。

「え〜！？俺達今日は非番だろ〜！？」

コウタがハイドに信じられないといった顔で言う。

「休みにやることないしな」

と言うハイドだが、本当はある。外部居住区に居る仲間にお土産を持って行くことだ。

しかし、いかんせんハイドは入隊してまだ日が浅いので、みんなの分のお土産を買って持って行くとなると相当な金額になり、今度は生活が苦しくなる。

となればあとは自主トレに励み、戦力になる努力をするくらいである。

「悪いなコウタ」

ハイドは返事も聞かず訓練ミッションを受注して、出撃ゲートから出て行った。

「ちえ〜…」

コウタはハイドにブーブーと文句を言う。

（あなたも見習ったらどうなんですか…）

アリサは冷めた目でコウタを見ながら思った。

エレベーターがゆっくりり下降していく中、リンドウはツバキに話し掛けた。

「期待の新人ですね〜。レア物の新型が二つも揃ってる支部なんて、ここぐらいじゃないですか？」

リンドウの声にツバキは答える。

「ああ、そうだな。だが本部の意向で、今後は新型適合者の発掘が優先されていくらしい…。ただ彼女の場合、適合はしているものの若干精神が不安定でな…定期的に主治医によるメンタルケアのプログラムを受けているようだ。まあ、とにかく注意を払ってくれ」

（ふーん…とつつきにくい性格に加えて精神不安定か…まあなんとかなるだろ…しかしすでに新型がいる極東支部にさらに新型を追加

するとは…シックザールは何を企んでるんだ…？

「了解です、姉上」

思考をとりあえず止めてリンドウはツバキの頼みを了承した。

「リンドウ…二度とここで姉上と呼ぶな！いいな？」

ツバキはリンドウの冗談をたしなめた。

（姉上なのは本当だろうに…）

リンドウはやれやれと頭を掻いた。

十七喰：もう一人の新型神機使い（後書き）

初期のアリサの性格をなるべく近い感じで表現してみたんですが、うまく出来ていたか不安です。

今回はアリサを連れての四人ミッション回です。頑張ってバトルをまとめたいと思います。

十八喰：新型のチカラ（前書き）

アリスの戦闘シーンをもう少しかっこよく書きたいな〜…と思う今日この頃です。

十八喰：新型のチカラ

（まったく…これから任務だというのに、皆さん脳天気ですね…）

アリサは窓の外に顔を向け、ハイド達の会話に加わらずにいた。

ここは任務に向かうヘリの中。今日はハイド、アリサ、コウタ、サクヤの四人でシユウの討伐任務に出ることになった。

その道中で、ハイド達は他愛ない会話をしていたのだが、アリサは自分からそこに加わりとうとしない。話を振れば返事はくるが、その内容はすごく淡泊で、話にまったく興味がなといったオーラが全開だった。

（なんていうかアリサは…自分のことを人に話さない子って感じなんだよね…自分の内側に入って来る人間を嫌っているのかな？）

ハイドはコウタとサクヤの会話に話を合わせつつ、アリサを分析する。

（同じ部隊なんだし、できれば仲良くはなりたいけど…少しの間は様子を見るかな…）

考えこんでるうちに、ヘリは今日の任務地「贖罪の街」に到着した。

「では早速、ブリーフィングを始めるわ」

待機地点に集まったメンバーを見渡して、サクヤが神機を担ぎながら言った。

「まずは索敵。これは三グループに分けて行います。ハイドとアリサは単独で、コウタは私がフォローしながら索敵を行うわ。OK?」

「了解!」

「了解しました」

「了解つす!」

三者三様の返事をする。

「そして目標を発見したら、その人は信号弾を使用してから交戦。他の人は合流次第交戦開始よ。それと、最初に交戦した人は、シユウを開けた場所まで誘導しながら戦ってね。狭い場所での戦いは危険だわ」

サクヤの指示に三人は頷く。

「それじゃ…ミッションスタート!索敵開始!」

サクヤの合図でハイド達は、三方向へそれぞれ駆け出した。

ハイドは南側の開けたエリア、アリサは東側の廃材が置かれているエリア、サクヤとコウタは西側の教会があるエリアへと向かう。

目的エリアに到達したアリサは、神機を構えながら慎重に進む。すると人間のものではない足音が聞こえてきた。すぐさま身を隠して

様子を窺うと、シユウがやって来た。

(あいつですね…)

シユウはこちらに背を向け、廃材を漁りながら捕喰対象を探す。

アリサはシユウに気を配りながら信号弾に点火し、発射した。そして気づかれぬように背後に忍び寄り…。

「いただきました！」

シユウを捕喰したアリサはバーストした。喰われたシユウは、いきなり背後から肉を食いちぎられて苦悶の声を上げる。アリサに気づいたシユウは大きな翼を広げ、その先にある拳をアリサへ向け、手招きした。

討伐対象『シユウ』は硬い翼手を持つ人型のアラガミで、それを用いて武人のような肉弾戦を繰り広げるかと思えば、拳にエネルギーを集中させ、放出して爆撃することもある。発生地はユーラシア大陸中央部で、かつて武術が栄えた地域でもある。

(かかってこいということですか…舐められたものですね…)

アリサは高速で神機を変形させる。そのスピードはやはりハイドより上だった。特別に深紅のコーティングが施されたアリサの神機は、その紅い剣を奥にしまい込むと、同じく紅いガトリング銃を取り出した。

アリサはシユウに背を向け開けた場所に出ると、先程の捕喰で手に入れたアラガミバレットを装填した。

追いかけてきたシユウにアリサはアラガミバレットを撃ち込んだ。
ドオン！！と静かな街に銃声が響く。

「！」

『！』

銃声のした方角をハイド、コウタ、サクヤが見る。するとその上空
に信号弾が上がっていた。

「加勢する！」

調べていた建物から飛び出したハイドは、すぐさまアリサを見つけ
加勢した。

「いきましょう！」

「はい！」

サクヤとコウタは少々距離がある。合流までに少し時間がかかりそ
うだ。

「たあっ！てやっ！」

アリサは主にシユウの腕を狙って斬り付ける。そこが比較的脆いか
らだ。

「加勢する！」

後ろからハイドの声がした。シユウはハイドを見つけると、アリサへの攻撃を止めて飛び上がる。

ハイドはシユウの低空飛行を、ジャンプでギリギリかわす。

かわしたあとハイドはシユウに向かっていくが、シユウは両手を合わせ、エネルギーを溜め込んでいた。

「やばっ！」

ハイドはとっさに装甲を展開した。

ガン！！と装甲が鳴り、ハイドはシユウの攻撃を耐えしのぐ。

しかし装甲を収めたハイドが目にしたのは、自分に向かって右腕を振り上げているシユウだった。

「くそっ！」

今度はバックステップで手刀をかわす。そこにアリサがバレットを撃ち込み、フォローに入る。

「足を引つ張らないでくださいと言ったはずですよ」

「ありがとうアリサ！」

シユウを見つつアリサに礼を言うハイド。そしてシユウが銃撃で後ろによるめいてる間に、ハイドが剣で追撃していく。

シユウは二人に間髪入れずに攻撃されシユウは反撃出来ない。

と、その時シユウの後ろからも銃撃が飛んできた。シユウが振り返ると、サクヤとコウタが神機を構えていた。

「お待ちせ！」

「二人とも無事みたいだね！」

コウタとサクヤが合流したことで、シユウはさらに追い詰められる。怒り狂ったシユウは、自らのオラクル細胞を活性化させ、反撃を試みようとしたがそれは徒労に終わる。

「喰らえ！」

ハイドの神機が、コウタとサクヤに気を取られ背を向けたシユウを捕喰した。バーストしたハイドは、神機を銃形態へ変形させる。

そして三人にアラガミバレットを一発ずつ撃ち渡した。

「よしキタアア！！」

「いくわよー！」

「…どうも」

リンクバーストを発動した三人はその力を解放する。

「……………」

その時アリサが残っていたアラガミバレットをハイドに撃ち渡した。これでチーム全員がリンクバーストを発動したことになる。

「一気に決めるぞ!!」

ハイドが声を張り上げると、全員が銃口をシユウに向ける。

「いつけええええ!!」

「終わりよ!!」

「くらえ!!」

「トドメだ!!」

前後左右から濃縮アラガミバレットを浴びたシユウはついに力尽きた。

シユウの素材を回収した四人は、ヘリの待機地点へと向かっていた。

コウタとサクヤが、今日の配給についての話に花を咲かせているのを見計らって、ハイドはペースを落としてアリサと並んで歩く。

「今日はありがとう、アリサ」

ハイドはアリサに感謝の言葉を述べる。

「…なんのことですか？」

「今日、援護射撃してくれただろ？それにリンクバーストも…」

アリサは礼を言われた意味がわからず聞き返し、それにハイドが答えた。

「あれは、あなたがあの程度の相手にあまりにも手こずってたから援護したまでです。リンクバーストも、あの時の状況を見て、全員が発動した方がいいと判断したからです。他意はありません」

アリサは、自分がハイドを手助けした理由を言ったが、どちらも少々喜びがたい理由だった。しかしハイドはアリサに微笑みながら話す。

「それでも随分助かったよ…本当にありがとう」

そう言われたアリサは目を背ける。

(なんでこの人は私に構うんでしょうか…放っておいて欲しいのに…)

そう思った瞬間にアリサの頭の中で、ある映像がフラッシュバックした。自分にニコニコと微笑みかける、金髪の女の子と女性…そこで映像は途切れた。

「っ…」

アリサはズキズキと頭が痛むのを感じた。

「アリサ？どうかした？」

ハイドが心配そうな顔でアリサを見る。

「なんでも…ないです」

アリサはペースを上げて歩き、ハイドと距離を取った。

「…？」

ハイドはなんだかよくわからない表情で首を傾げる。

へりの着陸地点に着いた四人。すでにへりは待機していた。

アリサはさっさと乗り込み、続いてコウタが乗り込む。そしてサクヤが乗ろうとしたとき。

「サクヤさん」

ハイドが小声で言った。

「何？」

サクヤが聞き返す。

「つくづく今のアリサは、ソーマに似てますね」

ハイドは微笑みながら言った。

サクヤは意味を理解すると微笑み返して、ハイドの言葉を肯定する。

二人は、アリサは本当は優しい子だと、今回の任務で理解した。冷たい言動が目立つが、今日の戦闘における彼女の行動には、それが随所に見えかくれしていた。

いつかアリサが本当の自分をさらけ出してくれる日がくることを願
い、二人はへりに乗り込んだ。

十八喰：新型のチカラ（後書き）

なんか戦闘が少しグダグダになってるような…。

アリスの加入によって戦闘のバリエーションが増えるので、もう少し良くなるのかな…とってたんですが、なかなか上手くまとまりませんでした。

反省…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』（前書き）

アリスとタツミの口論と講義、おまけにソーマを盛りつけたらボリ
ユームが…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』

「わっかんねえ奴だな！外部居住区の防衛は住民の避難が最優先だつて何度言わせりゃわかるんだよ！！」

タツミがエントランスで怒鳴り声を上げる。周りにいた人たちは何事だといった表情で彼を見る。

「その言葉、そのままお返しします。何度も言わせないで下さい。作戦効率よりも住民の気持ち優先ですか？よくそれで防衛班の班長が勤まりますね。だから外部居住区の被害が多いんじゃないですか？」

「なんだとっ…！！」

（やれやれ…またやってるな）

ハイドはソファに座って、アリスとタツミの口論を頬杖をついて眺めていた。

周りの人間が「まあまあ」とか、「二人とも落ち着いて」とか、「言い過ぎだぞアリス！」などと二人の口論を止めようとするが全く効果がない。

これ以上激化してしまう前になんとかせねばと思うハイド。

（人間は考え込むと黙るから…そうだな…）

ハイドはターミナルにアクセスし、メールボックスを開いた。その

中から開いたメールは、榊から定期的に来るお知らせメールである。メールの本文に記載されている『今回の件に関する質問はこちらから』と案内されたアドレスを利用するためだ。

(メールの用件とまったく違う内容になっちゃうけど…まあ、榊博士に届くのは間違いないし)

ハイドはそのアドレス宛てにメールを作成した。

『ハイドです。』

少々事情があり、今回のメールは質問ではなく要望とさせて頂きま

す。今から講義を開いて下さい博士。コウタ、それにアリサも連れて行きます。

PS・僕が講義を開いてくれと頼んだことは二人には内密に。』

(これでよし…あとは返事が来てくれることを願うしか…ってもう来た?)

ハイドがメールを送信してから一分も経たずに榊からメールが送られてきた。

『榊です。』

いいよ(^-_-)』

榊からのメールの内容にすっかりこけて、少々人間不信になりそうだったのを堪えたハイドは、早速行動に出た。

「コウタ」

ハイドはまずコウタに声をかける。

「どした？」

アリサとタツミの口論を傍観していたコウタが振り返る。

「榊博士からの呼び出しだよ。『研究室に来るように』だって。」

「まさか…また講義？」

コウタが聞き返し、ハイドは頷く。

「はあ…まあ別にいいけどさ。どうすんのアレ？」

コウタは二人を指差してハイドに尋ねる。

「心配ないよ」

そう言ったハイドは二人に向かって歩きだす。

「え？おい、ハイド？」

二人の口論はツバキクラスの間人か来るか、緊急事態が発生するかどうかのことが起きないと止まらないと思われたが、それをハイドが無理矢理断ち切った。

「ア…アリサ」

肩に手をぼんと置かれたアリサが振り返ると、そこにはハイドが優しい笑みを浮かべて立っていた。

突然のことにアリサはまるで時が止まったように固まるが、すぐに立ち直り今度はハイドに冷たい視線を投げかける。

「何か用ですか？」

「悪いけど討議はここまでだよ。俺とコウタと君が、榊博士に呼び出されている」

ハイドはアリサの態度など気にも止めずに言った。アリサは「わかりました」と言ってさっさとエレベーターに向かう。

「タツミさん…すみません。アリサのこと大目に見てあげてくれませんか？」

「え？」

ハイドに小声で言われ、タツミは高ぶっていた気持ちが静まる。

「アリサは、今は戦略とか効率とかを優先した考え方をしていますけど、本当は優しい子なんです…。きつといつか、『それが全てじゃない』って自覚出来るときが来るはずですよ。それまでは、待っていてあげませんか？」

ハイドの言葉にタツミはポカンとしていたが、少しずつ顔が赤くなってきた。

「ま、まあ…俺もちょっと大人気なかったかな…うわ…なんかスゲー恥ずかしい」

タツミが完全に落ち着いたのを確認したハイドは、アリサとコウタについて歩いていく。と、その時タツミがハイドに声をかける。

「あのさ、ハイド…伝わるかはわからねえけど、アリサに『ちょっと言い過ぎた、スマン』って伝えといてくれ」

それを聞いたハイドは笑顔で頷いた。

「本当は直接言っただけいいんですけどね」

ニコニコしながらいたずらっぽいことを言うハイド。

「ぐっ…それを言われるとキツイな…」

ふふ…と笑いながらハイドは、コウタ、アリサと一緒に榊の研究室へと向かった。

「……………前にも言った通り、アラガミを構成しているオラクル細胞はなんでも食べる。動物や植物のような生物に限らず、鉱物やプラスチックのような合成樹脂…挙句には、通常の生物には危険な核廃棄物だって食べてしまう。建造物や大地だって…ほら、この通りだ。結果、『食べ残し』である従来の環境は減少の一途を辿っている。」

画面に表示された映像を切り替えながら榊はアラガミの捕喰について

て説明した。また映像を切り替えると綺麗な風景が映しだされた。

「この辺りには春に桜を、秋には紅葉を見に行くなんて習慣もあつただけど…今となっては、望むべくもないね」

ハイドは映像から、昔のこの国の文化に興味が出たが、今はもうこの風景が見れないと知って残念な気持ちになった。

「その一方で、アラガミは食べた物の性質を取り込むことがある。最近では『光合成』を行うアラガミすら発見されているんだよ」

榊は歩きながら、アラガミの生態の一部を説明する。

「窒素79%、酸素21%…世界中の植物が、二十年前の三割弱まで減ってしまった今でも、地球の気は保たれている。これがアラガミの『光合成』のおかげとは、実に皮肉な話だと思わないかね？」

榊はコウタの頭をチョンとつついた。コウタはソファに座った瞬間に眠ってしまった。

「うーん…母ちゃん…もう食べれないよ…」

よくある、しかしあまり聞かない寝言を口にするコウタ。

「ホント、自覚が足りない人ですね…」

アリサは完全にコウタに呆れていた。

「君達、『ノヴァの終末捕喰』って言葉聞いたことあるかい？」

榊はハイドとアリサに突然尋ねた。

「ええ…アラガミ同士が食い合いを続けた先に、地球を飲み込むほどにまで成長した存在、『ノヴァ』が引き起こすとされる、人類の終末…ですか」

アリサは終末捕喰について知っていることを述べる。

「たしか、アラガミ信奉教団の教団員が、いろんな人に『ノヴァの終末捕喰』を吹き込んで回り、集団自殺者を出したって事件になってましたね」

ハイドはそこに補足を入れる。

「その通り…誰が言いはじめたのかも知らない。単なる風説だとも言われているけどね」

「エイジス計画が完成すれば、それからも守れるんだろ？」

コウタが話にいきなり加わり驚く三人。どうやら榊がつついたことで少しだけ目を覚まし、人類滅亡の話で完全に覚醒したようだ。

コウタの言葉を聞いた榊はゆっくりと口を開く。

「……………『犬』という動物を知っているかな？」

榊は突然関係ない話を始めた。

「え？」

なんのことだかコウタはさっぱりだった。

「もう大分数は減ってしまったが、今でも稀に外部居住区などで見かけることがあるはずだ。犬は賢く…言葉こそ話せないが、我々人間とコミュニケーションを取ることが出来る。犬のような性質を引き継いだアラガミがいれば、或いは共生できるのかもしれないね」

「共生？」

榊の言葉にアリサが怪訝な顔をして聞き返す。

「コミュニケーションという観点で見れば、もちろん犬に限った話じゃない。昔はサーカスと呼ばれる、見世物小屋で猛獣を繰る、猛獣使いもいたのだからね」

「アラガミと仲良くなんて…出来るわけないじゃない…」

アリサは榊に聞こえない声で、吐き捨てるように言った。

「アラガミ…オラクル細胞は発見されたとき、まだアメーバ状のものであった。それからミミズ状のアラガミが発見され、半年後には獣型のアラガミが発見された。そして一年経った頃には、一つの大陸がアラガミによって滅ぼされたんだ」

榊が今度は、アラガミの進化の経緯を説明した。

「彼らが、食べた物の形質を取り込み進化するにしても、異常なスピードだと思わないかね？そう…正確な話、彼らアラガミは、進化などしてないんだ。事実、オラクル細胞の遺伝子配列は変化していない。一つとしてね」

「そんなハズありませんよ！現にやつらは形態変化してるじゃないですか！」

榊の説明にアリサが反応した。当然のことだ。今世界中には様々な種類のアラガミが生息している。その外見から生態、捕喰の傾向まで全て異なっている。なぜ榊が「進化してない」と言ったのか？アリサも横で聞いていたハイドもわからなかった。…ちなみにコウタはまた眠っていた。

「彼ら…アラガミもね、今の君達と同じなんだ」

榊はアリサとハイドを見て答えた。

「食べた物の形質を取り込むということは、『知識を得る』ということ。そう、ただ知識を得て賢くなっているだけなんだ」

榊はコウタが座っている方へ歩きだす。

「どつという骨格をしていれば動くことができるのか、空を飛ぶためにはどうしたらいいのか。それこそ、スポンジが水を吸い込むようにして、情報を取り込み…わずか二十年の間に、彼らは非常に高度な形態を得るまでに至ったんだ」

榊はコウタの頭の上から、比較的大きな声で説明したが当の本人は起きない。榊がまたコウタをつついてみたが、今度は完全に寝てしまったようだ。

「うつてん…」

…まったく起きる気配がない。

「アラガミがコウタ君ぐらい、勉強嫌いだったらよかつたんだけどね…」

榊が諦めたような声で言った。

「彼らの勉強熱心さには舌を巻かされるばかりでね…なんと、ミサイルを発射するアラガミが目撃された噂まである。これが確かなら、彼らは人が作り出した道具すら取り込んでしまったということだ」

アラガミの進化の可能性と多様性にハイドは驚く。

「実に興味深いと思わない？それほどまでに複雑な情報を取り込めるのなら、まるで人間というアラガミが現れるのも、遠い日じゃないかもしれないね…」

榊は遠くを見るような目で（狐目だが）、一つの可能性を挙げる。

「人間という…アラガミ？」

アリスが聞き返す。確かに、それは否定しきれないなとハイドは思う。

榊の講義はここで終了した。

榊の講義にハイド達が参加していた頃…ソーマは任務で一人、贖罪

の街に来ていた。

ソーマはゆっくりと進み目標を探す。するとその時、誰かが教会に入っていくのが見えた…ような気がした。

「……人影…か？」

ソーマは教会の中に入って調べてみるが、中には誰もいなかった。

「気のせい…か」

ソーマはポシエットから携帯電話を取り出した。

「こちらソーマ。特務目標との接触はなし。索敵を続ける」

ソーマは携帯をしまつと教会から出ていく。その後ろ姿を、真っ白な少女が見つめていた…。

十九喰：『ペイラーサカキのなぜなに講座3』（後書き）

アリサとタツミの口論を書くときは注意しました。

下手すればアリサの印象がもっと悪くなってしまつので気を使って書かないとな〜と思ったんですが…案の定、程よく書けたか不安です。

二十喰：『空を見るんだ』（前書き）

ついに二十話になりました。リンドウの名アドバイス？回です。

芝の上に寝転んで、空を見て穏やかな気持ちになった思い出があります。

二十喰：『空を見るんだ』

ハイドは榊の講義が終わったあと、自室へと向かった。すると自分の部屋の隣にアリサがいた。段ボールの小山を片付けている最中のようだ。

「あれ？アリサ、隣の部屋なんだ？」

ハイドが声をかけるとアリサが顔を向ける。

「…どうやら…そのようですね…」

アリサはハイドに目もくれず荷物を整理していた。

アリサはフェンリル極東支部に配属されてすでに4日目だが、彼女の荷物は遅れてロシアから届けられた。その上、荷物の内部検査や書類の確認や申請まであったので、部屋まで届くのに時間がかかったのである。

「手伝うよ」

ハイドは段ボールを一つ持ち上げる。それをみたアリサは、いつもの冷たい視線を彼に向けてそれを拒否する。

「けっこうです！自分でやりますから」

「でも、二人でやった方が早く終わると思うけど、これはどこに置いたらいいかな？」

ハイドは首を傾げて聞き返す。

「必要ないと言っているのがわからないんですか？」

若干苛立った声でアリサは言った。

「はいはい…んで、どこに置いたらいいの？」

ハイドは軽く聞き流して、アリサに再度確認する。

アリサは観念してため息をついた後…。

「それはベッドの上に置いて下さい…」

呆れ気味に言った。

「了解」

ニコニコしながらハイドはアリサの指示に従う。

（なんでこの人は私に構うの…私には仲間なんかいらぬのに…一人ですらやっていけるのに…）

アリサはハイドに対する疑問、不満、愚痴を頭に浮かべる。

二人で作業した結果がやはり早く終わり、ものの40分でアリサの荷物は全て片付いてしまった。

「これで終わりです」

アリサは最後の段ボール箱をテーブルの上に置きながら言った。

「そっか」

ハイドはそう言ったあと、部屋を一旦出る。彼に続いてアリサは部屋の入口まで来る。

「…一応、お礼は言っておきます…ありがとうございます」

「どういたしまして。でも気にしないでいいよ？俺達は同じ仲間なんだから」

「同じ仲間なら重ねて言いますが、足を引つ張らないで下さいね。足を引つ張るといえば、あの『コウタ』とかいう人…講義は聞かずに眠ってるし、ミツシヨン前にもお気楽な言動が目立ちますし…。一緒に組んだらと思うとゾツとします。一度厳しく言っておいて下さい」

アリサは真向かいにある部屋…コウタの部屋を見て言った。

「ハハ…確かにコウタは楽天的だけど、あいつの明るい性格のおかげで、俺がずいぶん助かっているのも本当なんだ。あいつにはちゃんと良いところもある…これだけはわかってあげてほしいな」

ハイドは穏やかな表情でアリサに言った。

（あんな自覚が足りない人にも良いところがある？笑わせないで下さい…）

アリサは少し間を置いて…。

「考えておきます」

そう言ったアリサは扉を閉めて、セキュリティロックをかけた。

(怒らせちゃったかな…)

その翌日、ハイドとアリサは贖罪の街へと来ていた。今日はリンドウと三人でのミッションだ。

ハイドはリンドウがやってくるまでの間、なるべくアリサに話かけるようにした。

「アリサ、少し聞きたいんだけど…」

「…なんですか？」

「ロングブレードの戦術としては、やっぱり斬撃の合間にインパルスエッジを混ぜていった方がいいのかな？」

インパルスエッジとはロングブレードを装着している神機にのみ使える、神機内のオラクルを使った攻撃である。どんな属性のオラクル攻撃が出るかは種類によるが、属性攻撃のカバーとして使用したり、狙った部位の破壊のために使われる。

だが、大概のインパルスエッジは爆発系の攻撃であり、それを押さえ込まなければならなかったためにスタミナを大量に消費する上、オラクルが切れれば使えなくなるなどの欠点もある。

「…バーストしてないうちからそんなことしたら息切れしますよ？その戦術で戦うならリンクバーストLv3を発動するのがベストです。スタミナの消費量が減って息切れの心配はほとんどありません」

「そうなんだ。まだ使ったことない武器だから、よくわからなくてね…」

「あなたはずっとショートで戦ってるんですか？」

「まずは経験を積んでからって思ってるんだ。アリサはゴッドイーターになって一年経ってるけど、俺はまだ一ヶ月も経ってないからね…戦闘経験を増やしてから、使う武器のバリエーションを増やす予定なんだ」

「気の長い話ですね…それまでに死ななければいいですけど」

「アハハ…ホント、気をつけないとね」

などと話しているとリンドウがやって来た。

「お、今日は新型二人とお仕事だな。足を引っ張らないよう気をつけるんで、よろしく頼むわ」

リンドウは神機を肩に担ぎながら言った。

「足を引っ張るだなんてそんな…」

むしろ足を引っ張るのは自分の方だと思っハイド。ところがアリサはリンドウにすらキツイ一言。

「旧型は…旧型なりの仕事をしていただければ良いと思います」

アリサの物言いに目が点になるリンドウとハイド。

「はっは…まあ、せいぜい期待に沿えるように頑張ってみるさ」

と言ってリンドウがアリサの肩に手をぽんとおいた。

その瞬間、アリサの頭の中で様々な映像がフラッシュバックした。黒い、人間の顔を持つ虎のようなアラガミ…入院していた病院で主治医に見せられたアラガミの写真の数々…血にまみれた幼い頃の遊び場…。

「きゃあ！」

気持ちが悪い映像群に拒否反応をしめし、悲鳴をあげてアリサは飛びのいた。

「あゝあ…随分と嫌われたもんだな」

リンドウは残念そうに言う。

「あ、す…すいません！なんでもありません。大丈夫です」

頭を押さえながらアリサは謝る。

「ふっ…冗談だ。んー…そうだなあ…。よしアリサ、混乱しちまった時はな空を見るんだ。それで動物に似た雲を見つけてみる。落ち着くぞ？それまでここを動くな。これは命令だ。そのあとでこっち

に合流してくれ、いいな？」

「なっ…なんで私がそんなこと…」

リンドウに反論しようとするアリサだが…。

「いいから探せ…な？」

リーダーであるリンドウの一押しで決定してしまった。

「よし、先にいくぞ！」

リンドウはハイドを見てミッションスタートの合図を出した。

「はい！」

そしてリンドウとハイドは先に街へと進んでいき、アリサは一人残された。

(アリサ…言われた通り雲を探すかな？)

ハイドはアリサの方を気にしながらリンドウと共に歩いていった。

アリサは命令だからと、一応空を見て雲と動物を照らし合わせてみる。「こんなことして何の意味があるのよ…」と愚痴をこぼしながら…。

「あいつのことなんだが…どうも色々ワケありらしい」

リンドウはアリサのことについて、ハイドに話していた。

「まあ、こんなご時世みんないろんな悲劇を背負ってるっちゃあ背負ってるんだが…同じ新型のよしみだ。あの子の力になってやれ、いいな？」

リンドウの言葉にハイドは頷く。

「わかってます、リンドウさん。一応これでも、努力はしてるんですよ？」

ハイドの言葉にリンドウは満足そうに笑う。

「はっは…そうか。ソーマの時といいホントお前は頼りになるな」

リンドウに頼りなると言われたハイドは否定する。

「そんなことないですよ。まだどちらとも仲良くなれていませんから」

「フ…よし…じゃあ行くか！」

頃合いをみて二人は、夕暮れの街へと駆け出した。

二十喰：『空を見るんだ』（後書き）

知人に指摘され、アリサの心情の描写を増やしてみました。

よくよく読み返せば、今まで主人公以外のキャラの心情描写って極端に少なかったですね。

猛省…。

二十一 喰・蒼穹の月（前書き）

ついにこの話に来てしまいました。少々いつもより長めです。

二十一 喰：蒼穹の月

別れは様々なカタチでやって来る。学校の卒業式で友との別れ…愛し合っていた恋人との別れ…戦場で共に戦った、大切な人との別れ…。

その日も、俺はいつも通り任務に出て、アラガミを討伐していた…。

「コウタ！援護してくれ！」

「了解！」

夕暮れ時の街でハイドは巨大な獅子、「ヴァジユラ」に突撃している。ハイドの後ろからコウタは銃を構え、ヴァジユラの顔めがけてバレットを撃ち込む。

ヴァジユラはコウタの弾をヒョイとかわすと、ハイドに強靱な右足を振るうが、ハイドは一度バックステップでかわした後、その脚を斬り刻んだ。

ヴァジユラが大きく後ろにバック転しながらジャンプして距離をとるが、着地した瞬間にソーマに顔を斬りつけられた。

怯んだ瞬間、ヴァジユラの胴体にサクヤがレーザーを放つ。

するとヴァジユラは咆哮し、肩から生えている「マント」と呼ばれている部位に電流が走った。どうやら怒らせてしまったようだ。

それを見たハイドはスタングレネードを使用する。怒り、オラクル細胞が活性化した状態のヴァジユラには、普段の状態でスタングレ

ネードを使うよりも効果が高く、視力が回復するまでにだいぶ時間がかかるのだ。

ヴァジユラが倒れこんだ隙に、ハイドとソーマが神機を喰らわせる。

「ここだ！」

「喰らえ！」

バーストしたハイドとソーマはそれぞれ行動に出た。ハイドはサクヤとコウタをリンクバーストさせるために、銃形態へと神機を変型させてアラガミバレットを受け渡し、ソーマはヴァジユラの顔に、バスターブレード刀身を装備した者のみに使える攻撃「チャージクラッシュ」を叩き込んだ。

「終わらせるわよ！」

「おっしやああああ！！！」

サクヤとコウタはリンクバーストを発動した後、ヴァジユラに弾丸とレーザーを一斉に浴びせる。

ハイドは比較的脆い前脚と尻尾を狙って斬り刻む。

ヴァジユラは第一部隊にやられ放題だったが、ようやく視界が戻ってくるのと再び攻撃を開始した。

そして一際大きな咆哮を上げると、ハイドの足元から青い稲妻が走り、やがてドーム状に膨らんでいく。ハイドはすぐさまそのドームから逃れると、脱出した瞬間にドーム内に強烈な電撃が走った。

(危なかった…)

ハイドは残されたアラガミバレットをソーマに渡すと、ポケットからあるものを取り出した。

そしてヴァジュラが、ハイド以外の標的を狙っているときに、それを地面に設置する。

サクヤ、コウタ、ソーマはハイドが何をしているのかを理解すると、それぞれハイドのフォローに回る。

「よし！出来た！」

ハイドが設置を完了させると同時にヴァジュラがハイドを狙う。そして大きく飛び上がり、ハイドに襲い掛かる…が、その一歩手前でヴァジュラは止まった。

ハイドが仕掛けたのは「ホールドトラップ」。簡単に言えばアラガミの動きを封じる罠である。

何かに縛りつけられたかのように身動きがとれなくなるヴァジュラ。

ハイド達はその隙にありったけの攻撃を入れる。身体のおちこちが破壊されていき、ヴァジュラは苦悶の声を上げる。

ホールドトラップの効果が切れ、再び動けるようになったヴァジュラはコウタを狙って飛び上がる。

「うわぁー！ー！」

コウタは辛うじてよけるがそのすぐ後に再びヴァジユラがコウタを狙う。

(やばい…!!…!)

ヴァジユラがコウタをめがけてジャンプする。

自分の死を覚悟するコウタ。

そしてコウタとヴァジユラの間に入り込む、神機を構えたソーマ。

(いい加減くたばれ…)

力を溜め込み…。

「死ね!!」

ソーマはヴァジユラの顔にチャージクラッシュを叩き込んだ。跳んでいる最中に、顔からチャージクラッシュをまともに食らったヴァジユラは地面に叩きつけられる。

ヴァジユラはそれでも立ち上がるつとめるが、やがて力尽きて倒れた。

「ナイスよ、ソーマ!」

サクヤが駆け寄って言った。

「フン…」

ソーマとはそっぽ向く。

「大丈夫か？コウタ」

ハイドがコウタを助け起こす。

「うん、なんとかね！」

明るい表情でハイドに答えるコウタ。

（にしても手強かったなコイツ）

ハイドは、ソーマの神機が捕喰しているヴァジュラを見て思った。

「新人が乗り越えるべき壁」と言われているヴァジュラ。それを倒したハイドとコウタは、一応「新人」という肩書きは外される。

（まだコイツより強いアラガミがいるのか…もっともっと強くならなくちゃな…）

そう思ったハイドは改めて気を引き締めた。

「…戻るぞ」

捕喰を終えたソーマの言葉で三人は引き上げる。そして教会の入口まで来ると、反対側から自分達によく知る人物が二人やって来た。

「何？」

ソーマが驚いた。

「お前ら？」

「あれ？リンドウさんなんでここに！？」

やって来たのはリンドウとアリサだった。何故二人がここにいるのかは、ハイド達がヴァジュラを倒した瞬間辺りまで遡る。

リンドウは朝からシックザールに呼び出され、「今日は街に行つてやって貰いたいことがある」と任務を言い渡されていた。そして「ミッションにはアリサ君を同行させたまえ…」と、人選にまで注文をつけられた。そして現在に至る…。

リンドウとアリサは縦に並んで神機を構えながらゆっくりと進んでいた。

「…これは、いよいよキナ臭くなってきたな…」

近くにアラガミの気配はないが、辺りの異様な空気にリンドウが呟く。

その瞬間後ろにいたアリサの頭の中で、また映像がフラッシュバックした。

（また…なんなのよ…）

アリサはここ最近時折頭に流れる映像群に悩まされていた。

そんなアリサにリンドウが振り返った。

「どうかしたか？」

「い、いえ…問題ありません。側面、後方共にクリアです」

アリサはリンドウに悟られないようにごまかした。リンドウは少し考えてから…。

「そうか。進むぞ」

そして二人は教会の方へと進んで行った。

「どうして同一区画に二つのチームが…どういうこと!？」

サクヤが疑問を口にする。それはそうだ。原則として同じ区画に複数のチームは向かわせないのがフェンリルの軍規だ。疑問に思わずにはいられない。

「考えるのはあとにしよう。さつさと仕事を終わらせて帰るぞ。俺達は中を確認、お前達は外を警戒、いいな？」

手短かにリンドウがそう言うと、ハイド達は教会の入口を囲んで立ち、リンドウとアリサは中へ入って行った。

リンドウとアリサが教会の奥に入っていくと、何かの気配を外に感じた。やがて教会の割れたステンドグラスから、女の顔を模したヴ

アジュラの同型種、「プリティビ・マータ」が現れた。

「下がれ！！後方支援を頼む！」

リンドウは神機を構えて叫ぶ。プリティビ・マータはステンドグラスの窓辺から飛び降りて教会の中に入り、冷酷な瞳で目の前の獲物を見据える。

そして、プリティビ・マータの顔を見た瞬間、アリサの頭に昔の記憶が再生される。目の前でアラガミに親を食い殺される…あの記憶が…。

(パパ…ママ…やめて、食べないで…！)

アリサは少しずつ後ずさっていく。その肩も唇も震えていた。

「アリサア…！どうしたあ…！」

リンドウはアリサの異変に気づき、プリティビ・マータの相手をしていながら声を荒げる。

アリサは銃をゆっくりプリティビ・マータへと向ける。

『そつだ！戦え！打ち勝て…！』

(神機の適合試験の時…)

リンドウはプリティビマータの脚に突き飛ばされ、後ろに吹っ飛ばす。

『こつ唱えて引き金を引くんだ…』

(アジン)

(ドウ)

ヴァ (トウリー) !」

(入院してた時、オオグルマ先生が教えてくれた…)

「 (アジン) (ドウヴァ) (トウリー) …」

アリサは呟く。リンドウは立ち上がり反撃する。

『 そうだよ…そう唱えるだけで、君は強い子になれるんだ…』

「 (アジン) … (ドウヴァ) … (トウリー)

…」

アリサは再び呟き、銃口をゆっくりと、リンドウに向ける。

『 こいつらが、君達の敵…アラガミだよ…』

アリサの指は引き金へ…その先を曲げようとしたとき…。

『 混乱しちまったときはな、空を見るんだ』

その瞬間、アリサは銃口を天井へ向ける。

「 いやあっ!! やめてえっ!! 」

引き金を引き、通常のオラクルバレットとは思えない威力の弾が天井に命中し、教会の奥へと続く入口に瓦礫の壁を作った。

大きな爆発音が聞こえ、何事だとサクヤとハイドが駆け付けると、瓦礫の壁の前で床にへたりこんだアリサがいた。

「あなた……！！一体何をっ！？」

「ちがう……ちがうの……パパ……ママ……わたし……そんなつもりじゃ……！」

サクヤが問いたただすが、アリサは既に錯乱していて求める答えは返ってこない。

「くっ！」

サクヤは仕方なく、瓦礫に向けバレットを発射するが、威力が足りず崩せない。

ソーマとコウタは神機を構えて、この状況を打破する方法を考えていた。

「マズいな……こっちも困まれてやがる……！」

二人の目の前には、プリティビ・マータが3体いた。そのうちの1体が教会の中へ押し入ってきた。

「うわぁ……！」

コウタは寸でのところかわす。

プリティビ・マータはゆっくりとハイド、サクヤ、アリサの方へ顔を向ける。

サクヤはプリティビ・マータへ神機を向け、バレットを撃ち込み、ハイドも応戦する。

外にいるプリティビ・マータはソーマが応戦し、それをコウタがフオローする。

「命令だ！アリサを連れてアナグラに戻れ！」

その時、瓦礫の壁越しにリンドウの声が響く。

「でも…！」

リンドウを見捨てることが出来ずサクヤが口を開くが…。

「聞こえないのか！！アリサを連れてとつとアナグラに戻れ！サクヤ！全員を統率！ソーマ！！退路を開け！！！」

リンドウは声を張り上げて言った。それはいつもの飄々とした口調ではなく、緊迫感のある口調だった。

「パパ…ママ…そんな…つもりじゃ…！」

ハイドはアリサが今だに錯乱しているのを見て側へ行く。

「リンドウも早く…！」

サクヤはリンドウを必死の想いで呼ぶ。

「ワリいが、俺はちょっとこいつらの相手をしてくる！配給ビール、取っついてくれよ…！」

「駄目よ！私も残って戦うわ！」

なおも食い下がるサクヤにリンドウがもう一度命令を出した。

「サクヤ！これは命令だ！全員必ず生きて帰れ！」

「いやああああ！！！！」

サクヤの悲痛な叫びを堪え、やってきたコウタがサクヤの腕を引く。

「サクヤさん！行こう！このままじゃ全員共倒れだよ！」

「いやよ！！リンドウ！！！！」

教会全体が地震がおきたように揺れ、埃が舞う。ハイドはアリサを背負って立ち上がると、サクヤに呼びかけた。

「サクヤさん！行きましょう！」

「いやよっ！！リンドウを放って行けるわけないでしょ！！！」

全く聞く耳を持たないサクヤに、ハイドは珍しく覇気のコめられた口調で怒鳴った。

「見捨てられないのはみんな同じだ！！でも今は行くしかないんだ！リンドウさんの出した命令を無視してみんなを殺す気か！？そんなことしたら、リンドウさんは何て言うと思ってるんだ！！全員生きて帰れと言われただろ！！！」

ハイドの言葉にはっとするサクヤ。しばらくの間を置いて…。

「……………コウタ、ソーマのフォローをお願い……………ハイド、ありつたけのスタングレネードを渡して頂戴…あなたは私がフォローします……………」

サクヤの反応を見たハイドは高ぶった気持ちを静める。

「了解！」

そして四人は外へ飛び出した。ソーマはプリティビ・マータを牽制しながら戦っていた。

「いつまでも待たせるな！早く撤退するぞ！」

ハイドたちはソーマと合流し、帰投ヘリの着陸ポイントへ急いだ。

「……………行つたか」

ハイドたちが退避したあと、リンドウはプリティビ・マータを倒して、床に座り込み、壁に背を預けてタバコを吸っていた。

すると、プリティビ・マータが現れた窓辺に、今度は全身が黒い、敵つい男の顔を持つヴァジュラ種の中の最強種、「ディアウス・ピター」が現れた。

「はあ…ちょっとくらい休憩させてくれよ。身体が持たないぜ…」

タバコをもう一度味わい、それを床に投げ捨ててリンドウは立ち上

がる。

そしてリンドウは神機を肩に担ぎ、咆哮を上げる帝王に戦いを挑んだ…。

極東支部に戻った第一部隊のメンバーの表情は暗かった。

スタングレネードを全て消費してプリティビ・マータを撒くことに成功し、ヘリで無事帰投することができたが…誰も安堵などしていなかった。

帰投するなりアリサは医務室に運び込まれた。やはりまだ錯乱状態らしい…。今は薬を投与され眠っている。

サクヤの表情は目に見えて暗く、見ていて痛々しかった。ソーマは腕を組んで壁に背中からもたれ掛かり、何やら思い詰めた表情だった。コウタもいつもの明るさは消え去り、黙ってソファに座っていた。

第一部隊にヒバリから、「リンドウの腕輪の生命信号を確認するピーコンからの発信が途絶えた」と伝えられたのはこのすぐ後であった。

この日から俺達の運命は、大きく動き出した…。

二十一 喰・蒼穹の月（後書き）

サクヤさん、ハイドに敵しいこと言わせてしまいました。誰よりもツライだろうに…すいません。

話は逸れますが、アリサの呪文『

（アジン）

（ドウ

ヴァ）（トウリー）』はロシア語で、アジンが1、ドウヴァが2、トウリーが3の数字を表しているそうですね。

要するに『イチ、ニのサン！』で引き金を引くってことみたいです。
……………今更？

二十二喰：霞む希望、わずかな光（前書き）

ツバキとアリサが可哀相な回であり、そして二人に希望がもたらされる回です。

二十二喰：霞む希望、わずかな光

「教官！俺達も、リンドウさんの捜索に向かわせてください！」

「何度も言わせるな…それについては正規の部隊が動いている。経過を待て」

ブレンダンがツバキに詰め寄るが、ツバキはそれを突き返す。

「しかし！人数が多い方が、発見の可能性が…！」

今度はタツミが食い下がる。

「くどい！」

またも跳ね返すツバキ。すると次はカノンが…。

「リンドウさんは命の恩人なんです！だから今度は私たちが…！」

「くどいと言っている…！」

ツバキの張り上げた声に、第二部隊が肩を落として黙り込む。

「…ツバキさん、支部長がお呼びです」

その時ヒバリがツバキに声をかける。

「わかった。しばらく頼む」

「了解しました」

ツバキはさっさとエレベーターに乗って役員区画へ行ってしまった。

「なんでなんだよ…ツバキさん…リンドウさんのことが、心配じゃないのかよ…」

タツミが拳を握りしめて呟く。すると、後ろから事の一部始終を見ていたゲンが、第二部隊に話し掛けた。

「おい、てめえら…あいつの目の前で何人死んだか…教えてやろうか？」

「あ…」

カノンがゲンの言いたいことを理解する。ツバキはリンドウと同じくらい長い年月を戦っている。数々の戦いを経験した彼女は、その分人の死も経験しているということだ。

「ましてや血を分けた弟だ…飛び出したいのはあいつの方だろうに…」

エントランスに沈黙が訪れる…。

ツバキは支部長室へ向かうため、廊下を歩いていた。頭の中に、第二部隊の言った台詞の数々が流れ続ける。聞きたくなくて、苦しくて…ツバキは壁に、苛立ちを乗せた拳をぶつける。

「……………」

それから少しして、ツバキは支部長室へと向かった。

場所は変わってエントランスへ。

ハイドはよろず屋で、一昨日のミッションで消費したアイテムの補充をした後、ソファに座って考え込んでいた。

(同一区画に二つのチーム…一度に大量に現れた大型アラガミ…アリサの行動と錯乱…)

ソファに座って黙りこくってたハイドの前に、いつの間にかリツカが来ていた。

リツカは自販機で買ってきたと思われるジュースを二本持っていて、片方をハイドに手渡した。

「隣座るよ?。」

リツカはハイドの隣に座ると、スプリングを開けてジュースを飲み始める。少し沈黙が続いた後…。

「リンドウさん…まだ見つかってないんだって…。」

リツカが捜索班からの報告をハイドに伝える。

「そうか…」

力無くハイドは答える。そして再び沈黙…。

やがてジュースを飲み干したリツカが立ち上がると、ハイドに辛そうな顔を向ける。

「捜索班は、ちゃんと探してくれてるけど…あまり期待しないでね…彼らの仕事は主に、腕輪と神機の捜索だから…」

「……………」

リツカの言葉を黙って聞くハイド。リツカは少し心配そうな顔をしてハイドを見たが、やがて整備場へ戻って行った。

手持ち無沙汰にハイドは、リツカから貰ったジュースを口にする。

「……………冷やしたカレーか…リツカなりに元気づけようとしたのかな…」

飲めたものではないが、リツカの好意を無駄にしないために一気に飲み干し、ハイドは立ち上がった。

ハイドはラボラトリ区画に来ていた。アリサの様子を見に来たのだ。

医務室の前まで来ると、中からアリサの声が聞こえて来た。

「見ないで…もう放つといてよ…来ないで…私なんか…私なんか…
……………」

「鎮静剤を！クッションは交換しておけ！」

ツバキも中にいるようだ。どうやらアリサの面倒を看護婦と一緒に
看ているようだ。

「ああ…ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ………パパ…ママ
ア…私…違う…!!…違うの…!!！」

「私だ、わかるか？アリサ！」

「そんな、そんなつもりじゃなかったの!!…違う!私じゃない!!
私のせいじゃない!!！」

ハイドはアリサの変わり様に呆然としていたが、医務室の扉に手を
かける。

「ああ、君か…」

「！」

ハイドが振り向くと、無精髭を生やし、タバコを口にくわえた男が
やってきた。髪も長く、見た目はかなりルーズだが、胸に留められ
た医師免許がその腕を証明していた。

「極東支部の新型君…確か神霧ハイド君だったかな？」

「あなたは…？」

「私の名はオオグルマダイゴ。アリサがロシアにいた頃から、彼女

を看ている主治医だ」

そしてオオグルマは、ハイドが医務室の中に入ろうとしているのを見て話を続けた。

「今は、会わない方が良さだろうな…薬が切れるとあの調子だ。日を改めたほうがいいぞ」

「イヤアアアア！！」

アリサの絶叫が廊下に響き渡る。

「彼女だって、今の様子はあまり見られたくないだろうしな…」

オオグルマは申し訳なさそうにハイドに言った。

そしてハイドは、残念だが仕方がないと頷いて、その場を離れた。

ハイドはそれから任務が終わった後、面会出来るときは必ず医務室を訪れるようにした。アリサに何があったのか、『あの時』一体何があったのか…それが知りたかった。リンドウは未だ見つからない。ハイドは事の真相が知りたかった。

だがしかし、それ以上にアリサのことが心配だったのだ。あれほど冷静で、落ち着いたアリサがああまで変貌したら無理もない。

リンドウがいなくなっただけからすでに一週間。この四日間毎日、ハイ

ドはアリサのもとを訪れていた。

だが、『面会』と言っても、実際は「医務室に入ることが許されただけ」のようなものだった。何せ、顔を合わせるとアリサはいつも、点滴を受けながら眠っていたのだから…。

面会五日目…今日もハイドは見舞いにやってきた。アリサは案の定、寝息を立てている。

ハイドは近くにある椅子を引いて、そこに腰掛ける。

「アリサ…俺は、仲間である君を助けるって…前に言ったよね…。
………情けないよな…あんな偉そうなこと言っというて、いざ君に何かあると何も出来ない…」

ハイドの独白は、アリサの他に誰もいない医務室に静かに響く。

「アリサ…俺は君を助きたい…でも、どうしたらいいのかわからないんだ…」

「話し掛けても無駄だよ」

「！」

ハイドが驚いて振り向くと、医務室の扉の前にオオグルマが立っていた。

「効果の高い鎮静薬が届いたんでね…当分意識は戻らないはずだ」

オオグルマはアリサが眠っているベッドの側まで来ながら言った。

「…そうですね」

そしてハイドは、そろそろ医務室を出ようと思い、さよならの挨拶の代わりにアリサの左手を握った。

「!?!」

その瞬間、ハイドの頭に見たことのない映像が次々と映し出された。ハイドはまるで、自分がその映像を本当に「見て」いるかのような感覚を覚えた。

(な…なんだこれは…!?!)

ハイドがわけがわからず混乱していたら…。

「…あれ…ここは…私…どうして…?」

アリサが目を覚ました。

「意識が…回復しただと…!?!まさか…し、失礼する!」

アリサの回復にオオグルマは驚き、すぐに医務室を出て行った。

「今…あなた…の…」

そう言って、再び目を閉じるアリサ。ハイドは自分の手とアリサ、オオグルマが出て行った扉を順番に見つめた。

「……………」

オオグルマは休憩スペースへ歩きながら携帯電話で話をしていた。

「……………はい…ええまさか意識を取り戻すとは……………」

オオグルマは驚きを隠せずに言うと、話相手の声が耳に流れる。

『原因はわかっているのかね？』

「詳しくはわかりませんが……………」

『まさか…新型の？』

「ええ…例の…『新型同士の感応現象』が起きたのではないかと……………」

『そうか……………』

「はい…どうします？隔離しますか？」

切羽詰まった声でオオグルマが言うが、話相手はそれを否定する。

『……………いや、彼女にはまだ生きていてもらおう……………いざという時の「保険」、としてね……………』

「そうですか…では暫くはこのまま…はい！じゃあ、私はこれで……………」

そしてオオグルマは電話を切ると、医務室を見て呟いた。

「フン…面倒な事になりそうだ…」

二十二喰：霞む希望、わずかな光（後書き）

オオグルマほど書きやすい悪党は、他のゴッドイーターキャラには
いないだろうな」と書いてて思いました。

二十三喰：ツバキの涙、アリスの過去（前書き）

長くなるので二回に分けて書かせていただきます。

二十三 喰：ツバキの涙、アリサの過去

リンドウが行方不明になってから8日：アリサを除いた第一部隊は、ツバキに呼び出された。

「全員そろったな。お前たちを呼び付けたのは他でもない。本日の任務を、『当該地域のアラガミ一掃』に変更する。なお検査中だったアリサは快方に向かいつつあるが、入院のため暫く前線を離れることになるだろう。最後に：本日をもって：神機、及びその適合者であるリンドウは、消息不明：除隊として扱われることになった。以上だ」

ツバキの発言にサクヤがいち早く反応した。

「そんな…腕輪も神機もまだ見つかってないんですよ!?!」

「上層部の決定だ。それに、腕輪のビーコン、生体信号ともに消失したことが確認された。未確認アラガミが活性化している状況で生きていくかもわからない人間を捜す余裕はない!」

食ってかかるサクヤに言い放つと、ツバキはエレベーターに乗り、別のフロアに移動してしまった。

ソーマは聞くだけ聞いたなら何も言わずにどこかへ行ってしまった。

「ねえ!こんなに早く搜索が打ち切られるなんておかしいわ…!!
襲われた敵も場所もわかってるのに、なんで…!」

サクヤはハイドに向かって涙を零しながら、搜索打ち切りに対する

怒りをぶつける。

「いや…ゴメン…ハイドに当たっても仕方ないね…。少し…頭を冷やしてくる…任務には間に合うようにするから…」

そう言ったサクヤは、自室へと重い足取りで向かった。

「サクヤさん、大分参ってるみたいだね…。俺、ハイドもみんなもよくやったと思ってるよ。でも、アリサのやつ…急にどうしちゃったってんだよ…?」

コウタは身の回りの目まぐるしい変化に戸惑っているようだ。

「同じ新型なんだしさ…ハイドが側に居てやった方がいいんじゃないかな?」

「ああ…もちろんだ…」

コウタの提案にハイドは頷く。

「俺、サクヤさんの様子見てくるよ!」

「わかった…」

そう言ったコウタはエレベーターに向かって駆け出し、ベテラン区画のサクヤの部屋へと急いだ。

そのベテラン区画のある休憩スペースで、ソーマは一人腰掛けていた。

その少し離れたところで、二人のゴッドイーターがヒソヒソと話をしていた。

「おい、聞いたか？第一部隊のリンドウさんのこと…」

「ああ、またソーマのチームから殉職者が…」

「お、おい馬鹿！聞こえるぞ…！」

とある理由で、昔から並のゴッドイーターとは違うソーマには二人の会話など丸聞こえだったが、それよりもリンドウに対して腹を立てていた。

（自分の出した命令すら守れねえのかあいつは…！！）

「クソっ！」

苛立ったソーマは声を漏らし、手に握っていた缶を怒りに任せて握り潰した。

暗い雰囲気のまま夜が終わりを告げ、日が上る。やはりどうしても昨日の決定に納得がいかなかったサクヤは、エレベーターが来るのを待っていたツバキに掛け合った。

下降するエレベーターの中でツバキは嗚咽を漏らす。その涙は誰にも見られることは無かった。

ハイドはアリサがいる医務室に来ていた。

アリサは変わらず眠り続けていて、ハイドは彼女が眠っているベッドの横で椅子に座り、考え事をしていた。

(アリサに触れた瞬間に、頭に流れ込んできたあの映像は、まず間違いない。アリサの記憶だ…原理とか理屈はわからないけど…もう一度触れれば、何かわかるかもしれない…)

やがてハイドは前の時のように、アリサの左手に手を伸ばす。

(眠ってる女の子に触れて記憶を探るなんて、本当はしちゃいけないけど…今はそんなこと言ってる場合じゃない)

その手が触れた時、ハイドは再び映像の海へと投げ出された。

廃屋が建ち並ぶ、どこかの街…。そこに、優しい女性の声が響き渡る。

「もついいかい？」

「まあだだよ！」

そこに元気そうな女の子の音が響く。

「もういいかい？」

今度は男性の音が響く。

「まあだだよ！」

また女の子の音がする。

(これは…アリサの子供の頃の…)

二人の男女の声は、おそらくアリサの両親のものだろう、とハイドは推測した。

三人のやり取りは続いたが、女の子…アリサが「まあだだよ！」と言わなくなった。

アリサの両親は、近くにアリサが隠れていると悟り、辺りを探そうとする…が。

「アラガミだ！！アラガミが来たぞ！！」

と、叫び声が辺りに響く。

アリサはその光景を、隠れていたクローゼットの隙間から見ていた。

突然唸り声が聞こえて…漆黒の獅子が二つの命をあっさりと奪い、

蹂躪する。

そのアラガミは、一欠けらも残さずに二人の人間を捕喰した。骨が
かみ砕かれる音、内臓を食いつぶされ血が吹き出る音：徐々にヒト
の形を失っていく肉体：それらがアリサの脳内にしつかりと焼き付
けられていく。

捕喰を終えたアラガミはアリサの気配を目ざとく嗅ぎ付けて、クロ
ーゼットの隙間からアリサを見据える。

「イヤアアアア！！やめてええええ！！」

そこで風景は一気に変わった。

（ここは…フェンリルの訓練場…？…あれは神機が置かれるボック
ス…どうやらアリサの適合試験のようだな）

ボックスの前には、先程の映像から成長したアリサがいた。神機の
柄を握っていた彼女は、ケースの蓋に腕を挟まれ激痛を堪える。

「幼い君は、さぞかし自分の無力さを呪ったことだろう…」

（この声はシックザール支部長…？）

「うっあ…！！あぐう…！！」

「…その苦しみに打ち勝てば、君は親の敵を討つための力を得るの
だ！」

「うっあああああ！！！！」

「そつだ！戦え！打ち勝て！」

そこでまた風景が変わる。ハイドは今度は病院の一室にいた。アリスの入院していたフェンリルの病院のようだ…。

アリスはベッドに座りながら、横にいる医師にあることを教えられていた。

「こいつらが…君たちの敵、『アラガミ』だよ…」

「アラ…ガミ…？」

「そつだよ…こわーいこわーいアラガミだ…そして最後にこいつが…
そういつて医師はアリスに見せていた画像を切り替える。そこに映し出された映像に…ハイドは驚愕した。

「君のパパとママを食べちゃった、アラガミだ…」

そこに映されていたのは、他の誰でもない…リンドウだった。

「パパ…ママ…」

アリスはぼうつとしながら呟く。

「でも…君はもう戦えるだろう？簡単なことさ…こいつに向かって、
引き金を引けばいいんだよ…」

「引き金を…引く…」

「そっぢぢ…っっ唄えて引き金を引くんだ。」

(アジン) …

(ドゥヴァ) … (トゥリー) …

「 (アジン) … (ドゥヴァ) … (トゥリー) …

…」

アリサはその医師に続いて唱える。

「そっだよ…！そっ唄えるだけで、君は強い子になれるんだ…！」

「 (アジン) … (ドゥヴァ) … (トゥリー) …

…」

そこで映像は途切れた。

二十三喰：ツバキの涙、アリサの過去（後書き）

アリサの陰惨な過去を書くのが、今回一番辛かったです。

二十四噺：リンドウの遺品（前書き）

今までで1番編集モードを開いて、直した回だと思われます…。

それでも読みづらかったらすいません…。

二十四噺：リンドウの遺品

体感時間は長いように感じたが、それは一瞬のことだった。

アリサの記憶を垣間見たハイドはいたたまれない気持ちになる。

(これが…アリサの過去…)

と、その時アリサが目を覚ました。

「…何…今の…？今…頭の中に…あなたの気持ちが流れてきて…」
アリサはゆっくりと自分の身に起こったことを話す。

「まさか…あなたの方にも…？」

「ああ…。……すまない…君の過去を見てしまった」
ハイドはアリサ記憶を垣間見たことに謝罪の言葉を述べるが、アリサは首を左右にふった。

「あの日のこと…ずっと忘れてたはずだった…」

遠い昔を思い出すような瞳でアリサは過去を告白する。

「パパとママを少し困らせてやろうと思って…かくれんぼのつもりで、近くの建物の中に隠れていたんです…『もういいかい？』、『まあだよ！』って…そしたら、『アラガミだ！アラガミが来たぞ！！』って叫び声が変わって…早く出ていけば良かったのに…私、

怖くて動けなくって…！パパとママが私を探しに来たけど、突然唸り声が聞こえて…目の前でパパとママが…！！」

そこまで一気に話したアリサは、辛く苦しそうな表情でハイドを見つめる。ハイドはアリサの左手にもう一度自分の手を重ねて頷く。

「私が…もっと早くに気づいて逃げていれば、二人も…。私のせいで…！！」

「そんなことない…アリサのせいじゃないよ…」

ハイドは、ついに涙をこぼしたアリサを優しく慰める。アリサがやったことは、ただのかわいい子供の悪戯であり、今の世界にはとても微笑ましく、くすぐったく、幸せな光景である。彼女に非はないはずだ。

それにあの状況では誰のせいとは到底言えないだろう。アラガミが居住区画に現れれば避難勧告が出されるはずだが、警報もアナウンスも流れていなかった。

状況から推測するに、あのアラガミは突然現れ、そしてたまたまそこに運悪くアリサの両親が居合わせただけなのだ。誰のせいでもない…強いて言うならアラガミのせいか…。

アリサが落ち着くまでハイドは静かに待っていた。涙が収まると、アリサは話を続けた。

「だから、私が新型神機使いの候補だって聞かされた時は、これでパパとママの仇が討てると思ったんです。そう、二人を殺した…あのアラガミを…！！」

その時、漆黒の帝王とリンドウの映像が重なる。頭を両手で押さえ、苦しむアリサ。

見ていられなくなり、ハイドは彼女を引き寄せ、その胸に抱き留める。

「ごめんなさい…自分でもよくわからないの…！」

「……………」

再び嗚咽を漏らしたアリサを、ハイドはなすすべもなく抱きしめていた。

その姿勢のままいくらか時間が経ち、ようやくアリサは落ち着いて。アリサがハイドの胸から離れ、少し腫れた瞳でハイドを見つめる。

「ありがとう…この前もこうしてずっと手を握っててくれたの、あなただったんですね…温かい気持ち、流れてくるの…わかったから…」

ハイドはアリサの手だけは放さない方がいいと判断し、ずっと握りつづけていた。そのことにアリサは弱々しく微笑み、ハイドに感謝した。

「大切な仲間なんだし、これくらいはね…というか、これくらいしか出来なかったんだ。前にあれだけ偉そうなこと言ってたのに…すまなかったなアリサ。すぐに助けてやれなくて…」

『仲間だからアリサを助けたい』…前にハイドに言われた言葉を思

い出すアリサ。

「あなたが謝ることなんてありません…。それに…結局助けてもらいましたから…」

アリサはハイドに微笑んだまま再び感謝する。

「ありがとう、アリサ。……………そういえば、アリサが自分のこと話してくれたの、初めてだね？」

「えっ？」

言われてアリサははっとする。

自分のことを他人に話すのは、慣れていなければなかなか気恥ずかしいものだ。更に、今まで他人との関わりを拒んでいたということもあり、「腹を割って話す」ということなど、今までしたこともないアリサは急に恥ずかしくなり、その頬は少しずつ朱くなる。

「嬉しいな…頑張って話し掛けつづけたかいたってよかったよ」

にこにこしながらハイドはアリサにそう言った。

「え、えと…その…あつ…」

「ふふ…じゃあ、俺はそろそろ戻るかな？」

焦るアリサを見て微笑んだあと、ハイドは立ち上がった。

「あ……」

スルリとハイドの手が自分の手を離れていき、アリサは声を漏らす。

「ん？どうかした？」

「い、いえ……なんでもありません！」

アリサはハイドに悟られたくなく、必死でごまかす。「もう少し居てくれ」などと、今のアリサにはとても言えない……。

「そうか……じゃあなアリサ。明日も、任務が終わったらまた顔を出すよ」

そう言っただけでアリサの頭を優しく撫でたあと、ハイドは医務室から立ち去った。

アリサは頭に残ったハイドの手の感覚を味わいながら、再び眠りについた。

翌日……エントランスにてサクヤとハイドは、ツバキと三人でブリーフィングを行っていた。

「……………よし、以上でブリーフィングを終わる。準備が出来次第始めてくれ」

「了解しました」

ハイドがそう言って早速任務の準備に行こうとしたときだった。

「それとサクヤ、お前は少し残れ」

ツバキはサクヤも行ってしまっ前に呼び止める。

「…何か？」

「サクヤ、お前はしばらく休暇を取れ。これは上官命令だ」

ツバキの言葉を聞いた瞬間、サクヤは抗議した。

「そんな…私は…」

「サクヤ…最近鏡をみたか？」

「は…？」

私は大丈夫だとサクヤが言おうとする前にツバキに止められる。

「ほとんど寝てないんだろう？お前があいつを想う気持ちは姉として嬉しく思う…だが上官としては別だ。コンディションを整えられないものは、死を呼び込む…わかるな？」

「…はい…軽率でした…」

サクヤはツバキに謝った。サクヤの今の顔色が悪いのは誰の目にも明らかで、今日最初にハイドと顔を合わせた時に心配されていた。

「それともう一つ、お前はもう少し周りに頼ることを覚える…いい

な？」

ツバキはサクヤに肩の力を抜いて、仲間と助け合うことを求めた。

「…努力は…してみます」

ツバキに言われてから4時間ほど、サクヤは自室で仮眠を取ったが…やはり思うように眠れない。

ベッドから起き上がり、膝を抱き込み座るサクヤは、部屋を見渡す。

かつてリンドウが何度も訪れたこの部屋を…。今はただ思い出しが残っていない。

「おい、サクヤいるか」

いきなり部屋にやって来るリンドウ。

「もう散々言い飽きたけど、せめてノックくらいしてから入ってきてよ…」

「ああ、ワリィワリィ」

リンドウはそう言つとソファにどっかりと腰掛ける。

「どうせ私の分の配給ビールが目当てなんでしょ？いつつもすぐ飲んじゃうから」

サクヤは呆れながら冷蔵庫を開けてビールを取り出す。

「ハハ、いいじゃんか。どうせお前飲まないんだしさ…なんならアレと交換するか？新型のジャイアントトウモロコシと」

「いゝやゝよ！」

なんて、やり取りをしていた頃が懐かしく感じる。

やがて、彼女はおもむろに立ち上がり、冷蔵庫の扉を開けて、何気なく配給ビールを取り出した。

「何これ…？」

ビールを取り出すと、そこから一枚のディスクが転がり出た。

『配給ビール、とっといてくれよー』

リンドウの台詞を思い出すサクヤ。急いでターミナルのスリットに入れて解析を始める。

「腕輪認証がかかってる…リンドウの？」

中身を見ることは出来ないと判断したサクヤは、続いてミッションの一部始終を記録しているデータバンクにアクセスし、「あの日」のミッションのことを調べはじめた。

(そもそも、あの日はイレギュラーが不自然なまでに多かった…指令情報との食い違い…アリサの様子もおかしかったし…。……っ！あの日のミッション履歴が消されてる！？？どうということなの、リンドウ…)

その時自室の自動ドアがバシュッと開いた。

「！！」

サクヤが驚いて扉の方を見ると、ハイドが立っていた。

「あ、驚かせてすみません…ノックするのを忘れてました」

「なんだハイドか…どうしたの？」

「サクヤさんの様子を見に来たんです。顔色が悪そうだったので…」

ハイドは心配そうにサクヤを見て言った。

「ふふ、大丈夫よ…ありがとう」

(まったく説得力がないな…あの顔)

サクヤの今の顔を観察すれば、誰もがそう思うだろう。しかし本人が大丈夫だと言うのなら、今はそういうことにしておこうとハイドは思った。

「そうですね。…あ、あと一つ報告が」

「え、何？」

ハイドはアリサが目を覚まし、過去に何があったか話してくれたことをサクヤに話した。

「…そう、アリサが…教えてくれてありがとう…」

サクヤはハイドに報告に対する感謝を述べる。

「それにしても、触れ合うだけで気持ちが通じるなんて、新型同士の能力なのかしらね…？」

「さあ…俺にも、よくわからないんです」

サクヤはハイドとアリサの間で起こった現象に素直に驚いていた。そしてアリサが目を覚まして回復に向かいつつあることを知り、彼女は喜んだ。これで、「あの日」彼女に何が起こったのか…彼女しかならない真実を聞き出せる。

「とにかく…お願い、しばらくは彼女の側にいてあげて」

サクヤはハイドに、アリサの面倒を引き続き見ることを頼んだ。

「わかってますよ、サクヤさん。リンドウさんにも、コウタにも同じこと言われていますし、自分も最初からそうするつもりでしたから…」

ハイドは微笑んで、一通りの用事が済んだことを頭の中で確認して

立ち上がる。

「あ、そうだ…サクヤにもお願いが一つ…」

言い忘れてたと、ハイドがサクヤの方を見る。

「何？」

サクヤが尋ねる。

(ハイドが私ににお願いなんて…なにかしら?)

「アリサのこと…あまり怒らないであげて下さい」

ハイドが口にした「お願い」に、サクヤは首を傾げる。

「…どういこと？」

「サクヤさんは…アリサが回復したら、『あの日』のことを聞くつもりなんでしょう？」

「…」

「あなたがあの日のミッションに違和感を感じているのはわかっているし…それは俺も同じです。ですが、あなたは事の顛末を知ってその内容次第では…彼女を許さないつもりなんでしょう？」

「……………」

ハイドの言ったことは凶星だった。サクヤにとってリンドウは、ツ

バキも含めた三人で子供の頃からの付き合いだったし、大切な想い人でもあった…。もしもすべてアリサのせいだったら…許せるわけがない…。

ハイドはサクヤの胸の内に小さく灯った、暗き焔が燃え広がる前に水をかけることにしたのだ。

「一概にアリサが悪いと言えない以上、怒りをぶつける訳にはいきません。彼女の精神はまだ不安定なままなんです…安定するまでは、待つてあげて下さい…」

「…ええ…わかったわ…」

ハイドはサクヤの返事を聞くと、扉の前まで歩いて行き、そこで立ち止まる。

「サクヤさん…あの日のミッション中、あなたがどれだけ辛い思いをしていたのかを理解した上で…厳しいことを言ってしまった…。今さらですが…ごめんなさい…」

「……………」

ハイドは扉を開いて部屋から出ていった。

二十四噺・リンドウの遺品（後書き）

感情の変化を書くことの難しさを痛感した回となりました。

相変わらず、ちゃんと書けてるか不安です。

二十五噺：原隊復帰（前書き）

ようやくアリサ復帰となりました。最近一話が少しずつ長くなってきてます…。

二十五喰：原隊復帰

任務を終えてシャワーを浴びたあと、ハイドはある場所へ向かっていた。

「やあ、アリサ。具合はどう？」

ハイドが訪れたのは医務室だった。アリサは医務室に入ったときにはすでに起きていて、すぐに話ができるほどまで回復した。

「ハイドさん…ええ、体調は問題ありません」

アリサが回復してきたのは嬉しいことなのだが、ハイドにとってもっと嬉しいことは、アリサが名前を呼んでくれるようになったことである。

少しずつではあるが、アリサが自分に心を開いてきているのがわかったハイドは、最近医務室を訪れるのが楽しみになっていた。

「今日は…何の任務に行ってきたんですか？」

「ボルグ・カムランの討伐だよ。やっぱり大型アラガミは手強いね…まだまだ鍛練が必要だよ」

「クス…そうですか…」

また、アリサは少しだけ笑うようになった。それだけでも充分な変化である。

二人は他愛のない会話をして過ごしていたが、しばらくするとサクヤが尋ねてきた。

「あ…サクヤさん…」

サクヤはアリサの正面に立つと穏やかな表情で彼女を見つめる。

「…こんなところに…何の用ですか…？」

アリサはサクヤに少し怯えているのか、震えた声で聞いた。リンドウと深く繋がっていた人だ…無理もない…とハイドは思う。

「大丈夫、あなたを責めに来たわけじゃないわ」

サクヤはアリサを落ち着かせるように言った。

「だったら…！」

「話を聞かせてほしいのよ…その…あの日あの瞬間、あなたに起こったことを…。本当は、あなたがしたことには納得出来ない…でも、だからこそ、そこにある違和感が何なのか知りたいの…」

サクヤはアリサをまっすぐ見つめて言った。

「昔の話はハイドから聞いたわ…辛いお願いしてるのは承知の上よ…」

そう言われたアリサはハイドを見つめる。

「俺にも…聞かせてくれないか？アリサのことを…」

アリサはハイドの言葉を聞き、サクヤに向き直って話を始めた。

「私が、定期的にメンタルケアを受けているのは…ご存知ですが？」

「ええ、知ってるわ」サクヤは頷く。

「両親を殺されてから数年間…私は精神不安定な状態で、病院生活を送っていました…。…ですがある日、フェンリルから『新型神機使いの適合候補者に選ばれた』と連絡が入って…それでそれまでの病院から、無理矢理フェンリルの附属病院に移送されたんです…」

「そうだったの…」

「いえ、いいんです…新しい先生は良くしてくれました…私もこれで両親の仇が討てるって思ったから…」

「……………」

「それからは、症状を薬で押さえながら…敵のこと、戦い方のことを勉強しました。フェンリルにいた新しい先生はとっても優しくかったです…この極東支部にも、一緒に赴任してきてくれて…」

「その先生は、今もアナグラにいるってことね？」

サクヤがアリサの言う『先生』について聞く。

「はい…皆さんも知ってる、『オオグルマ先生』ですよ？」

「そう…ごめんなさい、続けて？」

サクヤは少し考えたあと、アリサの話の続きを求める。

「メンタルケアを続けながら、両親の仇のアラガミをずっと探してました…極東支部エリアにそいつが出没するって情報をもらって、絶対を探し出してやるって思いながら赴任して…やっと見つけたと思ったのに…！何故かわからないけど！あの瞬間、私の頭の中でリンドウさんがその『仇』になってて…！！」

ハイドは、病院で仇だと言われ、リンドウの映像を見せられているアリサの姿を思い出す。

「気がついたら…彼に向かって銃を…！！」

そこまで言うと、あの瞬間のことを思い出したのか、アリサが頭を両手で押さえて絶叫した。ぽろぽろと涙がこぼれ出し、肩と唇が震えていた。

「…無理をさせてごめんね…ありがとうアリサ…またくるわ」

そう言ったサクヤは、ハイドに「アリサを頼む」と無言で頷いて、ハイドが頷き返したのを見ると、医務室を出ていった。

「…私…どうしたら…」

「アリサ…リンドウさんが行方不明になったのは、君のせいじゃない…。いつか真実が明るみになる時が来る。サクヤさんも、きっとわかってくれる…。だから今はまだ何も考えず、回復に専念すればいいわ」

途方にくれるアリサの手を握って、ハイドは笑顔で答えた。

（とは言っても、もうほとんど検討がついてるんだよね…シックザール支部長はアリサの神機適合テストを見に来ていた。ロシア支部から連れて来たのもあの人だ。そして、入院していたアリサに『嘘の仇』と変な呪文みたいなものを教えていたあの医師は、まず間違いないくオオグルマだ…。支部長まで絡んでるとなると………しばらくは黙っというて、様子を見た方が良さそうだな…）

ハイドは頭の中で、今後の方針について思考を巡らしながら、アリサが落ち着きを取り戻すまで側にいることにした。

そして、『あの日』から約二週間後…エントランスで会話をしていたハイドとコウタのもとに、アリサがやって来た。

二人はアリサの姿に驚いていると、アリサがゆっくりと口を開いた。

「本日付けで原隊復帰となりました…。また、よろしく願いします…」

アリサは少し怯えたような、緊張したような声で言った。

アリサの復帰報告にコウタが反応する。

「実戦にはいつから復帰なの？」

「…まだ、決まってるません…」

「…そうなんだ」

なんと言葉をかければいいのか分からず、話あまり進展しない。

その時、下側のエントランスの方から、ゴッドイーター達の会話が聞こえてきた。

「おいおい、聞いたか？例の新型の片割れ、やっと復帰したらしいぜ？」

「ああ、リンドウさんを新種のヴァジュラと一緒に閉じ込めて、見殺しにしたヤローだろ？」

「ところが、あんなに威張りちらしてたクセに、結局戦えなくなっただったってさ！」

「はははっ！結局口ばかりじゃねえか！」

アリサを嘲り、笑いのネタにするような会話にハイドとコウタは苛立つ。アリサは顔を伏せて堪えるしかなかった。

アリサをチラチラ見ていた周りの人間も、ひそひそ話をしたり、クスクス笑ったりしていた。

「…あなたも、笑えばいいじゃないですか…」

アリサは、自分がひどいことを言ったコウタに向かって言った。

「俺達は笑ったりしないよ…」

コウタはそう答えるが、アリサは黙ってしまふ。耐え切れなくなりコウタは必死になって話題を取り出す。

「ああ…ええと…それより、リンドウさんがやられた新種のヴァジユラ…」

「…!」

アリサが肩をビクツと震わせる。

(『リンドウさんがやられた』はNGワードだぞコウタ…)

ハイドはコウタの空気の読めなさを呪った。

「欧州支部からも目撃報告があったみたいだね！ここにきて新種との遭遇例が増えてきてるのは、何かの兆しなのかも知れないね…
なんて…」

結局話が中途半端になり、アリサは更に黙り込む。

「……………」

「……………」

やがてコウタは物凄い速さでハイドに向き直り、肩に手を置いたあと、顔の前で両手を合わせる。

「…スマン、あとは頼んだ…」

そう言ってコウタは足早にその場を立ち去った。

(クールな声で言っても全然クールじゃないぞコウタ…)

遠のいていく親友の後ろ姿を見てそう思うハイド。

「お願いがあるんです」

その時、ようやくアリサが口を開いた。

「何？」

ハイドはアリサに向き直り、言葉を待つ。

「あの…その…」

「？」

「私に…もう一度、ちゃんと戦い方を教えてくれませんか！」

「戦い方を…？」

「はい…今度こそ本当に、自分の意志で…大切な人を守りたいんです！」

「…ああ、手伝うよ！」

アリサの真剣な眼差しにハイドは笑顔で答える。

「ありがとうございます！」

ハイドの了承にアリサも笑顔で答える。

「ただ、一つだけいいかな？」

「え、なんですか？」

「俺はちよつと前まで、リンドウさんに追いつきたくて…がむしやらに訓練に励んでいたんだ」

『リンドウに追いつきたい』というハイドの言葉に胸を締め付けられるアリサ。だがまだ話が続くようなので、今は無理矢理押さえつける。

「リンドウさんに、『とつと背中を預けられるぐらい育ててくれて言われてたのもあったのかもしれない…あるミッションで、俺はリンドウさんとサクヤさんに頼らずに、一人で討伐対象全てを一度に相手してしまつてね…。今思えば、愚かな行為だったよ…」

「……それで、どうなつたんですか？」

アリサはハイドの話の先が知りたくて尋ねた。

「結局、持ちこたえられなくて信号弾を使ったんだ。そしたら、すぐにリンドウさん達が現れてフォローしてくれたんだよ。俺の戦いを、影から見守つてくれたんだ」

「……………」

そこまで聞いてアリサは、リンドウ達が何を伝えたかったのかだいたいの想像が出来た。

「『お前は一人じゃない』、『人は良かれあしかれ、他人に支えてもらってる』…当たり前すぎることを教えてくれた…。そしてリンドウさんは、『焦ってでも強くなるうとはするな』って言ってくれたんだ」

「…ハイドさん…」

「だからさ…アリサ…。一歩ずつ強くなるう？焦る必要はないんだ。…そして俺は、そんなアリサを力の限り支えるよ…アリサが強くなるその日まで。一歩ずつ強くなって、陰口叩くやつらをいつか見返してやるう！」

「…はい…」

アリサの表情はここ最近で、最も明るい…綺麗な笑顔だった。

二十五喰：原隊復帰（後書き）

アリサを嘲笑う台詞を増やそうか、ハイドとコウタが庇う場面を入れようか考えたのですが、すでに傷心しているアリサを更に痛めつけるのは嫌だなと感じてやめました。

二十六喰：守る力を（前書き）

アリスの任務にハイドが付き合う回は。男子にはうれしいシチュエーションもあります。

二十六喰：守る力を

日が傾いて、影が長くなった頃…ハイドとアリサは『愚者の空母』
に来ていた。

かつて…アラガミが出現し、世界が混乱を始めた隙を狙って、武器
や貴金属を狙っていた二つの武装集団がいた。そして、彼らが空母
の上で争っていたところにアラガミが現れ、両者は壊滅…皆殺しと
なったのである。一際大きく開いた穴はアラガミに喰われてできた
ものであり、人間の愚かさを今も示し続けている。

船が座礁した今となってはアラガミの徘徊ルートの一つになってお
り、度々出動要請がかかる。

「アリサ…大丈夫か？」

ハイドはアリサの表情を窺いながら気遣う。

「は…はい…」

アリサは神機を握る手に力を込める。

…やはりまだ恐れているのか、肩が震え、顔色がすぐれない。

「やっぱりまだ、ちょっと怖い…？」

ハイドは神機を肩に担いで聞く。

「………すいません」

アリサは正直に言った。

「まあ、しょうがないよ。焦らずがんばろっ?」

ハイドは明るい声でアリサを元気づける。

「…はい!」

アリサはハイドに微笑み返した。

と、その時。

「グオオオオオオ…!」

「きゃあっ!」

遠くから聞こえてきたアラガミの声に驚き、アリサはハイドの左腕に両手を絡めてしがみつく。

女の子の胸に自分の腕を包まれて、普通なら喜ぶべきシチュエーションなのだが…今のハイドにアリサの、歳の割に豊かな胸の感触を味わうような余裕はなかった。

……………とにかく腕が痛い。

(痛たたたた! つ、爪がつ…腕の巻き込み方が…! !)

ゴッドイーターは遠慮なしに常人に抱き着くと、その人の中身を粉々に粉碎してしまうと言われている。

ハイドの身体がオラクル細胞によって強化されてなかったら、今頃彼の腕には10個の穴が開き、骨は複雑に折れ曲がっていた。

(やっぱりまだアラガミに対する恐怖は完全には克服できてな痛たたたた…!…なら…)

痛みに耐えながらハイドは少し考えると…。

「あ…アリサ!あの雲、羊の群れに見えない?」

ハイドが空を指差してアリサに言った。

「えっ?」

急にハイドに全く関係ないことを言われるアリサ。

と、ここでアリサ腕の力が抜けハイドは解放される。

言われてハイドの指差す方を見ると、夕暮れに朱く染まった羊雲が浮かんでいた。

「……………あ……………」

アリサはようやくハイドが言いたいことがわかった。

『混乱しちまった時はな、空を見るんだ。そんで動物に似た雲を見つけてみる、落ち着くぞ?』

かつてリンドウに言われたことを思い出すアリサ。

「……………そうですね…じゃあアレは、その羊を束ねる牧羊犬…でしようか？」

アリサが指差す方を見ると、確かにそれらしき雲が浮かんでいる。

「そうかもね…でも、どっちかっていうと馬に見えない？」

ハイドが「馬に見える」、と言ったのを聞いたアリサは…。

「絶対犬ですよ！羊と牧羊犬で合っていていいじゃないですか！」

「うん、馬も合ってる気もするけどね」

「と、とにかく…どう見てもアレは犬ですっ！」

「はいはい、犬だよね〜」

と言ってハイドはアリサの頭を撫でる。

「ちよっ…！もう、子供扱いしないで下さい！」

夕焼けで分かりづらいが、頬を赤く染めてアリサはハイドの手をどかす。

「ぷっ…！ふふ…ははは…」

アリサとのやり取りで笑い出すハイド。

「わ、笑わないでくださいよハイドさん！」

アリサはハイドの反応を見て怒ったあと、呆れ笑いになり、いつの間にか自分も笑っていた。

「ふふ…落ち着いた？」

「ええ、おかげ様で…」

ハイドがようやく笑いの波が収まって聞くと、アリサが笑顔で答えた。

「そうか…。もうそろそろ行くか」

「…はい！」

アリサはようやく肩の力を抜けたようだ。

「じゃあブリーフィングを始めよう。今日の任務では、俺が前線に出て陽動、アリサにはバックアップをしてもらうことにするよ」

「了解！」

「ただ…」

「？」

「バックアップとは言ったけど…俺へのフォローは、本当に必要な時だけにしてくれ。もう何回も言ったけど、焦らずに一步步強くなることが大事なんだ。だから今日アリサには、『自身の防衛を優先すること』と、『実戦における立ち回り方を再習得すること』…

この二つをやってほしい」

「でも…それじゃハイドさんが…」

アリスの言つとおり、ハイドの指示を守って行動した場合、今日ハイドは何の後ろ盾もなく戦うことになる。

「俺のことは気にしなくていい。自分の身が危なくなったら遠慮なく逃げてくれ。二週間のブランクはさすがに大きいから、アリスにはなるべく無理はしないでほしいんだ…」

「……………わかりました」

アリスは少し悩んだが返事をして、今日のミッションが開始された。

アナグラへと向かう帰投へりの中で、ハイドとアリスはミッションにおける、反省と改善点について話し合っていた。

「どうだった？久しぶりの任務は」

ハイドが向かいの椅子に座ってるアリスに尋ねた。

任務についてのブリーフィングでハイドが指示した通り、アリスは一切攻撃参加をせず、敵味方それぞれに対する距離感を掴む練習をさせていた。

「やはりと言うか…あまり以前の様に動けなかったですね…案の定、

距離感も鈍ってましたし……」

「……やっぱり間合いを保つという点では、ブランクが効いたね」

「……そうですね……つついっつい後ろに下がって、結局ハイドさんとの距離が広がってしまいました……」

「味方とアラガミ、それぞれの距離感ほどの戦術においても重要だから、次のミッションでも今日と同じ目標でやってみようか？」

「はい！またお願いします！」

「あと、神機の遠近切り替えのタイミングについてだけ……」
話が途切れることもなく、ヘリはアナグラに到着した。

二人は神機を保管庫エリアに持って行く間や、食堂で食事をしている時など、空いている時間をたっぷり使って話し合っていた。

……ちなみに、ハイドに用事があったコウタは、一度も声をかけずに一日を終えるという淋しい思いをしていた。

時間はあっという間に過ぎていき、もう少しで就寝時間になるといふ頃……自分の個室の前まで来ると、ハイドはアリサの方を向く。

「じゃあ、明日も頑張ろう」

「はい、お休みなさい…ハイドさん」

「ああ、おやすみアリサ」

そしてハイドは自室のドアを開けて、部屋の奥へ消えて行った。

アリサはドアが閉まる瞬間まで、ハイドの後ろ姿を微笑みながら見つめていた。

ベッドに潜り込んだアリサは、ハイドのことを思い浮かべる。

優しい笑顔で自分を励ましてくれたり…戦闘中にさりげなく自分をカバーしてくれたり…ミッションが終わった後に、自分の今後の方針について一生懸命話し合ってくれた、ハイドのことを…。

（ハイドさんは…自分のこともあるのに、私の力になると頑張ってくれてる……それなのに私は…）

アリサは自分の弱さと不甲斐なさに打ちのめされ、一刻も早く強くなりたいと感じる。

（でも駄目…焦らずに一步步強くなるって…ハイドさんと約束したんだから…）

アリサは目を閉じて、自分とハイドの間で交わした約束を改めて確認した。

（ハイドさんは私のことをしっかりと守ってくれた。…それだけの力を持っていたから…。私もいつか…彼の背中を守る力を…：…今はまだ無理でも必ず…ハイドさんに恩返しが出来るくらい強くなってみせる…）

アリサは、自分を救ってくれたハイドにいつか必ず恩を返す決意をした。

そして、久しぶりの任務で疲労した身体は、アリサの意識をあっという間に眠りの海に引きずり込んだ。

二十六喰：守る力を（後書き）

最近地味にアクセス数が気になってます。お気に入り登録して下さってる方も少しずつ増えてきてて…何て言うか…嬉しいです。

二十七喰・決意と克服（前書き）

アリサがトラウマと向き合う山場回です。

二十七喰：決意と克服

雨が降りしきる嘆きの平原…その一角から大きな爆発音とともに煙りが上がる。

「グオオオオオオ!!」

「来るぞアリサ!!」

「はい!!」

シユウが怒り狂った叫び声をあげ、ハイドとアリサが身構える。

シユウは飛び上がると二人目掛けて低空飛行しながら突進するが、ハイドはわずかな隙間をくぐり抜け、アリサはジャンプでかわす。

シユウは更なる追撃を入れようとするが、振り返ったところでハイドに頭を撃ち抜かれた。

最も弱い部分を的確に攻撃されたシユウはよろけた上、そこで更にアリサに腕を斬られる。

シユウは身体の後ろで両手を合わせ、エネルギーを収束し、ハイドに照準を合わせる。

（あれは…とある亀の仙人から教えてもらえるという必殺技か！）

呑気なことを考えつつ、スタングレネードを使うことを忘れないハイド。

シユウがうづくまっている隙にハイドとアリサが捕喰を行うと、二人はすぐさま神機を変形させて、互いを狙う。

「受け取れ！」

「どっぞー！」

ハイドとアリサはお互いに三発ずつアラガミバレットを撃ち渡し、リンクバーストLV3を発動する。

『うおおおおおお！！！』

二人の雄叫びが、嘆きの平原に響き渡る。

その時、シユウの視力が回復し、二人…正確にはハイドに向かって走り出した。

ハイドは神機を変形させて剣形態にすると、シユウに向かって突進する。

両者の距離が一気に狭まり、そこからはスローモーション映像のように見える。シユウが右腕を突き出してハイドの頭を狙い、ハイドがそれを神機で逸らしてシユウの懐に潜り込み、天へ昇るように斬り上げる。

そのまま神機は剣から銃へと変形し…。

「吹き飛ばせー！！」

濃縮アラガミバレットをシユウに撃ち込む。

LV3に強化されたバレットは、シユウに当たった瞬間に大爆発を起こし、その身体の至る所を破壊していく。

そして、ハイドの脇から飛び出したアリサが再び斬りつける。

しかしシユウはまだ倒れなかった。片足を引きずりながら背を向けて逃げていく。

「…終わりです」

ドオン！！

今日何度目かわからない爆発音が鳴り響く

アリサの濃縮アラガミバレットを浴びせられ、シユウはついに絶命した。

「お疲れ様、アリサ」

「はい！ハイドさんもお疲れ様です」

互いを労い、シユウの素材を回収した二人は歩きながら話をしていった。

「それにしても、もう大型アラガミと渡り合えるようになるなんて…明日にでも復帰出来るんじゃないかな？」

アリサの戦闘中の動作や神機の扱いは、ほぼ入院する以前のものま

でに修正できた。もうチームに合流してもいい頃だろう。

「ええ…まだ若干不安もありますが…短期間でここまで戦えるようになったのは…ハイドさんのおかげです」

アリスは、ハイドとの特訓が始まった一週間前からの出来事を思い返しながら言った。

「私のために貴重な時間を使わせてしまって、すいませんでした。そして…ありがとうございます！」

「ふふ…どういたしまして。これからも、よろしく頼むよ」

「はい！」

やがて二人が乗ったヘリは、アナグラへ向けて飛び立った。

「ふむ…アリス君は、もう大型アラガミを相手にできるほどにまで回復したのか…」

ミッション完遂の報告書に目を通したシクザールが呟くように言った。

「ええ、もう正式に復帰させてもいいかと」

シクザールの言葉を聞いたツバキは、アリスの復帰を打診してみる。

「そうだな。彼女の正式な復帰の日時は君に任せよう…好きなようにしたまえ」

「了解しました」

ツバキはそう言うと執務室を出て、すぐさまアリサを復帰させるため、人事部へと急いだ。

ツバキが出て行った後、シックザールはテーブルに肘をつき、両手を口の前で組んで再び呟く。

「まさか、こつも早く復帰するとは…これも、『新型の力』…なのか…」

翌日、ツバキはアリサを第一部隊（ソーマを除く）の皆の前に立たせ、正式に復帰したという人事部の決定事項を簡潔に述べた。

その後、今日の任務に関するブリーフィングが始まった。

「今日お前たちには、ヴァジュラー頭の討伐に行ってもらうことになっている。出撃時刻は一五…場所は贖罪の街だ…偵察部隊からの報告では、周囲に小型・大型アラガミの存在は確認されてない。説明は以上だ…何か質問はあるか？」

ツバキの問いにコウタが手を挙げた。

「あの、アリサを今回の任務に出してあげて欲しいな〜…なんて…
ほら、彼女最近…その…頑張ってると思うんだ！」

コウタの意見にツバキが反応する。

「お前もか……………ハイド、お前はと思うっ?。」

ツバキはここ最近、ほぼアリサを付きっきりで面倒見ていたハイドに尋ねた。

「アリサはもう充分戦えるようになりました。俺は出しても大丈夫だと思いますが…」

「そうか…サクヤ、お前はどうか?。」

ツバキに話を振られたサクヤは少し考えて…。

「……………賛成です」

ツバキをしっかりと見て言い放つ。

「だが、今回のターゲットは…『アレ』と同型の個体だぞ……………大丈夫か?。」

ツバキの気遣いが、何だかくすぐったいような気がするアリサ。そして、少し考えたのち…。

「行きます……………行かせて下さい…!。」

決意に満ちた瞳で、アリサはツバキに頼んだ。

「よろしい…無理はするなよ？」

「ハイ！」

「いえ〜い！俺がいるから大丈夫だよ！ね！」

コウタの台詞に、彼以外以来の人間が考えこむ。

（不安だ）

（さすがに…ちょっと不安かな…？）

（かなり不安ね）

（不安です…）

四人の思考がシンクロした瞬間だった。

時刻は午後3時30分…フェンリルが掲げる、神殺しの神話を持つ狼と、屍を意味するドクロを合わせた紋章を印したヘリは、荒廃した街に着陸した。

やがてそのヘリから、ハイド、コウタ、サクヤ、アリサが降り立つ。

待機地点に四人が集合すると、サクヤが口を開く。

「では、早速ブリーフィングを始めます。今回の任務では、まずハイドとアリサ、コウタと私の二組に分かれて索敵、目標を発見次第交戦、及び合流…いいかしら？」

「了解！」

「了解しました！」

「了解つす！」

返事を聞いたサクヤはアリサの方を向いた。

「アリサ…」

「はい…」

アリサは何だろうか？とサクヤの言葉を待つ。

「…くれぐれも、無茶や無理はしないでね…」

「…はい！」

アリサは嬉しかった。自分を憎んでいるはずのサクヤから心配されたことが…。サクヤの本心はわからないが、その言葉だけでも充分有り難かった。

「さあ、行くわよ！」

サクヤは時間を確認して、チームに呼びかける。

「ミッションスタート！索敵開始！」

『了解！』

ハイドとアリサは東側のエリアへ、コウタとサクヤは西側のエリアへと向かう。

「アリサ！いつも通り、背中を任せるよ！」

「…はい！」

アリサは前を走るハイドの背中を見ながら決意した。

（守ってみせる…もう二度と、誰かが目の前で死ぬのを指をくわえて見ていたりなんかしない！それにこの人は…私を救ってくれた大切な人…だから、今度は私が助ける…！）

二人は大きく開けたスペースへ出たが、ヴァジュラは見当たらなかった。

二人が少しの間辺りを探索していると、西の方角から発砲音が聞こえてきた。

「！…あつちか！」

「急ぎましょう！」

ハイドとアリサは西側の教会の方へ急いだ。

「当たれえ!!」

コウタが発射した弾丸はヴァジユラに向かって飛んでいくが、素早い動きでかわしてコウタに飛び掛かる。

(舐めんなよ!)

以前、似たような攻撃を受けたことがあるコウタは、しっかり対策を練っていた。

素早くバレットを装填し直して発射すると、撃った直後に足元で爆発し、コウタは後ろに大きく吹っ飛んだ。

ヴァジユラの攻撃はコウタに当たらず空を切る。

「見たか!これぞ必殺『緊急回避』!!」

全身黒焦げたコウタがキメ顔で言うが、あまりかつこよくはない。

「もう少し安全な回避を覚えなさい…」

サクヤが少々呆れながら、レーザーを放ち援護する。

『加勢します!』

同時に二人の声が響き、コウタとサクヤが振り向くと、ハイドとアリサがやってきた。

ハイドはヴァジュラに斬りかかると、アリサが射撃で援護する。この時、アリサの心臓は高鳴っていた。…恐怖によって…。

なにせバレットを撃っている間、ずっとヴァジュラと『あのアラガミ』が重なって見えていたのだ。

目線が合うと、それだけでアリサの恐怖は増大するが、今はなんとか根性と理性で押さえ込んでいた。

だが、彼女の感情の変化は戦いに表れる。バレットがヴァジュラの弱点にあまり当たらないのだ。正確には当たっているのだが、わずかに逸れている。

サクヤとコウタは、バレットや土煙によって見えなかったが、間近で戦っていたハイドには、アリサの感情の変化が手に取るようにわかる。

最近の任務ではずっとアリサとペアで組んでいたのだ。わからないはずがない。

(アリサ…やっぱり、まだ…。戦えてるだけでも、君は充分成長したよ…。なるべくコイツの視界に入って邪魔をするか)

そう思考したハイドは斬撃を与えながら、ヴァジュラの視界を横切るように動き回る。

アリサは胸の苦しさに必死になって堪えていた。こめかみに汗が伝い落ち、息は不自然に荒くなる。震える手を無理矢理押さえ込んで照準を合わせる。

「！」

アリサがヴァジュラを凝視していると、ハイドが突然動きを変えた。

（ハイドさん…）

アリサは、ハイドが今の自分の状態を戦いの中で悟ったことがわかった。

（…結局また心配をかけてるんですね、私は…）

神機を握る力を抜き…。

（…ありがとうございます…ハイドさん…こんなに私のことを見てくれて…）

改めて握り直す…。

（ハイドさん…あなたの背中…）

そして引き金に指を…。

（私が守ってみせる…！）

ドオォン…！と、アリサの放ったオラクルバレットはヴァジュラの胸へ一直線に飛んでいき、命中した。

クリーンヒットしたのか、ヴァジュラが怯み、大きくのけ反る。そして一目散に逃げ出した。

「逃がしちゃ駄目だ！追っよ！」

ヴァジユラに向かって散弾をばらまくが当たらず、コウタが声を上げる。

「一つに固まってる狙われるわ！一旦散開して！……皆、慎重にね……」

サクヤの合図で散り散りになる第一部隊。……だが、アリサが少し出遅れた。

一人になったことで再び恐怖が込み上げてくるが、自分を心の中で叱咤し、アリサは駆け出した。

開けた場所…教会の裏側に来たアリサは、今は塞がって使えない裏口の影に一旦隠れ、状況を窺う。

すると、ビルにできた大穴から、先程のヴァジユラが姿を現す。

アリサは回りを見渡すが、ハイドもサクヤもコウタも来る気配はない。

「…パパ…ママ………っ！」

ついに決心したアリサはビルから飛び出し、ヴァジユラに銃を向ける。向こうもアリサを見つけ、臨戦体勢に入る。

「はあっ……はあ……っ！」

ドクドクと心臓が高鳴り、その音は耳にも伝わる。唇も脚も震えて

いたが、アリサは今はなんとか立っていた。

しかし、ヴァジュラの咆哮によって、アリサの『あの記憶』が呼び起こされる。

そしてアリサはゆっくりと脱力し、片膝をついてしまった。完全に無防備な状態である。そしてそこにハイドがやって来た。

「っ！アリサ！」

ハイドは放心状態だったアリサを見つけると駆け寄った。そしてヴァジュラは、アリサよりも近くに現れたご馳走に狙いをさだめて飛び上がる。

それを見たアリサの思考は高速回転し、自分の身体に命令し続けた。

（動いて！動いてっ！！私にまた、誰かが死ぬのを指をくわえて黙って見てるっていうの！？）

ヴァジュラが空からハイドに迫る。

アリサの片足が伸びて身体をしっかり支える。

（ハイドさんは……！ハイドさんは……！）

ヴァジュラの牙がハイドの首を狙う。

アリサは引き金に指をかけ……。

（あなたは……私が守るっ！！）

「避けてえー！ー！！！」

アリサはハイドの頭に向けてバレットを放つ。正確にはヴァジュラの首を。

「うおっ！！！」

驚いたハイドは前転してかわす。そしてバレットはヴァジュラに吸い込まれていった。

辺りに大きな爆発音が響き、ヴァジュラは力尽きた。

(狙われてたのか…危なかった…)

ハイドはヴァジュラの死骸を見て、自分に訪れた死の危機を知る。

アリサは神機を構えたまま、立ち尽くしていた。

「はあっ…はあっ…はあ…」

ヴァジュラを倒した…ハイドは無事…。それがわかった後、荒かった呼吸は収まり、アリサは地面にぺたんと座り込んだ。

やがて涙が零れ出し、頬を伝い落ちる。

そこにサクヤとコウタが合流した。二人はアリサの様子を見るとハイドの側へ。

「どうしたんだ？」

コウタがアリサを指差してハイドに尋ねる。

「あのヴァジュラにトドメを刺して、危ないところだった俺を助けてくれたんだ。…アリサはようやく、トラウマを乗り越えたんだよ…」

ハイドが笑顔でそう言うと、サクヤがアリサに向かって歩いていく。そしてアリサが足元にまで近づいた時、サクヤは屈んで、アリサをそっと抱きしめた。

アリサもサクヤを抱きしめ返す。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

アリサは涙を零しつつけて、サクヤに謝った。あの事件から数週間、ようやくアリサはサクヤに謝ることが出来たのだ。

サクヤはアリサを抱きしめながらそっと頭を撫でる。

アリサが乗り越えた『過去』は、夕日の日差しに包まれて黒く舞い上がる雪となり…霧散していった。

二十七喰：決意と克服（後書き）

突然ですが、僕には約二十年間ほどの人生を生きてきて、まだトラウマがありません。それはある意味幸せなことだと思ってます。僕が脳天気なだけかも知れませんが…。

ですが、アリサのようにつらい過去を持っていたり、深刻な悩みを持っている人達は、それを乗り越えた時にとっても強い力を手にできる…。

ある意味、羨ましく思う時もあります。

二十八喰・許し(前書き)

この話でようやくやり取りが終了します。寂しいような気がします、個人的に。

二十八喰：許し

アリサがヴァジユラを倒してから約30分後、第一部隊が極東支部に戻ると、ツバキが出撃ゲートの前で待っていた。

「全員無事のような…いや、そうでもないか？」

ツバキは黒焦げたコウタを見て訂正する。

「なんて目で見てるんスカツバキさん！」

「フ、冗談だ…。聞いたぞアリサ、ヴァジユラにトドメを刺したらしいじゃないか」

コウタをからかったあと、ツバキはアリサに向き直る。

「よく頑張ったな…これからも精進してくれ」

「は…はい…」

相手がツバキだからか、アリサは控えめに返事をする。

アリサを褒めたツバキは、報告書の提出は忘れないように、と注意した後、エレベーターに乗って行ってしまった。

「よお、第一部隊！」

その時声をかけてきたのは、第二部隊班長タツミだった。カノンとブレンダンも一緒だ。

「市街地のヴァジュラを倒したんだって？」

「あの個体は特に強力で、他の部隊も対処しきれず手を焼いていたんだが…さすがだな」

「すごいですよね。どなたが倒したんですか？」

「アレを倒したのは、アリサですよ」

タツミ達が代わる代わるに話し、カノンの質問にハイドが答える。

「……………」

アリサは俯き、少し間を置いた後…顔を上げて、タツミの前に進み
でる。

「そっか、アリサが倒したのか！そいつはよかったな！確か苦手だ
つたんだろ？ヴァジュラ種…」

「え？…あ、ええ…まあ…」

「んじゃ！アリサの苦手克服記念の食事会でもするか？」

タツミが明るい声で聞いた。

「お前はめでたいことや良いことがあれば、何かと食事したがるな
…」

ブレンダンは提案者のタツミにつっこむ。

「いいんだよ！ゴツドイーターは何事も喰うことが仕事なんだからよー！」

「ゴツドイーターが仕事で喰事するのはアラガミだけだと思っていたが…そうだったのか…これからは真面目に食べなければならんな」

「…しまったな…ブレンドンの馬鹿真面目な部分引き出しちまった…」

タツミがブレンドンと天然漫才をやっていると、カノンが横から割って入った。

「私、クッキー焼いて持ってきてますよ！」

「えっ？」

突然のカノンの言葉にアリサは面食らった。

「おお〜そう！そう！カノンのクッキーはすっげえ美味いんだよ！」

タツミが話のレーンチェンジに素早く反応する。

「何か嫌いな味とか食感があったら、遠慮なく言っして下さいね？」

「あ、あの…！…そんなことより…」

このままでは、自分のしたい話が脇に逸れそうに感じて、アリサが声を張り上げたので第二部隊は続きを待つ。

「あの…タツミさん…私は以前、あなたに酷いことを言ってしまった…そのことを、まだ謝ってません。本当に、すみませんでした！」

アリサは深々と頭を下げる。

「あ……」

タツミは居心地悪そうに頬をポリポリと搔く。

「まあ、気にすんな！俺も、もう気にしてないからさ。確かにアリサの言い分も筋は通ってた…だから俺たちはこれから、人も、その人たちが住む居場所も、きっちり防衛してみせる！」

そうはつきりと言い切ったタツミは凄く清々しかった。

「…はい！」

アリサに笑顔が戻った。と、ここでブレندانが話に入ってきた。

「なあ、タツミ」

「んあ？どした？」

「真面目に喰事をするという話についてだが、姿勢と身なりを直し、食べれることに感謝するのは当然として…料理にフォークとスプーンを差し込む位置や角度、及び深さはどのくらいにすればいいのだから？」

「知るかつ！！！」

などと再びタツミとブレンダンは漫才を始め、カノンはその收拾に苦勞しながら二人を連れていき、ハイドたちと別れた。

（よかつたなアリサ：無事許してもらえて…）

アリサを見てハイドはそんなことを思っていた。アリサの表情は今、嬉しさと安堵の感情が入り混じっていた。

「支部長：この、人事部から届いたの書類の内容：間違いないのですか？」

ツバキは椅子に深く腰掛けるシックザールに書類が入った封筒を見せて聞いたです。

「もちろんだ：今後は、彼を中心とした体制に入っていくことにした」

「しかし、いささか経験不足なのは…？」

ツバキが眉をひそめてシックザールに聞き返す。

「心配はいらない：新型神機使いは、『神機使い同士を繋ぐ懸け橋』だ。彼なら、第一部隊を上手くまとめあげてくれると、私は信じている」

「……………わかりました」

そう言ったツバキは、封筒をしまつて、支部長室から出た。

（何故だ…？今の第一部隊の状態から考えれば、サクヤが就任するものと思っていたが…上層部は何を企んでいる…？…まあ、思い過ぎならいいんだが…）

ツバキはあれこれ思考しながら自分の部屋へと向かった。

サクヤは自室のターミナルを開いて、情報をかき集めるが…成果は芳しくない。

リンドウが置いていったディスクを見てため息をつく。その時…。

コンコン…

ドアをノックする音に驚き、サクヤは手を止める。

「誰？」

「夜分にすいません…私です」

「…なんだ、あなたか…ビックリした…そこじゃなんだし、入って」

声の主が判明すると、サクヤは部屋に招き入れる。

「失礼します…」

バシュッとドアが開くと、そこにはアリサが立っていた。

サクヤはとりあえずアリサをソファに座らせて、コーヒーを煎れた。

「はい、どうぞ」

「すみません…わざわざ…」

「いいのよ。…そんなことより、どう？調子は」

サクヤはソファに座ると、自分のコーヒーを口に含み、アリサに尋ねる。

「はい…おかげさまで、もう大丈夫です。…ご心配をおかけしました」

「あなたは…やっぱり強いわね…」

サクヤが微笑みながら、アリサに言う。

「そんなこと…皆さんのおかげです」

アリサは謙遜して言うが、実際彼女は確かに一歩強くなった。ハイドが一生懸命手助けしたこともあるが、結局強くなったのは他でもないアリサ自身の力によってなのだ。

「コウタたちの前でも、そのくらい素直でいてくれたらいいんだけど」

サクヤは悪戯っぽく言う。

「それは…」

アリサは頬を赤く染めて俯く。さすがにそれはまだ無理だ、とアリサは思う。

と、ここでサクヤは自身が得た情報を話した。

「あなたと一緒に赴任してきた、『オオグルマ先生』だけど、言われて気づいた時にはもう、極東支部から異動になっていたわ…その後の足取りも追ったんだけど、『ロシアに戻る途中に、アラガミに襲われて戦死した』って記録しか残ってないのよ…」

「そんな…」

サクヤの言葉にアリサは信じられないと声を漏らす。

「残念だけど…やっぱり腑に落ちないわよね…」

サクヤは俯きながら言った。その声は落胆と、悔しさを滲み出していた。

「サクヤさん…」

アリサの声にサクヤが顔を上げる。

「私にも…手伝わせてくれませんか？せめて、何か一つでも罪滅ぼしが…うっ…出、来っ…うっ…」

アリサは涙を零してサクヤに頼むが、サクヤは首を横に振る。

「ううん…あなたにこれ以上、償ってもらうことなんかない…」

アリサは顔を上げて、サクヤを見つめる。

「…………でも、そうね。…あなた自身にも関わることだものね。今回の件には、きっと何か裏がある…」

そう言っただけサクヤはポケットからディスクを取り出す。

「実はね、リンドウの置き手紙が開けられなくて困ってるのこれが最後の手がかかり…でも、この手紙を読むためには、リンドウの腕輪が必要みたいなの…一緒に探してくれる？」

「はい！」

アリサはサクヤを手伝えることに喜びを示した。

「それにしても…いなくなった後までこんなに振り回されるとは思ってもみなかったけど」

サクヤがアリサに明るい口調で言うが、やはり悲しみや強がりを感じ取れた。

アリサはふと、ある言葉を思いだす。昔、誰かに教えてもらった…古くから残されているその言葉をアリサはサクヤに伝える。

「ゴーレ・ニエ・モーレ・ブイピエシ・ダ・ドウナー」

「何？」

アリサが突然意味のわからない言葉を呟いたので、サクヤが聞き返す。

「『悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる』…ロシアの、古いことわざです…」

「……………そう、ありがとうアリサ」

サクヤは微笑み、カップを手に取るとコーヒーを飲む。

それを見たアリサは、まだ一度も自分に出されたコーヒーを飲んでないことに気づき、カップを手に取って飲んだ。

そして、二人はどちらからともなく笑い出した。

悲しみなんて、このコーヒーのように飲み干せる…私にもきつと…そんな生き方が出来るはず…。

サクヤの許しを得て、自らの生き方を見つけたアリサは、ようやく心が軽くなったような気がした。

二十八喰：許し（後書き）

次回の話では、主人公に転機が訪れます。

大分書いてきたつもりですが、まだまだこれからだと思っています。

二十九喰：リーダー（前書き）

ハイドが晴れて部隊長に任命されます。

二十九喰：リーダー

アリサのトラウマ克服から一夜明け…ハイド達第一部隊はツバキに呼び出され、エントランスに集まっていた。

「なあ、急に集まれて呼ばれて来たけど…一体何なの？」

コウタはアリサに尋ねるが…。

「知らないです…知っていても、あなたには教えませんが…」

アリサに冷たくあしらわれ、コウタはうなだれる。

「サクヤさん、何か知ってます？」

アリサはそんなコウタを無視して、サクヤに聞いてみる。

「なんにも聞いてないわ…それにしても、全員招集っていうのも珍しいわね…」

サクヤの言う通り、ソーマまで来ており…まさに第一部隊が全員集合している状態なのだ。

と、そこへツバキがやってきた。

「どうやら全員いるようだな…本日、執行部から正式な辞令が降りた。今回の任務の完了を持って、神霧ハイド…貴官をフェンリル極東支部、保守局第一部隊の隊長に任命する。これからはお前がリーダーだ…よろしく頼むぞ」

ツバキの放った言葉を、ハイドが、サクヤ達が、回りで立ち聞きしていたゴツドイーター達が信じられなかった。

(隊長?…まさか…嘘だろ?まだ戦場に出て二ヶ月も経っていないこの俺が…?)

ハイドが呆然としている中、コウタは呑気にハイドの出世に驚く。

「すつ…すげえ…!出世じゃん!大出世じゃん!!こういうの、なんて言うんだっけ?…『下剋上』!?!」

「それ…裏切りですよ?」

アリサはコウタに冷静につつこんだ後、ハイドに向き直る。

「改めて、よろしく願いします!ね、サクヤさん!…サクヤ…さん?」

サクヤがアリサに全く反応しなかったので、アリサは不安げに顔を覗き込む。

「えっ?ええ…そうね。リーダー…か…なんだかずいぶん頼もしくなっちゃったわね。君になら、背中を預けられるよ…これからもよろしくね!」

「えっ…あ、いや…」

いきなりの隊長任命とあって、コウタ達の言葉にハイドはどもる。しかし勝手にはしゃぐコウタ達にツバキが反応する。

「はやとちりするな。正式に任命されるのは、『今回の任務の完了後』だ。それに…確かにリーダーともなれば、相応の権限が与えられる。しかし同等の、重く大きな義務も負ってもらおう」

ツバキは真剣な面持ちでハイドを見ながら話す。

「神機使いとしての職分だけではない…チームの部隊員を無事に生きて帰還させるという義務だ」

そして皆に向き直り…。

「死ぬなよ。全員生きて帰れ。これは命令だ」

ツバキの言葉を聞いた第一部隊の表情は暗くなった。

かつてのリーダーに言われ続けた…大切な命令…。

命令を出した本人は戻ってこなかったが…それでも彼はリーダーとして、自らを犠牲にし、部隊員を生かす道を選んだ。ゴッドイーターとして、人として…彼の選択は尊敬に値する。

「さあ…」

ツバキの声に全員がはっ、と我にかえる。

「いつまでボサツとしている！任務に向かえ！」

ツバキに叱咤された第一部隊は、鉄塔の森に来ていた。

ちなみにメンバーはハイド、サクヤ、アリサ、コウタである。ソーマは別の任務があるとのことであれた。

ハイドのリーダー就任を左右する今回のミッション。ターゲットは『オウガテイル』二体と『サリエル』だ。

サリエルとは、人と蝶を融合させたようなアラガミで、美しさに見とれて深手を負った情けない神機使いも何人かおり、発生地は地中海沿岸と見られている。

…ちなみにパイラー榊は、サリエルはザイゴートの進化種ではないかと考えているようだ。理由としては、サリエルの頭にある邪眼とザイゴートの目玉の構成成分がほとんど合致していることや、どちらも人間の女性の身体を表した部分がある等、共通点が多いから…ということらしい。

「じゃあ、リーダー。作戦を」

サクヤはハイドにニコニコしながら言った。

「まだリーダーじゃないですよ！」

ハイドが照れながら訂正する。

「よっ！リーダー！ヒューヒュー！」

ハイドの反応を見たコウタが茶化す。

「コウタは静かにしてて下さい！…でも、この任務が無事終われば…あなたはもう、私たちのリーダーです」

コウタをたしなめてハイドに向き直ったアリサは微笑んで言った。

「そつよ？どの道あなたはこれから皆を引っ張っていくんだから、！練習練習！」

サクヤはアリサの話に乗っかり、ハイドを促す。

「…そうですね…では、ブリーフィングを始める」

いつまでもモタモタしてられないと、ハイドは表情と口調を真剣なものに変えてブリーフィングを始めた。

自然とアリサ達も、姿勢を正しハイドの話聞く。

「観察班からの報告では、サリエルは低速でこちらに向かっているとのことだ。先にオウガテイルを叩こう。俺とコウタ、アリサとサクヤさんのペアに別れて索敵、各個撃破した後合流し、やってきたサリエルと交戦、殲滅する。………で、どうですか？」

言い終わった後で不安げにハイドがサクヤに聞いたので、サクヤ達三人はガクつと肩が片方下がる。

「…せっかくカツコよく決まったと思ったのに…」

サクヤがハイドに文句を言った。

「仕方ないじゃないですか…俺だって不安なんですから…」

姿勢を直したサクヤたちはやれやれ、といった笑顔でハイドをみた。

「私はそれでいいわよ」

「そうですね！私も、無駄のない作戦で良いと思います」

「俺もOKだぜ！」

三人の了承を得たハイドは、安堵した後先頭に立つ。

「…じゃあ、行くよ！ミッションスタート！索敵開始！」

ハイドの合図で、第一部隊は二つに別れた。

「アリサ！剣が使えるあなたは、前線で陽動をお願い！私はバックアップに回るわ！」

「はい！」

「コウタ！後ろを頼む！」

「任せとけて、リーダー！」

「だから『リーダー』はやめろよ！」

アリサとサクヤ、ハイドとコウタはそれぞれの道を進み、工場の裏側へと回り込む。

「目標発見！行きますよサクヤさん！」

「OK！」

「見つけた…。行くぞコウタ！」

「了お解！」

それぞれほぼ同じタイミングでオウガテイルを見つけ、攻撃を仕掛けた。

今の第一部隊には、オウガテイルなどで手間取るはずもなく、一分も経たずに倒してしまった。

「！あれは…」

「出たな…」

アリスとハイドは、ついに姿を現した『サリエル』を捕捉した。サリエルは塀をふわりと飛び越えて工場の中に入ってきた後、ハイドとアリスを発見する。

二人の立ち位置は今、サリエルを挟むような形となっており、ハイドとアリスも互いに互いを視認出来ていた。

「よし、行くぞ！」

「行きます！」

二人はサリエルに向かって突進する。サリエルはひらりと横に回りながら、脚のような部分の下から光球を出す。

それは少しの間滞空した後、ハイドに向かって物凄いスピードで飛んでいった。

「くっ！」

ハイドはそれを横にスライドしてかわす。

「はあっ！てやっ！」

その間にアリサは、サリエルを背中から斬りつけて着地した。

サリエルは背中中の痛み之苦悶の声を上げるが、すぐに反撃に出る。

頭の瞳からレーザーを上に向けて4本発射した。一度上に上がったレーザーは急に角度を下に下げ、雨のようにアリサに降りかかる。

「ふっ！」

タイミングを見極めて、アリサはレーザーの雨から逃れる。

二人がレーザーに手間取っている間、サクヤとコウタはバレットを撃ち込み続けた。すると、サリエルの瞳が妖しく光りだした。どうやら怒らせてしまったようだ。

サリエルはコウタに狙いを定めて、地面を滑るように滑空し、体当たりを仕掛けた。

「あぶねっ！！」

S字に曲がりながらの突進は避けづらかったのか、ギリギリでコウタはかわした。

しかしサリエルの攻撃はまだ終わらなかった。両腕をぎゅっと身体に寄せ、まるで何かの力を溜め込むような動作をした。

そして、縮こませた両腕を天に向かって突き出した直後、サリエルを中心に地面から巨大なエネルギー波の柱がせりあがる。

「ぐうああああ！！！」

それをもろに食らったコウタは後ろに吹き飛ばされた。

「し…まつ…た…」

コウタが地面に倒れ込む。

「コウタ！…くっ…アリサ！サクヤさん！フォローしてくれ！」

『了解！！』

アリサとサクヤがハイドと、倒れているコウタの前に出た。

「よくもやってくれましたね！！」

怒りが込み上げたアリサは斬りかかり、サクヤがフォローでレーザーを撃ち込む。

「あ、あ…ぐ…」

コウタはすでに虫の息だったが、その命の灯が消えることはない。

「しっかりしろ、コウタ……」

ハイドはコウタに触れると、意識を集中する。すると、体力や生気が吸い取られ、自分の身体がズシリと重くなった感覚を覚える。

ゴッドイーターは互いの身体の壁すら超越する。ハイドが行ったのは『リンクエイド』という、神機使い同士のみで行える応急治療法だ。使う神機使いにもよるが、理論上、体力のだいたい半分程度を他の神機使いに分け与えることが出来る。

「あ、ハイド……ゴメンな……」

「まだいけるか？」

ハイドは疲労を隠してコウタに聞いた。

「ああ、なんとか……」

そう言ってコウタは立ち上がる。

「なら……仕事の続きだ！」

ハイドも立ち上がり、神機を構えてサリエルに向かって行く。

コウタは体力を回復する回復錠と、オラクルバレットを撃つ度に消費する「オラクル」を補給するOンプルを飲んで、戦線に復帰する。

「このっ…！」

アリサは斬撃を与えていくがあまり削りきれていない。

するとサリエルが、瞳からレーザーを4本発射した。今度は対象者を追尾するホーミングレーザーのようで、曲がりながらアリサに向かって飛んでいく。しかし…。

ガンン！！

ハイドが装甲を展開し、それを防ぐ。

「ハイドさん！」

「いい加減…」

そう言ったハイドはサリエルの正面に飛び上がる。神機を振りかぶり…。

「墜ちろ！！！」

ショートブレード刀身とは思えない力でサリエルを頭から叩き斬り、無理矢理地面に落とす。

「アリサ！今だ！」

「！はい！」

ハイドの力に驚いていたアリサは我にかえり、神機を構える。

「喰らえ!!」

「隙あります!!」

二人の神機がサリエルを捕喰した。肉を引きちぎった二人は一気にバーストする。

『うおおおおお!!!!』

二人は神機を変型させてコウタとサクヤに向けて二発ずつ撃ち渡す。

「いくわよ!!」

「おし来たああ!!」

そして今度は互いに向けて…。

「渡すぞ!!」

「どうぞ!!」

リンクバーストを発動した四人は一気に仕掛けた。

ハイドの剣撃でサリエルのスカートと脚が破壊され、サクヤとコウタの射撃で頭が破壊される。

「決めるぞ!!」

再びハイドが神機を銃に変型させて、アリサ、コウタ、サクヤとともに濃縮アラガミバレットを放った。

光の奔流に飲み込まれ…後に残ったのは、無数の風穴が開けられたサリエルの死骸だった。

ハイドが神機を剣形態に戻して、目標の沈黙を確認した後…ポケッタから各隊長に支給される携帯電話を取り出す。ヒバリに電話をかけ、一言…。

「ミッション完了…帰投する」

それは、新たなリーダー誕生の報告となった。

二十九喰：リーダー（後書き）

最近なんか話が長くなっていくような気がします…

もっと上手くまとめたらな…

三十喰・権利と義務（前書き）

正式に隊長に任命されたハイドの話です。

三十喰：権利と義務

ミッションを終えて、ハイド達はエントランスに戻ってきた。

カウンターへ行くとハイドにヒバリが話しかけた。

「ハイドさん、支部長がお呼びです」

「あ、はい。…え」と…」

ハイドのどうしようかなといった表情にアリサが口を開いた。

「いいですよ、ハイドさん。報告書は私が記入しますから」

「そっか…じゃあ、頼むよアリサ」

「はい！」

アリサに報告書の提出を頼んだハイドはエレベーターに乗り、役員区画へと向かった。

目的の部屋に到着したハイドは、支部長室に入るのは始めてだった？と身なりを整える。（別に乱れているわけではないが）

コンコンとノックすると、中から久しぶりの声が聞こえてきた。

「誰だ？」

「神霧ハイドです」

「君か。入りたまえ」

「失礼します」

バシュッとドアが開き、部屋の中に入ると、シックザールが椅子に深々と腰掛けていた。

ハイドが近づくと、シックザールが口を開く。

「期待通り、滞りなく任務を完遂してくれたようだね…まずは祝辞を述べさせてもらおう。リーダー就任、おめでとう」

「ありがとうございます…」

ハイドは軽く頭を下げて礼を言った。

「さて…君に足を運んでもらったのは、他でもない。リーダーの権限と、義務について…触れておこうと思ってね」

シックザールはいつものように机に肘をつき、両手を口の前で組みながら話した。

「まずは権限の強化だ。君には、リーダー専用の個室が与えられる。前リーダーであるリンドウ君が使用していた部屋だ…」

「！」

リンドウの部屋に移り住むと聞いて、ハイドはピクリと反応する。

「その際…ターミナルにアクセスして、使用者権限を更新しておくように。今まで閲覧が許可されていなかった資料が、確認できるようになってきているはずだ…。情報を開示、共有することを我々が決断した…この意味を、よく理解しておいてくれ。そう…これは我々、フェンリルからの信頼の証…願わくば、裏切らないでほしいものだ…」

シックザールの意味深な言葉を聞いたとき、リンドウの姿を思い浮かぶ。

「さて、次は義務の方についてだが…君には通常の任務の他に、リンドウ君が遂行していた『特務』を引き継いでもらおう…」

次の言葉が続かず、シックザールが考え込むような仕種をしたので、ハイドは首を傾げた。

「……………細かい話は、追って伝える。今日は君も、疲れていることだろう。ご苦労だった、これからもよろしく頼むよ」

「はい」

シックザールの話が終わったようなので、ハイドは執務室を出る。

緊張が解けると、一気に空腹を覚えるハイド。部屋に荷物を移動させる前に、食堂でも行くのかなと考えていた時だった。

「ハイド!」

「えっ?あ、ツバキさん」

いきなり後ろから、ハイドはツバキに呼び止められた。

「お前に伝え忘れていたことがあった」

「？何ですか？」

ハイドはなんだろう？とツバキに聞き返す。

「本日、一八　にお前の新しい部屋に荷物が届けられることになっている」

「荷物…ですか？」

「そつだ。明日からはそれを使って任務に臨んでくれ」

ツバキはニヤッと笑みを浮かべて立ち去った。

「？」

ハイドは訳が分からず、遠ざかるツバキを見ていた。

「……………」

食堂での食事を終えたハイドは、リンドウの部屋の前に来ていた。

(今日からここが…俺の部屋…)

ハイドはゆっくり手を伸ばし、ドアの開閉スイッチを押す。

リンドウの部屋は予想に反して綺麗に整頓されていて、窓には夕焼けの海が映しだされていた。

そして、部屋と同じく綺麗なベッドの脇の棚には、今の世界では希少となった酒瓶がズラリと並んでいる。…どうやら封を開けてはいないようだ。リンドウがミッションの報酬として貰ったのだろうか…。

壁にはダーツの的が掛けてあり、三本の矢が刺さっている。

ハイドはしばらく部屋に見入っていたが、ドアを閉じてロックをかけた後、自分の荷物が入った鞆を床に置く。

すると、ベッドの下に箱がいくつか置かれていることに気がついた。これか、とハイドは箱を開き中を確認する。

「これは…」

翌日ハイドは目を覚ますと、顔を洗って支度を始めた。

昨日届けられていたのは服だった。これを着て任務に臨めとツバキは言ったのだ。

ゆったりと幅が広く、脚の動きを制限しないズボンを穿き、ベルトを締める。

肌触りの良いニット地のダブルジップジャケットに袖を通し、ジッパーを上げる。その際、コウタやアリサ達には見せていないが、いつも身につけている、チェーンを通した指輪を服の中へ隠すように入れる。

更にダークブラウンのジャケットに袖を通して、両袖の端を二の腕で綺麗に折り曲げる。背中にはフェンリルの紋章や、背骨をイメージした留め金があしらわれている。

余談だがこのデザインには「アラガミとの命のやりとり、他者の犠牲の上に成り立つ世界」というメッセージが込められているとか。

機能性の高い、黒い軍用ブーツを履き、ズボンの裾を中へ入れる。

最後にグレーのレザークロップを装着し、鏡の前に立つ。

(…おかしいところは…無いよな…よし)

ハイドは部屋を出てドアをロックすると、エントランスへ向かった。

「では、第一、第二、第三部隊合同ブリーフィングを始める」

ツバキは自分の管轄する部隊を全員招集して、朝のブリーフィングを始めた。

これだけのゴッドイーターが一同に集うのは珍しく、エントランス

に異様な空気が流れる。

「あ、あの…ツバキさん」

コウタが手を挙げた。

「何だ？」

それにツバキが聞き返す。

「あの…ハイドがまだ来てないんすけど…」

コウタもアリサ達も、いつもならちゃんと時間には来ているハイドが今日は珍しく遅刻したので心配していた。

「ああ、そのことなら心配いらない。『少し遅れて来い』と言ってあるからな」

ツバキはサラリと言った。

「えっ？」

「そろそろ来る頃だな」

とツバキが言った時、エレベーターが動く音がした。

やがて全員がエレベーターを注視する中、ゆっくりと扉が開き…中からハイドが現れた。

皆口が半開きになっていたので、ハイドはやっぱりどこかおかしい

のか？と自分の身体を見直した後…。

「え〜と…どうですか？」

と聞いた瞬間、様々な感想が飛んできた。

「おおお〜！！いい！似合うぞハイド！！」

タツミは大絶賛した。

「心なしか…遅しく見えるな」

ブレンダンも後輩の成長に驚く。

「凄くカッコイイです、ハイドさん！」

カノンも素直に褒めた。

「なん…だとっ！あれは隊長専用だろ！？なんでハイドが…！」

「隊長になったから着てるんじゃないかねえか。そのくらい分かるだろ…」

シユンが納得いかずに声を荒げ、それにカレルが冷静につっこむ。

（くそっ…『新型』には最初から出世のレールが敷かれてるってか…）

内心は冷静では無いようだ…。

「ふふ、まあまあ二人ともそのくらいにしておきなさい…。…私も、

素敵だと思っわよ…ハイド」

ジーナも、言われた方はかなり照れる褒め言葉を述べる。

「似合うぜリーダー！」

「はい！どこもおかしくありません、凄く似合ってますよ！」

「……………」

コウタとアリサは絶賛するが、ソーマだけは何も言わなかった。

「フ、第一部隊のリーダーに相応しい風格も出てきたか？」

「本当に…似合ってるわよ、リーダー」

ツバキとサクヤは感慨深げにハイドを見て感想を述べた。

ハイドの着ている服は、各部隊長にのみ支給される軍服で、リンドウが着ていたものと一緒のデザインなのだ。

違うことと言えば、ハイドがジャケットなのに対し、リンドウがロングコートだったことぐらいだろう。

ハイドは（一部を除く）皆の喝采に少々照れながらツバキの横に立ち、全員の方を向いた。

「もうみんな知っているとは思っが、昨日の任務の完了をもって、神霧ハイドが第一部隊の隊長に就任した。では、新しい隊長に一言挨拶してもらっ」

そう言ってツバキはハイドを見た。ハイドは姿勢を正すと口を開く。

「この度、第一部隊隊長に任命された神霧ハイドです。極東支部の主力である第一部隊のリーダーとして、皆さんを引っ張って行きたいと思いますが…俺はまだ経験不足です。…だから…皆さんの力を貸して下さい！」

ハイドの頼みにほぼ全員が頷く。

「よろしい。では本日の各ミッションについての話に移る……………」

ツバキの言葉で、新しい一日が始まった。

三十喰：権利と義務（後書き）

第三十話ということになりました。そして、突然気づきました……
…。

『主人公のキャラ紹介してねえ！！！！！！』

という訳でキャラ紹介です

：神霧ハイド（18）

フェンリル極東支部初の新型神機使い。コウタと同時期に入隊。

メデイカルチエックにて、非常に高い潜在能力が確認される。

神機使い候補に選ばれる前は、今はアラガミに襲われ破棄されている外部居住区A13エリアに住んでいた。

アラガミの急襲により、両親と妹を目の前で無惨に喰い殺され、自身も危うく殺されるところをとあるゴッドイーターに助けられた過去を持つ。

その後はそのゴッドイーターの配慮で、アナグラに一番近いエリアに移り住んだのち、適合者に選ばれる。

三十一 喰・お土産（前書き）

ようやくハイドの外部居住区時代の仲間登場です。

三十一 喰：お土産

ハイドは隊長に就任した次の日、いきなりツバキに「少しは休暇を取れ」と言われ、急遽非番になった。

一日何もすることが無いのは、ゴッドイーターに選ばれる前以来だな…と考えたとき、ハイドはふと思いつく。

外部居住区の人々にお土産を買って持っていくという約束を。

コツコツ貯めてきたお金もある程度まで増えていた。

（ちょうどいいや、今日持って行こう！）

ハイドは早速計算を始めた。

（外部居住区の食糧供給は『一週間分』ってことになってるけど、どう考えてもあれは四日分くらいしかない…とすれば一ヶ月をだいたい四週間として3×4で12…そこに二日プラスで14日分の食糧を持って行こう…あとは衣類とか生活用品だな…）

あれこれ計算しながら買い物をしていったハイドは、途中でコウタとすれ違う。

「よう、ハイド…って何だその荷物!？」

ハイドが台車で押していた荷物を指差してコウタが驚く。

「お土産だよ。外部居住区にいたときに世話になったみんなに渡す

んだ」

「そうなんだ！俺も家族にお土産買っていくんだけどさ……その度に母さんと妹が喜んでくれるんだよ！やっぱさ……いいよな、そういうの」

「ああ……じゃあ俺、もう行くよ！ミッション気をつけてなコウタ」

「おう！また明日な」

そう言っただけでコウタは別れた。ハイドは荷物を落とさないように紐で縛り、台車の借用書に記入して、アナグラのゲートから外部居住区へと向かった。

外部居住区の光景はわずか一ヶ月程しか経っていないのにすごく懐かしく感じる。

ハイドは台車を押しながら感慨深くその町並みを眺めていた。

『居住区』とは言っても、物資が少ないこの世界では、廃材を使って建てられた小屋が乱立しているだけであり、住民たちは実にわびしい生活を強いられている。

ハイドが以前住んでいた場所も、その小屋の内の一つだった。今、そこではハイドと同じように、家族を失ってしまった人間が五人で生活しているハズだ。

目的の小屋までたどり着くと、軽くノックする。

「…誰…？」

生気の無い声の中から聞こえてきた。ハイドはこの声の主を知っている。

ドアがギギイ…と開くと、髪がボサボサの十歳の少年が現れた。

「マルク！久しぶりだな！」

「……………ハイド兄ちゃん！？」

マルクと呼ばれた少年の顔は驚きに彩られた後、喜びの笑顔に変わった。

「ハイドが来たってえ！？」

ドドドド…と四人がドアに駆け寄る。

「久しぶりだね、みんな」

ハイドが明るく挨拶すると、その四人も喜びを爆発させる。

「おお〜ハイド！！元気にしてたか！？」

「ええ、なんとか無事に生きてます、バルトさん」

バルトと呼ばれた男は、スキンヘッドの45歳の男性だ。小屋のリーダーのような存在であり、ハイドの面倒も見ていた。

「やっぱり一ヶ月会わないと、見違えるわね…」

ハイドを目を細めて見つめていたのは、ステラという24歳の女性で、夫を失いこの小屋に流れ着いた。家事全般を担当している。

「なあなあハイド、フェンリルでの話聞かせてくれよ！」

「主に食糧供給について！」

そうハイドに詰め寄るのはトウヤとマヤの双子兄妹だ。ハイドより三つ下。つまりコウタと同じ15歳だ。常に風に吹かれているような、癖のある黒髪が特徴で、普段はステラのお手伝いをしている。

「その話は後。ほら！約束通り、お土産持って来たよ」

ハイドが台車を小屋の中に入れて、ワアアと子供たちが喜ぶ。

「食糧は14日分、あとは寝具とその他生活用品です」

ハイドはステラに箱の中身を説明する。

「助かるわ。ありがとうハイド！でも、ちゃんと量を気にして食べないといけないわね」

そう、足りるのかどうかは分からない。何せ育ち盛りの子供が三人もいるのだ。自分たちがあまり食べ過ぎると、今度は子供たちが食べれなくなる。

「なににせよ、これで当分心配はいらねえな！」

ハイドの肩にバシツと手を置いてバルトが笑いながら言った。

「すみません、本当はもつと早くに持ってくる予定だったんですけど…入りたての頃は極貧生活だったので、物を買う余裕がなかったんです…」

ハイドが申し訳なさそうに言うが、バルトは気にしない。

「いってことよ！どっちにしろお前は、ちゃんと約束を守ってくれた…自分の生活も命懸けで苦しい時に…こっちも無理言ってますまなかったな、ハイド…」

ハイドにお土産を真つ先に頼んだのはバルトだった。そのことをハイドに謝る。

「それこそ気にしないで下さい。俺を受け入れてくれたんですから…当然のことです」

その時マルクがハイドの服の裾を引っ張った。

「ハイド兄ちゃん！フェンリルの話聞かせて！」

「ああ…それじゃあ、何から話そうかな…？」

ハイドはとにかく密度の濃かったこの一ヶ月間を、バルトたちに話した。

適合試験直後の訓練や、戦場の恐怖、いろんな仲間との出会い、一人のゴッドイーターの殉職、リンドウの行方不明、アリサの介抱と

支援、部隊長就任……。いくら話しても話のネタは尽きなかった。
みんなハイドの話に興味津々で、あっという間に時間は過ぎていっ
た……。

「まあ……こんな感じかな？」

ハイドが話し終わると、全員溜め息をついた。

「すげえ生活してるな、ハイド……」

バルトが話のあまりの濃さにびっくりしてハイドに言った。

「うん……よく身体壊さないね……」

ステラも、話の途中で出てきたスケジュールを聞いて半ば呆れてい
た。

「まあ、『ゴッドイーター』ですし……」

ハイドは苦笑いして答える。

「ねえねえハイド……」

マヤが突然尋ねる。

「何？」

「ハイドとその『アリサ』って人、付き合ってるの?」

「えっ?...あ...いや...」

マヤの言葉にハイドともると、茶化すようにトウヤが追撃する。

「おっ!焦ってる、焦ってる!付き合ってるんだ」

ニヤニヤしながら言うトウヤ。それにハイドは冷静に対処する。

「付き合ってるよ...良くて、仲間として信頼しあってる」ってくらいだから...」

「嘘だ。だってすごい可愛いんでしょ?その子」

「それはそうだけど...でも、トウヤとマヤが考えてることは何もないよ.....今はまだね」

視線を逸らしてハイドが言った。それにマヤがしつこくつつこむ。

「『今はまだ』ってことは『いつかそうになりたい』ってことなんじゃないの?」

年頃の女の子は、どんな世界でも色恋沙汰に興味があるのか、グイグイくる。

「そうは言っていないよ。俺はただ『可能性がある』って言っただけ。人間は、明日何が起こるかわからないんだ。...アリサといつかは恋人になってるかもしれないし、そうじゃないかもしれない...そう言

っただけだよ」

「むっ……」

マヤは頬を軽く膨らませて、ハイドをジト目でみつめる。

(昔からハイドは本心を突かれると饒舌になるな……)

バルトとステラはハイドを見ながら同じことを考えていた。

彼のことを十歳の頃から面倒見ている二人には、わかりきったことだった。

「さつて……そろそろ帰るかな？」

立ち上がるとマヤが「こらっ逃げるなっ！」と言ったが、軽くスル―してハイドは扉を開ける。

外は日がすっかり沈み、星がいくつか見えはじめていた。

「……じゃあ、また時間ができれば、お土産持ってここに来るよ」

ハイドがマルクたちの頭をそれぞれ撫でながら微笑んで言うと、バルトが口を開く。

「無理はするなよ？」

「わかってますよ」

「身体には気をつけてね」

ステラは心配そうな顔で言う。

「はい、ステラさんも気をつけて」

そしてハイドはみんなに手を振って、アナグラへと歩いていった。

バルトとステラは、遠ざかるハイドの背中を見つめながら不安に思っていた。

ハイドの言った言葉が頭に残っているのだ。

『人間は一日先の未来がどうなっているのか分からない』ということとは、人が生まれた時からずっと続いてきたことだ。

しかし二人は、『明日ハイドが死んでしまったら…』などとは考えたくなかった。

特にバルトは、引き取ってから八年…長い間一緒にハイドと暮らしてきた。愛情が湧かない訳がない。

ステラは一緒に暮らしていたのは四年だけだったが、ハイドのことをすっかり家族として認めていた。

二人にとってハイドは息子も同然なのである。…もちろんマルクもトウヤもママもだ。

「頑張つてねハイド…」

ステラはそつと呟き、ハイドの姿が見えなくなるまで見送った。

三十一 喰：お土産（後書き）

今まで一度も書いてなかった文を書かせていただきます。

「アドバイス・ご感想お待ちしております」

今まで書くのを忘れていました…。

三十二 喰・コウタとソーマ(前書き)

コウタがソーマのシンパにいらついでつしまつて回ります。

三十二喰：コウタとソーマ

ハイドがリーダーになってから五日が経った。

ハイドはミッションにおいて、すでにメンバーを統率する程にまで成長したのだが…やはり、日に日に増していく精神的な疲労感はない。

「はあ…」

エントランスへ向かうために待っていたエレベーターの前で溜め息をつく…。

「どうだ？調子の方は」

「あつ、ツバキさん！はい、最近は皆に支えられてなんとか…」

「ああ、皆まで言うな。その顔を見れば、だいたい分かるさ…」

そう言ったツバキは右手を伸ばし、ハイドの頬にそつと添える。

ハイドはツバキの突然の行為にどきまぎしていたが、やがてツバキは口を開く。

「リーダーになりたてだったリンドウそっくりの…テンパった顔つきだ」

そしてツバキは手を戻し、続けてハイドに言う。

「まずは肩の力を抜くことだな。お前が全てをこなすことはないん

だ…。仲間を使い…自分を使え。それが信頼を生む」

ハイドは、リンドウの歩んできた道を思い浮かべる。長い歳月を戦い抜いた、生き残るための秘訣…そして、リーダーのすべきことを…。

「お前ならきつといいリーダーになれる」

ツバキはハイドを見つめながら励ましの言葉を贈る。

「…なれるでしょうか…？」

「ああ…さあ、任務に戻れ！これからもよろしく頼むぞ！」

「…ハイ！」

ハイドの表情は明るさを取り戻し、声には疲れなど微塵も感じさせないものになっていた。

「なんかさ…最近支給品の質が目に見えて落ちてない？いや、贅沢言ってらんないのはわかるんだけどさ…」

ツバキの激励を受けたハイドは、コウタ、ソーマとともに鎮魂の廃寺に来ていた。

そして、ミッションが始まるまでの暇な時間に、世間話をしていたコウタが支給品に対する不満を漏らしたのだ。

「プリンのレーションとかモロに体に悪そうな味でさ〜…あのザラツとした甘い食感、耐えらんないんだよね…」

「あはは、そうだね…まあ食べれるだけマシだと思っけど…」

と、ハイドがそう返した時に物音がして振り返るとソーマが立っていた。

「あ！ソーマ！今度の休みに全員でハイドのリーダー就任祝いでもやるうかと思ってるんだけど、どう？」

ハイドには初耳のコウタの提案を聞いたソーマは…。

「…断る」

あっさり切り捨てた。

「えー、そう言わずにさあ…」

コウタはあまりに関心過ぎるソーマの発言に交渉する。しかし…。

「馴れ合いいたいなら、お友達同士で勝手にやれ」

またもあっさり切り捨てたソーマは、神機を肩に担いで待機ポイントからフィールドに降りて行ってしまった。

「くっそー、ちょっと腕が立つからってエリート気取りかよ！遅れて来て偉そうにすんなよな！だからアンタは友達が少ないんだよ、ヴァーカー！…」

(子供か?.....あ、子供か)

コウタのクラスでやたらとバーカ、バーカとか言ういじめっ子みたいな言動を見て、心の中で呟いた。

「んだよー...人がせつかくさあ...暗すぎだろアイツ...」

コウタの声が何だかしよげているように感じた。一応ショックは受けているようだ。

「ああつと！作戦開始時刻だ！よし、行こうぜ！」

コウタもフィールドに降りて行ったのを見て、ハイドも降り立つ。

「グオオオオオオ！！！」

その瞬間、アラガミの声が辺りに響き、複数の爆発音が聞こえてきた。

...どうやらソーマがもう交戦しているようだ。

「行くぞコウタ！」

「おう！」

二人は素早く走り出し、寺院の階段を駆け上がる。登りきって辺りをハイドが見回すと、すぐに二つの影を確認した。降りしきる雪で鮮明には見えないが、近寄っていくと一つはソーマ、もう一つは今日の討伐目標「クアドリガ」だとわかった。

クアドリガとは戦車のような装甲を持つ巨大なアラガミで、人間の兵器を模倣した大火力の砲撃とその巨体に似合わない高い機動力を持つ。

以前サカキが講義でミサイルを発射するアラガミが目撃された、と言ったのはこのアラガミを指していたのだ。

「コウタ！いつも通りフォローしてくれ！」

「了解！」

ハイドが先にクアドリガに斬りかかり、コウタは頭を狙ってバレットを撃ち込む。しかし…。

キーン！

(堅い…！！)

手に返ってくる痛みに耐えながらハイドは剣を振りつづけるが…あまり削れている気はしなかった。

そしてクアドリガは背中にある小さな箱みたいなものをパカッと開く。すると中からミサイルが飛び出し、コウタに向かって飛んでいく。

「うお！？」

コウタは間一髪でかわすが、今度はクアドリガが自ら突進してきた。

「クソっ！これでも食らえ！」

コウタはスタングレネードを地面にたたき付けて、目が眩むほどの閃光を炸裂させる。

「よし！今だ！」

クアドリガが視界を奪われている内に、ハイドとソーマの神機がクアドリガの装甲と肉を捕喰する。

バーストしたソーマは、クアドリガにチャージクラッシュを叩き込み、ハイドは神機を変形させてコウタにアラガミバレットを撃ち渡す。

「おっしやああ！！！」

リンクバーストを発動したコウタを見た後、ハイドはクアドリガに向き直って攻撃を再開する。

そして、ようやくクアドリガは視力を取り戻したのか、再び戦闘体勢に入る。

ソーマに狙いを定めて、ミサイルポッドを開いたその時…。

「ここだ！！！」

ハイドが刃を振り下ろして、片側のミサイルポッドを切り落とした。

破壊された肉体にクアドリガが悲鳴をあげる。

ズガン！！

堅い装甲などものともせず、ソーマはノコギリ状の巨大な刃を振り下ろした。

無慈悲な一撃を受けたクアドリガは、その体を一刀両断されて生命活動を停止させた。

「いや、終わった終わった！」

「ああ！お疲れ…でも、まだ気を抜くなよ？」

と言いながらハイドはクアドリガを捕喰する。

「よし、ミッション完了！帰投する…ってあれ？ソーマはどうした？」

辺りを見渡してもソーマの姿が見当たらなかった。

「あれ？そういえば…」

コウタも気づいて見渡す。

「まくら勝手にあっちこちほっつき歩いてるな？」

ソーマは崩れた寺の一角で、神機を構えながら歩みを進めていた。

調べたいことがあって一人やってきたのだ。……当然軍規違反である。

ソーマはやがて仏像が並ぶ本堂にたどり着き、中へゆっくりと侵入していく。

木で出来た床がギシギシと音を立て続けるが、ソーマが本堂の中央まで来ると、それも止まった。

「誰だ…姿を見せろ」

戦っている最中にずっと感じていた視線がソーマは気になっていた。それ以前にも、似たような視線や気配を感じていたことは何度かあった。

確かめたい…アラガミの殺気がこもった視線を浴びつづけた自分に違和感を与える、人間のものとは思えない不思議な視線の正体を…。

「いるのはわかってるんだ！」

試しに脅してみる。しかし、仏像の影に隠れて、ソーマを見つめていた白い人影は出てこなかった。

ソーマがキョロキョロ見回していると、後ろから突然物音がした。

素早く神機を後ろに向けて、刃を突き付ける。

「ちょよ、ちょっと待った！！俺だつて！！」

神機を向けた先にはコウタとハイドがいた。刃を向けられたコウタは、自分の神機を盾がわりに構えていた。

「ちっ…なんだ、お前か…」

ソーマが苛立たしげに言う。

「なんだじゃねーよ！帰投する時間を過ぎても来ないから探してたんだぞ！」

コウタはソーマの行動に対して文句を言う。

「余計なお世話だ…俺は俺の好きにさせてもらおう」

「俺たち、同じ部隊の仲間だろうが！勝手ばかり言うなよ！」

コウタは弱冠声を荒げてソーマに詰め寄るが…。

「フ…『仲間』か…少し小突かれたくらいで死んじまう…おちおち背中も預けられないような仲間なら、いない方がずっとマシだ…」

冷た過ぎる言葉を放ってソーマはそっぽを向いた。

「コイツっ…ああ、わかったよ！アンタは『特別』だよ！大したヤツだよ！………お高くとまりやがって…好きにしるよ！俺は先に帰るからな！」

コウタはソーマの態度に苛立ち、散々言い散らかした後背を向けて帰投へリのもとへ向かった。

「…お前も、俺みたいなバケモノに関わるな…」

ソーマにそう言われたハイドは、頬をポリポリと掻いて…。

「うん…関わるなって言われても…一応リーダーだからねえ…関わらせてもらっよ?」

「…あ?」

ハイドが微笑みながらソーマを見て言った。それにソーマは意味が分からず聞き返す。

「それに、ソーマの言ったこと…『背中を預けられない仲間はいらない』ってことは、『背中を預けられる仲間は歓迎』…ってことだよな?」

(何言ってるやがる、コイツ…)

ソーマはハイドの返してきた意外な返答にいらつき、わずかに困惑する。

「今はまだ無理でも、いつかソーマを支えられるくらい強くなるよ…リーダーとして、仲間として…」

なおもハイドは、微笑みながらソーマを見つめて宣言する。

(俺を支えられるようになるだど……笑わせやがる……)

ソーマはハイドにそれ以上何も言わなかった。ただ、言い合っのが面倒なだけだったのだが。

「そんなに死にたいなら…好きにしろ…」

物騒なことを言っただけでソーマはハイドの横をすり抜け、へりの待機地点へと向かった。

その後ろ姿を見ながらハイドは密かに思った。

(ソーマと仲良くなるのは…最難関かつ重大な責務だな…あそこまで言ったからには意地でも強くなってやるぞ…)

ハイドとソーマのやり取りを見ていた白い人影は、その場を離れ、雪景色の中に姿を消した。

三十二喰・コウタとソーマ(後書き)

ソーマは扱いが難しいのか簡単なのか自分でもよく分からないキャラです。

ただ、今回の話を書くのにはかなり気を使いましたからやっぱり扱いにくいキャラなんでしょうかね…

三十三喰：過去と陰謀（前書き）

長い…セリフ長い…どうしたもんでしょうねこの回…。

三十三喰：過去と陰謀

ハイドはシックザールに再び呼び出され、執務室に来ていた。

最近よく呼ばれるなど思いながら中に入ると、シックザールが趣味で集めたらしき骨董品がハイドを迎える。

ハイドがシックザールの前まで行くと、話が始まった。

「最近の君の活躍は、目を見張るものがある。この短期間で、チームを束ねる程の存在になるとは…まさに、新型の面目躍如といったところだな」

シックザールはハイドの活躍ぶりを褒めたたえる。そして、今日呼び出した用件を口にした。

「さて…知っているかもしれないが、エイジス計画がそろそろ最終段階に入りつつある」

その言葉にハイドはピクつと反応する。

「アラガミの脅威から我々を守り、人類を新たな未来に導く箱舟…それがやがて完成を迎える、実に喜ばしいことだ」

そう言ってシックザールはテーブルに肘をつき、組んだ両手に顔を埋めた。その表情はよく見えないが、何か思い詰めた雰囲気漂う。

「もう少しだ…あとしばらく、君達の力を貸してくれ」

「はい！」

ハイドが返事したとき、シックザールのノートパソコンが、小さなアラームを鳴らした。

シックザールはキーを叩き、内容を確認するとハイドに向き直る。

「来客だ…申し訳ないが、続きは後日にしよう。ともかく…君たちの更なる働きに、期待しているよ。以上だ、さがりたまえ」

ハイドは頷いて、彼に背を向け部屋を出た。

部屋を出ると、ちょうど向かいからサカキがやってきた。

そしてハイドが軽く会釈をして、サカキの横を通り過ぎようとしたとき…。

「君は好奇心旺盛な方かな？」

「えっ…？」

サカキはハイドの返事も聞かずにシックザールの部屋に入って行った。

ハイドはわけが分からず扉を見つめていたが、やがて足元に一枚のディスクが落ちていることに気付いた。

それを拾い上げて、扉と交互に見た後、サカキの言葉の意味が気になったハイドはとりあえず部屋に持って行く。

「やあ、誰かと思えば…ペイラー…」

椅子から立ち上がり、骨董品を眺めていたシックザールは旧友の突然の来訪にいつも口調で話す。

「ヨハン、あの子も飼い犬にしようというのかい？」

サカキの第一声はやたらと意味深なものだった。

「…なんのことかな？それより、お願いしていた『例の件』だが、その後報告を受けていないが…？」

シックザールはサカキの言葉に微塵も動揺せずに返す。

「ああ、『特異点』のことかい？すまないがまだ手がかりはない」

「そうか…アレは計画の要だ。引き続き頼むよ」

サカキから収穫0の報告を聞いたシックザールは、焦りや落胆の様子を見せずに話した。

「君は君で探させているようじゃないか？そっちの方はどうなんだい？」

サカキは、シックザールが内密に探索を進めていることを知った上で聞いてみる。

「やはりソーマだけでは、ままならないといった所だ」

「それで、あの子も手駒に引き込もうとしていた…と、いうわけだ

ね？」

シックザールはサカキの物言いに、少々苛立たしげに言葉を返す。

「少しは言い方を考えて欲しいな博士。君はいつも通り、観察に徹してくれればいい」

「ああ、私にとって森羅万象は観察の対象さ…だからこそ、興味深い観察対象を無駄にしてほしくないだけだ」

サカキはシックザールに背を向け、背中越しに言った。

「ご忠告ありがとう、『スターゲイザー』…これからも『我々』が成すことを見守っていてくれたまえ」

シックザールの言葉を聞いたサカキは、一度も彼に振り向かず部屋を出て行った。

(さて…どちらについてくれるかな？「新米リーダー」くん…)

サカキは静かに一人の青年を思い浮かべる。彼がどちらの道を選ぶのか…それもまた、サカキの「観察」の内だった。

翌日…シャワールームから出たハイドは、頭をワシワシとタオルで拭きながら自室に戻った。

「ふう…今日も疲れた…」

この日はコウタ、アリサの三人でグボロ・グボロの討伐に行ったのだが、討伐の最中にもう一体増え、ミッション完了までに時間がかかってしまったのだ。リーダーになりたてのハイドとしては、イレギュラーは勘弁してほしい。

一通り髪の毛の湿気も取れたハイドはふと、ターミナルの脇に置いてあるディスクに目を向ける。

（中身を見ても大丈夫なのかな…でもサカキ博士、ワザと落としたっばいし…見るか見ないかは俺次第ってことか…）

少し考えた後…。

「まあ、見ても問題ないものだと思えばいいか」

好奇心に負けたハイドは、早速ディスクを入れて解析を始める。どうやら中身は動画ファイルのようだ。

動画が始まると、砂嵐が少し映ったあとに、手術室のような部屋が映し出された。よく見ると、何人かの研究者たちがオウガテイルを解体している。

と、その時作業していた一人が悲鳴を上げ倒れた。

「麻酔、効いてないの!？」

「おい!こつち、手伝え!」

慌ただしく人が動き回り、撮影していたカメラは倒され、映像が荒

くなくなった。

(な、なんだなんだ!?)

場面が変わって、大きな丸いテーブルを囲むように椅子に腰掛ける三人の人間が映し出された。その三人は黒髪褐色肌の眼鏡をかけた女性と、今より若いシックザールとサカキだった。

(これは…支部長室?でも、少し違う…?)

「やはり、生体への偏喰因子組み込みは難度が高いわね…」

黒髪褐色肌の女性が腕を組んで呟く。

「投与しても、アポトーシスが誘導されづらいようだね…やはり、胎児段階の投与が一番確実じゃないかな?少なくともラットでは成功している…」

そう提案したのはサカキだ。

「…どちらにせよ、人体での臨床試験が必要な段階だろう」

今度はシックザールが口を開く。

「原理が分からない物を、わからないまま使うアプローチ全てを否定するわけじゃないけど…P 73 偏喰因子の解明は始まったばかり。少なくとも、今行うのはいかがなものかと…」

サカキが方針の穴を指摘するが、シックザールが言い返した。

「一日10万人近くが、アラガミによって捕喰されている状況で、悠長なことは言ってられないだろう」

「君がペッテンコーファーのように、自分で試すのかい？」

「ああ…それが合理的であれば試すさ」

シックザールがサカキの反論に声を荒げる。

「…ヨハネス…私の、私たちの子供に投与しましょう」

しばし考え込んでいた黒髪の女性が、意を決してシックザールに提案する。

「本気が…！？いくら君の発案だからといって…私たちの子供を…！」

あの余裕に満ちたシックザールが目に見えてうるたえていた。

「誰かが渡らなければいけない橋よ…それならば私たちが…」

「しかし…」

夫婦で話し合っている横から割って入り、女性の提案をサカキが否定した。

「合理的だけど…賛成しかねるね…」

「生まれてくる子供たちに、滅びゆく世界を見せるつもりはないわ

…」

女性の決意は変わらないようだ。意志の宿った瞳でサカキを見つめる。

「……………私は、支持しよう」

少し考えて、シックザールが女性の提案に賛成した。

「両親ともに賛同か…説得の余地はなさそうだね……………ならば私は降ろさせてもらう。君たちとは方法論が違いすぎる」

「サカキ…」

サカキの声は珍しく、怒っているような印象を与えた。

「私はどこまでも『スターゲイザー』…星の観察者なんだ…君たちの重大な選択に介入するつもりはないよ…」

サカキがシックザールと女性を見て話しつつける。

「私は私の方法で、偏喰因子の研究を続ける。またどこかで交わることもあるだろう…それじゃあ失礼」

またも場面が変わって、今度は病室が映し出される。そして、真っ先に映ったのはベッドに背を預ける先程の黒髪の女性。

「気分はどうだ？」

シックザールの声が聞こえてきた。どうやら撮影をしているのも彼のようにだ。

「うん…体調もいいし…早く生まれてきてね…」

女性はそう言って膨らんだお腹を愛しそうに撫でる。

（シックザール支部長はソーマの父親だったよな…じゃあ、今あのお腹の中にいるのは…）

ハイドが考え込んでいると、女性がシックザールに尋ねた。

「サカキは？」

「安産のお守りが贈られてきたが…音信不通のままだ…」

シックザールがお守りを見せて女性に答える。

「そう…私たちが計画を強行したのを、まだ怒って…」

「今は、考えるな…体に障るぞ…」

シックザールは女性の身を案じて声をかける。

「そのお守りは、あなたが持っていて頂戴…明日はよろしくね…」

その時カメラがカクンと上下に動いた。シックザールが頷いたせいだろう。そこで再び砂嵐…。

映像が鮮明度を増すと、今度はいつもの執務室で椅子に腰掛けたシックザールが正面に映し出された。

今度は自分で自分を撮っているようだ。

「やあペイラー、久しぶりだね。あの忌まわしい事件の後、君もご存知の通り…マーナガルド計画は事実上凍結された。」

あの事故で生き残ったのは、生まれながらにして偏喰因子を持ったソーマと、君からもらった『安産のお守り』を持っていた私だけだ。君が作ったあのお守りの技術が…今や人類をアラガミから守る対アラガミ装甲壁になるうとは…科学者として、君には敵わないと痛感したよ…。おそらく君は、こうなることを予見していたのだろう…。フっ、安心してくれ。君を責めるためにこのメールを送っているわけではない。

近々私は、フェンリル極東支部の支部長に任命される。そこで再び力を貸してほしい。

報酬は研究のための十分な費用と、神機使い…ゴツドイーターに纏わる、全ての開発統括だ。

…そうだ、君に息子を紹介していなかった。まあ、そういうわけで、近々挨拶に行くよ…それじゃあ、失礼」

長々と、しかし端的にシックザールは話をまとめるとパソコンのキーを叩き、映像が終了した。

そして最後に、可愛らしいサカキとオウガテイルの絵が映し出され、こんな文面が書かれていた。

『このディスクを拾った人は、ペイラー・榊の研究室まで届けてください。』

…まさか中身は見てないよね？ ペイラー榊』

「いや、見終わった後に出すなよ…」

ハイドはサカキの意地の悪さにツッコんだ。

「単刀直入にいこう、話とは？」

ハイドがディスクの中身を見てから三日経ったある日、サカキにいきなり「話がある」と研究室に呼び出されたシクザールは、手短かに聞いた。

「最後の確認だ…考えなおすつもりはないのかい？」

サカキは低く静かな声でシクザールに「計画の見直し」について尋ねる。

「計画は最終の段階に近づきつつある。もう止められんよ」

「そうかい…じゃあ君にいい知らせだ」

シクザールの意志は変わらないと悟ったサカキは、急にいつもの口調になって話しはじめた。

「民間からのタレこみなんだけど…これまでにない強力なオラクル結合を持ったコアが、旧イングランド地域で見つかったらしいんだ」

「『特異点』か！」

シックザールがサカキの言葉にすぐさま反応した。

「それはまだわからないよ…たけど、あそこは本部の直轄地域だ。私でもなかなか手が出せなくてね」

フエンリルの創設メンバーの一人であるサカキですら、今、本部に對してあれこれちよっかいを出せる力はない。それを知っているシックザールは、少し考えた後…。

「わかった…しばらくの間ヨーロッパに飛ぶ…留守を預かって貰えるかな？」

「了解…まあいつも通り、私は私の研究を続けさせてもらっただけさ」
サカキの言葉を聞いたシックザールは、すぐに部屋を出た。おそろく準備に取り掛かるのだろう。

サカキは立ち上がり、シックザールが出て行った扉を見つめて呟いた。

「そう…研究の『障害』は少ない方がいいからね…」

ニヤリと笑うサカキが何を考えているのか、まだ誰も知る者はいない。

三十三噺：過去と陰謀（後書き）

長いと文句を言いつつ書いてしまいました。

でもやはり時間がかかってしまいます。

三十四 喰・お祝い（前書き）

ハイドのリーダー就任祝いを実行してみました。

三十四喰：お祝い

「『P 73 偏食因子』：お、あった」

ハイドは自室のターミナルで見た「あの映像」から気になった単語を調べていた。

「『複数発見された偏食因子の一つで、人体の細胞をオラクル細胞に変化させる働きが強いゆえに、投与が禁止された』：か…」

更にハイドはキーを叩き、別のことを調べる。

（『シックザールの妻』って打てば出るかな…？）

予想通り、すぐに目当ての情報が出てきた。

『アイーシャ・ゴーシュ…故人。（享年26）ヨハネス・フォン・シックザールの妻であり、ペイラー・サカキ、シックザールとともにフェンリルを創設したメンバーの一人。生科学の第一人者。自身の提案したマーナガラム計画において、当時まだ胎児だったソーマにP 73 偏食因子を母体を通して投与。自身はアラガミの捕喰爆発により、複数の研究員とともに死亡。シックザールと、生まれながらに偏食因子を持ったソーマは生き残り、現在も存命』

その後、ソーマの身体能力の向上の判明や、人体に投与できる新しい偏食因子が見つかり、現在の「ゴッドイーター」を形成するに至ったことなどが判明した。

「…そうか…ソーマが生まれたおかげで、ゴッドイーターの基礎や

神機の技術が確立されたのか…」

ハイドはターミナルを閉じると、部屋を出てエントランスへと向かう。

(ソーマにそんな過去があったなんて…俺は…どうしたらいい…?)

ハイドがあれこれ考えていると、エレベーターがエントランスに到着した。

扉が開いてエントランスに入ると、すぐさまコウタがハイドの腕を掴んでエレベーターの中に引きずり込んだ。

「うおわっ!!びっくりした…なんだよコウタ」

「まあまあ、今日はもう何も無いんだろ?ちょっと来てくれよ!」

コウタがニヤニヤしながらハイドに言う。

「…?」

ワケが分からずハイドはコウタに手を引かれるままついていった。

「食堂?」

コウタが足を止めたのは食堂の扉の前。

「よし、じゃあ行くぜ!」

コウタが扉を開けると中は真っ暗だった。気にした風もなく、コウ

夕はハイドの手を引き中に入って行く。

そして、コウタの手がハイドの手からスルリと抜ける感触がしたと思っただら…。

「リーダー就任おめでとうハイドー!!」

コウタの合図とともにいきなり食堂の電気が全てつき、ハイドは拍手で迎えられた。

ハイドが目にしたのは、この時代にはなかなかのご馳走がならんだテーブルと、第一、第二、第三部隊の面々だった。

(そういえばリーダー就任祝いをやるってコウタが言ってたっけ…？本当にやるとは思わなかった)

ハイドが自分が招かれた理由を理解すると、アリサがやってきた。

「さあ、ハイドさん！こちらに掛けて下さい」

アリサが椅子を引き、ハイドに座るよう促す。

「ふふ…うん、ありがとうアリサ」

そう言ったハイドは椅子に腰掛ける。

「よし！主役も到着したことだし…」

タツミがぐるりと見渡して、欠員がないことを確認すると…。

「そんじゃあみんな！このご馳走を用意してくれたアリサ、サクヤさん、カノン、ジーナさんに感謝して…食らいつくせ！！」

タツミの合図で食事が始まったが、ハイドはどうやら料理ができてからだいが皆を待たせたようで、特にコウタ、シユン辺りの食欲が凄まじかった。そのほかの皆も、普段なかなか食べられない物を「皆で食べる」ということが楽しいようで、かなり食が進んでいる。

「美味しすぎ！！」

凄い勢いで掻き込むコウタ。

「おい、コウタ！てめえ何勝手に俺の卵焼き食ってんだよ！！」

そう言いつつ自分も掻き込むシユン。

「お前ら…ちよつと食い過ぎだぞ」

カレルは半ば呆れていた。

「別にいいじゃねえか！どんだけ食っても…って、ああ！？俺のサンドイッチが無え！！コウタてめえまた取りやがったな！」

「べぶいばえはばはんへひはっへはいはほ！？（別に誰のだなんて決まってるないだろ！？）」

「何言ってるかわかんねえんだよー！！」

そんなやり取りを見て微笑んだハイドは、とりあえずスープに口をつける。

「あ、どう？ハイド…私の作ったスープの味は」

ハイドの向かいに座っていたサクヤが、スープの感想を聞いてみた。

「ええ、とてもおいしいですよ」

それにハイドは笑顔で答える。

「そう…口に合ったようで何よりだわ」

サクヤはニコニコ笑ってて上機嫌だった。

続いてハイドは、近くにあったサンドイッチに手を伸ばす。

「あ…」

アリサがそれを見て思わず声を漏らす。

「？…あ、もしかしてこのサンドイッチ、アリサが作ったの？」

アリサの様子に気付いたハイドが尋ねる。

「え、ええ…まあ…」

しどろもどろになってアリサが答える。

「……………うん、おいしいよ、アリサ」

一口食べたハイドは微笑みながらアリサのサンドイッチの味を保証

した。アリサは頬を赤く染めて俯く。その表情からは、安堵と照れからくる笑みがこぼれていた。

「あ、ハイドさん！これも食べてみて下さい。私の新作です！」

そう言って小皿に載ったプリンらしきものを差し出したのはカノンだ。

「パンプキンペーストをベースにしたカスタードプリンです！名付けて『ボルケーノプリン』！」

「フフ…素敵なネーミングね…」

「カノンのネーミングってやたらと爆発系なんだよな…」

横で聞いてたジーナとタツミが咳く。

「パンプキンということは、カボチャのプリンか？」

ブレندانがカノンに尋ねる。

「カボチャの裏ごし中に思いついたんですよ！ほら、ちょっと赤みがかってるでしょ？」

「え〜と…俺が食べていいのかな…？」

ハイドがおずおずとカノンに聞いてみる。

「はい！もちろんです！そのために作ってきたんですから！」

カノンが笑顔で答えたのを見て…。

「…じゃあ、いただきます」

ハイドはスプーンをプリンに差し込み、口に運んだ。

「……………!!」

「どうですか？」

「おいしい…これ、ホントにおいしいよー!」

「よかったあ〜!あ、皆さんも食べて下さい!」

ハイドからの絶賛を受け、カノンは皆にプリンを配る。

「カラメルの甘さが程よくていいわね」

サクヤが満面の笑みで言った。どうやらお気に召したようだ。

「配給品のジャイアントビートから糖分を分離してみたら意外と上手くいったんですよ」

「ジャイアントビートって、固くて調理しづらいアレ?味もクセがあるって話だったと思うけど…」

サクヤとカノンが調理法について話し合う。

「そうなんですよ。でもおかげで周りの方からいっぱいもらえました!あれ、結構日持ちするんで、便利なんですよ?」

「へえ…知らなかったわ…。それにしても、よくこの食感が出せたわね」

そこにジーナも加わる。ちなみに彼女も一人暮らしの生活が長いため、一通りの家事はできるそうだ。

「今の食感にするまでに苦労したんですよ…最初アガーだけ使ってたんですけど上手くいかなくて……………」

楽しい時間はあっという間に過ぎ、料理もほとんどが片付いてしまった。

そろそろ切り上げ時だな、とタツミは立ち上がり、両手を叩いて皆を注目させる。

「ようし！んじゃあ主役に締め挨拶でもしてもらおうかな？」

皆の視線がハイドに集まる。やがてハイドは立ち上がり、口を開いた。

「皆さん…本日は、僕のためにこのような席を開いてくれて、ありがとうございます。…ソーマも、来てくれてありがとうございます…」

今度はソーマに視線が集まる。どこか居心地が悪そうだ。

「……………別に来たくて来たワケじゃねえ…」

言っただけではなかったが、食事会が始まったときからソーマも、テーブルの一番端の席からさらに一つ分席を開けた場所で食事していた。

「まあ、多分どこかの誰かさんが無理矢理引つ張って来たんだと思うけど」

ニヤニヤしていたコウタを横目でちらりと見てハイドが言った。

「まあ、それはともかく…隊長に就任した時も言いましたが、僕はまだ力不足です…皆さんの力を貸して下さい！今日は本当にありがとうございました！」

大きな拍手で、ハイドのリーダー就任パーティーが締め括られた。

「え〜〜〜〜！？ハイドのリーダー就任パーティー！？」

現在エントランスに二人きりのリツカとヒバリ。

ヒバリに聞かされた情報にリツカが腹を立て、羨ましがった。

「くう〜…みんなで私たちをのけ者にして〜！！…はあ、いいなあ
〜…」

リツカは肩をがっくりと落とす。ヒバリもかなり残念そうな表情になっっていた。

「そうですね…でも、仕方ないですよ…私たちは仕事があるんですから…」

「そりゃあそうだけとさ〜…」

リツカは今のご時世、滅多に味わえない楽しい時間を逃したことにシヨックを受けていた。

「まあ、私たちも一応メールで『おめでとう』とは送りましたし…そのことでお礼も言われてますから…」

「う〜…」

うだるリツカの後方でエレベーターの扉が開き、中からハイドが出てきた。

「あ…リツカ」

リツカがものすごい勢いで首を捻り、ハイドの姿を確認すると…半泣きでした。

「お楽しみだったみたいだね、ハイド…」

「?…ああ、就任パーティーのこと?」

ハイドが首を傾げて尋ねる。

「そうだよっ！よくも私をのけ者にしてくれたね！」

「いや、そんなつもりはないよ…ちゃんと二人にも持ってきたし…」

ハイドが手に持っていた袋を開けると、中から例のボルケーノプリンが二つ出てきた。

「はい」

それを一つずつ渡すハイド。

「俺が主役だからって、カノンから三つも貰ったんだ…でも俺は一つ食べたから、あとは二人で食べていいよ」

「…え、でも…」

ヒバリが本当にに食べていいのか？と尋ねるが…。

「気にしないで…ヒバリにもリツカにも世話になってるんだし…じやあね」

そう言ってハイドはその場を立ち去った。

二人はカウンターのの中にあるスプーンで、プリンを食べはじめた。

「…おいしいね…」

「…はい…」

二人はハイドの優しさに心の中で礼を言った。

二人が食べたプリンは、普通に貰うよりも格別に美味しかったそう
な。

三十四喰：お祝い（後書き）

あまり豪華な料理は時代的に用意出来なさそうだったので（肉とか肉とか肉とか：）、量産しやすい卵の料理とか、材料の幅が広いサンドイッチとかにしました。

レーションじゃ味気なさ過ぎるので、なんとか頭を捻って出した感じです。

料理全然わからないので、正直少々苦痛でした（笑）

三十五喰：死神の悪夢（前書き）

ソーマの悪夢の話です。可哀相です。

三十五喰：死神の悪夢

ソーマは海の中にいるような感覚を覚えた。身体が水の中で少しずつ浮かんで行く感覚を…。

目を閉じて、身体を丸めて動かない様子はまるで胎児のようだ。

目を開こうとするが、なぜだかうまくいかない…。

そして耳に、かつて聞いた声が流れ出す。

『気分はどうだ？』

(これは…あいつの…)

『うん…体調もいいし…早く生まれてきてね…サカキは？』

(この声は…お袋…?)

『安産のお守りが贈られてきたが…音信不通のままだ…』

『そう…私たちが計画を強行したのを、まだ怒って…』

『今は、考えるな…体に障るぞ…』

『そのお守りは、あなたが持っていて頂戴…明日はよろしくね…』

『あなたは…この世界に福音をもたらすの…アラガミから皆を…守

つてあげて…』

(…勝手に決めるな…)

『お前は全てのアラガミを滅ぼすために生まれてきた…いいな、あれらを殲滅しろ!』

(…勝手に決めるな…)

『基礎代謝が、普通の子供のそれと比べて異様なまでに高いですね』

『あの子…8針縫うような怪我をしても、次の日には傷が修復するの…人間じゃないわ…』

『しっ…聴力も高いから、余計なこと言ったらドクターに怒られるわよ?』

(…医務室のクソツタレども…)

『あいつと同じ分隊になったやつで、今生き残ってるやつっているの?』

(…黙れ…)

『あの人とは、できるだけ組みたくないな』

(…黙れ…)

『最近だとエリックにリンドウさんだろ…？洒落になってねえよ…』

(…黙れ…)

浮上していくソーマの身体は光に包まれ…。

『ねえねえ、ドクターから聞いたんだけど、あなたのお母さん、あなたのせいで…』

「クソっ…!」

「わっ…!!ちょ、ちょっと…驚かさないでくださいよ!」

ソーマの顔を覗き込んでいたアリサはびっくりした。

(…夢か…)

ハイドたち第一部隊は、任務でここ、鎮魂の寺院に来ていた。

作戦が開始されるまでの間、ソーマは待機地点で眠っていたのだ。

夢だと分かるとソーマの苛立ちは段々薄れていく。

「うなされてたみたいだけど、大丈夫?」

様子がおかしかったので、コウタがソーマに声をかける。

「…ああ…」

「おっ!今日はやけに素直だな〜!」

意外にソーマが普通に受け答えしたものだからコウタが面白がって茶化す。

「うるさい！黙れ…」

ソーマの反応を見てコウタが笑顔になる。

「…いつも通りだね！大丈夫でしょ！」

座って壁に背を預けていたソーマは立ち上がると、神機を持ち直して位置につく。

「本当に大丈夫か？ソーマ」

ハイドが改めてソーマに尋ねた。

「…大丈夫だと言ってるだろ…」

静かな怒気を漂わせてソーマが言ったのを見て、ハイドは表情を切り替えた。

「そうか…よし！作戦開始時刻だ！ミッションスタート！索敵開始！」

スタートと同時にハイドたちは散り散りになる。

今日はコンゴウ墮天種の討伐任務だ。極低温に適応したコンゴウ墮天種は、体内で氷堺を精製して発射することができ、通常のコンゴウに比べ獰猛だ。

しかしコンゴウの弱点はきちんと残しているので、戦闘においてやることはあまり変わらない。

ソーマは雪を踏み締めながら夢のことを思い出していた。

(……………クソっ！頭に響きやがる…！)

ソーマは服の中からイヤホンを取り出すと耳につけて音楽を流しはじめる。

戦場に立つ人間にとって聴覚を殺すことは自殺行為に等しいが、ソーマはほかのゴッドイーターと違い、五感が鋭敏すぎることから来る苛立ちや鬱憤を紛らわせるためにワザとやっている。

少し進むと、こちらに背を向けてあぐらをかき、仏像をかじっているコンゴウを見つけた。

「……………」

ハイドはブリーフィング時に、「目標を発見次第信号弾を使うように」と言っていたが、そんな命令をソーマが守るはずもなく、コンゴウに音を立てずに近づいて神機を構える。

ソーマの巨大な剣が振り下ろされ、ドン！！という鈍い音が辺りに響く。

背中からチャージクラッシュをモロに食らったコンゴウは、地面に叩きつけられダウンした。

ソーマはもう一度神機を構えて、今度はコンゴウを捕喰した。

バーストしたソーマは重い一撃を次々と入れていき、コンゴウは痛みに悶え逃げ出した。

それを追おうとしたとき、コンゴウの顔に正面からバレットが飛んできて命中した。

怯んだコンゴウは尻餅をつく。

ソーマが見ると、そこには銃を構えたハイドが立っていた。

「近い場所で索敵しといてよかったよ」

どうやらソーマが信号弾を使わないことを予想して、あえて近い場所です敵していたようだ。

「チっ…」

ソーマは舌打ちすると、再びコンゴウに斬りかかる。

ハイドも神機を剣に変型させてコンゴウに向かって行く…。

「あれっ！？もう終わってるし！」

「いつの間にか…」

コウタとアリサが合流したときには、ハイドの神機がコンゴウを捕喰して素材を回収していた。

「やっぱり刀身を強化したのが大きいかな？」

この日、ハイドがいつも装備しているショートブレード刀身「ナイフ」は、超高熱を発する刃を持つ赤いナイフ、「発熱ナイフ」に強化されていた。

「…よし、ミッション完了！帰投する」

素材回収を終えたハイドの合図で、第一部隊は引き上げる。

「にしてもハイド…いつの間に神機強化したんだよ？」

へりに向かう途中ハイドにコウタが尋ねた。

「つい昨日だよ？」

ハイドは発熱ナイフを見ながら答えた。

「切れ味も貫通性能も上がったし、火属性がついたおかげで大分早く討伐出来たよ」

最後に、ソーマが削ってくれたこともあるけど…と付け加え、ハイドたちはへりに乗りこんだ。

「でも、火属性が効かない相手が討伐対象だったらどうするんだ？」

フェンリルに向かう途中、コウタはまだ神機強化について話す。

「ああ、それは心配いらなかな」

「なんで？」

「実は強化と同時に、今まで使ってた『ナイフ』も新しく作ってもらったんだ」

「え？どうしてですか？」

アリサはハイドがナイフをまた作ったことに疑問を抱いた。

「実はリツカから、『ナイフの強化派生が増える』って話を聞いたんだ」

「ナイフの強化派生…ですか？」

アリサが気になって聞き返した。

「ああ、最近は新型神機専用パーツの制作技術が上がってきたらしくてね。まだ実験段階だけど、いずれナイフに雷属性と氷属性が付くんだってさ」

「へえ…じゃあハイドはそのうち三属性のショートを使うようになるんだ？」

コウタが興味深そうに尋ねる。

「まあ、そうだね。どんなアラガミが相手でもダメージを与えられ

るようにならないと……」

などと話をしている内にヘリはフェンリルに到着した。

「あ、ハイドさん！お疲れ様です」

ヒバリがカウンターにやってきたハイドに労いの言葉をかける。

「ミッション完遂しました。確認お願いします」

「……………はい、確認が取れましたのでこちらの書類に必要事項を記入して提出してください」

「ありがとうございます」

もはや決まり文句と化した一連の会話を終え、ハイドは書類を受け取って休憩スペースへ向かった。

休憩スペースにはアリサとコウタがソファに座ってジュースを飲んでいた。

「あ、ハイド！」

やって来たハイドにコウタが手を振って声をかけた。

ハイドは二人が座っているソファに腰掛けて、早速報告書を片付けはじめた。

「にしてもさ〜…やっぱりソーマって気難しいヤツだよな〜…」

いきなりソーマの話題を取り出したコウタはふう、とため息をついた。

「おっ！なんだなんだ？ソーマの話か？」

そこに突然割って入ってきたのはシュンだ。

「まあソーマは『死神』って呼ばれてるくらい不吉なヤツだからな〜」

こちらから聞いてもいない情報を口にする。

「…死…神？」

アリサが怪訝な顔で聞き返す。

「おっ、何故『死神』なんて呼ばれてるかって〜とな？まず、あいつの側にはやたらとアラガミが寄ってくんだよ」

「マジで!？」

コウタが驚きの声を上げる。

「おっ、やっぱり死神ってウワサは本物だぜ…」

シュンが声を低くして話すが、突然ハイドの静かな声が沈んだ空気を断ち切る。

「アラガミを自分に引き付けるように動いて、皆の負担を減らしてくれてるだけじゃないの？」

「えっ……………？」

「……………」

「……………」

ハイドが報告書に書き込むカリカリという音以外、何も音はしなかった。

人の悪口はついつい聞いてしまうのか、周りで盗み聞きしていた人間もいたのだが…彼ら全員を含めてコウタ、アリサ、シユンはポカんとハイドを見つめていた。

今までそんな風に考えたことがなかったのだろうか、人のウワサに流れソーマのことをロクに見ていなかったことが窺える。

「じゃ…じゃあソーマのチャージクラッシュユが、バーストもしてないのに普通のやつより早く出せるのはなんでだよ！」

シユンが反論する。

「リックに聞いたけど、ソーマの神機にはチャージクラッシュユの溜め時間を短縮する、特殊な機構が組み込まれてるんだってさ」

報告書から目を離さずに淡々と喋るハイド。

「……………」

再び何も言えなくなるシユン。

「なら！リンドウさんが死んだのは…」

シユンの言葉にアリサがびくつと反応した。

「ソーマのせいじゃない…もちろんアリサのせいでもないよ？」

語尾を食うスピードで否定し、アリサも庇う。

「俺は…きつと今でも、リンドウさんはどこかで生きてると信じてる」

ハイドの言葉にシユンが段々いらついで声を荒げる。

「じゃあエリックが死んだのは…!!」

「俺のせいだ…」

静寂が訪れた。コウタは事情を知っている。アリサにとっては初耳で、表情が驚きに彩られる。シユンはまた何も言えなかった。

「手を伸ばせば助けられた…でも助けられなかった。言い訳はしないよ、何言っても今更だしね…だけど、『死神』だからって理由でエリックが死んだことや、リンドウさんがいなくなったことをソーマのせいにするのなら…俺はそいつを許さない」

微笑んだままそう言ったハイドの瞳には、強い意志が宿っていた。エリックを救えなかった後悔、大切な仲間であるソーマを助けたい

という思い…様々な感情が渦巻いた瞳だった。

「なっ…なんだよ…」

シユンはそそくさと立ち上がって行ってしまった。

それを受けて周りで聞いてた人間も我に返り、慌てて自分たちの会話に戻る。

「ハイドさん…」

「ハイド…」

「……………よし、出来た」

『えっ？』

ハイドは報告書を持って立ち上がる。

「これ提出してくるよ」

ハイドはそう言ってカウンターのヒバリの元へ向かった。

「……………」

ハイドの言葉の数々を、ソーマは柱の影にもたれて聞いていた。

(チっ…)

ソーマは姿勢を直すと、自室へと歩いていった。

三十五喰：死神の悪夢（後書き）

ソーマの悪口に対して見方を変えろという話は前々からやりたいと思っていました。

うまくフォローできたかはわかりませんが、自分の中で少しスッキリした気分です。

三十六喰：サカキの依頼（前書き）

更新ペースが少々遅れてきております。なんとかしなくては…。

三十六喰：サカキの依頼

「いや〜ゴメンゴメン。君が拾ってくれたのか、助かったよ」

サカキはすまなそにしてハイドに言った。

ハイドは例のディスクをサカキの元へ届けに来ていたのだ。

「もちろん中身は見ないでおいてくれたよね？…何の事は無い、若き日の思い出さ」

ギクリとしたハイドなど気にもとめずに話し続けるサカキ。

「そうだ、ちょうどいい！実は…君にお願いがあつてね」

ディスクを机にしまったサカキはハイドに向き直る。

「とあるアラガミのコアを入手してきて欲しい。出張中の支部長に頼まれてる仕事なんだ」

「はあ…」

サカキから直接任務を依頼されるなんて珍しいなと考えにふけるハイド。

「支部長や教官にはもちろん、他の皆にも口外無用だよ？」

サカキはいつの間にかハイドの目の前に来ていて、ズイッと顔を近づける。

「は…はい…」

顔をひくつかせながらハイドは答えた。

「実はソーマにだけは以前から同じようなお願いをしてるんだ。彼と二人で何とかしてほしい」

「わ、わかりました」

ハイドの返事を聞いたサカキは姿勢を直す。

「…そういえば、君はリーダーになったんだっけね？おめでとう」

リーダーになってから一週間くらい経ってるんですが…と心の中で呟くハイド。

「君は、『マーナガラム計画』って、聞いたことあるかな？」

「あ、ええ…」

「お世辞にもエレガントとは言い難い実験だった…。大切な友人たちも失っちゃったしね…」

サカキは当時を思い出しているのか、遠い目で話す。

「その負の遺産を、残されたソーマは一人で背負っているのかもしれないんだ…私自身も…彼からは恨まれても仕方のないことをしてきた一人さ…」

サカキはまたズイッと顔をハイドに近づける。

「よかつたら、彼と仲良くしてやってくれ…頼むよ」

サカキの言葉にハイドが頷いた。

用事を済ませたハイドはエントランスに戻ると、ヒバリに呼ばれた。

「あ、ハイドさん！サカキ博士が依頼されたミッションが届いていますよ？」

「うん、ソーマと俺の二人で組んどいて」

「了解しました、ではお気をつけて！」

ハイドはヒバリに軽く手を振ったあと、出撃ゲートへと歩いていった。

それから約40分後、ハイドとソーマは贖罪の街にやってきた。

「…面倒な仕事引き受けやがって…」

「仕方ないだろ？サカキ博士も上司なんだし…」

この任務の討伐対象は、ボルグ・カムランとヴァジュラだ。この二体のコアを持ち帰るのがサカキからの依頼だ。

「俺はボルグ・カムランを叩く、ソーマはヴァジュラを頼むよ」

「ちっ…さっさと終わらせるぞ！」

ソーマは街に降り立つと、観察班からの報告でヴァジュラがいる西側のエリアへ向かった。

ハイドはそれと反対側…ボルグ・カムランがいるはずの東側のエリアへ向かった。

ちなみにボルグ・カムランは、金属製の甲殻で被われたサソリ型のアラガミで、一見すると騎士のような姿をしている。両手には、二つ合わせると顔のような模様ができる盾を持ち、尻尾による攻撃はとてつもない威力を誇る。

クアドリガと同じく希少なアラガミなので、ハイドも一度しか戦ったことがない。

ハイドはしばらく探索していると、不規則なようで規則的な足音が聞こえてきた。

（いた…）

ボルグ・カムランが廃墟の中へ侵入していくのを見たハイドは気づかれないようにそっと後を追った。

物陰に隠れて様子を窺うと、ボルグ・カムランは廃材を捕喰していた。

回り込んで近づき、神機を構え、尻尾の甲殻の間にねじ込むように突き出して捕喰した。

突然の攻撃に尻尾を振り回して、無理矢理距離を取ったボルグ・カムランは立ち上がり、ハイドを捕捉する。

すると盾を合わせ、尻尾の針を突き出して突進してきた。

ハイドはスライドしてそれをかわすと、一旦建物の外に出た。

ボルグ・カムランを外に誘導すると、神機を構えて向かって行く。

しかし、振り下ろされた神機は盾によりガードされ、尻尾を振りかぶる。

「くっ！」

繰り出された尻尾による回転攻撃をジャンプしてかわす。

（このままじゃせつかくバーストしたのに切れちゃうな…）

ハイドはスタングレネードを使った。そして、素早くボルグ・カムランの懐に飛び込み、再び捕喰した。バキバキという音をたて、甲殻を神機がむしり取る。

「いくぞ！」

ハイドは防御力の下がった脚に剣で猛攻撃をしかけた。

ひたすら同じ部位を斬られ続けたボルグ・カムランは体勢を崩して倒れ込む。

その後ハイドは盾を集中的に攻撃する。弾かれてもやめずにひたすら痛め付けた結果、ついに盾を破壊する。

ボルグ・カムランが体勢を立て直すと、いい加減頭にきたのかオラクル細胞が活性化する。

（あと10秒：バーストの残り時間も少ない…決めるか）

跳び上がって上から降ってくるボルグ・カムランをやり過ごしたハイドは、足に力を込めて一気に詰め寄る。

ハイドは神機を振りかぶるが、ボルグ・カムランは破壊された盾を合わせてガードしようとする。

しかし…。

「はあああああ!!」

ズガンっ!!

盾を貫通したナイフはそのままボルグ・カムランの頭に突き刺さっていた。

ズポッと引き抜くと、ボルグ・カムランが断末魔の悲鳴を上げる。

「……………終わったか」

突然後ろから声が出て、振り向くとソーマが神機を肩に担いでたっていた。

「ああ…そっちは？」

ハイドがソーマに聞き返す。

「…とつくに片付いた…」

「そうか」

ハイドはボルグ・カムランを捕喰し終わると、携帯を取り出す。

「ミッション完了、帰投する！」

翌日、ハイドはけたたましい音を鳴らす目覚まし時計に叩き起された。

（目覚ましなんてあったかこの部屋…？）

眼を擦りながら、ハイドはムクっと起き上がる。

『7時だよ！ラボに集合！！』

どう聞いてもサカキのものとしか思えない声が部屋に響き、ハイドはずっこける。

「…こんなもの絶対この部屋に置いてなかったよな…」

ハイドは仕方なくベッドから降りると、すぐさま着替えてラボラトリ区画へ向かう。

「やあ、毎度毎度呼び出してすまない」

変な目覚ましに起こされた後、サカキは部屋にやって来たハイドを迎え入れた。

「今日はちょっと、特別なお願いがあつてね…」

「はあ…また…ですか…？」

「まあ、内容はいつも通り、アラガミの討伐なんだけど…この任務にはサクヤくん、アリサくん…それに、コウタくんを連れていってもらう」

その言葉にハイドは怪訝な顔をする。

「みんなを連れていくんですか？」

「ああ、他のメンバーを駆り出すことについては心配いらないよ。ちよっぴり細工して、通常任務に偽装してあるんだ。用件は以上、結果を楽しみにしてるよ」

「りよ、了解しました」

(『偽装』って…大丈夫なのか…?)

不信に思いつつハイドは部屋を出た。

「さてと、こちらもお出迎えの準備をしておかなくちゃね…」

三十六喰：サカキの依頼（後書き）

ようやくここまでできました。いよいよ次は『あの子』が登場する話です。

三十七噺・アラガミの少女（前書き）

シオファンの皆様大変長らくお待たせいたしました。シオちゃん登場です。

いや〜長かった（笑）

三十七喰：アラガミの少女

「なんか、博士が俺達に任務を依頼するのって珍しいよな…」

コウタがへりから降りつつボソツと呟いた。

「仕方ないと思うよ？今は支部長に留守を任されてるんだから…」

ハイドはコウタに続いてへりから降りながら言う。

「それにしても、最近この辺りの討伐任務が多い気がするのよね」

…

サクヤがふう、と溜め息をつきながら言う。

「アラガミがこの一帯に集まってきているんでしょうか？」

アリスが風になびく髪を押さえながら答える。

ハイドたち第一部隊は、サカキの依頼で鎮魂の廃寺に来ていた。討伐目標はシユウ一体：正直今の第一部隊には相手にもならないが、依頼されてしまったのは仕方がないというものだ。

「ぶっちゃけシユウなんて楽勝なんだよな」

コウタが頭の後ろで手を組んで文句を言った。

「あ、じゃあ、あとは任せるから行ってらっしゃいコウタ」

ニツコリ笑って手を振るサクヤ。

「えっ？」

「そうですね！私たちはここで待ってますからね、コウタ」

それにアリサも同調する。

「ちよっ……」

「はい、携帯電話。ミッション完了したら報告ヨロシク！」

携帯電話を差し出すハイド。

「わ〜！！冗談！俺一人じゃ心許ないです！！」

コウタが冷たい仕打ちに堪えられなくなり、若干涙声で叫ぶ。

「ふふっ……、本当コウタをからかうのは面白いわね！」

サクヤの少々サドスティックな発言にコウタがガツクリと肩を落とす。

「じゃあ、みんな！肩の力も抜けたことだし、そろそろ行こう！」

ハイドの合図にアリサとサクヤは頷くが、コウタは口を3にして不機嫌そうな表情だった。

数分後、地に倒れ伏したシユウとそれを囲む第一部隊の姿があった。

「じゃあ、見張りお願いします」

ハイドがサクヤ達に頼むと、シユウに向き直り神機を構える。そのまま捕喰しようとした、その時…。

「それ、ちょっと待った！」

聞き慣れた声が聞こえ、振り返る。すると近くにある階段から、サカキとソーマが歩いてきたのだ。

サカキがいきなり戦場に出てきたことに第一部隊は驚きの声を上げる。

「えっ!?!」

「博士!なんでこんなとこに!?!」

サクヤとコウタはサカキに詰め寄るが…。

「説明はあとだ。とにかく、そのアラガミはそのままにして、ちょっとこつちに来てくれるかな?」

サカキが背を向けて歩きだしたので、仕方なく後ろについていく。

「ここで待機しよう」

サカキが止まったのは、先程倒したシユウが見えて、なおかつこちらが隠れることができる階段の上段あたりの位置だった。

「一体何を？」

ハイドが尋ねるとサカキは…。

「ちょっと待ってれば、いずれわかる」

などと言われてしまったので、待機するしかなかった。

それから約20分…サカキが常に持ち歩いている懐中時計を取り出し、時間を確認した。そして時計を服の中に戻した時…。

「！来たよー！」

静かな声でテンションを上げるサカキ。

ハイドたちはサカキの声でシユウを見ると、人間が一人…ペタペタとシユウに向かって歩いていくのが見えた。

そのままシユウの背に登り…なんと肉を食いちぎり始めた。それを咀嚼して飲み込んでいく。

ハイドたちが今度はサカキを見ると…。

「！」

GOサインが出たので、全員一斉に飛び出し、そのシユウと人間を取り囲んだ。

物音に気づいて、人間はゆっくりと振り返る…いや、人間にしては肌が白過ぎるうえ、アラガミを食していた…とても人間とは言い難い。しかし、確かにその身体は人間に他ならない形を形成していたでは、この生命は一体何なのか？

一見すると女の子のように見えるそれとしばし対峙していると、口を開いた。

「オナカ…スイ…タ…ヨ？」

「ひいつ！」

コウタが情けない声を上げて神機を向ける。

そしてサカキが出てきた。

「いやあ、ご苦労様！」

物凄いテンションの高さだ。こんなにウキウキしているサカキをハイドは初めて見た。

「やっと姿を現してくれたね〜！ソーマもここまで連れて来てくれてありがとう！君のおかげで、ここに居合わせることができたよ！」

「礼などいい…どういふことが説明してもらおうか…」

サカキの言葉を聞いたソーマは、苛立たしげに聞き返す。

「いや、『彼女』がなかなか姿を見せてくれないから、暫くこの辺
一帯の『餌』を根絶やしにしてみたのさ！どんな偏食家でも、空腹
には耐えられないだろう？」

サカキの言い分を聞いたソーマは口が半開きになっていたが、すぐ
に厳しい表情に戻した。

「チっ…悪知恵だけは一流だな…」

ハイドはようやく納得した。この辺の任務が増えた理由を。

(またこの人の企みか…なんかいいように使われてるな俺達…)

「ええ」と博士…こ、この子は…??？」

コウタが、急に現れたたくさん人間をキョロキョロと見回す女の
子に視線を向ける。

「そうだね、立ち話もなんだし…私のラボで話すとしてどうか」

そう言ったサカキは女の子の方へ歩いていく。

「ずっとお預けにされていて済まなかった。君も…一緒に来てくれる
ね？」

「イタダキマス！」

サカキの言葉を聞いた女の子は、頭をペコッと下げて文脈がおかし
い返事を返す。

「あ？」

それにソーマが声を漏らす。

「イタダキ…マシタ？」

女の子は身体をゆっくりと左右に振って言い直した。

『えええええええー！！？』

サカキの部屋に大絶叫が響き渡る。声を張り上げたのはソーマ以外の第一部隊で、みんなかなりのオーバリアクションで、驚きの感情を表現している。

あれから女の子を『サカキ特製段ボール郵送用』に詰め込み、へりに載せて持ち帰った後、サカキの研究室に運んで封を切ったらいきなり衝撃発言を受けたのだ。

「あの…今なんて…！？」

サクヤが驚きのポーズを変えずにサカキに聞き返し、サカキは表情を変えずに答えた。

「ふむ、何度でも言おう。これは『アラガミ』だよ」

「ちよっ！まっ！あぶっ…！」

「えっ…！？あっ…！」

目の前の女の子がいきなり「アラガミだ」と言われたら慌てても仕方ない。

コウタとアリサは完全にテンパっていた。

「まあ、落ち着きなよ…これは君達を捕喰したりはしない」

サカキが溜め息をついてアリサ達に言うと、構えを解いてようやく落ち着いた。

「知っての通り全てのアラガミはね、『偏食』という特性を有しているんだ」

「アラガミが固体独自に持っている捕喰の傾向…私たちの神機にも、利用されている性質ですね…」

「その通り！まあ、君達神機使いにとっては常識だろうね」

アリサとサカキの会話に、コウタがソーマに聞いてみる。

「……知ってた？」

「当たり前だ…」

一蹴された。

「このアラガミの偏食は、より高次のアラガミに向けられているよ
うだね…つまり、我々はすでに食物の範疇に入っていないんだよ」

サカキの説明は続く。

「誤解されがちだが、アラガミは他の生物の特徴を持って誕生する
のではない…あれは捕喰を通して、凄まじいスピードで進化してい
るようなものなのだ。結果として、ごく短い期間に、多種多様な進
化の可能性が凝縮される。それがアラガミという存在だ」

「つまりこの子は…」

サクヤはこの女の子の進化について予測がたった。

「うん、これは我々と同じ『とりあえずの進化の袋小路』に迷い込
んだもの…ヒトに近い進化を辿ったアラガミだよ」

サカキの言葉にソーマが反応する。

「人間に近い…アラガミだと…？」

「そう、先程少し調べてみたのだが…頭部神経節に相当する部分が、
まるで人間の脳のように機能しているみたいだね。学習能力もすこ
ぶる高いと見える…実に興味深いね」

「先生！」

いつも講義中寝ているのに、珍しく挙手をしたコウタ。

「はい、コウタくん！」

機嫌を良くしたサカキは「先生」みたいに振る舞う。

「大体のことはわかったというか…まあ、あんまよくわからなかったんですけど…コイツのゴハン、とかイタダキマスーとかって、何なんですかね？」

「ゴハン！」

女の子が元気良く言った。そして身構えるコウタ。

「コイツが言うとしゃレにならないんですけど…」

そしてサカキは口を開く。

「言った通り、アラガミの『偏食』傾向の基本として、自らの形質と似たようなものは食べないんだ。ただ…そうは言っても、さっきみたいに本当にお腹がすいたときは…不味かるうとなんでもガブリっ…だろっけどね」

サカキの脅しにソーマ以外がまた身構える。

「まあ、それは例外さ…。アラガミってのは知っての通り、彼らの俗称だけど、実際にいくつもの個体が我々人間がイメージする『神ケ』の意匠を取り込んだ例が各地で報告されているんだ」

サカキは再び説明を始める。

「一体彼らが何を考えて、そんな生態を取っているのか…どんな過程で『神』をかたるに至ったのか…実に興味深いじゃないか」

(確かに…これは、ちょっと面白いな…)

アラガミの少女を見てハイドは思う。

「そんな中、完全に『人』の形をしたその子は、さらに貴重な一つのケースなのさ…おっと、話が脇に逸れちゃったね、勉強会はこれくらいにしよう」

サカキが話を切り上げた。もうこれで終わりかと誰もが思ったその時。

「最後に…この件は、私と君たち第一部隊だけの秘密にしておいてほしい…いいね？」

サカキの釘刺しにサクヤが聞き返す。

「ですが…教官と支部長には報告しなければ…」

するとサカキは神妙な面持ちでサクヤの方を向き、声を冷静なものに変える。

「サクヤくん…君は天下に名だたる人類の守護者ゴッドイーターが、その前線拠点であるアナグラに秘密裏にアラガミを連れ込んだと、そう報告するつもりなんだね？」

「それは…しかし、一体何のために？」

「言っただろう？これは貴重なケースのサンプルなんだ。あくまで観察者としての個人の調査研究対象さ。大丈夫、この部屋は他の区画とは通信インフラや、セキュリティ関係も独立させてあるんだ」
そして、サカキはサクヤにしか聞こえない声で（ソーマと一番近くにいたハイドには聞こえたが）言った。

「君だって…今やってる個人的な活動にも、余計なツツコミを入れられたくはないだろう？」

「！」

サクヤの表情が変わった。本日何度目かわからない驚きの表情だ。

(…？何かやってるのかサクヤさん…)

するとハイドの思考をサカキが断ち切る。

「そう！我々はすでに共犯なんだ！覚えておいてほしいね」

「イタダキマス！」

少女が急に割って入ると、サカキはそれを流して続ける。

「彼女とも仲良くしてやってくれ。ソーマ、君も…よろしく頼むよ？」

サカキにそう言われたソーマは、いきなり声を荒げた。

「ふざけるな！…人間のまね事をしていようと…バケモノはバケモノだ…」

やがてソーマは先に研究室を出て行った。

コウタはソーマの背中を目で追ったあと、もう一度少女に目を向ける。

見ると少女はどこか寂しげな表情で、ソーマが出て行った扉を見つめていた。

(…さて、人が神となるか、神が人となるか、競争の始まりだ…)

観察者の立場として、非常に面白い研究対象を見つけたサカキは、やたらと楽しげだった。

三十七噺：アラガミの少女（後書き）

シオはまだ登場したてなのであまり面白いことはやれてませんが、これから増やしていく予定です。

三十八喰：『名前』（前書き）

名前に関するお話です。原作でニヤけた方もいらっしやるのではないのでしょうか？

三十八喰：『名前』

アナグラは今日も、ゴッドイーターとその親族、従業員で賑わっていた。…しかし、その中に第一部隊の姿が見当たらない。

それもそのはず。ハイドたちはミッション以外の大半の時間を、先日連れて来たアラガミの少女の面倒を見ることに費やしていたのだ。なぜそこまでするのかというと、一言で言うならば『興味深い』から。

アラガミの少女の学習スピードは、同じ年くらいの子供達のそれを遥かに凌駕していた。

以前サカキが言ったように、文字通り『スポンジが水を吸うように』いろんなことを覚えるから面白くて仕方がない。

コウタやアリスは、小さい妹ができたような気分で喜んでいたり、サクヤも楽しそうだった。

サカキに至ってはこの数日間何回『興味深い』と言ったのかわかっただけではない。

そんなある日、ソーマ以外の第一部隊はサカキに呼ばれて研究室に來ていた。

なんの話かというところ…。

「名前…ですか…」

アリサが呟く。サカキに呼び出された用件は、『アラガミの少女に名前をつける』というものだった。

「ああ…いつまでも『この子』扱いじゃ、何かと不便だからね。どうもこの手の名付けは得意じゃなくてね…代わりに素敵な名前を考えて欲しいんだが…どうかな？」

とサカキが言うと…。

「どうかなー」

女の子が繰り返す。

ハイドがチラリとコウタを見ると、何やらニヤけていた。

「フ…俺、ネーミングセンスには自信があるんだよね…」

「嫌な予感しかしないんですけど…」

自信満々に言うコウタと、訝しげな表情のアリサ。

「そつだな…例えば…『ノラミ』とか！」

沈黙する研究室。やがてアリサが口を開き一言。

「……………ドン引きです……………」

「なんだよ！じゃあ他にいいのがあるのかよ！…」

とコウタは不満そうに叫ぶ。

「なっ、なんで私がそんなこと……」

アリサは顔を紅くして背ける。

「へーんだ！自分のセンスを晒すのが恐いんだな」

「そ、そんなわけないでしょ！？え、え」と……」

コウタに言われてどもるアリサ。彼女の頭の中ではいろんな名前が飛び交っていた。

(え、えくとえくと……『白子』！……駄目！同レベル！じゃあ、じゃあ……アラガミの女の子だから……『ガブリ子』！？……これも駄目！！えくと……じゃあ……)

……とんでもない名前が次々浮かぶアリサ。

しかしその思考はアラガミの少女によって止められた。

「『シオ』……」

少女の声にすかさずアリサは便乗した。

「そ、そう！それ！ちょうど同じ名前を考えてたんです」

「うそつけ！……え……でもやっぱり『ノラミ』でしょ！」

「『シオ』……」

コウタがアリサの苦し紛れの言い訳にツッコんで少女に『ノラミ』を推すが、少女は『シオ』の一点張りだった。

「それ、あなたの名前？」

サクヤが尋ねたら、シオと名乗った少女は「そうだよ」と返した。

「どうやら…ここに居ない『誰か』が、先に名付け親になってしまったみたいだね」

「え…それって…」

サカキの言葉を聞き、その意味を理解したコウタはもう一度少女に推してみる。

「なあ…なあ…やっぱ『ノラミ』の方がよくない…？」

「ヤダ」

可愛く一蹴。

「んだよチキショー!!」

コウタの絶望に似た叫びが研究室にこだました。

それを横目で見てたハイドは、屈んでシオに聞いてみた。

「ソーマが名前を付けてくれたの？」

言葉を選び、シオに解るように丁寧に話す。

「そうだよ〜！そーま、『シオ』っていった！」

元気に答えたシオ。彼女の話によると、研究室にソーマと二人きりだった時に、彼がそう呼んでたらしい。

どうやらそれをそのまま気に入ったようだ。

とりあえず名前は決まったので第一部隊は部屋を出た。

「『シオ』かあ…ソーマ、いいネーミングセンスね〜」

「そうですね、俺もいい名前だと思います」

ハイドとサクヤが話しているのをコウタとアリサが後ろで気まずそうに聞いていた。

「コウタとは大違いね」

クスッと笑ったサクヤ。それにコウタが落ち込む。

「……………じゃあちなみにサクヤさんはなんて名前考えてたんスか？」

コウタが尋ねるとサクヤは顎に人差し指を当て…。

「私は雪が積もった場所で会ったから『ユキ』とか？」

「シンプルっスね……」

「シンプルイズベストよ！」

サクヤが片手をグツと握りしめ、自信を持って言う。

「じゃあ、ハイドさんはどんな名前を……？」

サクヤとコウタのやり取りを聞いたアリサは話をハイドに振った。

「ん〜？俺はけっこう気軽に『リリース』とかかな？」

……やはり自分たちの方がセンスが少しズレている……コウタはともかくアリサはそう自覚した。

そういえば……と、コウタはハイドに尋ねた。

「なあ、ハイド。名前で思い出したんだけどさ……『神霧ハイド』って、けっこう変わった名前だよな？」

「あ……それ、私も聞こうと思ってたんです！」

アリサも話に加わる。

「確かに、昔で言う『日本人』でも充分通るし……ハイドって名前だけだと外国でも通りそうね……」

次々浴びせられる言葉にハイドは少し思い詰めた表情で俯く。

言葉が返ってこないハイドを、「何か悪いことを言ってしまったか」という表情でアリサたちが見つめる。

少し間を置いた後…。

「…本当、変わった名前だよねー」

そう言ったハイドは困ったような笑顔になっていた。

「変わった名前ってのはいつの時代でもあれこれ言われるから苦労したよ〜」

ハイドの明るい様子を見てアリサたちは胸を撫で下ろす。

この時アリサたちの中では、ハイドが「名前のことで過去にからかいの的になったことを、笑って受け流したもの」と受け取っていた。

「なんで親がこんな名前にしたのか…理由がわからないよ」

いつもと変わらぬ笑顔で話すハイド。

しかしアリサは何となくだが、ハイドの様子に違和感を覚えた。

(ハイドさん…ちょっと…様子がおかしい?)

「ん?…アリサ、どうかした?」

自分をじっと見つめているアリサに気づいてハイドが尋ねる。

「あつ、いえ、なんでもありません…」

気のせいかと、アリサは考えることをやめた。

「じゃあ俺、そろそろ部屋に戻るね！」

「おう！また明日な、ハイド！」

「おやすみなさい、ハイドさん！」

二人に手を振ったハイドと、同じベテラン区画のサクヤは先に部屋に戻った。

「じゃあハイド、明日もよろしくね！おやすみ！」

サクヤはハイドに微笑んで手を振り、自室の中へ入っていった。

「……………」

ややあつて、ハイドは自分の部屋に入り、ロックをかけるとベッドに腰掛けた。そして…。

ガンッ！！

自分の右頬を右手で思い切り殴った。ゴッドイーターの力で殴ると、たとえ軽いパンチでも頭がクラクラする。

少々フラつく足取りで鏡の前に立つと、右頬が膨らみ血が滲んだ自分の顔が映った。

滑稽だが…今の俺には相応しい顔だ…いいか？間違っても親のせいにするな…そもそも、親から貰った大切な『名前』を捨てたのは…俺だろうが…。

ハイドは自分の愚行を戒める。二度と同じことを考えないように、二度と同じことを言わないように…。

明日には、この頬の腫れも血も痛みも完全に消えていることだろう…しかし、目に見えない傷はしっかりとハイドの胸に刻まれていた。

その傷が何なのか…アリサたちには知るよしもない。

三十八喰：『名前』（後書き）

実はハイドの名前ネタがあります。でも今はまだ書きません。

あと、シオの話は胸打つものが多いので個人的に好きです。

あ、ちなみに「シオ（Chiot）」ってフランス語で「子犬」って意味らしいですね。

まさに子犬のようなアラガミの女の子ですが、制作者が人とアラガミの共生を願ってつけたのでしょうか？（詳しくはペイラーサカキのなぜなに講座3を参照）

かなり粹なことをしますね（笑）

三十九喰：孤独なデート（前書き）

作者がかなりほのぼのした部分から始まります。

三十九喰：孤独なデート

ハイドとアリサ、そしてコウタは、今日もサカキの研究室を訪れていた。

その理由はやはり、シオの成長具合が気になる…といったところだ。部屋に入ると、床にお尻からぺたっと座っているシオが挨拶した。

「おっす！」

「オッス！」

シオとコウタの二人は手を挙げて挨拶するが、アリサが早速コウタにツッコむ。

「何その下品な挨拶…そんなの覚えさせないで下さい」

ピシヤリと言われたコウタは文句をたれる。

「えー、いいじゃんよー」

「じゃんよー」

シオもコウタに続くからアリサが優しく冷たさを孕んだ言葉で言い聞かせる。

「シオちゃん、駄目だよ？バカがうつつちやうよ？」

「ひでえ…」

コウタがうなだれるのを無視して、アリサはシオの側に屈んで正しい挨拶を教える。

「シオちゃん、『こんにちは』!」

「んー?…こんにちはっ!」

「うん!えらいえらい!」

正しい挨拶が言えたことにアリサが気を良くし、シオの頭を撫でて褒めた。

シオはえへへ、と嬉しそうに顔を綻ばせ、四つん這いでぺたぺたとハイドの足元に来た。そして座りなおし、ハイドを見上げる。

「ありさ、えらいってー!えらいの、いいことだな?どうだろな?」

「うん、いいことだよー」

ハイドも笑顔でシオの頭を撫でる。…少々変わった感触だった。

シオは楽しそうに笑いながら床をころりころりと回っていた。

「大分いろんな言葉、覚えてきましたね」

コウタがサカキの方を向いて話す。

「そうだね。君たちがこうやって、相手をしてくれているのもある

けど…それにしても、中々に飲み込みが早いねこの子は…。知性を
持ちながら、喰うか喰われるかの世界を生き抜いてきたんだ…飢え
ているんだと思うよ？コミュニケーションというやつにね…」

「はあ…シオちゃんって本当に可愛いですよね〜！『妹』ってあ
んな感じなんでしょうか？」

廊下を歩きながらアリサはうっとりとした表情で話す。

「ふふ…アリサ、顔緩みっぱなしだったよね」

ハイドの言う通り、アリサは研究室にいる間は始終楽しんでいた。

シオの天真爛漫な言動に癒されて、ここ最近のアリサの肌はツヤが
出ている。

「え？そう見えましたか？」

…まだ少し、あの空間で味わった空気が抜けていないようだ。

ハイドとコウタはやれやれと溜め息をついて、アリサを引っ張って
いった。

そして、シオがアナグラにやって来てから五日が経過した。

ハイドは毎日研究室に顔を出していたが、この日改めてサカキに呼び出された。

なんだろう？と研究室に行くと、ソーマも来ていた。

（アリスとコウタとサクヤさんは…どうやら呼ばれていないみたいだな…）

ハイドがソファーに座っているサカキの方まで行くと、サカキが口を開いた。

「やあ！頑張っているようだね〜！君のお陰で、シオの知識知能は…ほぼ成人のそれと言って良いほどに成長したよ」

サカキは横に立っているシオを見ながら話す。

「したよ〜！ありがとね、ありがと〜！」

と、ソーマとハイドにそれぞれぺこり、ぺこりと頭を下げる。

「口調は相変わらずだけどね…さて、今日呼んだのは、別に君を驚かせるためではないんだ…」

（いつも驚かせるために呼んでいたのか…？）

そうだとしたらかなり精神的にくるなと思いつつ、サカキの話に耳

を傾ける。

「実に切実な問題…シオの食糧確保だ。今まで君に依頼して集めていたコアを貯蔵しておいたんだけど…つい、先日それも尽きてしまつてね」

（あれだけ集めたコアが！？…まあアラガミだし…仕方がないか）
心の中で落胆するが表情には出さず、用件を聞くハイド。…つくづく切ない。

「君たちには、シオをデートに連れて行ってほしい…ってことなんだ。フルコースのディナーをよろしく頼むよ！」

「たのむよー」

サカキとシオのお願いにソーマがめんどくさそうに口を開く。

「ふざけるな…なんで俺まで…」

「わかりました！任せて下さい」

そんなことをしなきゃならねえんだ、と言おうとする前にハイドが了承してしまった。

「おい！…勝手に受けるな」

「おおっ！『リーダー権限』ってやつだね！これは逆らえないな？ソーマ？」

「バカ野郎が…安請け合いしやがって…」

「?なんか問題あった?」

「チっ…」

ソーマが断る前に素早く了解してよかったと、ホッとするハイド。

「では改めて…よろしく頼んだよ、二人とも」

サカキがそう言つと、シオがお礼を言った。

「ありがとー!…ねえ、はかせ、でーとつてなにー?」

「楽しいことだよー」

「たのしいこと…イタダキマスだな!？」

二人の会話はなんだかほのぼのしていて、これからしんどい思いをするハイドとソーマの肩にのしかかった。

「とりゃあー!…!」

「うおっ!…シオすげえ!…!」

その後コウタを連れて、ハイドとソーマ、シオたちは愚者の空母に

来ていた。

今戦っているのはコンゴウ墮天種二体だが、そのうち一体はシオ一人で圧倒しており、それにコウタが驚きの声を上げた。

シオは「それ、おもしろそうだなー」と、ハイドの神機を真似て手の形を変化させた、『神機らしきもの』を武器に、コンゴウを翻弄している。

ちなみに、ハイドが戦闘中に神機を変型させるのを見て、最初は剣だけ真似ていたのが銃と変型動作まで再現してしまった。

「っ、強い…」

シオはただ単に強いから生き残ったんじゃないか？と思うハイドだった。

「それじゃあ…イタダキマスー!!」

倒れた二体のコンゴウが並び、シオが早速食べようとした。

「あ…そーだ！そーま！いっしょにたべよー!」

ソーマの方を向いて食事に誘う。それにコウタが困ったような口調で答える。。

「…おいおいシオ。俺達人間はアラガミを食ったりしないんだよー？」

「えー？…でも、そーまのあらがみは『たべたい』っていつてるよ？」

「え？」

シオのその言葉に、ソーマの胸の内で、激しい何かが弾けた。

「ふざけるな！！テメエみたいな…バケモノと一緒にするんじゃないねえー！！」

「お、おい…」

ソーマの激しい怒りや深い悲しみが混ざったような動揺にコウタが驚く。

「…いいからもう、俺に…関わるな…」

ソーマは突き放すように言うと、神機を担いで一人で歩いていき、その跡を追うように歩くシオが話しかけた。

「シオ…ずっとひとりだったよ…？」

シオの言葉にソーマの足が止まった。それに合わせてシオも止まる。

「だれもいなかった…だから…うーんと、だから…だから…そーまをみつけて、うれしかった…みんなをみつけて…うれしかった！」

一生懸命言葉を探してソーマに語りかけるシオ。

「うーんと、だから、だから、えーと…」

しかし、彼女の伝えたい言葉を構成するには、彼女自身がまだ幼な過ぎた。

「おい！待てよソーマ！」

再び歩き出したソーマにコウタが声を張り上げるが、無視されてしまった。

「なんなんだよアイツ！」

コウタがじだんだを踏むとハイドが側に来た。

「コウタ、そつとしておこっつ？」

「ハイド…なんか知ってんの？」

「ああ…」

それからハイドは、サカキが落としたディスクを拾い、その中に収められていた過去について話した。

シオは甲板の縁に座って海を眺めている。

「そっか…よくわかんないけど、要するにアイツがゴッドイーターや神機の技術のオリジナル…ってことだよな…それで、自分が生まれたことで母親まで殺しちまったって思ってたのか…」

大まかに理解したコウタはソーマが行ってしまった方を見て呟く。

「そんなもん、ずっと一人で背負って…カツコつけてんじゃねえよ…」

「ソーマの辛さは多分…まだ俺たちには分かち合えない…」

「ハイド…」

夕日を見つめて話すハイドはどこか心配そうな表情だった。

「ソーマが心を開いてくれない限りは、ね…シオ！そろそろ帰るよ…！」

ハイドがシオを呼ぶと、シオはすぐに立ち上がってこちらにやって来たが、なんだか淋しそうだった。

（あゝあ…これからなんて声かけりゃいいんだよ…）

はあ、と溜め息をついたコウタは、自分のことを話してくれないソーマを軽く恨んだ。

三十九喰：孤独なデート（後書き）

やっぱりシオはかわいいですね。ソーマに一生懸命話しかけるとことか…なんかグツときました。

四十喰：みんなおなじ（前書き）

記念すべき四十話です。ただちょっとグダグダ感が…。

四十喰：みんなおなじ

サカキの研究室は、以前と比べ人口の密度が高くなってきていた。

ハイド、コウタ、アリサは欠かさずに通っているし、サクヤもたまたま顔を見せに来てはシオの成長に驚く。

ソーマは、最近は全然来ていないらしい。：仕方のないことだ。

シオに暴言を吐いたうえ自ら「関わるな」と言った手前、自分からは来られないのだ。

シオはいつも通り明るかったが、たまに見せる表情には寂しさが滲んでいるような気がしてならない。

(よっぽどソーマのことが気に入ってるんだな)

サカキとシオの食糧について話しながら、ハイドは頭の中でシオを案じる。

と、その時シオが立ち上がり、ソファに座っているアリサの方へ歩いていく。

アリサの前で立ち止まり、アリサが顔を上げた次の瞬間…。

「きゃあっ！？なっ、何!？」

シオが両手を伸ばし、アリサの胸をわしづかみにした。突然のシオの行動に、アリサとコウタが驚く。

シオはそのまま胸を押したりして…。

「ぶにぶに…」

…どうやら感触を確かめていたようだ。

そしてすぐに手を離すと、今度はコウタの前に来た。両手を広げ、コウタの両肩を二回ぺちぺちと叩く。

「いてっ、いてっ」

「かちかち…うー…」

コウタの感触を確かめたシオは、不思議そうな様子で体を左右に揺らす。

今度は首をねじり、ハイドの背中に狙いを定める。

なんだか嫌な予感がしたサカキは、ハイドと話をしつつ、一步左に動いた。

ドーン！！

ごぎっ！！

「ぐぶっ！！」

背中にシオの体当たりを食らい、体がくの字に曲ったハイドは床にぐそっとう倒れた。

「……………」

そのまま沈黙…。

「んー…」

ハイドの脇腹に両手を回して感触を確かめたシオは立ち上がり…。

「おつかしーなー…これ、おつかしーなー…」

「おかしいのはお前だよ」

コウタがシオの不可解な行動を指摘する。

シオの後ろでは、倒れたままのハイドを指でつんと突っつき、反応がないことを確認して合掌するサカキの姿があった。

「ふむ…人間の個体差が気になりだしたみたいだね…興味深い」
とりあえずハイドを隅に置いて、サカキが話に加わる。

「個体差…ですか？」

アリサはシオを見たまま聞き返した。

「ああ…体格差や性格、人種、性別…人間の多様性に興味を持ち始めたんだ。アラガミは分類上、無性生殖に近い繁殖形態を取っているけれど、新種のヴァジユラのような例もある。概念としての性別というものへの理解も時間の問題だろうね」

「この子も、見た目は…女の子なんですけど…」

改めてシオを見るが、その体つきや声など、人間の女の子に相違ないことに変わりはなかった。

「そうだねえ…支部長もそろそろ帰ってくるだろうし、あの服もどうにかしないと…」

シオは出会ったときから服を着ていた。ただ服とは言っても、どこからか拝借してきたフェンリルの旗を体にグルリと巻き付けているだけなのだ。

旗自体がボロボロなので、なんとというかかなり無防備だ。

「よし、明日早速服を着せてみよう」

「そうですね。よろしくお願いします」

「じゃあ、そろそろ戻るか！」

と、コウタが立ち上がった時、サカキが呼び止めた。

「…ああ、二人ともハイド君を連れて帰るのを忘れないように」

その言葉にはっとして部屋の隅を見ると、そこにはまだ床に俯せで転がっているハイドがいた。

シオの行動にばかり関心がいつてしまい、すっかり忘れていたようだ。

慌てて二人でハイドの肩を担ぎ、部屋まで送っていったのは言うまでもない。

そして翌日、第一部隊はまたもサカキに呼び出された。

サカキが強引に呼んだのか、ソーマまで来ていた。サクヤも呼び出したところを見ると、どうやら全員に招集をかけたようだ。

「呼びつけてすまない…私では、どうにもならない問題が発生してしまっただね」

そう言うとサカキはシオの方を向いた。

「彼女に服を着せてくれないか？」

「はあ…服、ですか…？」

サクヤはわけがわからず聞き返す。

「様々なアプローチを試みてみたんだが、全て失敗に終わってしまったね〜」

「きちきち、ちくちくやだー」

駄々をこねるシオ。

「ということらしい…是非女性の力を借りたくてね〜」

さつきから不機嫌だったソーマは更に不機嫌そうな顔をした。

「ならなんで俺を呼ぶんだ…戻るぞ」

ソーマはぶつきらぼつにそう言うと、さつさと研究室から出ていく。

「俺も役に立てそうにないし…ちょっと今バガラリーがいいところだったんだ！任せたよ！」

コウタまでハイドを残して先に戻ってしまった。

「まったく薄情な男どもね〜…とにかく、ちょっと着せてみますよ」
「！」

サクヤが出て行ったソーマとコウタに呆れると、サカキに向き直って言った。

「シオ〜！ちょっとおいで〜！」

「な〜に〜？」

サカキが用意したシオ専用の部屋の前で、シオを呼ぶサクヤ。

「博士、ちょっと奥の部屋借りますね！アリサく、ちょっと手伝って〜！」

「わかりました！」

アリサはサクヤと一緒にシオを連れて、奥の部屋に入っていった。

「それにしてもシオや君たちはとても興味深いよ」

アリサたちがシオに服を着せ始めて少し経ったとき、サカキは不意に言葉を発した。

「その柔軟さと多様性が、予測できない未来を生み出すのかも知れないね……」

ドガンツ！！！

もの凄い力で何か壊される音が響き、大量の埃とともにアリサとサクヤが咳込みながら出てきた。

「げほっ、げほっ…あ、あの…シオちゃんが…」

「こほっ…壁を壊して外に…」

二人の言葉に、サカキの線で書かれたような狐目がわずかに見開かれる。

「やはり、予測できない……君たちお願いだ！なるべく早く、彼女を連れ帰って来てくれないか！？」

珍しく切羽詰まったサカキにハイドが頷く。

「わかりました！サクヤさんとアリサは休んで！俺とコウタとソーマで探してくる！」

「お願いします！」

アリサに頷いて、ハイドはすぐに部屋を飛び出した。

「駄々っ子のパワーって恐ろしいわね……」

サクヤは体についた埃を払い、ポツリと呟く。

いきなりハイドに手を引っ張られて鎮魂の廃寺に連れてこられたソーマは、内心嫌がりつつシオの搜索に協力していた。

「おい、いるんだろ？」

仏像が並ぶ誰もいないと思われる寺の一角で、神機を担いだソーマがシオを呼んでみた。サカキからの調査報告では、この辺りにシオのコアの反応があったはずだ。

「いないよー」

わかりやすい口調の声が仏像の影からしてきた。そこにいたかと笑ったソーマは、更に呼びかける。

「遊びは終わりだ…さっさと帰るぞ」

「ちくちくやだー!」

「…フ…所詮はバケモノか…」

まだ駄々をこねるシオにソーマが独り言のように呟く。

「そーま」

仏像の後ろからひよこっ顔を出したシオがソーマを呼ぶ。

「ああ?」

「もう、おこってない?」

シオの言葉でソーマは、空母で彼女に向かって暴言を吐いたときのことを思い出す。

「そーま、あるとき、おこってた」

「テメエには関係ねえ…」

「あのとき、ソーまにいやなことしたんだな…シオも、ちくちく、いやだもんな…シオ、えらくなかったな…」

「一丁前な口利きやがって…」

シオは頑張って謝罪の念をソーマに伝えた。拙くて、伝わりにくいシオの言葉でも、言いたいことはしっかりソーマに届いたようだ。

人間に近いとは言え、アラガミに謝られるのは何か変な感じがして顔を背ける。

「俺もテメエくらいに、自分のことなんか何も考えずに生きていたら…ラクになれるのかもな」

「ソーま」

「あ？」

顔を上げてシオを見ると、虚をつく言葉が飛び出した。

「『じぶん』って、うまいのか？」

一瞬の沈黙の後…ソーマが吹き出した。

「フっ…ハっハっハ！」

笑ったことなんて、今までなかったな…。楽しかったことも…幸せ

だったこともない…だが、こんなクソツタレな世界でも、笑うことはできるのか…。

などと頭の中で思考する。

ソーマは人生で始めて、純粹に笑った。彼の境遇に笑えるようなことが何一つなかったからだ。

「テメエも少しは自分で考えやがれ…まあ、お互い自分のことわからねえ出来損ないってことだな…」

すると、ソーマの言葉にシオが反応する。

「おお！やっぱりいっしょか！」

「だから一緒にするなと…」

ソーマが否定しようとするが、シオがそれを遮る言葉を放つ。

「いっしょに『ジブンサガシ』、だな！」

「や、やめる…」

ガッツポーズを作って言うシオにソーマは自然と顔が赤くなる。

そうしてシオは、ようやく高い場所にある仏像の影から降りてきてくれた。

その時、コウタとハイドの声が寺院に響く。

「おい！シオ！どこだよー！」

「シオー！いたら返事してくれー！」

それを聞いたソーマは、再びシオに向かって口を開く。

「考えても見ろ…あいつらも予防接種程度とはいえ、生きるためにアラガミの細胞を自ら望んで取り込んでるんだ…俺以上に救われねえヤツラさ…」

「うん、シオわかるよ！みんなおんなじ『なかま』だって、かんじ
るよ?」

頷いたシオの純粋な言葉に、ソーマは心が軽くなるのを感じた。

…ほんとうに…一丁前な口利きやがる…。

「……………そろそろ、戻るか」

そう言ったソーマは、空いている左手を顔に持っていき、両目を軽く擦る。

シオは何をしているのか気になってソーマの顔を覗き込もうとしたが、顔を赤くしたソーマに頭を左手で押さえられて見れなかった。

しばらくその押し合いが続いたが、ようやくシオが諦める。

「行くぞ」と言われ、ソーマと並んで歩くシオ。するとシオがあるものに気づいた。

「そーま、それなんだー？」

シオが指差したのは、ソーマの首から下がっていたイヤホンだった。

「…音を聞く道具だ…」

説明が面倒なのか、それとも上手く説明できないのか…物凄く端的に説明するソーマ。

「シオも、きいていいかー？」

シオが目を輝かせてソーマにねだる。

(しょうがねえな…)

ソーマはその場に座ると、首からイヤホンを外した。

「……ここに座れ」

ぶっきらぼうにそう言いわれ、嬉しそうな表情で素直に座るシオ。

シオは今、ソーマの胸に背中を預けている状態で座っていた。

ソーマは後ろからシオの耳を探し、イヤホンを装着する。いつも大きい音量で聞いていたため、プレイヤーの再生ボタンを押す前に、音量を少し下げる。

「じゃあ、流すぞ」

ソーマが再生ボタンを押すと、曲が流れはじめた。

「おお！おとがなつたぞー！」

シオはきゃっきゃ、と楽しそうに音楽を聞いていた。

そしてこの時、ソーマは数ある曲の中から、『ある一曲』を選んで
いた。

アラガミであるシオに、この曲の意味がわかるのかは正直わからない。
い。

ただ曲の内容と、今の自分達とシオの境遇が似ているから選んだに
過ぎなかった。

だが、心のどこかで…この曲のような状況にはなつてほしくない
感じている自分がいることに、ソーマは気づいていなかった…。

プレイヤーがその旋律の終わりを告げると、ソーマはイヤホンを外
した。

「たのしかったー！」

「…そうか」

シオは笑顔でソーマの胸にもたれる。

「なあ、そーま」

「あ？」

シオが首をひねってソーマの顔を見ながら尋ねる。

「いまのおと、なんていうの？」

「……………『うた』」

散々言い方に悩んだ結果、出てきたのはたったの二文字。しかし、その二文字を新しく知ったシオは、とても喜んでいた。

そしてふと、自分の服に軽く雪が積もっていることに気がつくソーマ。

だが胸の内に微かに広がる感情によって、寒さなど微塵も感じなかった。

四十喰：みんなおんなじ（後書き）

シオがソーマのイヤホンで『うた』を聴くという場面は個人的にと
うしてもやりたかったなので、無理矢理ねじこみました。

四十一 喰：ガールズトーク（前書き）

ガールズトーク自体よくわかりませんし、一人「ガールズ」と呼ぶには微妙な人もいます。

四十一 喰：ガールズトーク

無事シオを研究室に連れ戻すことに成功したハイドたちは、シオに着せる服について話し合っていた。

「それにしても、シオは一体どんな服ならちゃんと着てくれるんだろうね……」

サカキの言葉に考え込む第一部隊。

「……………わかった！」

真つ先に沈黙を破ったのはハイドだった。

「わかったって……何がわかったんだ？」

コウタがハイドに聞き返す。

「考えてもみて……普通の人間の服はちくちくして嫌がるのに、フェンリルの旗は平気で着てるんだよ？」

その言葉に、更に疑問の表情を浮かべるコウタ、アリサ、サクヤ、ソーマ。

サカキはハイドの言わんとすることがわかったようだ。

「フェンリルの旗は全て、アラガミの素材からできているんだ。言い方は悪いけど、世界にその力を誇示するためにね。つまり、シオの服を全てアラガミの素材で構成すれば、彼女は嫌がらずに服を着

てくれる…と、いうことなんだね？ハイドくん」

「ええ、まあ」

サカキの言葉にハイドが頷く。

「そっか！それなら確かに着てくれそうだな！」

「ええ！じゃあ早速、素材を集めましょう！」

コウタとアリサも納得したようだ。サクヤも「なるほど…」とサカキの言葉を理解した。

「博士、どの素材が要りますか？」

ハイドがサカキに尋ねると、少し考えてサカキが口を開く。

「そうだねえ…どうせなら徹底して作り込もう！肌触りを良くするために、ヴァジュラの毛…服にしなやかさを加えるためにコンゴウの尻尾…ああ、そうだ！防御力も備えよう！クアドリガの装甲も頼む。あとはサリエルの羽くらいかな…おっと、そうだ！硬い素材に通す針がいるな…ボルグ・カムランの針も頼むよ！」

「わかりました！…ところで、誰が作るんですか？」

ハイドが一番肝心なことを聞いた。かなり重要なその言葉に全員固まる……が、ここで少し考えたサカキが口を開く。

「…リツカくんに頼もう」

「でも、博士…なんて言って説明するんですか？」

そう、それも外せない重大事項なのだ。

ゴッドイーターが着る服には偏食因子が使われているが、アラガミの素材をまるまる使われたことなど一度もない。

それにリツカにお願いするにしても、「ちょっとアラガミ素材で服を作ってくれ」などと頼むだけでかなり怪しい。

人工の素材で作られた服を着るハイドたちがお願いするのは不可解なことこの上ない。

サカキから頼むにしても、普段はもつと高度なオラクル細胞の研究をしている彼が、いきなりリツカのところへ来て「アラガミ素材で服を………」などと言うのは違和感がある。

そもそもそんな服「誰が」着るのか…その説明も困難を極めた。

「まあ、なんとかするさ…とにかく君たちは素材を頼む」

サカキの言葉に全員頷き、研究室を後にした。

「なんかさ…最近ここ、人が少なくないかい？特にハイドちゃんやコウタちゃんにアリサちゃん…」

「確かに、第一部隊の方々はあまり見かけませんね…一応、朝のミッションとお昼の休憩時間は見るんですけど…」

「掃除はしやすいけどさ…何かあったんじゃないかって、時々心配になるのよね…」

掃除のおばちゃんと、休憩中のヒバリが話しているのはエントランスの一角にあるソファ。

コーヒーを飲みながら雑談していると、そこにリツカも加わった。

「何の話？」

愛飲している『冷やしカレードリンク』の缶をコトっとテーブルに置いて、ソファに座りながらリツカが尋ねた。

「最近ハイドさん達を見かけないという話です」

そうリツカに答えるヒバリ。

「そういえば確かに………なんか、また私に黙って裏でコソコソと楽しいことしていきそうな気がするよ…」

リツカが『ハイドのリーダー就任祝い』に参加できなかった時のことを思い出しているのか、少々不機嫌そうな顔になる。

「考えすぎじゃないかと…」

と、ヒバリは控えめに言うが…。

「いっやっ！そんなことないと思うな！絶対楽しいことしてる！」
女の勘は鋭い。事実ハイドたちは、人型アラガミの女の子と心癒される触れ合いをするという、かなり楽しいことをしていた。

「……………やっぱりそうでしょうか？」

ヒバリも少々気にはなっていたのだ。ただ、ハイド達を責めるような言い方をしているような気がして、あえて言わなかった。

「そつだよきつと！あゝもう！やっぱり冷たいなあ、ハイドは！」

対象をハイドに特定して、理不尽な愚痴をこぼすリツカ。

それを見たおばちゃんがクスリと笑って、リツカに点火済みの爆弾を放った。

「あらあら…可愛いわね、リツカちゃん！ハイドちゃんに構ってもらえないことがそんなに寂しかったんだ…よつぽどハイドちゃんが好きなのね！」

おばちゃんの投げた爆弾は、リツカの脳みそというゴールリングに綺麗に吸い込まれ、爆発した。

「ちよっ！ちがっ…違つよ！！そんなんじゃないつたら！！！」

真っ白な頬を紅く染めて必死になって否定するリツカ。

「確かに、ハイドちゃんは年上からみればちよつと可愛いし、同じ

年か下から見ればカツコイイわよね？リツカちゃんがコロっといっちゃったのも納得だわ〜」

おばちゃんがにやけながらリツカを追い詰めていく。

「だから違っつてば！確かにハイドは…優しいし、熱心だし…神機を整備しているときに『いつもありがと』って言うってくれるし…カツコイイけど…でも、そんなんじゃないから!」

「リツカさん…顔紅くして、軽く墓穴掘ってますよ…?」

頑張っつて否定しようとするが、ヒバリに指摘されて口が滑ったことに気づき、両頬を手で押さえるリツカ。

このままでは持ちこたえられない。そのうち無理矢理『ハイドのこと』とおばちゃんに言わされそうな展開を予想したリツカは、その矛先をすぐさま別の方向へ向けた。

「そ、そういうヒバリちゃんはどうかのかな？最近タツミさんが任務が忙しくて、話をしてられる時間が短くなってるって聞いたけど〜?」

「えっ…」

リツカの言葉におばちゃんの視線がヒバリの方へ。

「あら〜それは寂しいわね〜」

「いや、その…」

モゴモゴと言うヒバリにリツカが追い打ちをかける。

「で…本人としてはそこらへんどうなのかな？」

「…『どうなのかな』とはどういう意味なんですか？」

「えっ…」

急に落ち着いたら、若干冷たさを感じるヒバリの声色にリツカが戸惑う。

「いや…だから本人としてはどうなのかな…って…」

「ええ、ですから『本人としてどうなのか』とはどういう意味なんですか？」

『……………』

リツカもおばちゃんも見ずにコーヒーを口にするヒバリ。その目はどこか焦点が合っていないような…。

ヒバリから突然発せられた冷たい空気と無言の圧力に、リツカもおばちゃんも矛を納めて黙り込む。

（うつ…ヒバリちゃんって昔から「そういう話」で自分に突っ込まれるといきなり恐くなるんだよね…）

休憩時間が終わるまであと10分…リツカとおばちゃんにとっては、かなり長い10分となった。

四十一 喰：ガールズトーク（後書き）

ヒバリは実際どうなんでしょうね…タツミの努力が実ることを個人的に祈ります。

四十二喰・服と『うた』（前書き）

個人的にお気に入りのシーンです。やっぱりシオは可愛いです。あ
とソーママも。

四十二喰：服と『うた』

「アラガミの素材で…服を…？でも…一体何のために？」

休憩していたらいきなりサカキに呼び出され、呼ばれるまま研究室へ行ったら訳のわからない依頼を受けたリツカ。

「まあ、無理なら別にいいんだが…」

「いえ…不可能ではないと思います！それに、肌に密着させるためにオラクル細胞を改良するという作業は、新しい技術開発に役立つと思います！」

「おお！じゃあ引き受けてくれるのかい？」

サカキの言葉にリツカは頷く。が…。

「ところで、誰が着るんですか？」

リツカの疑問にサカキがびきっ！と固まる。

「い、いやあ…ははは…まいったな…」

頭を掻いて困った表情でどもるサカキ。

「ハカセー！」

その時突然、奥の部屋から無邪気そうな女の子の声が研究室中に響いた。

「?…奥に誰かいるんですか?」

リツカが奥の扉を覗くように首を傾げる。

「いや!今のは…め、目覚まし時計さ!」

「ハカセー!だれかそこにいるのー?」

「……………目覚まし……………ですか……………?」

リツカのジト目に睨まれ、サカキは脂汗を浮かべる。

「……………っ!」

リツカは突然、奥の扉に向かって走り出した。

しかしサカキも予想していたらしく、とても着物を着ているとは思えないスピードで立ち上がり、左手を伸ばしてリツカを阻止にかか
る。

リツカは構わずサカキの左手が伸びた方へ突っ込む。

(なんだとっ!?)

リツカの行動に驚くが、サカキはそのまま手を伸ばしリツカを掴もうとした。

と、ここでリツカは右回りに急旋回する。

そしてサカキの右側を通り抜けようとしたとき…。

(くっ…こんなこともあるっつと…！)

サカキは右手をリツカに伸ばすと、袖の中からマジックハンドが飛び出した。

ものすごい勢いで伸びていき、リツカの右手を掴む。

「！」

「ふっふ…私を甘く見ていたようだねリツカくん」

ニヤリと不敵に笑うサカキ。しかしその笑みはすぐに驚愕の表情に彩られる。

バン！

「なっ…！」

リツカの手袋が突然破裂したのだ。その光景にサカキはハッとする。

(そうか！整備士が着けているあの作業手袋は、万が一オラクル細胞の捕喰を受けた時のために破裂するようにできていたんだ！)

リツカは文字通り、マジックハンドの魔の手から逃れると、扉に手をかけて勢いよく開いた。

「んー？…だれだー？」

「……………」

「……………」

「いや〜！今日も疲れたね〜」

疲れを感じさせない声でそう言ったのはコウタだ。

「うん、早くさっぱりしたいよ」

顔についた汚れを擦りながらハイドも頷く。

「……………そういえば、博士はリックさんにちゃんとお願いできたんでしょうか？」

ふとアリサはシオの服のことを思い出して咳く。

「大丈夫よ、きっと！アリサ、シャワー浴びてゴハンにしましょ！」

前向きに考えるサクヤは、笑顔でアリサを誘う。

「じゃあ皆、一通り落ち着いたら、またサカキ博士のところに行こう」

ハイドの言葉に頷いて第一部隊は一旦別れた。

それからシャワーや昼食を終えた第一部隊の五人は、サカキの研究室で目を点にして固まっていた。

床にはシオが座り込み…その後ろには腕を組んでニヤニヤしながら仁王立ちしているリツカ…。

その隣でサカキが、少々困ったような顔で立っていた。

「おつかれさま〜！今日の任務はどうだった〜？」

非常に明るい、楽しそうな声で沈黙を破ったのはリツカ。

「いや…任務は滞りなかったけど…それより、なんでリツカがここに…？」

ハイドの疑問の声にサカキが一步前に進み出た。

「いや〜ゴメン、ゴメン！結局、リツカくんにも共犯者になってもらうことになっちゃったんだ」

サカキの言葉に脱力する第一部隊。

「安心して！ちゃんと秘密にしとくよ！これでも口は固い方だからさ…それで、肝心の服のことだけど、ついさっき完成したよ！」

「マジで!?!」

コウタの驚きの声にリツカは頷く。

「ホラ!この中に入ってるよ!」

そう言ってリツカはシオの服が入っているという箱を取り出した。

「あ、私にやらせてリツカちゃん!」

「はいはい」

名乗り出たサクヤがリツカから箱を受け取ると、シオを連れて奥の部屋へ入っていった。

「それにしても…私に隠れて随分と楽しいことしてたみたいだね? ハイド?」

ニヤニヤした笑みを再び浮かべ、ハイドを横目で見るリツカ。

「うっ…」

ハイドはまいったな…と視線をそらす。

「リツカさん…これには事情が…」

「いっよっ!『アラガミを連れ込んだ』…なんて誰にも言えないもんね」

アリスのよく使われる言い訳を聞く前にリツカが制止した。

「だいたいの事情はサカキ博士から聞いたよ…シオちゃんだったっけ？私もビックリした…アラガミが人間にまでなれるなんて…」

奥の部屋を見てリツカはため息をついた。

すると、まだ不安なような、申し訳ないような、いろんな感情が混ぜ合わさったハイドの表情に気づき、クスと笑う。

「だ〜いじょうぶだってば！そんな心配そつな顔しないでよ」

「あ…うん、そうだね…ゴメン」

気づいて慌てていつもの表情に戻すハイド。

「ただ…」

「？」

「仕方ない理由があったにせよ、私に二度までもお楽しみイベントがあったことを隠していたのは、ちょっと許せないなあ〜？」

「うっ…」

リツカのジト目に思わず後ずさるハイド。

「黙ってた罰として、ハイドには後で『冷やしカレードリンク』でも奢ってもらおうかな？」

リツカはニヤリと笑いながらハイドを見た。

ええ…なんで俺だけ…？

自分へのみ罰を与えられたことに疑問を感じながらも、今回の件や就任祝いのことを黙っていたのを、冷やしカレードリンク一本で済ませられるなら幸いだと、ハイドはその条件を承諾した。

「あ、箱買いでお願いね？」

「えっ」

リツカから無情なる御達示を受けたその時、奥の部屋の扉がシュッと開いた。

「おまたせ！」

サクヤがシオを連れて部屋から出てきた。

シオの姿を見たサクヤ以外の第一部隊の人間は、ポカンとした表情で彼女を見つめていた。

純白を基調としたドレスを着たシオは、例えるならユリの花、あるいは天使。

胸元には白いバラがあしらわれ、背中にはブーケを思わせるフリルの翼。どちらも緑色のリボンで可愛くデコレーションされている。

足は素足のままだが左側の足首に緑色のリボンが結ばれていた。

また、服装に影響されたのか髪に似せて変えていた肉体も形が変わり、綺麗に整えられている。

「きゃあ〜！可愛いじゃないですか〜！！」

アリスが一気にハイテンションになり、リツカは両手を腰に当て胸を張った。

「本当に普通の女の子みたいよね〜」

サクヤもシオの様子にニッコリとしている。

「おっ？おっ？えへへ…」

可愛いと言われたシオはニヤつきながら照れ笑いした。

「おおっ！可愛いじゃん！ねえ、ソーマ!？」

コウタがソーマに話を振るが、その時コウタは「失敗したかな」とすぐに思い直す。

あのソーマのことだ、またいつものように流される…と思っていたが、結果は違うものになった。

「…まあ…そうだな」

「おお…予想外のリアクション…」

意外にもちゃんとした返事が返ってきたことに驚くコウタ。

「どうハイド？私の作った服の出来は？」

「すごいよ…普段作業してるとこ見てて思ったけど、リツカってやっぱり手先器用なんだね…」

「えへへ〜そうかな〜？」

大評判になった自信作の服に満面の笑みを浮かべるリツカ。

「うん、すごく似合ってたて可愛いよシオ！」

「いやあ、私も驚いた！実に素晴らしい！」

ハイドとサカキにも褒められ、この部屋にいる人間全員に可愛いと言われたシオは、うれしくて仕方なかった。

「なんか…きぶんいい…」

そう言うとシオは突然胸の前で両手を組み、目を閉じて歌い始めた。歌詞をなぞっているのではなく、鼻歌のような歌い方だったが、彼女の澄んだ歌声はすんなりと耳に届く。

シオが歌いだした時、ソーマはすぐにハツとした。

（この歌は…）

ソーマも含め、第一部隊、リツカ、サカキはみな口が半開きになってシオの歌を聞いていた。

やがてシオが歌い終わると、組んでいた手を解き目を開いた。

「これ、しってるか!? 『うた』っていうんだよ!」

「……………ほっ」

「すっごい…」

「すごいじゃないシオ!」

シオの言葉にソーマ、アリサ、サクヤが次々と口を開く。

「なんだ? これ…えらいか?」

シオがハイドを見て尋ねたので、ハイドも「うん! えらいよシオ!」
と頷く。

「えへへ…そっか! えらかったか! なんか、きぶんいいな!」

「それにしても…歌なんてどこで覚えたの?」

「んー? そーまといっしょにきいたんだよ!」

サクヤの質問にシオが答え、それを聞いたコウタが驚いた。

「ナ又っ!?!?」

「あら〜〜! あらあらあらっ?」

「へえ〜…そうだったんですか〜…」

サクヤとアリサがニヤついてソーマの方を見た。

「し、知らん……………」

たまらずソーマは赤くした顔を背ける。

「え〜？…でもシオちゃんは『ソーマと一緒に聴いた』って言うてるよ〜？」

「うむ、実に興味深い……………」

「なんだよ〜…いつの間に仲良くなっちゃってんの？」

今度はリツカとサカキ、それにコウタがソーマに追い打ちをかけるように言った。

「チツ…やっぱり一人が一番だぜ……………」

ソーマがそう呟いたのを見たハイドは静かに思った。

(なんか照れてる表情が新鮮でかわいいなソーマ…いい兆候だ)

四十二喰：服と『うた』（後書き）

リツカとサカキを話に組み込んだのになんか影がちよっと薄かったかな？と書いた後で気づきました。それでは！

皆さんのご意見ご感想お待ちしております！

四十三喰：ユ一ガツタメール！fromシオ（前書き）

シオからメールが送られてきたという話です。

番外編に近い形となりますので、少々短いです。

四十三喰：ユーガツタメール！fromシオ

これは少し前：シオがいろんな言葉を覚え、一通りのコミュニケーションが取れるようになった頃の話。

ある日の朝：ハイドは自室のターミナルで神機と消費アイテムの管理をしていた。

（合成を使えば回復錠は当分補充の心配はいらないな…神機のメンテナンスはもう頼んだし…）

こんなところか、とターミナルの接続を切ろうとしたとき、まだ今朝のメールを確認してなかったことに気づく。

別に後で確認してもいいのだが、緊急のメールが来ていたら後回しにすると厄介なので、メールボックスを開く。

すると、メールが一通昨夜の9時頃に届いていた。差出人は…。

（アリサから？…なんだろう？）

カーソルをそのメールに合わせ、開いた。

『差出人：アリサ

件名：ああああ

本文：ゴハン ゴーハーン

』

「ぶっ!？」

本人が言った時のことを想像して、思わず吹き出してしまった。

(文面から察するにこれはシオからのメールだな…?それにしても、ターミナルの使い方まで覚え始めているなんて…)

つくづく彼女の成長スピードには驚かされる。このままでは、いずれアイテム管理まで弄ってしまいそうで怖い。

(…まあとりあえず、さっさと任務に行くか…そのあとシオに、勝手に他人のID使ったらいけないってコト教えとかないとな…)

などとぼんやり考えながら、ターミナルの電源を落としたハイドはエントランスへと向かった。

502

午後1時…ミッションを終えたハイドは、食堂で昼食を取っていた。

「ハイドさん、ここいいですか？」

その時、アリサが料理の載ったトレイを運んで向かいの席に来た。

自分の横にはいつの間にかコウタも座っているし、彼から一つ離れた席にソーマ、向かいにはサクヤも座っていた。

「ああ、いいよ」

断る理由も無く、アリサの相席を了承する。…が、彼女が席についたときふと、シオから届いたメールを思い出し…。

「ええっ！？なんで私が席につくなり笑ってるんですかっ!？」

アリサは向かいに座っているハイドの様子にびっくりしていた。

彼はフォークを握りしめ、顔を後ろに向けて笑いを堪えていたが、体の震えによつて感情が伝わってしまった。

「ど、どうしたんだハイド…!」

「さ、さあ…」

コウタとサクヤも、ハイドの様子に戸惑っていた。

その後、シオからのメールを見せたらアリサは慌てて自室のターミナルを調べに戻り、数分後こんなメールが届いた。

『差出人：アリサ』

件名：スイマセン！

本文：あのメール、どうやらシオちゃんが私のIDを使って送ってたみたいです！お騒がせしてスイマセンでした><

『

翌日の朝…ハイドは昨日と同じくターミナルでアイテム管理をし、最後にメールの確認した。

すると、またも一通、昨夜の9時頃にメールが届いていた。

(コウタから…?)

『差出人：コウタ

件名：

本文：バガラリーみたー うまそうなのいっぱいいたー

』

(……………これは……………シオがやったのか…コウタの悪戯なのか……………どっちなんだ…?)

アリサのメール騒動はコウタも知っているため、可能性は充分ありえた。

シオの服が完成した日の夜…ターミナルでコウタに教えてもらった動画掲示サイトを見ていると、新着メールのインフォメーションが流れた。

トップ画面に戻り、メールの差出人を見ると……なんとソーマからだった。

(珍しいな…なんの用だろう?)

ハイドは初めて来たソーマからのメールを少々ウキウキしながら開封した。

『差出人：ソーマ

件名：

本文：おおーこれチクチクしないぞー これエライなー

『

ソーマがシオのあのドレスを着て、メール通りのセリフを言っているとところを想像しただけで、ハイドの腹筋は完全に崩壊していた。

片手で腹を押さえ、膝を屈して笑いを必死に堪える様は、傍目から見れば怪しいことこの上ない。

笑いの波が収まると、またもソーマからメールが届いた。

『差出人：ソーマ

件名：

本文：わかっているとは思いますが、さっきのメールはシオだからな』

（つつたく…）

ハイドに訂正メールを送信したソーマは、心の中でぶつくさ言っていた。

いつの間にか送信した覚えのないメールが送信されていてはだれもが気になる。

中身を見たらあの内容だ。不機嫌になっても仕方がない。

「なんてメール送ってくれやがる…」などとぶつぶつ愚痴をこぼしていたその時、ターミナルの画面に『新着メール受信』の文字が表示された。

（あ？………サカキのおっさんからだと？）

ソーマは面倒に思いつつもメールを開封してみる。

『差出人：サカキ

件名：そーまー

本文：あしたはふたりでかくれんぼしようなー
おぼえと
けよー
『

(……………)

サカキ本人に言われた時のことを想像して、鳥肌が立ったソーマであつた。

四十三喰：ユ一ガツタメール！fromシオ（後書き）

シオからのメールを初めて見た時、思わずニヤけてしまいました。

主人公以外にもいっぱい送ってそうです。

四十四喰：原初の螺旋（前書き）

ついに来ました、ウロヴオロス戦です。今まででハイドが一番怪我します。

四十四喰：原初の螺旋

へりの窓から見える風景は、雨と共に視界の外へとただただ流れ続けていく。

これから、今まで味わったことのない死闘を経験するというのに…なぜか心はひどく落ち着いていた。

窓の外をぼんやりと眺める瞳には、濁った空と平原、へりの窓についた雨粒が映るが、どれも彼の気を逸らすには至らなかった。

雨を切り、風を切り…フェンリルの紋章を刻んだへりは、神霧ハイドを乗せて一つの『神』の元へと向かう。

平原の覇者「ウロヴオロス」…雨宮リンドウが討伐して以来の出現となったが、竜巻をおこすとされるその力は依然として猛威を振るっている。

この暴君を討伐する者として今回、神霧ハイドに白羽の矢が立った。

この日彼は、海外出張から戻ってきたシツクザールに呼び出され、「特務」の遂行を言い渡されていた。

半端な実力のゴッドイーターでは何人束になろうと敵わないとされるウロヴオロス…例え、極東支部の主力である第一部隊が全員で立ち向かったとしても、一人二人は死者が出ると考えたシツクザールは、この個体を特務目標とした。

海外にいる間も、第一部隊の隊長として戦うハイドの活躍を耳にし

ていた彼は、「例え単身でも、困難なこの任務を遂行することができる」…そう判断したようだ。

「あれ？ハイドさん、これから任務ですか？」

ハイドがエントランスに設置されているターミナルで、神機のチェックをしていたのを見たアリサが尋ねた。

「えっ？あ、ああ、まあね…」

ハイドは急に後ろから声をかけられたので一瞬驚くが、すぐに平静になる。

「緊急に入ったミッションでね…すぐに出撃しなくちゃならないんだ」

「そうですか……………じゃあハイドさん！私も一緒に出ます！」

「えっ？」

アリサの突然の申し出にハイドは困ったような表情を浮かべる。

「二人で出撃すれば、早く終わるでしょうし…それに…その……………二人での戦い方の再確認もしたいですし…」

語尾に近づくとつれて段々声が小さくなっていき、それにとまなっ

てアリサの頬も少しずつ紅くなっていく。

モジモジとした仕種がなんだかそそるが、残念ながらハイドの思考はまったく異なったものだった。

(どうしよう…支部長には『単騎で』って言われてるし、特務は最高レベルの機密になってるし…)

少し考えて、ハイドは申し訳なさそうにアリサの申し出を断った。

「いや、俺一人でも大丈夫だよ！ごめんねアリサ…ホントは一緒に行けたらいいんだけど、最近アラガミの活動が活発化してるらしくて…上層部は任務にかける人数をなるべく減らしたいらしいんだ。俺がいない間にも緊急で任務が入るかもしれないから、それに備えて待機していてくれないかな？」

「あ…そう、ですか…：…わかりました…：それなら、仕方ないですね…」

アリサの表情が暗くなったのを見て、「どうしたんだろう」と思い声をかけようとした時、出発の時刻が迫っているというアラームが鳴った。

「じゃあ、行ってくるよアリサ！なるべく早く帰れるようにする」

「…はい！気をつけて下さいね…」

アリサに頷いて踵を返し、出撃ゲートへと歩いていくハイド。その後ろ姿をアリサが静かに見守っていた。

ハイドは頼杖をついて出発前の出来事に思いを馳せ、それと同時にシックザールの言葉の数々を思い出す。

『特務には基本的に、一つの原則が設けられている。それは、「全ての特務を私が直轄で管理する」…というものだ』

『特務遂行中に得られた物品も、その例外ではない』

『特務は最高機密の任務であるというその特性上、ほとんどが「単身で」臨むこととなっている』

『困難な任務になるが…成功したあかつきには、入手困難な物品と相応の金額を提供させてもらう』

『以前、特務を遂行していたリンドウ君…彼も、よく私に尽くしてくれた…彼ほどの男を失ったのは、大きな損失だった…』

『…とうとうお前も呼ばれたのか…これだけは言っておく…アイツには深入りするな』

最後に、支部長室を出た時に腕を組んで壁にもたれていたソーマから受けた忠告を脳内で再生して、ハイドは現実復帰した。

ぼやけていた視界が鮮明度を増し、窓の外の世界を脳に伝える。

「……………着いたか……………」

へりが少しずつ下降し、やがて車輪が地面に触れる。

扉がスライドして開かれると、ハイドは雨に打たれながら神機を担いで平原に降り立った。

待機地点まで来ると、そこから離れた場所に巨大な竜巻が発生しているのが見えた。

以前来た時よりも風が強いのはそのせいだろう。

「ヒドいなこれは……………」

ポツリと呟くその声は風に流され消えていく。

しばらく風景に見入っていたが、やがてハイドは更に歩みを進め、スタート地点にたどり着く。

「ミッション開始時刻までまだ時間があるな」と神機、そして携行品の最終確認をしていたその時だった。

「グガアアアアア！！！！」

「っ！！」

地面がビリビリと震えるほどの咆哮に、ハイドは思わず身構えた。

そして………平原の中央にある小山の影から、ついにウロヴォロスがその姿を現した。

（こんなに大きいのか…！？）

まさに「山のような」と言っても過言ではない巨体に唾然とするハイド。

以前ターミナルで調べた時は、「全長約10メートル」という記述を目にしたが、簡単に「10メートル」と言われても中々想像できるものではない。

あの巨体からどれほどの威力の攻撃が繰り出されるのか………考えただけでゾツとする。

だが、少しずつ近づいてくるウロヴォロスを見て、ハイドはとうとう覚悟を決めた。

胸に手を当て、瞳を閉じ、リンドウの教えを思い浮かべる。

（死ぬな…死にそうになったら逃げろ…それで隠れる…運がよければ不意を突いてぶっ殺せ…）

最後に深呼吸。

怖くないと言えば嘘になる。

ハイドは今までにない大きな恐怖が襲ってくるのを感じていた。

だが…まだここでは死ねない。

死にたくないというのもあるが、まだ色々と気になることが多過ぎるし、なにより…リンドウの敵を討っていない…。

キツとウロヴオロスを見据え、神機をしっかりと握る。

(さあ…いくぞ！)

ハイドはウロヴオロスへ向かって飛び出した。

向こうもハイドに気づき咆哮を上げるが、それに気圧されることもなく駆けていく。

近づいていくに連れてどんどん大きくなっていく巨体目掛けて、ハイドは剣を振るった。

キーン！と軽い音が響き、小瓶ほどの量の血が吹き出る。

(くっ…外殻はかなり硬いな！)

ハイドはまずウロヴオロスの外殻に攻撃を仕掛けた。その理由は『牽制』にある。

彼は初めてウロヴオロスと戦う上、攻撃手段への対処法もわからない。

援護してくれる仲間もない以上、まずは距離を保ちつつ戦うのが定石だろう。

また、ウロヴオロスの体の一番外を攻撃して一定の距離を取ること
で、急な反撃にも対処できるようにした。

ウロヴオロスの巨体を生かした攻撃は、全て桁外れの威力がある。

ハイドにとってこの戦いは、一撃も食らわれないことが大前提なのだ。

「ふんっ！はあっ！」

今度は黒い触手を斬り刻んでみると、刃はしつかり傷痕を残し、そこから鮮血が散った。

（体の黒い部分はおそらく全体的に斬れるな…）

一旦距離を取りながらウロヴオロスの情報を整理していると、足元から気配がした。

「！…！」

ハイドの身体の真下から、いきなり触手が回転しながら飛び出した。ギリギリでかわすとその触手はもう一本、更にもう一本とハイドが避けるたびに追いかけるように飛び出す。

やがて触手は回転しながら地面へと潜っていき、ウロヴオロスは地面に突き刺していた触手を引き抜いた。

どうやら土の中に触手を通して対象を攻撃するという攻撃手段のよ

うだ。

(面白いことしてくれるじゃないか…)

ウロヴオロスはハイドの方へ体を向けると、右腕の触手を薙ぎ払うように振るった。

そのわずかな隙間を抜けて懐へ侵入したハイドは、脚を五度斬りつけた。

脚も触手と同じ組織で構成されているようで、着実にダメージを与えていく。

するとウロヴオロスは両腕を上げてその場でジャンプし、ハイドを潰しにかかる。

「やばっ!!」

慌ててバックステップで後方へ下がる。

ズシン!!という地響きが辺りに轟き、激しい揺れを引き起こす。

(コイツ一体で天災に匹敵するな!!)

振動に堪えながらも足元に潜り込んで斬撃を与えていく。

しばらくの間、足を斬る、ジャンプのしかかりで反撃を受けるといふ攻防を繰り返していたが、いい加減ウロヴオロスも頭にきたのか、触手を地面に突き刺した。

(あの動作は…！)

読みが正しければ、この後地面から触手が突き出るはずだ…と、すぐさま距離を取るが、ハイドのその読みは外れていた。

ウロヴオロスの頭にある無数の邪眼が激しい光を放った。

「ぐああああっ…！」

辺り一帯を照らすほどの強烈な光にハイドの視界は奪われてしまった。

「くっ！目がっ…！」

痛みを堪えながら目を無理矢理開くと、触手を振りかぶったウロヴオロスの姿が霞んで見えた。

装甲を展開しようとするが間に合わず、巨大な鞭を腹に受けたような衝撃が身体に響く。

「がふっ…！！！」

そのままハイドは後ろに大きく吹き飛ばされ、地面を転がった。

「ぐっ…ゲホっ！ゲホっ！」

腹の痛みと嘔吐感を根性で押さえ込み、ハイドが立ち上がる。

しかしウロヴオロスはそんなハイドに休む暇も与えない。

体を沈めてハイドに狙いを定めると、邪眼が輝きだした。

そのままエネルギーを収束し、大口径のビームを放つ。

今のハイドには避けるような余裕も無く、装甲を展開して正面からその衝撃を受け止める他無かった。

「ぐっ…うう…!!」

神機から熱が伝わり、両手がジリジリと焼ける。

装甲で防ぎきれない足の部分が熱線に悲鳴を上げる…。

ようやくエネルギーの塊が通り過ぎると、ハイドの体から白い煙が上がった。

ついに足が身体を支えきれなくなり、ハイドは片膝をつく。

「はあ…はあ…」

歯を食いしばって顔を上げるとウロヴオロスが咆哮を上げて突進してきた。

(このまま…やられるのか…俺は…)

肋骨が折れているのか、立ち上がろうと力を込めただけで激痛が走

る。

ウロヴオロスが腕を振り上げる。

(ごめん…アリサ…みんな…)

死を覚悟する。

黒い腕が振り下ろされる。

その時、ハイドの頭の中で過去の記憶がフラッシュバックした。

強大な力を振るい、大切な家族を目の前で奪った、帝王…。

怯えて身動きできない自分に向かってくる、帝王…。

自分の命を奪うため、爪を振り下ろす、漆黒の帝王……………。

「……うっつおああああ————!!!!」

ドガシヤアアア!!

ウロヴオロスの体は慣性の法則にしたがって地面をスライディングし、やがて丘に背を打ち付けて停止する。

ハイドの命は呆気なく奪われたかに見えた。

命どころかそこにいた痕跡すらも残さないと思われた。

が、ウロヴオロスの通りすぎたあとには神機を振り払ったハイドと、その後ろに切り落とされたウロヴオロスの両足が残っていた。

ハイドは立ち上がると、足を失って起き上がれないウロヴオロスへ駆け出す。

「……らあっ!!!!」

腕に神機を喰らわせ、力任せに引きちぎる。片腕まで失ったウロヴ

オロスは完全に立てなくなった。

「おおおおおお!!!」

バーストしたハイドは邪眼に何度も剣を突き立てた。その度に鮮血が吹き出し、ハイドの身体を赤く染め上げていく。

それでも攻撃を止めない。今のハイドには目の前のアラガミを徹底的に叩きのめすことだけ考えていた。

「グギヤアアアアア!!!」

眼を一つ一つ潰される痛みにもウロヴオロスが絶叫する。

力の限りジタバタと暴れるがそれは何の意味も成さず、ただ無駄に体力を消費するだけだった。

「……………」

細切れにされて原形を失ったウロヴオロスを、返り血で染まったハイドが静かに見つめていた。

降りしきる雨に、身体の血が適当に洗い流されていく。

あれから、動けないウロヴオロスに対して攻撃の合間に捕喰攻撃を織り交せていたため、バーストが途切れることもなくトドメを刺せた。

しかしその代償として、長時間バーストし続けたことでハイドの身体中の筋肉はボロボロになっていた。

また、神機を握っていた手の平は皮がめくれて血が出ており、折れた肋骨もまだ痛む。

それに、ビームによってほぼ全身が火傷しているようなものだし、突進を受けた時に肩を引っかけてそこから出血していた。

それでもハイドは生き残った……………勝ったのだ……………たった一人で……………。

ハイドの神機には今、ウロヴオロスの大きなコアが収められている。

それは完全なる勝利の証だった。

ハイドは携帯電話を取り出すと、秘匿回線に接続した。

『私だ』

「こちらハイド…特務目標の討伐に成功…帰投します」

『そっか…ご苦労だった』

必要最低限のことを伝えると、ハイドは片足を引きずりながらヘリの着陸地点へ向かった。

その際、ヘリの運転手に肩を支えられ搭乗したのは言うまでもない。

やがてプロペラが回りだし、ヘリが離陸した。騒音や振動で肋骨がキリキリと痛んだが、こればかりはどうしようもない。

渡された白いタオルで血と雨に汚れた顔を拭いたあと、窓からウロヴオロスを見下ろすハイド。

ウロヴオロスは今、黒い霧となって散っている最中だった。

やがて肉片が全て消え去ると、ふう、とため息をつく。

終わったんだ…。

自分がまだ生きていることをようやく実感し始めたハイドは、ヘリに揺られながら「早くシャワーを浴びたいな」と、今最大の願望を心の中で呟いた。

四十四喰：原初の螺旋（後書き）

今回は文章に力を入れてみました。

読みづらい、こつした方がいい等、皆さんのアドバイスやご意見を
お待ちしております。

四十五噺：壊眠療法（前書き）

壊眠かいみんと読んでください。

安静にしなければならぬときにそれができないのはよくあると思います。

四十五喰：壞眠療法

午後8時を回った、フェンリル極東支部のアナグラ…そのエントランスの人混みの中にハイドを除いた、雑談中の第一部隊のメンバーの姿があった。

「そういえば、ハイドはどこ行っただ…？」

ジューズを口に含みながらコウタは横目でアリサに尋ねる。

「今、任務に出ています…一人で」

アリサは自分で言った『一人で』という単語に、内心落ち込みながら答えた。それにコウタが驚いて目を丸くする。

「マジで！？こんな時間なのに!？」

「ええ、なんでも最近、アラガミの発生が増えているそうで…私も行こうとしたんですけど、『緊急事態に備えて待機していてくれ』って言われてしまいました…」

「そつなの…それでハイドはどんな任務に行ったの？」

隣で聞いていたサクヤがアリサに尋ねる。

「詳しくは聞いてませんが、『一人で片付く』任務だそうです」

「……………」

壁にもたれて話を聞いているソーマは、何も言わなかった。ハイドが今、どれ程過酷な戦いに身を投じているのか知っていたから。

「そう。それならきつと大丈夫ね」

「…はい…」

「にしても、イレギュラー任務が増えるかもしれないんだよ…せめて外部居住区にアラガミがくるのだけは止めて欲しいよな…母さんとノゾミに『気をつける』って言つとかないと…」

外部居住区に住んでいる家族を案じるコウタ。

その時だった。

ゴウウウン…。

「きゃあっ！！」

「うわっ！！」

「ひっ！！」

出撃ゲートの扉が開かれる音と同時に、様々な悲鳴がエントランスに響き渡る。

「なっ…なんだなんだ!?!」

コウタたちが慌ててゲートの前まで行くと、そこには……………。

「きゃあああああああああ！！！！」

ホラー映画の撮影でも即OKが出るであろうアリサの悲鳴に、横に居たコウタがノックダウンされた。

「は、ハイドさん…どうしたんですか…それ…！！」

震える指でハイドの身体を指すアリサ。

帰還したハイドの全身は真っ赤な血で染まっていた。

素肌が出ている顔と腕だけはタオルで拭いた痕跡があるが、服や髪に至ってはお手上げだった。所々に血が固まってこびりついている。

「大丈夫だよアリサ、大半が返り血だし…」

ハイドは『落ち着け』と手のジェスチャーもつけてアリサをなだめる。

「ほ、本当に大丈夫なのハイド？」

サクヤが珍しくうるたえながらハイドに聞いた。

「……………まあ、左肩と肋骨、手の平の怪我と火傷を少々……………」

そこまで言うとアリサがガシッとハイドの腕を掴んで引っ張る。

「呑気に言ってる場合じゃないでしょう！？早く医務室に行きますよ……」

『アリサがこれほど取り乱したのはいつ以来だろう…』と考えに耽るハイドを片手で引っ張り、アリサは猛スピードで医務室へと向かった。

「火傷や手の平の皮のめくれ、肩の傷はすぐに治ると思いますが、肋骨の骨折は少なくとも一日二日はかかるかと…」

医師の診断を受けたハイドは「そうですか…」と呟く。

横で一緒に聞いていたアリサは、ほっと胸を撫で下した。

白い天井、漂う薬液の臭い…ここはアナグラの医務室の一つ。

あれからハイドは医師たちの手で服を切られてほぼ裸にされた後、特殊な洗浄液をシャワーで吹きかけられて血を落とすという作業を行った。

今は入院着を着用しており、腹部を圧迫しないよう寝かされている。

「君はなかなか過密なスケジュールで生活しているとツバキさんに聞いた。骨も折っちゃったことだしここらで一っ、『骨休め』でもしなさいってね！わっはっは！」

あんまり上手くないな〜と思いつつ、ハイドとアリサは愛想笑いを

しておく。

「まあ折れているとは言っても、そこはゴッドイーター。レントゲンを見る限り、もう骨がくつき始めている。明日の検診で問題がなければ、すぐに退院できるでしょう」

「わかりました」

「じゃあ、あとはちゃんと安静にしていることだけ考えていなさい！ わっはっは！」

快活な笑顔でそう言うと、医師は看護婦と共に医務室を後にした。

「もう、いきなり血まみれで帰ってくるからビックリしましたよ！ 洗い流してみれば大怪我してるし…一体どんな任務に行けばあなたがこんなことになるんですか!？」

医師がいなくなった途端にマシンガンのように話してハイドに問い詰めるアリサ。

「い、いやあ〜…その〜…」

どうしたものかと内心焦るハイド。上手い言い訳が思いつかない。

「……………嘘です」

「え？」

アリサが突然落ち着いた態度になったので、ハイドが伏せた彼女の顔を覗き込む。

「何となく察しはついてます…… たった一人で……ウロヴオロスの討伐に行ったんですよね……」

アリサの沈んだ声と表情、そして事実……ハイドは何も言えなくなっていました。

「……やっぱりそうなんですね……」

「……どうして、そのことを？」

観念したハイドは、何故自分がウロヴオロスの討伐に行ったことをアリサが知っているのか尋ねた。

「あなたが洗浄作業を受けている頃に、アナウンスが流れてました……『第七部隊がウロヴオロスのコア剥離に成功した』って……第七部隊って……ハイドさんのことなんですよ……？」

「……ああ」

ハイドは「せめて服の着替えを持って行けばよかった」と、自らの失態を悔やんだ。

「ハイドさん……」

なおも話すアリサにハイドが顔を向ける。

「私……あなたのおかげで立ち直れた『あの日』から、いっぱい訓練しました……戦術も勉強したし、偵察任務や防衛任務を受けて、いろんな経験も積んでいます……！」

アリサは膝の上の拳をギュッと握る。

「私じゃあ、まだ頼りないですか？あなたの背中を…守れませんか？」

アリサの言葉をハイドはただ静かに聞いていた。

「頼りないというのなら…もっともっと強くなります…でも、ハイドさんも…もっと私を頼ってくれてもいいじゃないですか…！ハイドさんが前に『力を貸してくれ』って言ったのは…嘘なんですか…？」

頑張っているのに頼られないことが悲しくてアリサは涙を堪える。

（もっと頼ってほしい…か…そう言われてもな…）

あの任務は支部長が直接管理をしてるし、単騎が原則となつては頼るも何もない……が、今にも感情が溢れてしまいそうなおアリサをこのまま放っておくわけにもいかず、とりあえず謝ることにした。

「ゴメンね、アリサ…」

ハイドが口を開き、アリサが彼を見る。

「力を貸して欲しいって言ったのは嘘じゃないよ？それにあの任務は最高機密の任務で、一人で行かないといけないことになつてたんだ…」

「え…そうなんですか？」

若干涙目で小首を傾げてキョトンとした表情を見せるアリサ。

「うん…アリサが最近すごく頑張ってるのは俺も知ってる…頼りないなんてこと、あるはずないよ」

ハイドが穏やかな表情でアリサを見つめるので、彼女の頬は紅く染まる。

「ただ…例え今回の任務に誰かを連れていけたとしても、俺は誰も連れていかなかったと思う…」

「え…？」

ハイドの言葉に疑問を抱いたアリサが聞き返した。

「リーダーになってから、いろんなことを考えたよ…みんなをなるべく傷つけないようにするにはどうしたらいいのか…みんなの負担を減らすにはどうすればいいのか…」

ハイドはアリサを見つめたまま静かに話し続ける。

「あれこれ考えてたけど、どんな方法を選んだとしても『自分が無茶をして他人の負担を減らす』っていう結論になってしまふことに最近気づいたんだ…」

「なっ…そんなの傲慢過ぎです！！そんな考え方は今すぐやめて下さい！！あなた一人で何でも解決できると思ってるんですか！？」

ベッドに身を乗り出してハイドの顔の真正面で怒るアリサ。

荒くなった呼吸を整えた後、ハイドに向き直るアリサ。

「そうそう…俺が馬鹿なマネしたら、そんな風に俺を笑って蔑ましてくれればいいんだよ」

ハイドは明るい笑顔でそう言うが、アリサの表情は対照的に暗くなつた。

「……………自分の恩人に…そんなことできるわけないじゃないですか……………」

「…アリサは優しいね…」

「というか！いくらなんでもアレはやり過ぎです！セクハラで訴えますよハイドさん！」

するとハイドは肩をすくめ、アリサの脅しにまったく動じずに答えた。

「その方が『リーダー取り消し』になっていくらか楽になりそうだね」

「じゃ、じゃあ言いませぬ！本当に取り消しになったらハイドさんが可哀相ですからね！」

軽く受け流されたせい、それとも自分の恫喝に動じなかったせいなのか。「なんだかズルイ」と感じたアリサは頬を膨らませてそっぽを向く。

「私にとってのリーダーはハイドさんだけです…」

「え？なんか言った？」

聞こえないくらい小さな声でアリサが呟いたのでハイドが聞き返した。

「なんでもありません！…とにかく！なんでも自分で抱え込まないこと！自己犠牲の精神はほどほどにしておくこと！いいですね！？」

「…りよ、了解…」

ものすごい剣幕で畳み掛けるようにアリサが詰め寄ったので、思わずハイドは頷いた。

「よろしい」

いたずらっぽく笑うアリサは非常に愛くるしい。

ハイドがアリサの表情にポケットと見とれていると、突然医務室のドアがシュッと開いた。

「ようハイド！ウロヴオロスをたった一人で倒したんだってな？スゲーじゃねえか！！」

「もう完全に差が開いてしまったな…」

「ホントすごいですよね〜！」

入ってきたのはタツミ、ブレンダン、カノンたち第二部隊の面々。
更に…。

「おいハイド！あんな高額な任務受注するならなんで俺を連れていかねえんだよ！」

「冷静になって考えれば、あなたにはまだ無理だと思っわよ？」

「ホンっと金にはうるさいよな……」

カレル、ジーナ、シュンたち第三部隊も入ってきた。

だがそれだけでは終わらない。

「ハイド！ウロヴオロスってどうだった！？強かったか！？」

「怪我の具合はどう？ハイド」

（フン……生きてたか）

コウタ、サクヤ、ソーマたち第一部隊まで入ってきた。

「ちよっ……！」

アリスが何か言おうとするが、それはタツミの言葉に遮られた。

「どうだったよ！？ウロヴオロスのでかさは！」

「ええ、あのサイズまでいくともう近接も遠距離も関係ないですね……技も広範囲に及びますし、ビームまで発射してきましたから……」

ハイドは律儀にタツミに答える。

「倒すのにどのくらいかかったんですか？」

今度はカノンが質問した。ハイドは、うん…と状況を思い出し…。

「だいたい15分くらいかな？」

「うわ〜すごいです〜！」

カノンが目を輝かせると、今度はブレンダンが口を開く。

「俺もまだまだ訓練不足ということだな…せめてウロヴォロスの討伐に行けるほどの実力を身につけなければ…」

「おいハイド！さっきも言ったが、なんでそんな高額な任務に俺を連れていかない！？」

ブレンダンの話が長くなりそうだったので、カレルが横から割って入る。

「すみませんカレルさん…支部長に『単騎で』と言われてたので…」

「なんだと！？」

「まあまあ…それにしても、もう一人でウロヴォロスを討伐できるようになったなんて…リンドウさんを超えるのも時間の問題かしら？」

とジーナが言ったところでまたも扉が開いた。

「あ、リツカ…」

現れたのはリツカだった。何かあったのか、彼女は医務室に入った途端ズンズンとハイドの方へ歩いていく。

やがてハイドの横で腕を組み仁王立ちすると、静かに口を開く。

「ハイド…今日、銃使った？」

ドスの効いた声でリツカがハイドに尋ねる。

「え？」

「今日、銃使ってないでしょ！銃口が汚れた形跡も無いし！オラクルが増減した形跡も無いし！」

わけが分からないといった顔のハイドに痺れを切らしたリツカが怒鳴る。

「……………あ、そういえば使ってなかったかも……」

ようやく理解したハイドがポツリと呟くと、リツカは呆れたように「はあ……」とため息をついた。

「まったく…銃使つてればもう少し軽傷で済んだかもしれないのに………いいハイド？これからは使えるものはフルに活用するんだよ？神機は、装甲だけが身を守る盾っていうわけじゃない…剣も銃も…自分と他人を守るために戦う術を与えてくれる、盾の一つなんだからね！」

リツカの言葉にハイドはポカンとした表情になっていたが、やがて

微笑んだ。

「うん…そうだね！ごめんリツカ…ありがとう」

するとリツカも笑顔になり、組んでいた腕をほどく。

「うん！分ければよろしい！」

そんなやり取りを後ろで聞いていたコウタは感嘆の声を上げた。

「す、すげえ……………」

「？何がすごいんだコウタ」

タツミが首を捻って後ろにいるコウタの方を向いた。

「だってさタツミさん！リンドウさんは旧型近接神機でウロヴオロスを倒したんだろ！？ハイドも銃を使わずに倒したってことはさあ……………！！！」

この瞬間、コウタの言わんとすることをその場にいた全員が理解した。

彼は要するにハイドとリンドウが、「強さ」という点ではほとんど同じ場所に立っているということが言いたいのだ。

「同じじゃないよ」

みんなが何かしらのリアクションをとる前にハイドが自ら制止した。

「リンドウさんは何食わぬ顔で帰ってきてた…怪我もすることなく、
疲れた様子も見せずに」

「それでも…凄いことよハイド？十分誇っていいわ」

サクヤがそう言ったとき、またも扉がシュッと開いた。

今度は三人の見慣れない顔のゴツドイーターたちだった。観察班、
あるいは医療班あたりの人間だろう。

三人とも女の子で、そんなに広くない医務室の人口密度の高さに気
圧されているようだが、一人の子が勇気を出して口を開いた。

「あ、あの！ハイドさん…ウロヴオロスを倒したんですよね？おめ
でとつございます！」

「え？あ、ああ…ありがとう」

人海の隙間からかろうじて見えた真っ赤な顔で話す女の子に礼を言
うハイド。

「そ、それで…その…あの…ち…ち…」

「ち…？」

ハイドが首を傾げると、女の子は意を決して彼の前まで進み出た。

「さ…サイン下さい…！」

「えー？え、え」と…」

両手で差し出された白い色紙と黒いペンに面食らうハイド。

「うん…書いてもいいけど、価値ないよ?」

「いいんですか!?!」

頷くとハイドは色紙とペンを受け取った。

「コードネームでいい?」

「はいっ!?!」

サラサラとペンが紙の上を滑る音が医務室に流れる。

「…h…y…d…e…っ」と

色紙とペンを受け取った女の子は、花が咲き誇るような笑顔を見せた。

「ありがとうございます!!それで、あの…あの子たちも…」

振り返った先には期待したような表情で待っている女の子二人…。

「いよいよ」

「やった〜!」

「ありがとうございます!」

二人の分のサインも書いて渡すと、三人はもう一度頭を下げて医務室から立ち去った。

「だんだん人気者になってきたなハイド……」

コウタが恨みがましい視線を送ってくるが、それをアリサが遮る。

「さあ皆さん！長居は無用です！ハイドさんは怪我をしているんですから、安静にしてあげないと後々響きますよ！」

「おう、そうだな」

頷くタツミたち。だが、それだけで医務室を去ろうとはしなかった。

「ハイド、後でサインよこせ」

そう言ってきたのはカレルだ。

「え？」

「お前のサインが欲しくても自分からはなかなか貰いに行けないって奴に売れそうだからな」

シレッと言いきったカレルにシュンも便乗する。

「おー！そういうことなら俺も貰ったところかな？」

「……………」

コウタまで便乗しそうな気配を感じたアリサは、医務室の掃除道具

が収納されているロッカーへ行き、中からおもむろに箒を取り出した。

そして…。

「いい加減に…してくださあぁあぁあぁい！…！」

ペペーンといい音が響き渡り、カレル、シュン、コウタが医務室から掃き出された。

(安静にしてなさいって言われてから早1時間…全然安静にできてないな…。あと、全然『最高機密任務』じゃないぜ支部長……………まあ皆が来てくれて楽しいから、回復にはいいかもな…)

アリスと口論を繰り広げる三人と、それを見て笑う皆を見て、ハイドも静かに微笑んだ。

「あぁつくしゅっ！…！」

その頃、支部長室でくしゃみをして「風邪でも引いたか？」と考えるに耽るシツクザールの姿があった。

四十五喰：壞眠療法（後書き）

最近少しずつ更新の感覚がズレていることが気になってます。

もう少し頑張って書かねば…。

では、ご意見・ご感想お待ちしております！

四十六喰：リツカちゃん人形（前書き）

タイトルはただの遊び心です。

別にリツカが着せ替えられるわけではありません。

四十六喰：リツカちゃん人形

整備場から少し離れたところにある、整備班区画の一室………自室兼作業スペースとなっているリツカの部屋。

普段は工具やら部品やらが散乱しているが、数日前から色とりどりの布やらリボンやらが無造作に置かれている。

その中心にリツカが座り込み、チクチクと針を通していた。

「ふっふっふ…明日は楽しみだな〜…」

………なんだか表情が怪しい。

彼女が何を考えているのか知る者はなく、ただ夜が更けていく。

ハイドたち第一部隊の一行は、シオの様子を見に行くためにサカキ博士の研究室に向かっていた。

何気にソーマも毎日通うようになった。その影響でシオの天使のような笑顔にさらに磨きがかかり、中毒性の高い「癒し」にハイドたちはすっかりハマってしまっていた。

研究室の扉を開くと、サカキが迎え入れる。

「やあ、今日も来てくれてありがとう！」

「毎日毎日、お仕事中にすいません…」

ハイドが申し訳なさそうにサカキを見ると、彼は手を顔の前でヒラヒラさせた。

「いやいや、実のところここ最近のこの部屋の人口にすっかり慣れてしまつてね…一人だと寂しさを感じるようになってきたんだ。まあ、気にせずいつでも立ち寄ってくれ！」

シオもその方が喜ぶと思うしね、と付け加えてサカキは奥の扉を開く。

「みんなー！よくきたなー」

ハイドたちを見るなりパアツと明るい笑顔が広がる。

「シオちゃん！はあ…今日も可愛い…」

「きゃあ〜」

アリサがシオを抱きしめて頬をすりすりした。シオも楽しそうな悲鳴をあげる。

「そーま！あそぼー！」

アリサから解放されるとシオは即座にソーマに抱き着いた。

注目的になり、顔が赤く染まる。

「断る…あと、くつつくな…！」

「遊ぶくらい別にいいじゃんか、ソーマ」

コウタの声にソーマが何か言おうとするが、畳み掛けるようにハイドたちが口を開いて押し込める。

「そうよ、ソーマ。女の子には優しくしないと」

「なっ…！」

「ホントですよ！だいたい、あなたとシオちゃん二人きりのときは、いつも仲良く遊んでるじゃないですか」

「おまつ…！」

「まだ駄々をこねるなら、ハイドが隊長命令下すことになるぜ？ソーマ」

「テメエ…！」

サクヤ、アリサ、コウタに窘められるソーマを見てクスクスと笑うハイド。

「ふふ…ソーマも大変だね」

コンコン…。

シオを引きはがすことを諦めたソーマが舌打ちをしたのと同時に、研究室の扉の向こうから誰かがノックする音が聞こえてきた。

「…どうやら、リツカくんが来たようだね」

扉の上に仕掛けてある監視カメラで外の様子を確認したサカキが、キーボードを操作してセキュリティロックを解除する。

だいぶ前からすでに搭載されていたシステムだが、サカキは今までほとんど使ったことがなかった。

特に隠さなければならぬようなものなど無かったからだ。

せいぜい、シックザールがやって来た時くらいにしか使っていないかったが、シオを匿うようになってからは研究室を訪れる人間に注意を払うようになっていた。

「やつほ！みんな、プレゼント持って来たよ〜！」

そう言いながらリツカはたくさんの箱を山積みにした台車を押して入ってきた。

「おおっ！何々!？」

コウタが興味津々で食い入るように箱を見る。

「すごい量ね〜…」

「けっこう頑張って作ったんですよ？ちゃんと着て下さいね！」

二カツとサクヤに微笑むリツカの言葉に、ハイドが反応した。

「着る？服を作ったの？」

「うん！まあ、とにかく着てみてよ！まずは…はい！コウタくんから！」

台車に載っている箱の一つを手に取り、コウタに差し出すリツカ。

「え？俺からのの？」

箱を受け取りながらコウタが聞き返した。

「うん！きつと気に入ると思うよ！」

「はあ…」

よく分からないといった表情で箱を見つめるコウタにサカキが声をかけた。

「コウタくん、奥のシオの部屋を使って着替えるといいよ」

部屋を勧めるサカキに頷いた後、コウタは箱を持って部屋へ向かう。そのまま扉の開閉スイッチに手を伸ばしたとき、リツカが声を張り上げた。

「ああ！そつだ、もう一つ！」

「？」

声の大きさからしてこの場にいる全員に伝えることだと感じた第一部隊とサカキはリツカの言葉の続きを待つ。

「作った私からのお願いってどうか…服を着替えて出て来たとき、
『その服に似合う台詞』を言ってほしいんだ」

「台詞…ですか？」

アリサが言葉を繰り返すとリツカが頷いた。

「ただ着て終わるんじゃないしね！じゃあコウタくん！みんなのお手本になってね？」

「うーん…？まあ…じゃあ、とりあえず着替えてくるよ」

リツカの意図が分からないままコウタはシオの部屋に消えていった。

「それにしてもリツカ…なんで急に服を？」

ハイドが尋ねるとリツカはシオを見ながら答えた。

「実は、シオちゃんの服を作ってから完全にハマっちゃって…みんなに普段と違う服着せて遊びたくなっただけ」

ニコニコとしながら話すリツカに「やれやれ」と溜め息を漏らす八
イド。

と、その時だった。

「うおおおおおおお！！！リツカさん！この服ってもしかして……
！！！」

コウタの叫び声にニヤリと笑みを浮かべたリツカは、彼に聞こえる
ように大きな声で返事した。

「そうだよー！台詞、忘れないでねー！」

しばらくしてコウタが部屋から出てくると、全員目が点になっていた。
た。

コウタは左手を腰に当て、遙か彼方を指差して高らかに言った。

「行くぜジヨニー！！俺達のレースはここからだ！！」

『……………』

「おおっ！以外と似てる！！」

リツカからのみ高評価を貰ったコウタは顔を綻ばせる。

「そう？リツカさんもそう思う？」

「うん！バッチリだよ！」

(ジヨニー……………ああ！バガラリーの…)

そう、コウタの服は願いを一つだけ叶える方舟を目指して主人公たちがレースに身を投じるといふ旧時代の娯楽映像作品『バガラリー』の主人公、イサムの服なのだ。

ウエスタンテイストのコーディネットに身を包んだコウタは、まさに今『イサム』となっていた。

「いやあ〜リツカさんマジで最高だよ〜！！ちよっ！誰か写真写真！！」

完全にテンションが上がっているコウタをサカキのシャッターが捉え、その間にリツカは次の箱をサクヤに渡した。

「次はサクヤさんの番ですよ〜」

「オツケイ！」

ウィンクして箱を受け取ると、サクヤはシオの部屋へ入っていった。

「似合うなコウタ」

「やめるよハイド〜何にも出ないぜ!？」

………そうとう舞い上がっているようだ。ハイドの言葉に破顔してしまうコウタを見て、アリサが少々引いていることに気づかない。

そうこうしている内に扉が開き、中からサクヤが現れた。

「ニーハオ〜！」

サクヤは赤いチャイナドレスを身に纏って、かつて「中国」と呼ばれた国の挨拶をする。

「うわぁ〜お！良いですよサクヤさん！」

リツカの拍手喝采を受け、サクヤは改めて自分の服を見直した。

「いい服ね〜…気に入ったわ〜！露出もいい具合ね！」

『えっ?』

ハイドとコウタがサクヤの言葉に耳を疑った。

(この人…今まで露出度の高さで服選んだのか…?)

太もみをチラリと見せるチャイナドレスはサクヤのハートを射止めたようだ。

サカキがシャッターを切る毎にポーズを変えている。

次にリツカはシオがくつついているソーマの前に来て箱を差し出した。

「……………なんだ？」

素知らぬふりをするソーマに「ふう……」と溜め息をついたリツカは彼の袖を引っ張って耳に口を近づけ、何やらヒソヒソと耳打ちした。

何を言われたのか、ソーマの身体がビシッと固まったかと思うと、引ったくるように箱を受け取って奥の部屋に消えた。

「ねえ、リツカ…」

「ん？なに？」

ハイドがリツカに右手を添えて小声で話しかけた。

「ソーマに一体何を言ったの…？」

「ふふ…ヒ…ミ…ツ！」

ソーマの何を知っているというのだろうか…怪しい笑みを浮かべるリツカが少々恐ろしく感じるハイド。

と、その時扉が開いて中からソーマが不機嫌な顔で出てきた。

「……………」

「ソーマ、台詞！」

何も言わないソーマにリツカが催促するが、それでも口は固く閉じたままだった。

「はあ……………みんな！実はソーマはねえ……」

「まで！！……………わかった、言えればいいんだろ……」

苦渋の決断をしたソーマは深呼吸をして覚悟を決めた。

「……………シオお嬢様……紅茶の用意ができました……」

割と綺麗な会釈をするソーマ。

『……………』

呆然としているハイドたち。

「はい！よく出来ました〜」

リツカのOKサインをもらえて、ソーマはようやく肩の力が抜くことができた。

「なーりつかー！『おじょうさま』ってなんだー？」

「ん？お嬢様ってなのはね…」

「説明しなくていい！」

シオに説明しようとするリツカをソーマが慌てて止めに入る。

彼が今着ている服は、主に仕える者の証明…執事服だった。

しばらくして第一部隊に笑いの波がドツと押し寄せた。

「あははは！キャラが全然似合わねえ！あははは…！」

「クスククス…わ、笑っちゃ駄目じゃないですかコウタ…ふ、ふふふ…」

「あゝ可らしい…ふふふ…」

コウタ、アリサ、サクヤたちが腹を抱えて笑うのでソーマは顔を真っ赤にしてプルプルと震えていた。

「なー『おじょうさま』ってなにー？」

「お前は知らなくていい！」

やけっぱちになっているソーマをサカキがバッチリカメラに収めていた。

「ふふ…さあ！お次はアリサの番だよー！」

あと二つ残った箱の一つをアリサに渡すが、受け取った瞬間に彼女は怪訝な表情になった。

(あれ…なんか、重い…?)

少し気になったが、『ちよつと重い服が入っている可能性だってある』と考えたアリサは、シオの部屋へと向かう。

「……………え?なんでリツカさんまでこつちに?」

一緒にリツカが部屋に入ろうとしたため、アリサが尋ねた。

「ああ、一人じゃちよつと着れない服だしね……………お手伝いだよ!」

「そうですか…すみませんわざわざ…」

「気にしないで!さ!行くよ!」

そう言つてリツカはアリサを引つ張つて部屋に入つていくが、この時…ハイドたちは疎か、アリサですら気付いていなかった。

リツカの表情がこれまでで1番怪しいものになっていたことを…。

「時間かかるな…」

二人が部屋に閉じこもってから約20分が経過した。

なかなか出て来ないリツカとアリサに少々待ちくたびれたといった表情で文句を垂れる。

すると、ようやく終わったのかアリサが部屋から出てきた。

その姿にハイドたちは言葉を失い、「どこがおかしいのかな？」とアリサは自分の格好を見直した。

「あ、あの…やっぱり、ロシア育ちの私には似合いませんか…？」

「……………うっん！そんなことないよアリサ！すごく似合ってるじゃないか！」

「…すっげえ…豪華…」

「何も問題ないわアリサ！似合ってるわよ」

「……………」

「ふむ…実に興味深い」

ハイドの絶賛に頬を紅くそめたアリサは、その後も続く称賛の聲にますます紅くなる。

アリサが着ていたのは、豪華な装飾を施された赤い振袖だった。

ローズグレイの髪も結わえてあり、いつもとは違った雰囲気となっ

ていた。

「あれ？台詞は？」

着替えて出てきたのにアリサは約束の台詞を言ってない…。

コウタの疑問にリツカが答えた。

「ああ、この服は印象的な台詞がないからね！私が言わなくていいって言ったんだよ」

「え、なんでアリサだけ」

台詞を言わなくていいことにアリサは心底ホツとしていた。

コウタに何言われるかわかったものではないし、何よりハイドに見られるというのは堪えられない…。

しかし、そんなアリサの気持ちなどリツカの言葉であっさり打ち砕かれることになる。

「そう、『この服は』ね！」

『へ？』

アリサとコウタが間抜けな声を漏らすとサクヤが聞き返した。

「『この服は』ってことは、まだあるの？」

「はい！アリサにはこれ以外の服で台詞を言ってもらいます！」

「ええっ!?!」

アリサは相当焦っているがリツカは気にせず手を引つ張って奥の部屋へ入っていった。

それから10分後にアリサが再び出てきた。今度は濃紺のワンピース、白いフリルがついたエプロンとカチューシャという姿で…。

やはり美少女は何を着ても似合うのか、ものすごく様になっていた。

「うう…い、いらっしやいませご主人様…」

「……………」

顔を真っ赤にしたアリサにご主人様と呼ばれたハイドは照れ隠しで顔を背けた。

「いいね〜いいね〜!ハイドの照れがいい具合だね〜!んじゃあ次行ってみようか〜!」

「ええっ!?!まだあるんですか!?!」

またもリツカに手を引つ張られ、アリサが「もう勘弁してくれ」といった声を上げるが、リツカは聞く耳を持たない。

「と〜ぜん!?!」

アリサはそのまま部屋に連れ込まれ、数分後…。

「次はコレだー!!」

今度は赤いビキニ姿のアリサがリツカに背中を押されて飛び出してきた。

「ちょ、ちよつとっ！リツカさん!!これはいくらなんでも!!」

「……………」

「……………」

「いやああああああ!!見ないでえええ!!」

ゴス！バキ！

「じゅっ!!」

「ぐはっ!!」

アリサの水着姿にコウタとソーマの目がくぎ付けになり、彼らは恥ずかしさが限界に達したアリサの拳をまともに食らうことになった。

KOされた二人をハイドが部屋の隅に運んでいる間にまたもリツカに引っ張られてアリサが連れていかれた。

「さあドンドン行くよー!!」

四度目の登場。今度のアリサは、真っ白な無地のTシャツとソックス、運動靴に濃紺の…。

「ちょっとリツカさん！これブルマ…！」

「うん！お約束でしょ？さあてお次は…！！！」

「また…！？」

その後も、ゴスロリ服のアリサ、スクール水着のアリサ、バニーガールのアリサ……。

「ぜえ…ぜえ…」

「さあ、次は『エプロンのみ』身につけて…」

「却下です！！！」

アリサがハイドにだけは見えないよう鬼の形相でリツカに詰め寄る。

「冗談だよ。今ので終わり！」

リツカの言葉に脱力し、床に座り込むアリサ。

「お疲れ様アリサ！ちゃんと全部着てくれてありがとう！作ったか
いがあったってもんだよ」

そしてリツカは最後の箱を手に取り、ハイドの前に来た。

「はい！最後はハイドだよ」

「やらないわけにはいかないか…」

みんなちゃんと服を着た上、アリサが散々着替え直しているのに自分だけやらないわけにはいかない。

どんな服が用意されているのかは知らないが、さっさと着替えて終わらせよう…と、箱を受け取ってハイドはシオの部屋に向かう。

「あっ！ハイド…！」

「ん？なに？」

ハイドがスイッチに手を伸ばした時にリツカが呼び止める。

「ハイドの台詞は最初から決めてあるんだ！中に台詞が書いてある紙が入ってるから、それを言ってね」

「この中に？…うん…わかったよ」

そしてハイドは部屋の奥に消えた。

「まったく…ヒドイ目に逢いました」

「あはは！ゴメンゴメン！」

アリサが愚痴を零し、リツカがまったく誠意のない謝罪をする。

「だいたい！なんで私だけあんなに服があつたんですか！？」

「面白いから」

即答するリツカに固まるアリサ。

「アリサは可愛いスタイルも良いしね…」あれ着せたいな…これ着せたいな…」って色々作っちゃって…気がついたらアリサの服が極端に増えてみんなの服が少なくなつてたよ…アハハ！」

アリサがガツクリと肩を落とすと同時に部屋の扉が開いた。

「……………」

ハイドは黄色い柄のナイフを持っていた。それを逆手に構えて一言。

「生きているのなら、神様だって殺してみせる！」

「……………」

サクヤもアリサも、復帰したソーマとコウタもみな言葉を失っていた。

まず彼の髪に面影がなかった。日に当たれば綺麗に輝く金髪は、黒くなって全て下ろされている。

毛先がまとまってツンツンしていた髪型も、乱雑に切り揃えられたオカツパのような髪型に変わっていた。

服は青い着物の上に赤い革ジャン。かすかに見える足は革のブーツに包まれている。

構えをといた後、彼はリツカの方を見た。

「ねえリツカ…何…？このカツコ…」

「いや〜素晴らしい！！様になってるよハイド！」

リツカは絶賛するが、彼女以外は全員訳がわからないといった表情だった。

「あの…リツカさん…ハイドさんも言いましたけど…何ですか？あのコーデイナート」

アリサがリツカに尋ねると、ハイドをジロジロ見ながら答えた。

「この衣装は、昔この国で出版されて強烈な印象を残した、とある伝奇小説の主人公のものだよ！映画化もされたヒット作品で、ターミナルでたまたま動画を見つけてね！その主人公、女の子なんだけど…ホラ、ハイドって中性的な顔してるしイケるかなって思ってた！」

「それにしても、和と洋がごっちゃになってて…なんかおかしくない？」

コウタの感想を聞いたリツカはすぐにそれを否定する。

「そんなことないよ？サカキ博士だって、着物の上にインバネスコート着てるし…」

「ふむ…かなり興味深い…ハイドくん、悪いけどもう一度ポーズ取ってくれないかい？」

言われるがままハイドはいくつかポーズを取り、サカキがそれに合わせてシャッターを切る。

「みんな今日はありがとう！服は私からのプレゼントだよ！」

ようやくコスプレ会が終わってホッと胸を撫で下ろすと、アリサはサカキにこっそり耳打ちした。

「あ、あの…サカキ博士…」

「？」

「さっきの写真焼き増しして、私に下さい…お願いします」

「…ああ、いいよ」

こうしてアリサは、珍しいハイドのコスプレ写真を手に入れることに成功したのだった。

四十六喰：リツカちゃん人形（後書き）

書き上げるのに少々時間がかかってしまいました。

最近ミスの修正を少しずつ直していたので余計に…。

小説内でのコスプレは、個人的にやって欲しかったものです…アニ
メーション会社の繋がりで。

四十七喰：シグナルチェイサー（前書き）

リンドウの腕輪を追って、風の中、雪の中…めげずに戦うハイドたちの話です。

風も雪もそんなに強くはありません。

四十七喰：シグナルチェイサー

ある日のこと…ハイドたち第一部隊は、ツバキの呼び出しを受けてエントランスの出撃ゲートの前に集められていた。

「300秒以内に集まるように」と言われたことから、ハイドたちは「どうやら緊急ミッションが入ったようだ」などと憶測を立てていた。

その時、コツ、コツ、と軽い音がエントランスに響く。

不真面目な隊員が聞くと震え上がるといふヒールの音を鳴らし、指定時間ピッタリに現れたツバキは、彼らの予測通りのミッションを言い渡す。

「今回のターゲットから…前リーダーの腕輪らしき信号が確認された。目下調査中だが、おそらく…先の戦いの相手だろう」

ツバキの言葉にハイドたちの目は見開かれた。

リンドウが無念の死を遂げたあの日のことを一気に思い出す。

「苦しい戦いになるかもしれないが、現状の戦力を鑑みて、勝てない相手ではないと判断した」

そう…アリサやサクヤ、コウタは、あの日を境にどんどん強くなっていた。

ハイドに至っては、一人でウロヴォロスを討伐できるようになった。

勝算は充分にある。

だがツバキは、いくら勝算があると言っても、一つの懸念がどうしても拭いきれなかった。

それは、サクヤとアリサの…リンドウを殺したアラガミに対する復讐心だ。

幼い頃からの付き合いであり、長年想い続けたリンドウをアラガミに奪われたサクヤが…そのアラガミを目の前にして、きつと憎しみを抱かすにはられない。

アリサも…リンドウをあゝの教会に閉じ込める原因を作ってしまったとして、表には出さずに悔やみつづけていたはずだ。

この任務にかける二人の想いは相当なものになるだろう…。

そう考えるツバキ自身も…たった一人の血の繋がった家族を奪われ、自ら捜索に向かうこともできなかった。

だが、決してその悔しさをハイドたちに押し付けたりなどしない。自分の感情を背負わせ、隊員を危険にさらすからだ。

リンドウの世話になった者たちが大勢いることは知っている。

その者たちに、死を近づけるわけにはいかない…。

「仇などという雑念を混ぜるな！くれぐれも慎重に戦いを進める！いいな？」

まるで、自分自身に言い聞かせるように命令するツバキ。

「はい！」

ハイドが了解の返事を返したとき、サクヤが俯いた。

「リンドウ…やっと…やっと…」

そう小声で呟くサクヤは、アリサと目が合つと互いに頷き合い、任務へ向かう準備を早々に始めた。

時刻は午後7時を回ったところ…月明かりが辺りを照らし、雪が降り積もった廃寺にハイドたちは降り立った。

誰も、いつものような軽口を交わさない…というより、交わすような余裕がない。

特にサクヤとアリサは、今まで見たことがないほど入念に神機をチエックしていた。

無理もない…と、ハイドは思う。

リンドウを殺したアラガミに、自らの手で裁きを下すことができる…その瞬間をサクヤがどれほど待ち望んでいたことか…。

アリスも許しをもらえたとは言え、自分のせいでリンドウをあつアジュラと戦わせて死なせた、という罪に未だに苛まれていた。

夢に見る度、辛くて泣いていた…ツバキやサクヤに申し訳が立たなかつた…。

その夢に終止符を打てる…その罪の一つを償うことができる…。

彼女たちの今日の任務に対する思い入れは人一倍強かつた。

「……………そろそろ時間だ！各員、任務開始位置につけ」

リーダーという立場がだんだん様になってきたハイドの呼びかけに頷き、アリス、サクヤ、コウタは位置についた。

「…それじゃあ、ミッションを開始する前に皆に聞いてほしいことがある」

ハイドの言葉に、サクヤたちは彼を注視する。

「出撃前にツバキさんも言ってたけど…復讐や仇討ちという考えは忘れてくれ。神機を握る力に余計なものは混ぜないこと！いつも通りの戦いを意識するんだ！いいね？」

三人が頷いたのを見て、ハイドは時計を見た。

「…ちょうど開始時刻だ。ミッションスタート！索敵開始！」

ハイドの合図で、四人は高台から廃寺の細道に降りた。

ハイドとアリサ、コウタとサクヤの二手に分かれて寺院を進んで行く。

ハイドは前方を探索している間も、後方に位置して背中を守ってくれているアリサの動向に注意を払っていた。

彼女を信用してないわけではないが、任務開始前の様子が明らかにおかしかったからだ。

やはり「意識するな」など、言うだけ無駄なのかも知れない。

今のアリサは、リンドウに対する償いの感情に突き動かされていた。

（リンドウさん…あなたが死んだのは私のせいです…私が弱かったせいで…あなたを死なせてしまった…その責任は…必ず取ります…！）

アリサの瞳が揺らいでいるのをハイドは見逃さなかった。

「アリサ！」

「…は、はい！何ですか？」

突然声をかけられたことに驚くアリサ。

「『私情を挟むな』ってというのは、やっぱり無理か？」

「えっ？あ…ええと…その…」

「……………無理なんだね？」

「……………」

何も言えなくなったアリサを見てため息をつく。

「…仕方ないよね…サクヤさんもアリサも…強がってるけど、きつとツバキさんも…はじめをつけたいのは皆同じなんだよね」

「…はい…私は、リンドウさんの仇を討つまでは、ふっ切れそうにもありません…」

静かな声でアリサはハイドの背中に言う。

「そっか…じゃあ、アリサは仇を討った後ふっ切れて、リンドウさんのことを何事もなかったかのようにして過ごせるの？」

「！そんなこと、できるはずないですよ！」

「なら、ふっ切れていないんじゃないか？」

「っ……………」

ハイドの言葉にアリサは押し黙ってしまった。

「持論だけど、多分…『ふっ切れた』なんてのは大概、勘違いなんじゃないかな？リンドウさんの仇を討って…ツバキさんもサクヤさんもアリサも…みんなその苦しみから解放されるとは俺は思えない」

「……………」

「人間はいつまでも同じことに悩まされ続ける生き物だと思うんだ…残酷だけど、きっとアリサのその苦しさや悩みも、一生君を縛り続ける…」

周囲に気を配りながら淡々と話すハイドをただジッと見つめるアリサ。

「私のこの苦しみは…ずっと続くんですか？……………いえ、そうですね…仇を討ったところで、リンドウさんは帰ってこないですよ…私の苦しみが、終わるはず…ないんですよね…」

「うん…辛いけど、その苦しみとは一生向き合っていかなきゃいけない」

ハイドは立ち止まってアリサの方を向く。

「逃げ出したくなる時も来ると思うけど……………君も含めて俺達は…リンドウさんに生かされた…自分の命を差し出して、俺達に『生きる』と言ってくれた…だったら俺達は生き残らなくちゃいけない…生きて、彼の意思を継がなくちゃならない」

アリサはあの教会での一部始終を思い出していた。瓦礫の壁の向こうから、リンドウに『全員必ず生きて帰れ』と言われたあの時のことを。

「アリサ…今日の任務で生き残るために、俺達がしなくちゃならないことは何？」

ハイドに尋ねられたアリサは考え込むが、答えを返せなかったためハイドが再び口を開く。

「それは、任務の最初に言ったのと同じことだよ……。私情を挟まないこと……怨みや憎しみ、復讐心を込めた剣は自分や他人を傷つけるだけだし、何より自ら『死』に近づいてしまう……それは、生きると言ってくれたリンドウさんの気持ちを無下にしてしまう行為なんだ」

「……………！」

「ツバキさんもそれが分かかって言ったんだと思う……だからアリサ……リンドウさんやツバキさんの気持ちを無駄にしないためにも……生きよう」

「……………はい！」

それは、新たな決意と覚悟に満ちた少女の顔だった。

（ああ……私、リンドウさんへの罪の意識を軽くしたいだけだったんだ……悩んで、辛くて、苦しくて、逃げ出したい一心で……）

ハイドの話を要約すればそんなに難しいことは言っていない。ただ当然のことを言っただけなのだ。それなのにアリサの心は、背負っていたカバンを降ろしたようにいくらか軽くなっていた。

（何を悩んでいたんだろう、私は……こんなに単純で当たり前のことを、ハイドさんに言われるまで気づかないなんて……）

そう、仇討ちに成功したところでリンドウは帰ってこない……これは

真実だ。

憎しみなど負の感情に囚われ周りが見えなくなった剣は、大切な仲間すらも傷つけ自分を死に追いやる…これも真実だ。

自分が関わったことでリンドウを死に追いやったあの日に、一生苦悩し続けることも…全て、真実なのだ。

「すみません、ハイドさん…軽率でした…」

「うん、よろしい」

アリサが頭を下げて謝るとハイドは即答で許す。

「まあ、どうしても辛くなったら俺を頼ってね…まあ、普段あまり人に頼らない俺が言うのもなんだけど…アリサの苦しみくらいなら一緒に背負ってあげるられるからさ」

「!?!」

優しい笑みを浮かべたハイドに言われたアリサの顔は、ボン！という音が聞こえてきそうなほど急激に茹で上がった。

「え、あ…あつ…」

口をパクパクさせるアリサ。雪が積もっている場所なのに、手で頬に触れると熱を感じた。

…なんでそんな恥ずかしいセリフを簡単に言えるんだろうこの人は…。

アリスがそんなことを考えたとき、寺院に爆発音が響く。

『！』

二人はすぐに思考を戦闘モードに切り替え、表情を固くした。

「行くぞアリス！」

「はい！」

二人はすぐに駆け出し、爆発が起きた場所へ向かった。

「食らいなさい！！」

サクヤの放ったレーザーは、美しい曲線を描いて氷雪の女帝を貫く。ヴァジュラ上位種、プリティヴィ・マータ……リンドウが姿を消した日から急に現れはじめたヴァジュラで、人間の女性のような人面を持ち、氷でできた鎧を身に纏っている。

繰り出される攻撃も、氷の棘を精製して飛ばしたり、氷塊を足元から出現させたりと氷雪系の強力なものばかりである。

データ上、生命力や体力という面ではヴァジュラに劣るが、それを

補うようにたくましい筋肉が目立ち、戦いにおける強さを表していた。

プリティヴィ・マータの弱点である高熱を帯びたサクヤのレーザーは、その肉体に確実にダメージを与えていく。

が、しかし…。

「ゲガガガガガ！！」

大して怯むこともなく、プリティヴィ・マータは独特な咆哮をあげ、氷棘を飛ばしてくる。

「くっ！」

サクヤはギリギリでかわすと、Oアンプルを飲んで再び怒涛の攻撃を始める。

「サクヤさん！最初から飛ばし過ぎだよ！！！」

コウタがプリティヴィ・マータの側に張り付いて散弾をばらまきながら声を張り上げた。

しかし、今のサクヤは人の話を聞く耳など全く持たず、次々とOアンプルを消費してレーザーを撃ち込んでいく。

その表情には、『殺す』という彼女の感情が剥き出しになっていた。

（サクヤさん…完全に頭に血が上っちゃってる…！このままだとマズイ！）

サクヤはプリティヴィ・マータの背中を見つけるなり、いきなりレーザーを撃ち込んだ。

事前に決められた作戦ではより万全を期すために信号弾を使い、全員が合流してから交戦という取り決めだった。

しかし、サクヤはそれを無視して信号弾も使わずに交戦してしまい、コウタは戸惑っていた。

どうしたものかと頭を抱えたその時、ハイドとアリサが合流した。

「加勢するぞ！」

ハイドはコウタの脇をすり抜けてプリティヴィ・マータの懐へ飛び込み、愛刀の発熱ナイフでその胴体を切り刻む。

鉄をも溶かすと謳われる高熱の剣に驚いたプリティヴィ・マータは、背を向けて逃げ出した。

「逃がさない……!!」

サクヤはプリティヴィ・マータの眼前にスタングレネードを炸裂させる。

まばゆい光が女帝の視界を奪い取り、その隙にサクヤはレーザーを撃つ。

ここでサクヤは最後のOアンブルを使用し、オラクルを回復させるが、射撃ペースを落とさなかったため、それはすぐに消費されて尽

きてしまった。

引き金を引いても、カチンツという金属音しか鳴らなくなり、サクヤは軽く舌打ちをする。

「サクヤさん！落ち着いて下さい！」

プリティヴィ・マータを捕喰してバーストを発動したハイドがなだめようとしますが、聞き入れようとしない。

それどころか…。

「ハイド！アリサ！Oアンプルを渡して頂戴！！コイツは私が仕留める！！！」

「えっ！？」

アリサは普段、大人のお姉さんの余裕を感じさせ、戦闘において冷静沈着なサクヤがこれほどまで勝手な物言いをしたところを見たことがなかった。

「アリサ！渡して！」

なおも手をアリサに伸ばしてOアンプルを要求するサクヤ。

「できません！」

「！？」

炎がほとばしるバレットをプリティヴィ・マータに連射しながら拒

否するアリサに、サクヤは怒りをあらわにする。

「渡しなさいと言ってるでしょ!?!」

「今のサクヤさんには渡せません!?!」

二人が言い争いをしている隙に、プリティヴィ・マータが力を溜め込む。

するとプリティヴィ・マータの顔の前に雪が集まり、圧縮、凝固され、当たれば致命傷に至る巨大な氷の棘が現れた。

それはクルクルとドリルのように回転し、サクヤに向けて放たれた。

「サクヤさん!?!」

「危ない!?!」

「!?!」

アリサとコウタが声を上げた時には、氷の棘はサクヤの眼前にあった。

(リンドウ…!?!)

ギョツと目を瞑るサクヤ。

この光景を見た誰もがサクヤの死を覚悟したことだろう。

だがしかし、その氷はサクヤに当たることはなかった。

横から飛び出してきたハイドがサクヤを庇うように飛び込んだのだ。二人はそのまま雪に見を投げ出し、慣性にしたがって進み、引きずった跡を残して停止した。

「コウタ！一度撤退だ！」

「！わかった！」

ハイドの声に頷いたコウタはスタングレネードを投げつける。

強烈な光が収まってプリティヴィ・マータが目を開いた時には、すでにハイドたちの姿はなかった。

「はあ…はあ…ここまでくれば大丈夫でしょ」

コウタが息を切らして膝に手をつく。

プリティヴィ・マータが一体だけギリギリ通れるか通れないかの道に入り込んだハイドたち。

アリスは後ろからプリティヴィ・マータ追ってこないか、銃を構えて見張っていた。

「…なんで渡してくれなかったのよ…」

雪に手をついて顔を伏せたまま、サクヤが震えた声で言った。

「サクヤさん…今のあなたは、チームの戦力になっていません。これ以上あんな戦いをするというのなら、あなたにはしばらくここで待機してもらいます」

ハイドの言葉に唇を噛み締めたサクヤは、立ち上がってハイドに思い切り反論しようとした。

しかし、口を開いたところで言葉が続かなかった。

ハイドの左頬は、ぱっくりと裂けて夥しい血が流れていたのだ。足元の白いキャンパスには赤い水玉模様が一つずつ描かれていく。

「……………アリサ、コウタ…しばらくサクヤさんを頼む」

『え?』

穏やかな表情でそう言うと、カタカタと震えているサクヤをそのままに、神機を肩に担いでハイドは来た道を戻る。

「俺は先にあの猫とじゃれ合ってくる…サクヤさんが落ち着いたら合流してくれ」

「でもハイド…その怪我じゃ…」

コウタが止めようとするが、伸ばした手はハイドに押し止められた。

「俺のことなら心配いらぬ。ウロヴオロスの方の方がまだ酷かったから、大丈夫だよ。……アリサ…わかってるね？」

「…はい」

アリサが頷いたのを確認して、ハイドはプリティヴィ・マータの下へ向かった。

それと同時にサクヤは脱力し、地面にぺたりと座り込んでしまった。

アリサはサクヤの前に屈んで口を開く。

「サクヤさん…私が、ハイドさんに言われたこと…諭されたことをお話します…」

それからアリサは、ハイドに教えてもらったことや、ツバキが私情を挟むなど言った理由について話した。

話を聞いている間、サクヤは一度も口を開きはしなかった。自分の愚かさがあったのか、肩が震えていた。

アリサの話が終わったところで、ぽろぽろと涙までこぼし始め、絞り出すような声で言葉を紡いだ。

「ごめんなさい…二人とも…本当は…わかってた…あの人はもう…帰ってこないことくらい…。わかってたはずなんだけど…自分を…止められなかった…」

「サクヤさん…」

「ゴメンね…迷惑かけて…ハイドには怪我までさせちゃったし…謝りに行かないとね…」

サクヤはおもむろに立ち上がると、目尻を指で軽くなぞった。

「もう、大丈夫ですか？」

アリサの問い掛けにサクヤは頷く。

「行きましょ！」

三人はすぐに路地を抜け出して、ハイドの下へと急いだ。

程なくしてコウタたちは、血の池に沈むプリティヴィ・マータを見下ろしているハイドを見つけた。

彼はちょうど神機に捕喰させ、リンドウの腕輪を探している最中だった。

「ハイド！もう倒したのか！」

「コウタ！サクヤさんにアリサも…」

後ろから掛かった声に驚いて顔を上げるハイド。

ハイドの身体は頬を除いて、体中をめつた刺しにされているプリティヴィ・マータとは対照的に綺麗だった。どうやら一度も攻撃を食らわなかったようだ。

「ハイド…」

サクヤが一步進み出る。しっかりとハイドの目を見て、謝罪の念を口にした。

「ごめんなさい…本当は、1番しっかりしなきゃならない立場なのに…我が儘言った挙げ句、あなたを怪我させちゃって…」

「…気にしないで下さい。俺は別に怒ってるわけじゃないですし、気持ちをよくわかります…ただ…もう、あんな無茶はやめて下さいね?」

「ええ…」

サクヤが自分の非を素直に認めているところを見ると、どうやらアリサが上手くやってくれたようだ、とハイドは安心した。

その時、プリティヴィ・マータの腹をまるまる食いちぎって神機が捕喰を終えた。

ハイドは神機の中身を見て、素材の中にリンドウの腕輪が混じっていないか確認する。

「あつた?」

コウタの問い掛けから数秒後、ハイドが首を左右に振る。

「ないわね……」

「最近の調査隊、いい加減過ぎますよ！」

アリスが不満を口にするが、それをコウタがなだめる。

「まあまあ…到着前に逃げちゃったかもしれないし…」

「同じ個体が何体もいたから、違うのと入れ替わった可能性もあるな……」

「ガアアアアアアアアアア！！！」

最後にハイドが口を開いた時、突然何かの巨大な咆哮が辺りに響いた。

『！』

ハイドたちは神機を構え、咆哮が聞こえてきた方角へ急いだ。

「！」

高い崖のある場所へきたとき、上から強大な気配を感じて顔を上げると、崖のふちにゆっくりと大きな陰が現れた。

吹雪が止み、ハイドたちはついにその姿を明確に捉えた。

ヴァジユラやプリティヴィ・マータなど比べものにならない強靱な四肢。漆黒の体は見るものを圧倒する。その顔は、人間が想像した…まるで神のような威厳のある顔だった。

ヴァジユラ最上位種：『ディアウス・ピター』。

まるで玉座から見下ろすようにしてハイドたちと対峙していたが、「相手にするまでもない」とでも言うかのように、背を向けてその場を立ち去った。

「あいつを倒さないと駄目ってことね…待ってなさいよ」

静かな闘志を燃やすサクヤ。それはハイドたちも同じだった。

先程の一瞬の対峙で、ハイドたちは悟った。「このアラガミがリンドウを殺した」と。

いずれ、ぶつかる時がくる…そのときは必ず命のやり取りがあるだろう。

必ず倒すと心に誓ったハイドたちは、アナグラへ戻っていった。

「残念…でしたね」

ベテラン区画の一室、サクヤの部屋でアリサはその部屋の主に言った。

サクヤとアリサはコーヒーを味わいつつ、数時間前の任務に想いを馳せていた。

結局腕輪も神機も見つからずに任務は終わった。ハイドが怪我をし、そのことでサクヤがツバキにお小言を貰ったこと以外何もなかった。現在ハイドは医務室で手当てを受け、コウタは「たまにはあなたを書いて下さい」とアリサに報告書押し付けられ、エントランスで書類と格闘している最中である。

アリサに頷いてコーヒーを軽く一口飲んだ後、サクヤは口を開いた。

「実はね…ちょっとホツとしてるの」

「え？」

思いがけないサクヤの言葉に、ついアリサは聞き返してしまった。

「心の整理、つけたつもりだったんだけど…やっぱり、まだリンドウが死んだって認めたくないのかな…」

サクヤはアリサの後ろに置いてある写真に目をやる。

サクヤとツバキ、そしてリンドウが写っている写真に…。

「腕輪が見つかったら…認めなきゃいけない…それに、リン

ドウがしてたこと、死ななきゃいけなかった理由…それを知るのも、本当は怖いんだと思う…ホント、何を今更って感じただけだね」

肩をすくめて言ったサクヤの顔には、拭いきることのできない悲しみが残っていた。

「そ、そうですよ！何言ってるんですか！しっかりして下さいよ！」

アリサはそんな彼女をなんとか励まそうと言葉を紡ぐ。

咄嗟に上手い励ましの言葉を練り出せない自分を恨めしく思いながら、胸のモヤモヤを紛らわせようとコーヒを一気に飲み干した。

(にがいに…ですね…)

四十七喰：シグナルチエイサー（後書き）

やっと書き終わりました。今回の話：皆さんいかがだったでしょう
か？

個人的に「ここを成長回にしようかな？」と以前から思っていた
話なので、かなり時間をかけました。

良い話になったかはわからないので、皆さんのご意見ご感想をお待
ちしております！

四十八喰：コウタの覚悟（前書き）

コウタの覚悟に関する話です。

四十八喰：コウタの覚悟

「まったく…君の体の再生力は医者泣かせだよ、本当に」

医務室でハイドは医師に理不尽に呆れられていた。

「はあ…なんか、すいません」

「いやいや！仕事を減らしてくれて実に助かってるって話だよ！わっはっは！」

医師の言葉に苦笑いするハイド。

昨日プリティヴィ・マータに切り裂かれたハイドの頬は、跡すら残さず綺麗に修復されていた。

ハイドはどつやら普通のゴッドイーターよりも自己修復能力が高いようだ。

大怪我や致命傷といったものが非常に身近な存在になっているゴッドイーターたちのケアを、医師たちは少ない人手で行わなければならない。

患者を捌く手間が省けるのならそれに越したことはない…といったところだろうか。

「いつ重傷者が来ても対応できるように手を空けておきたい」というのが医療関係者の本音なのだ。

5分もかからずに医師のOKサインが出され、とりあえずハイドは礼を言つて退室した後エントランスへ向かった。

エレベーターの扉が開き、ハイドはエントランスに入つて中を見渡した。

この日は珍しく人が少ないようだ…。スペース自体そんなに広いわけではないが、コウタとタツミとブレンダン…仕事中のヒバリと万屋しかない。

知ってる顔しかないのもまとめて挨拶した。

「おはようございます」

ハイドの声にコウタたちが挨拶を返す。

「おっす！」

「おはようございます、ハイドさん」

「ようハイド！」

「おはよう。傷の具合はどうだ？」

四者四様の言葉が返ってくると、そこから少しの雑談が始まった。

「ふむ…もう傷が塞がったのか…任務に支障が出ないようにうでよかったです」

ブレンドンがハイドの頬を見て言うと、タツミも同調する。

「ああ…お前は極東支部の主力だからな！あんまり無理すんなよ？」

「お気遣いありがとうございます。でも今のところはまだ大丈夫ですよ？」

「いやいや、目に見えない部分はきつと疲れてるハズだぜ？」

タツミの意見にコウタも頷く。

「そうだけハイド…リーダーになってから余計にストレス溜まっているはずだからさ、たまには休めよな」

「そうそう！あんまり根を詰めるとぶっ倒れちゃうぜ？…な？ヒバリちゃん！」

タツミに突然話を振られてヒバリは驚く。

「えっ？あ、ああ、はい…そうですね」

「ヒバリちゃんも毎日毎日大変だよな…どう？たまにはヒバリちゃんも休みを取らないかい？」

「…実は、ちょうどそうしようかなって思ってたところなんです…」

「おお！マジで！？」

ヒバリの意外な言葉にタツミが食いついた。

「はい！久しぶりに実家に帰ろうかなって思ってたので」

「…え？俺とのデートは？」

「ありませんけど？」

ヒバリに一蹴されてガツクリと肩を落とすタツミ。それを見て笑い出すハイドたち。

和やかな空気に包まれるが、それはわずか数分で打ち破られることになる。

ビー！！ビー！！ビー！！ビー！！

けたたましい警報がアナグラ内に響き渡る。それを聞いたコウタは真っ先に口を開いた。

「アラガミ！また外部居住区に侵入したんだ！」

その言葉にタツミが反応する。

「おう！これは俺達、防衛班の仕事だ！」

「お前さん方は、自分たちの仕事をまっとうしてくれ！」

ブレンダンの言葉にコウタが頷く。

「ああ、頼むよ！気をつけてね！」

タツミとブレンダンもコウタに頷き返し、すぐにエントランスを出ていった。

「近頃多いよな…外部居住区へのアラガミの侵入…」

コウタが呟くと、カウンターのヒバリが口を開いた。

「居住区外周の対アラガミ装甲も、このところのアラガミの変化に対応しきれなくなってきたみたいなんです…」

「それって…装甲に使われている例の『偏食因子』ってやつが、敵の変化についていけてないってこと？」

『アラガミは短期間の間に進化の可能性を凝縮した存在』…以前サカキが言った言葉だ。

アラガミのオラクル細胞は、捕食した動植物やアラガミによって多種多様な進化を遂げる。偏食もまた例外ではない。

アラガミ装甲はアラガミに偏食を起こさせる因子、偏食因子を解析して張り巡らすことで「食べたくない」とアラガミに思わせるものだ。

だが、その偏食の網にかからないアラガミも当然出てくるわけで、そうなるもまた新しい偏食因子が必要になってくる。

実質、アラガミ装甲は破られてようやく強化されているようなものなのだ。

「そうです…最近出没している新種から、偏食因子を摂取できれば…装甲も強化できるはずなんですけど…」

俯いてそう呟くヒバリ。するとコウタがハイドの方に向き直る。

「あるじゃないか…俺達にもできることがさ！行こう！」

「そうだな！」

「えっ？」

ヒバリが目を丸くしていると、コウタがカウンターに身を乗り出す。

「だからさ、ヒバリちゃん！その『新種』とかいう任務を俺達にやらせてよ！俺達がそいつの偏食因子を取ってくるからさ！」

「！…わかりました！では、鎮魂の寺院にて極低温対応型のクアドリガが確認されています！これが先程言った新種です！気をつけて下さいね？」

ヒバリに出された書類に素早く記入して、ハイドとコウタは頷く。

「ああ！行ってくる！」

「急ごうハイド！」

二人はターミナルで神機と消費アイテムを確認すると、すぐさま出撃ゲートへと向かった。

ドオン！！

耳をつんざく爆発音が寺院に響き渡り、積もっていた雪が舞い上がる。

また、その音の影響で遠くの雪山では雪崩が起きていた。

「コウタ！行ったぞ！」

「まっかせる！！」

クアドリガがコウタに向かって突進していくと、ハイドが彼に叫んだ。

足で地面を踏む度に、寺院全体が揺れるような感覚に襲われるが、その突進を難無くかわすとコウタはクアドリガの背中に、ハイドから渡されたアラガミバレットを放つ。

複数のミサイルが降り注ぎ、ついにクアドリガは力尽きた。

「おっしゃあ！決まったぜ！！」

コウタがガッツポーズをすると、ハイドが歩み寄る。

「やったなコウタ！」

「ああ！んじゃあ捕喰回収よろしく！」

コウタに頷くと、ハイドは神機を硬い装甲に突き立てる。

程なくして、息絶えたクアドリガを捕喰したハイドの神機には、しつかりとそのコアが収められた。

「コイツでアラガミ装甲を強化できるな！」

「よし、すぐに戻ろう！」

ハイドの言葉で二人はすぐにその場を離れ、ヘリの着陸ポイントへ向かった。

「おつかれさま！そっちはどうだった？」

ハイドとコウタの二人がエントランスに戻ってくると、ちょうどタツミとブレンダンが向かいから戻ってきたので、コウタが尋ねた。

「ああ…お前さん方が持ち帰ってくれた偏食因子のおかげで、なん

とか食い止められた」

ブレンドンの言葉にホッと胸を撫で下ろす二人。

「まあ…何人が犠牲が出ちまったけどな…」

「あ…」

タツミとブレンドンの表情が先程から優れない理由はこれだった。

ハイドたちも勿論そうだが、居住区を護る防衛班に所属する二人としては、犠牲を出したくはなかっただろう。

「そっか…ごめん、もっと早く届けられればよかったんだけど…」

コウタの呟きには悔しさが滲んでいた。それを聞いたブレンドンは首を左右に振る。

「コウタのせいじゃないさ…E26エリア方面だったから、家屋が集中していたのでな…」

「E26!?!」

ブレンドンの話の途中で、コウタはすぐにエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターが止まったのは、外部居住区と連絡を取れる専用ターミナルが設置されている区画だった。

「そっか!E26にはあいつの実家が…」

コウタの突然の行動にようやく察しがついたブレンダン。

「！」

ハイドもようやく理解すると、すぐにコウタを追いかけた。

ハイドが専用ターミナルの場所に来たときにはすでにコウタはいなかった。

辺りを見渡して、顔を真っ青にして外部居住区と連絡を取り合っているゴッドイーターたちの中にコウタがいないことを確認したハイドは、彼の自室へ向かった。

自動ドアが開いて中に入ると、コウタがソファに座っていた。

俯いていて表情はわからなかったが、ハイドが近づくと彼はゆっくりと口を開いた。

「ふう………母さんたちは無事だったよ……」

そう言って顔あげるコウタ。彼の表情は安堵に包まれていた。

「そっか！……よかった」

コウタの様子にハイドも安心して、笑みがこぼれる。

「…エイジス計画、早いところ完成させてもらわなきゃな…」

エイジスは完成まであと少しと言われ続けているが、なかなか完成報告が届かない。

だが、人類の安寧を願って、どれだけ待たされようとゴッドイーターたちはめげずに戦い続ける。

そして人々も、平和な暮らしを願って日々の恐怖に耐え続ける。

「守れるんなら…どんなことだってやってやるさ…」

コウタの口から放たれたのは、彼の『覚悟』。

例え自分をなげうってでも、大切な家族を守るという『覚悟』だった。

「それにしてもホント、今ってヒデエ世の中だよな…」

突然、コウタがいつもの明るい口調でわかりきってることを話し出した。

会話の振り幅の大きさに戸惑いつつ、ハイドは頷く。

「昔…アラガミが出てくる前はさ、すげえ平和だったみたいだよ？」

「ああ、そうらしいな」

「命のやり取りなんか全然ないんだよ」

(それは多分、ないと思うけど…)

だいが昔は人間同士で、『戦争』という名の殺し合いをしていたらしいことを、ハイドはノルンのデータベースで知った。

アラガミがいなくても、結局人は殺して殺されるのか…と、大分シヨックを受けたものだが、どうやらコウタはその事実を知らないようだ。

だが、アラガミに食い荒らされたこの世界は、戦争等の跡地などすでになくなっている。

人々の記憶から少しずつ薄れていっても仕方のないことだとは思っ

「いやあ、まあ全部ノルンの情報の受け売りなんだけどね？」

ハイドが難しい表情になったのを気にしてコウタが慌てて言った。

「旧世代の動画がいっぱいストックされてるログがあってさ、知ってる？」

「コウタに前教えてもらったやつじゃなくて？」

「そうそう」

ハイドは少し考え込むが、コウタの言ったログらしきものは思い浮かばず、首を左右に振った。

「いや、知らないな…」

「それが面白いんだよ〜！バガラリーみたいな昔の番組もいっぱいアップされててさあ〜！」

ターミナル端末の細かい操作を早々に熟知したコウタは、すでにあちこちのデータベースに手を出したらしい。

神機や戦闘に関する知識はやや欠けてるが、こういうことにはやたらと詳しいコウタである。

「きつとみんな、ニコニコしながら平和に暮らしてたんだろうな…」

コウタは遠い昔を思い出すような表情で、当時の生活を想像する。

「ウチに帰ったらさ、家族が笑顔でお出迎えでさあ…笑いながらご飯食べて、夜更かしして…ゲームで遊んじゃったりして…」

語るコウタの声には羨望の色が滲んでいた。

「寝るときは『明日何しようかな〜』とか、楽しいことだけ考えて…そんでまた、当たり前前に次の日がくるんだよ」

そこまで言うとコウタの声は、少しだけ悲しみを感じさせる声に変わる。

「こんな悲惨な未来なんて…想像もつかなくてさ…」

「……………」

ハイドはただ黙って聞いていた。

「まあ、わかるわけがないよな…オレらだってこの先わかんねえし、誰が悪いってわけじゃないんだし…」

そう…確かにコウタの言う通り、誰かが悪いわけではない。

ハイドもそう考えるが同時に、「悪いのは『誰かが』ではなく『人類が』悪いのではないか」と考える。

ヒトがこの星に生まれた時から、星の寿命は常に削られてきた。

本来の姿を失っていった自然環境…破壊されていく大気…星だけでは飽き足らず、互いの命までも奪い合う日々…。

もし、この星を造った神様がいるとするならば…アラガミは、そんな人間たちに対して下した罰なのかも知れない。

「でも…エイジスができれば、そんな世界が戻ってくるんだろ？みんなが安心して楽しく暮らせる世界がさ…」

それはコウタだけではなく、みんなの望み。

「ああ…きつとくるぞ」

自分の少々冷たい考えを表に出さず、ハイドはコウタに頷いた。

「そうそう！見てよコレ！」

そう言ってコウタがポケットから取り出したのは、彼の顔を模した

かわいいマスコットだった。

「妹が作ってくれたお守りなんだ！へへ、カワイイヤつたる？」

「へえ…上手だね、コウタの妹さん」

ハイドは手にとって観察したあと、コウタに返しながら呟いた。

「ああ、今度の休暇には、お返しにいっぱいお土産持って帰ってやるんだ！」

「ふふ…お母さんも妹さんも、幸せ者だな」

ハイドの言葉に頷くと、コウタはソファから跳んで立ち上がる。

「よしっ！そろそろ戻ろうぜ！教官に怒られちまうよ！また腕立て15000回なんて言われたらたまらないからな！」

入隊したての頃を思い出し、ハイドは苦笑いした。

「あれはコウタの墓穴だろ？」

「そんなことねーって！」

二人は軽い言い合いをしながら部屋を出て、次の戦いに向けた準備をしにエントランスへと歩いていった。

四十八喰：コウタの覚悟（後書き）

次回はついにディアウス・ピター戦を書かせていただきます。

どんな戦闘にしようか悩み中です。

では、ご意見ご感想お待ちしております！

四十九喰・帝王の黄昏（前書き）

リンドウの〜

腕輪探して

三千里〜

ついにここまで

来たかと思う〜

……………すみません。

四十九喰：帝王の黄昏

第一部隊は夕焼けの空にいた。

黒い迷彩柄のへりは夕日に染まり、コックピットのガラス窓は一際強く輝く。

窓から差し込む茜色の光に照らされながら、ハイドたちは念入りな作戦会議を行っていた。

いつもなら軽口の一つも交わすものだが、今日ばかりは訳が違う。

『ディアウス・ピター』：今日の討伐対象であり、リンドウの腕輪の信号が確認された個体だ。

この日のメンバーは、ハイド、ソーマ、アリサ、サクヤで構成された。

アリサとサクヤがメンバーに志願したことはともかく、様々な角度から見た実力やバランスなどを総合した結果、選ばれたのがこの四人ということだ。

出撃する直前：ハイドたちは、ほかの部隊の人間から期待を込めた瞳で見られた。

そこにはやはり、「リンドウの仇を討ってくれ」という思いがあったのだろう。

それはアリサとサクヤも同じだが、二人とも以前のような二人では

ない。

ハイドやツバキに教えてもらった、大切なこと…リンドウが遺したもの…。

それを理解したサクヤはもう、憎しみを引き金に込めたりはしない。

アリサも、もう償いの念に囚われた剣を振るったりしない。

「……………よし、俺とソーマが前衛を担当する。サクヤさんとアリサは後方支援を頼む。アリサはこちらが優勢になった時に前衛に加勢してくれ」

『了解！』

「……………」

ハイドの作戦命令にサクヤとアリサが返事をしたが、ソーマだけは何も返さなかったが、いつものことなので気にしない。

「それと、みんなもう充分わかってると思うけど……………」

「大丈夫よ、ハイド」

ハイドの台詞を途中で遮ったのはサクヤだった。

「もう大丈夫…言いたいことはわかっているわ。私は…私たちは…生き残るのよ…必ず…！」

サクヤの言葉に、ハイドもアリサも頷いた。

と、その時へリが滞空していることに気がつく。……………どうやら着いたようだ。

ハイドたちが神機を担いでへリから降りると、早速異様な気配が襲ってきた。

言葉では形容しがたい、強大な気配…。

待機地点まで歩いてくると、ハイドが口を開く。

「よし…じゃあ、みんなくれぐれも注意してね！今日の相手は、多分今までで一番手強いよ？」

そう…なにしろヴァジュラ種の中でも最強と呼ばれる程の存在だ。苦戦を強いられることになるだろう…。

「望むところです！」

アリスの意気込みに微笑んで、ハイドは話を続ける。

「……………そうか。じゃあ、任務開始の前に命令を四つ」

ハイドが出した命令は、『あの』命令だった。

「死ぬな。死にそうになったら逃げる。そんで隠れる。運がよければ不意をついてぶつ殺せ」

「はい！」

「OK！」

「……………フン」

三人が表情を引き締めたとき、ミッション開始のアラームが鳴った。

「時間だ！ミッションスタート！」

ハイドたちが高台から飛び降りて、ついに任務が開始された。

降りてすぐに教会の裏へ向かい、大きく開けた場所に出ると、そのまま中央へ。

真ん中辺りまで来たとき、ソーマが「待て！」と言い出したので、先頭を走っていたハイドが振り返った。

「どうした？ソーマ」

「……………」

何かの気配を感じ取っているのか、言葉が続かないソーマ。

が、沈黙はすぐに破れた。

「…来やがった…正面だ！」

ハイドが前方に向き直ると、正面にそそり立つビル……………そこに開けられた大穴から、ついに漆黒の帝王がその姿を現した。

威圧感を与える、禍禍しい角がいくつも生えたような前足と肩。

隆起した筋肉が目立つたくましい四肢。

怒りに満ちた老齡の人間の男のような顔。

常に輝きを放つ、金色のマントのような放電器官。

ディアウス・ピターはハイドたちを見据えると、一際大きな咆哮を上げた。

まるで空気が振動するかのような咆哮だが、この程度ではハイドたちは退かない。

ディアウス・ピターは飛び降りると、目の前の獲物に向かってゆっくりと近づいていく。

ハイドは神機を握り直して深呼吸した後、ディアウス・ピターから目を逸らさずに呟いた。

「みんな……………行くよ」

ドンッ！！

ハイドは地を蹴って一気にディアウス・ピターとの距離を詰めた。

だが、ディアウス・ピターも同じタイミングで飛び出し、両者の距

離は一秒も経たずに無くなる。

振るわれる帝王の爪を紙一重ですり抜け、ハイドはまず一太刀、その後ろ足へ叩き込んだ。

キンッ！

硬い金属音が辺りに響く。

(っ！なんて硬さだ…！)

まさに筋肉の鎧といったところだろうか…。

一番剣が効きそうな部分なのに、とても高い防御力を持っている。

「ふん…！」

今度はソーマが前足に剣を振り下ろすが、鈍い音と共に弾かれた。

「チッ…！」

舌打ちと同時に、ディアウス・ピターの後ろ足がソーマを蹴り飛ばした。

ソーマはかろうじて装甲を展開してこれを防ぐが、力が強すぎて後ろから何かに引っ張られるように地を滑っていく。

続いてディアウス・ピターはアリサに狙いを定め、雷球を作り出し

た。

（次の狙いは私ということですか…！）

アリサはすぐに銃形態から剣形態へと変型させ、装甲を展開できるようにした。

彼女はそのまま横へ移動していく。

やがて力を溜め込んだディアウス・ピターの雷球が放たれる。

「っ！？」

ディアウス・ピターとの交戦経験がないことや、攻撃情報の材料として「ヴァジユラ」を想定していたことが重なったせいでもある。

ヴァジユラの雷球攻撃は一発だけしか撃ってこない。

だが、ディアウス・ピターは雷球を、ターゲットを狙って追尾するように連発してきた。

（まずい…！）

アリサはすぐにUターンして逆に向かって走るが、それでも雷球は撃つ度にしつこくコースを変えて狙いつづける。

「くうっ！！」

ガガガンッ！！

計八発放たれた雷球のうち、五発まではかわすことができたが、残りの三発は装甲で受け止めるしかなかった。

「貫けっ！」

フロローに入ったサクヤが打ち込んだレーザーは、相変わらずのコントロールの高さでディアウス・ピターの尻尾に命中した。

「ギャッ！！！」

その時、ディアウス・ピターが痛み思わず苦痛の声を漏らした。

「尻尾が弱点なの！？」

サクヤが続けて尻尾を狙うが、ディアウス・ピターがブンブンと振り続けているため中々狙いが定まらない。

「まだ決めつけちゃダメだ！！！」

『！！』

不意に声を張り上げたのはハイドだった。

「尻尾だけ削っていてもラチが開かない！それぞれの武器の属性に弱い部分を見つけるんだ！！！」

叫びながらハイドは剣を前足に突き出した。

ザクツという軽い音を立てて、切っ先がしっかりとディアウス・ピターの肉に侵入していた。

(ここか…!!)

先程から体のあちこちを斬ってみたが、前足が一番ショートブレイド…つまり貫通能力の高い剣が効くようだ。

(ショートブレイドが効いた? ……なら)

ハイドの攻撃を観察していたソーマは、少し前の光景を思い出して後ろ足を思いきり斬りつけてみた。

貫通属性が効かない箇所は対象的に、ソーマが使うバスターブレイド…つまり破碎属性の高い攻撃が有効になることがある。

戦闘の始めにハイドが後ろ足を斬ったが効かなかった…それなら自分がやったら効くのではないか?

ソーマの読みは見事に当たっていた。

バツ!と、鮮血が吹き出し、痛みに耐え兼ねたディアウス・ピターは一度、大きくバツク転しながら後ろに跳んで距離を取る。

ズバツ!

「グギヤ!!!?」

着地した瞬間の後ろ足をサクヤが狙い撃ちした。

(…『剣の貫通』は効かないのに『銃の貫通』はいくらか効くようね…)

そのままサクヤは他の弱点を探るため、レーザーを違う場所に撃ち込んでいく。

「たあっ!!!」

そして、ディアウス・ピターが怯んでいる間に、アリサが脇腹へ斬撃を入れる。

ザンツ!!

噴き出る血の量を見て、アリサは思考した。

(今のところはここが一番効くようですね…あと攻撃していないのは顔ですか…)

ハイドの指示を受けて、全員が少しずつディアウス・ピターを理解していく。

このまま大人しくやられてくれればいいのだが、帝王ディアウス・ピターはそんなに甘くはなかった。

「ガアアアアアアアア!!!」

とうとう頭にきたのか特大の咆哮を上げると、ディアウス・ピターのマントが輝きを増し、電流が迸った。

「散開して距離を取れ！！みんな気をつける！」

ハイドの指示にアリサとサクヤ、ソーマまでもが距離を取った。

これは、オラクルが活性化したアラガミのデータが不十分な場合、どの個体に対しても必ず実行する戦法なのだが、それ以上に「今のコイツはとにかく危険だ」という本能的な予感がして離脱したことのほうが大きかった。

放電器官に電流を走らせ、ディアウス・ピターはサクヤを狙って大きく跳び上がる。

「くっ！」

サクヤは横にローリングして何とか躲すが、ディアウス・ピターの着地した地点に強烈な光と共に雷がほとばしる。

あとコンマ数秒遅れていたら確実に巻き込まれていた。

「ガアアアア！！！」

咆哮が聞こえてサクヤが振り返ると、彼女を飛び越えてハイドを狙うディアウス・ピターが目映った。

「させない！！！」

サクヤはすぐに銃口を向け、がら空きの胴体を撃ち抜いた。

「ガアウ!？」

不意打ちにディアウス・ピターが苦悶の声を上げるが、そのままハイドを踏み付けにかかる。

「ふっ！」

落ち着いてバックステップで躲すと、前足に斬り込もうとするハイド。

だが、ディアウス・ピターは飛び掛かったときの勢いをそのまま利用して、強固な肩でシオルダータックルを繰り出した。

「ぐうっ!!！」

装甲を展開したものの、あまりの威力にハイドはダンプカーに跳ね飛ばされたように後ろへ吹き飛び、トタンなどの廃材で作られたバリケードに叩き付けられた。

「が…ふっ…！」

背中に激痛が走り、息が一瞬できなくなる。

「ハイドさん!! サクヤさん! フォローして下さい!」

壁に縫い付けられたように身動きが取れないハイドをアリサが助けに行く。

「わかったわ! ソーマ!」

サクヤが叫ぶと、ソーマは無言でスタングレネードを投げつける。

激しい閃光がディアウス・ピターの視界を包み込み、ぎゅっと目を瞑って顔を逸らす。

次にディアウス・ピターが目を開いた時にはハイドとアリサの姿がなかった。

と、その時ディアウス・ピターの横顔にレーザーが直撃する。

レーザーが飛んできた方向に目をやると、銃を向けるサクヤとディアウス・ピターと反対方向へ走って行くソーマの姿があった。

と、ここでサクヤもソーマのように背を向けて遠退いていく。

からかいにも近いこの行為は帝王のプライドを刺激したようだ。

怒り狂った咆哮を上げてソーマたちを追いかけていく。

「……………来たわね！」

教会の入口で待ち構えていたサクヤとソーマは、ディアウス・ピターがこちらを確認したのを見て、すぐに教会の中へ入っていく。

それを見たディアウス・ピターはさらに怒りをつのらせ、二人を追いかけた。

「この中で時間を稼ぐわよ！」

「フン……」

二人は決死の覚悟で帝王の追撃を迎え撃った。

ディアウス・ピターがソーマとサクヤを追いかけていった後のハイドが埋まったバリケード。

その中の大きな廃材がガタガタと動き、やがて落ちた。

その下には、アリサと埋まったままのハイドがいた。

アリサはディアウス・ピターの視力が奪われているうちに、手近な廃材を手にとって自分とハイドを覆ったのだ。

「ハイドさん！しっかりして下さい！」

ハイドを廃材の山から引き抜いて声をかけるアリサ。

「たたた………やっぱり一筋縄じゃないかな……」

顔を歪めて背中をさすりながらハイドが呟く。

「まだ行けそうですか？」

不安そうな表情を向けるアリサにハイドは微笑み返した。

「ああ、仕事の続きだな！」

「はい！」

二人は先程から銃声や何かにぶつかる音が響いてくる教会へと急いだ。

「クソ…しぶとい野郎だ…!!」

ソーマは自身が発見した後ろ足を狙うが、ディアウス・ピターもさすがに知恵をつけた。

ソーマになるべく後ろを見せないように狭い教会の中を動き回っている。

(くっ…ハイドとアリサがいてくれたら…)

二人がいれば四人になって、言い方は悪いがディアウス・ピターが狙う対象が増え、攻撃後の隙が生まれる上こちらの火力も上がるのだが…と思案するサクヤ。

その時、教会の割れたステンドグラスの下で、ディアウス・ピターが咆哮を上げ、力を溜め込む動作を始めた。

「チッ…クソつたれが…！」

壁を背にしているせいで、せつかくの攻撃のチャンスをものにできない。

ディアウス・ピターは雷球を五つ召喚し、自身の回りをグルグルと高速回転させた。

「近寄らせない」とでもいわんばかりの、守りも兼ね備えた攻撃だ。

そして、顔の前で雷球が綺麗に整列し、ソーマとサクヤに狙いを定める。

「させるかあああああ…！」

ザンツ…！！

「グガアツ…！？」

「っ…ハイド！」

「…！」

ディアウス・ピターとサクヤとソーマが驚きの表情に彩られる。

ディアウス・ピターの背後のステンドグラスからハイドが教会内に侵入、そのままから空きの右前足に剣を振り下ろし、表面の肉を大きく削ぎ落としたのだ。

噴水のように血が噴き出し、赤い筋肉が剥き出しになる。

「ふんっ!!」

そこへハイドがさらに一薙ぎ。筋繊維が切り裂かれ、バランスを崩して倒れ込む。

「今です!!」

サクヤの後ろからアリサが飛び出した。

(ああ!アリサはハイドの踏み台になってあのジャンプの手伝いをしてたのね!!)

アリサだけが入口から回りこんで来たのを見てようやく納得するサクヤ。

そうこうしている内にアリサは、ディアウス・ピターの前にハイド、ソーマと並んで神機を構え、その血肉を食いちぎった。

「いくぞ!!」

「神機解放!!」

三人はバーストを発動したが、ここでディアウス・ピターが立ち上がる。

(っ！まだ動けるなんて…！)

足の筋肉が半分は切られているはずなのに、痛みを堪えて咆哮を上げるディアウス・ピター。

そのまま垂直に高く跳び上がり、バック転して着地した。

そこからディアウス・ピターを円く囲んで雷が暴れ回る。

ガガガン！！

「っ！！」

「ぐっ！！」

「チイツ！！」

三人は装甲を展開して堪え凌ぐが、ディアウス・ピターの攻撃は収まらない。

(どれだけしぶといんですかもっっ！！)

アリサは軽く舌打ちをして斬りかかるがディアウス・ピターはまたも跳び上がってやり過ごす。

そのままハイドへ、傷ついてない左足を振りかぶったが、その爪はハイドに一步届かなかった。

「はあっ！！」

ソーマが渾身のチャージクラッシュをマントに決めて、ディアウス・ピターは床にたたき付けられた。

「食らえ！」

その隙にアリサが剣を振り払い、帝王の顔に横一文字の傷をつける。だが、それでもディアウス・ピターは力の限り暴れ回り、それ以上の追撃を許さない。

「ハイドさん！サクヤさん！ソーマ！」

もうこれ以上戦いを長引かせる訳にはいかない、とアリサはアラガミバレットを一発ずつ撃ち渡す。

「よし！」

ハイドもアリサに一発、バレットを放った。

「アリサ！ソーマ！三人で切り込むぞ！」

ハイドの合図で、アリサとソーマは彼に続いて駆け出す。

「らあっ！！」

ディアウス・ピターが振り下ろした左足の爪をすり抜け、ハイドが右足を完全に切断した。

流れ出る血の量を増やして、ディアウス・ピターはバランスを崩す。

「てやつ!?!」

アリサがディアウス・ピターの顔に再び剣を入れる。

「死ね!?!」

ソーマが左後ろ足を切断し、帝王はとうとう立てなくなった。

「サクヤさんトドメを!?!」

残ったアラガミバレットを全て渡し、サクヤはリンクバーストLv3を発動する。

ずっと…この時を待ってた…。

ありがとう…みんな…ここまで連れてきてくれて…

銃口を帝王に合わせる。そのまま引き金に指をかける。

リンドウが受けた苦しみを…味わいなさい…！

ドオオン！！

サクヤの放った濃縮アラガミバレットは巨大な球体となって、ディアウス・ピターの体をすっぽり覆った。

その後、少しの間を置いて青白く光り、始まったのは雷の乱舞。

ドームの中で幾重にも重なる雷に、ディアウス・ピターの肉体は焼かれ、裂かれる。

「グガアアアアアアア！！！」

帝王の叫びが教会中に響き渡る。

ディアウス・ピターはしばらくのた打ち回っていたが、やがてピクリとも動かなくなった。

ついに倒したのだ…漆黒の帝王を…。

頭がそれを理解したとき…第一部隊の顔にはドツと汗が流れ出し、

体の内に溜め込んでいた空気を吐き出した。

「はあ……………終わりましたね」

アリスが構えを解いて口を開くと、サクヤも頷く。

「ええ……………じゃあ、始めるわよ」

すぐに表情を引き締めて、アリスとサクヤは特殊な偏食因子が練り込まれた手袋を装着し、ディアウス・ピターを捌き始めた。

ハイドとソーマが後ろからジツと見つめている中、二人の作業は続く。

長いようで短い時間…。

ハイドは内心、見つかって欲しくないと思っていたが……………それは叶わなかった。

「っ！これは……………」

アリスがディアウス・ピターの腹部に何かを発見した。

それを掴んで一気に引き抜く。

「っ……………当たり……………です……………」

大量の血と共に現れたのは、同じく血のような色の赤い神機……………
リンドウの神機だった。

サクヤも口から何かを見つけ、取り出した。

「こっちも見つけたわ……間違いない……これは……あの人の……」

そこまで言うとサクヤは地面に座り込み、リンドウの腕輪を胸に抱きしめる。

「ああ……リンドウ……」

涙を一粒一粒零しながら……。

「リンドウさん……」

アリサも涙を堪えきれずに崩れ落ちた。

「……」

ソーマは何も言わずに目を瞑り、顔を逸らす。

「……」

ハイドは静かな瞳で虚空を見つめた後、携帯電話を取り出した。

「こちらハイド……目標の討伐に成功……雨宮リンドウの腕輪、及び神機を回収……これより……帰投します……」

ハイドのミッション完遂報告で……一つの苦しみに、幕が下りた。

四十九喰：帝王の黄昏（後書き）

ディアウス・ピターの戦闘を味のあるものにしたかったんですが、なんか：イマイチかな～：って気分になりました。

では皆様～：ご意見、ご感想お待ちしております！

五十喰：ターニングポイント（前書き）

記念すべき第五十話です。

少々短いです。

五十喰：ターニングポイント

無事帰還した第一部隊は、多くの暖かい拍手で迎えられた。

笑顔を向けてくる者たちの中には、手で口を押さえて涙を流している人間も何人かいた。

その人海から一人の人間が足を踏み出して、ハイドの前に進み出た。

「おう、お疲れさん！よくやったな！！」

手をハイドに伸ばして声をかけたのはタツミだった。

その手をガッチリと握って頷いたハイドは微笑んで答える。

「ええ…何とか倒すことができました」

「つくづく…お前たちはすごいな…」

タツミの後ろから出てきたブレンダンも手を差し出す。

「ツバキさんは私情は挟むなど言っていたが、それでも礼を言わせてくれ…仇を討ってくれてありがとう」

ハイドが手を握り返すと、今度はカノンとジーナが出てきた。

「あの…ひつく…黒いヴァジュラを…うう…倒してくれて…あ、ありがとう…ごじます…」

涙を流しながらも礼を言ったカノン。そんな彼女の手を取って、ジ
ーナが支える。

「わ、わたしっ…リンドウさんに…助けられてばかりで…ひっく…
でも、何もお返しできなくて…」

カノンの胸中を察して、アリサも瞳が少し潤み出していた。

「カノン…あのヴァジュラにトドメを刺したのはサクヤさんだ…俺
はサクヤさんを手伝っただけで、みんなから礼を言われるほどのこ
とはしてないよ…今日お礼を言われるべきは、サクヤさんなんだ…」

ハイドのその言葉を聞いたカノンは、顔を涙でグシャグシャにしな
がらサクヤに向き直る。

「ありがとうございます…サクヤさん…」

「……………」

サクヤは無言でカノンを抱きしめる。

すると、カノンはついに感情が押さえられなくなったのか、洪水の
ように涙を流してサクヤを抱きしめ返す。

二人が抱擁を交わしているとき、ハイドとアリサの前にコウタがや
ってきた。

「お疲れさん…腕輪、見つかったんだな…」

「ああ…」

ハイドはコウタに頷いて答える。

「…力になれなくて、ゴメン…」

「気にしなくていいよ、コウタ…とりあえず決着はついたんだから」
コウタの肩に手をポンと置いて、ハイドはヒバリの下へ行き、ミッション完遂の報告を行った。

「ミッション完了しました。確認をお願いします」

ミッション完遂報告を一通り終えて、ハイドとアリスはサクヤの部屋に来ていた。

腕輪が手に入ったことで、リンドウが残した例の手紙を開封することができるようになった。

これで…リンドウの死の謎に近づくことができる…。

高鳴る鼓動を押さえ付けて、サクヤはターミナルの前に立つ。

「じゃあ…始めるわね」

意を決して、サクヤはリンドウの腕輪をターミナルの脇にある認証装置にはめ込む。

「認証…通ったわ!」

サクヤが声を上げ、ターミナルの画面には様々なファイルが映し出される。

「レポートが一つ…リストファイルが一つ…」

アリサがそのファイルの種類を一つ一つ読み上げていく。

「それに、プロジェクトファイルが一つ…あと、何かのプログラムの実行ファイル…ですか?」

「けっこう数あるね…」

ハイドが呟くと、サクヤは少し考えて操作を再開する。

「上から見ていきましょう…まずはレポートから…」

ファイルを選択して開封すると、画面にリンドウが打ち込んだと思われる文面が映し出された。

「やっぱり…私にも黙ってこんなことを…」

『エイジス計画を隠れみものとして「アーク計画」という別の計画が

進められていることは、疑いようがありません。

「真の人類救済のためのプラン」とされているようですが、計画の内容など詳細は不明です。

調査の過程で名簿らしきリストを入手しましたので、関連資料として添付します……………」

「アーク…計画…？あなた聞いたことある？」

聞いたことの単語に疑問符を頭に浮かべると、サクヤはアリサに尋ねた。

「いえ、聞いたことないです…あ、そのリストファイルが関連資料みたいですよ？」

アリサが画面を指差して言うと、サクヤが調べ始める。

「アーク計画に関連する名簿のようだけど…」

画面に新しく映し出されたのは、一つのファイルに二百人の名前が記載されている名簿が五つ。

「各支部の神機使い…それにエンジニア…科学者…その親族？」

「なんの為の名簿かはわかりませんね…」

「アーク計画に関わるひとたちのリストだとは思っけど…」

アリサとハイドが首を傾げる中、サクヤは操作を続ける。

「実行ファイルは危ないから後にして、先にプロジェクトファイル見ておきましょう」

出てきたのは先程とは別の、リンドウのレポートだった。

「エイジス…潜入…」

ファイル名を口にするアリサは眉を顰める。

「…先に進めるわよ」

サクヤが操作を再開し、文面が映し出された。

『やはりアーク計画の全貌をつかむには、エイジス島を直接調査するしかないようだ。』

先日発見したエイジス島管理システムのバグを利用し、警備システムをダウンさせるプログラムを作成した。

使用すればすぐ対策されるハズ…。

チャンスは一度きりだ…。」

脳が文字の織り成す言葉の意味を理解すると、アリサが口を開く。

「リンドウさんは…確証を掴むためにエイジスに忍び込もうとしてたんですね…」

サクヤも画面を睨みながら頷いた。

「そうみたいね…これで色々繋がったわ…私が次に何をすべきかね…」

そう言っつてサクヤはハイドとアリサに向き直る。

「サクヤさん…リンドウさんの意志を継ぐんですね！」

アリサはそう言ったが、彼女の気持ちとは裏腹にサクヤは首を左右に振る。

「いいえ、違うわ…二人ともこのことは忘れて頂戴…私も忘れるから」

「え？…どういう意味ですか？」

アリサが驚いて聞き返すと、サクヤは静かに言葉を紡いだ。

「言葉通りの意味よ…この計画には少なくとも、この極東支部内の誰かが絡んでいる…下手に動けば…あっという間に潰される」

「そんな…それなら他の支部か、本部に緊急連絡するとか…」

アリサはなんとか説得しようと試みた。

（だつて…おかしいじゃないですか！リンドウさんのことを、あんなに追いかけていたのに…！こんなにあっさり諦めるなんて、サクヤさんらしくないですよ！）

だが、アリサの努力は報われることはなかった。

「確証もない…通信インフラも押さえられているであろうこの状況で、勝ち目があると思う？」

残念そうな笑みを浮かべて言ったサクヤは、自分のターミナルや部屋を見る。

「このターミナルや…この部屋ですら、そいつの監視下かも知れないのよ？」

「それは…」

反論することができなくてアリサは拳をギュッと握る。

「だから、もう忘れましょう…？きつとリンドウも、それを望んでいるわ…」

「そんな…！」

「ちょっと…一人にしてくれないかな…お願い…」

食い下がるアリサに止めの一言を言うサクヤ。

アリサはそれでも何かを言おうとするが、喉から先に言葉が出なかった。

心の中で彼女は、何も言い返せない自分を恨んだ。

そんなアリサの肩に、手がそつと置かれた。

振り向くと、ハイドが「今はそつとしておこつ…」とでも言いたげな瞳で見つめていた。

「……………失礼します」

逡巡したがとうとう諦めたのか、アリサは扉に向かって歩いていった。

ハイドも軽く頷いて部屋を出ていった。

ハイドたちが出て行った後のサクヤの部屋…その主は配給ビールを口に含みながら、ラックの上に立ててある写真を眺めていた。

「リンドウ…さすがにこれ以上は、巻き込めないよね…」

写真の中で動かない人物に語りかけるサクヤの瞳は、ほぼ固まった決意に彩られていた。

夕暮れに染まる空母は、相も変わらず寂れた世界を形成していた。

リンドウの腕輪が見つかったから一夜明け、ハイドとアリサ、そしてサクヤはシオを連れて愚者の空母にやってきた。

シオに食事をさせるといふ目的を終えた三人は今、甲板からエイジス島を眺めている。

「大きいよね…」

サクヤが甲板の淵まで歩いてきながら呟く。

その視線の先には、人類にとっての楽園…。

建設中の巨大な人工島は、リンドウの置き手紙によってさらに謎を深めていた。

「エイジス計画の要、人類最後の望み…エイジス島…」

その時サクヤは、少し離れた場所の甲板の上に、エイジスの方へゆつくりと歩いていくシオに気づいた。

「シオ?…どうかしたの?シオ!?’

サクヤの呼びかけに答えず、シオは歩き続ける。

すると、シオの体が光り始めた。

体中に描かれた紋様のような青いラインが、夕日の中でもはっきりとわかるほど輝いている。

「シオー!!」

「シオちゃん!!」

「シオ…あなた…!」

呼びかけるハイドたちの方へシオがゆっくりと振り向いた。

「ヨンデル…」

「え…?」

ハイドはシオの言葉の意味がわからずに聞き返す。

「タバタイ…タバタイツテ…ヨンデルヨ」

シオはエイジス島に向き直ると、これまで見てきた表情の中で最もいびつな笑みを浮かべた。

「オイシソウ…」

それはまるで…飢えた獣のような、食欲に満ちた冷酷な笑みだった。

「…で、そのまま海に飛び込んで姿を消した…」と

事情を説明するために、サカキの下を訪れたハイドたちの表情は暗かった。

シオはあその後、突然海に飛び込んで泳いでいつてしまった。

ハイドたちはその行動にしばらく面食らっていたが、事の重大さに我に帰り、急いでアナグラに戻ったのだ。

「申し訳ありません…」

サクヤがなおも暗い表情で頭を下げるが、サカキはそれをやめさせた。

「いやいや、まずは皆が無事で何よりだよ」

サカキは頭を上げたサクヤに、念のため確認を取る。

「サクヤくん…場所は空母の北端…エイジス島近郊で間違いないんだね？」

サカキの言葉にサクヤが頷く。

「はい…あの子、一体何があったんでしょうか…」

「今の状況からでは、何とも言えないね…」

何かわかるかも、と期待していたアリサだが、サカキからの情報は得られなかったことがわかると、沈んだ声で口を開く。

「…そうですね、わかりました…」

「ともかく、君達にはシオの搜索をお願いすることになるかもしれない…何か判明したら連絡するよ。今はゆっくり休んでほしいな」

「わかりました。居場所がわかり次第、すぐに向かいます！」

ハイドの言葉にサカキが頷く。

「ああ、頼むよ」

ハイドたちが立ち去り、サカキ以外は誰もいなくなった研究室。

椅子に腰掛けたまま眼鏡を押し上げて、サカキは静かに呟いた。

「予想以上に早いね…実にマズイな…」

五十喰：ターニングポイント（後書き）

最近中々小説が進まない…何故だ？

などと思つ今日この頃でございます。

せつかくの休みは活用したいものです…。

それでは皆様、ご意見ご感想お待ちしております！

五十一 喰・別れの序章（前書き）

すみません…またもや短いです…。

五十一 喰：別れの序章

シオが行方不明になってから一夜明け、もはやすっかり慣れてしまったシックザールの呼び出しで、ハイドは彼の部屋を訪れていた。

「うむ、ご苦労」

仕事机を挟んで正面に立つハイドに勞いの言葉を述べるシックザール。

「わざわざ呼び出したのは、他でもない…」

口の前で手を組むいつものポーズでハイドを読めない瞳で見つめる。

「目下、最優先事項である特務を君にお願いしたい…先日、太平洋近海…エイジス島周辺に非常に特殊なアラガミのコア反応があった…」

シックザールのその言葉に反応するハイド。

そのコアの正体にはおおよその察しがついていたが、顔には出さずにシックザールの話の続きを待つ。

「非常に高度な知性を有していると思われるアラガミの討伐任務だ」

(やっぱり…シオのことだな…)

「もしそのアラガミを発見したら…速やかにそのアラガミのコアを無傷の状態で抽出し、持ち帰ってもらいたい」

『無傷』という言葉を強調して用件を口にしたシックザールは、更に続ける。

「この特務は、いかなる任務よりも優先される最重要項目だ…おそらく一人での搜索は難しいだろう…ソーマと共に任務に当たってくれ」

シックザールはそこまで言うと、組んでいた手を解いて背もたれに背を預ける。

「話は以上だ…健闘を祈る！」

「了解しました！」

扉を開けて部屋を後にするハイドは、「急いでシオを見つけなければ…」と、ソーマの下へ向かった。

それから約30分後…シオがいなくなった空母に、ハイドとソーマが降り立った。

待機地点で二人は神機を肩に担ぎながら、目の前に広がる破壊された甲板を見つめていた。

「お前ならもう気づいていると思うが…」

不意にソーマが口を開いて、ハイドが彼の方を見る。

「支部長が探してる『特殊なコアを持ったアラガミ』ってのは、シオに間違いない」

「だよな…やっぱり…」

ハイドが相槌を打つと、ソーマは話し続ける。

「俺はずっとあのクソ親父の命令で、そいつの探索を任されてきたんだ…」

思い返せば腸が煮え繰り返る出来事ばかり…自分の言葉に苛立って歯ぎしりをするソーマ。

だが、顎に込められた力はすぐに抜けていった。

「だが俺はシオを…あのヤロウに差し出すつもりはない」

「ああ、やっと出来た『心を許せる仲間』だもんな」

ハイドのその言葉を聞くと、顔を赤くしたソーマが巨大な剣をハイドに突き付ける。

「か、勘違いするな！俺やシオをオモチャにして勝手なことを考えてるのが気に食わねえだけだ…」

ふと今の状況を見たソーマは、「フ…」と何やら思い出し笑いをし

た。

「そういえば…最初に会った時も、お前に剣を突き付けたな」

「はは…そういえばそうだったね」

へらへらと笑うハイドの全身を見直してソーマが呟く。

「あの時のルーキーが気がつきやリーダーかよ…」

溜め息をついたソーマは、改めて空母を見渡す。

「アイツがこの辺りにいることは間違いないが…他のアラガミも活発化してるらしいな…」

「ああ…今日の討伐対象は『テスカトリポカ』…強力な新種アラガミだ」

「お前に限ってそれはないと思うが…気を抜くなよ？」

「了々解…行こうか！」

ハイドとソーマは高台から飛び降りて、任務が始まった。

テスカトリポカはクアドリガの最上位種で、発生地は地中海南部沖とされているが、詳細は不明となっているアラガミだ。

とてつもない火力を誇り、神機のオラクルを漏らす状態異常攻撃を繰り返す上、対象の頭上に突然ミサイルを出現させるといふ予測しにくい攻撃もしてくる。

非常に厄介な相手だが、シオの搜索となってはハイドとソーマでやるしかない。

二人は少し進むと、すぐに目標のアラガミを発見した。

クアドリガの前面装甲にあたる部分は緑色に染まり、遺跡の壁画のような人間の顔が描かれていた。

頭はまるで神の偶像を体現したようなものになっていた。

「いくぞ、ソーマ！」

「フン……」

二人は空母を捕喰しているテスカトリポカの背後に忍び寄り、同時に神機の口を装甲の間に突っ込んだ。

「ゲエゲゲゲ！？」

カエルのような独特な叫び声を上げ、テスカトリポカは振り向いた。

テスカトリポカの体が180度ターンした時には、すでに神機を振りかぶったハイドとソーマが空中にいた。

ズガンッ！！

二人の剣撃はミサイルポッドを破壊し、テスカトリポカは苦悶の声

を上げる。

着地した二人はそのまま足を斬るが、さすがにそう簡単にはいかせてもらえないようだ。

キンツ！と、硬い金属音が響いて、微かな血が吹き出ただけだった。

この隙に体勢を立て直したテスカトリポカは高く跳び上がると、大量の小型ミサイルと共に自身を降らせた。

巨体の着地による地響きとミサイルによる爆撃で、甲板は自然災害を受けたような惨状へと変貌する。

しかし、何事もなかったかのように爆煙から抜け出たハイドとソーマは、テスカトリポカに斬り込んでいった。

二人がテスカトリポカの後ろに着地した時にはすでに、頭を守るように覆っていた兜が破壊されていた。

そして、着地と同時にハイドはスタングレードを使用し、テスカトリポカの視力を奪うと神機を変型させて前面装甲に弾丸を撃ち込む。

そうして徐々についた傷にソーマが重い一撃をしつかり加えていき、テスカトリポカの眼が回復した時には前面装甲が破壊されていた。

反撃の隙をほとんど得られずに、体の部位を次々と破壊されていくテスカトリポカはついにダウンして、前面装甲をだらし無く開く。

この日、ハイドとソーマは事前に戦闘におけるコンビネーションの確認を徹底して行っていた。

搜索対象が『シオ』だということもあり、任務を迅速かつ丁寧に終わらせたかったのだ。

テスカトリポカをさっさと片付けて、シオを研究室に一刻も早く連れ戻したいというソーマの気持ちが全面に押し出されたせいか、二人でも苦戦するアラガミがこつも簡単に追い詰められている。

ハイドは、ソーマは実は協力して戦うことこそが真骨頂なのではないか…と、戦いながら密かに思っていた。

注文した通りに動いてくれるおかげで、先程から尋常ではない戦い易さを感じる。

二人は神機をがら空きになったテスカトリポカの肉体に突き立て、再びその血肉を糧にバーストする。

ソーマは神機を背負うように構え、力を溜め込む動作を行った。

そしてハイドが、そんな彼にアラガミバレットを撃ち渡してリンクバーストを発動させる。

「ぬうおあああああ!!」

ズガンッ!!!

一気に力を増大させたソーマのチャージクラッシュを受けて、テスカトリポカは頭から両断された。

噴水のように血が飛び散るテスカトリポカを一瞥し、ソーマはハイドに向き直る。

「よし…シオを探すぞ」

「ああ」

二人は空母を突き進み、シオの搜索を始めるが、彼女はさほど苦勞せずに見つけたすことができた。

あちこちを噛みちぎられたオウガテイルの死骸が転がる、不審な瓦礫の山を見つけた時…。

「ふふん、ふん、ふん…ふふうん、ふふん、ふふん…………」

以前聴いた歌声が頭上から降ってきたのだ。

二人が顔を上げると、瓦礫の山の頂上に座り込んで鼻歌を歌うシオがいた。

シオはしばらく鼻歌を続けていたが、突然…涙が一粒二粒と零れた。

「あ…なんだろー、これ…」

シオは自分の眼から流れ出た水滴を手の甲で拭う。

「これ…いやだな…」

胸の内に渦巻く、嫌な感情…その正体は彼女にはわからなかった。自分が何故涙を流しているのか…何故こんなにも苦しいのか…。

「別れの歌、だからかな…その歌は」

シオの疑問を解決するソーマの声が静かに響く。

「わかれの…うた…？」

ソーマに聞き返すシオは、不安げに首を傾げる。

「大切な人と会えなくなってしまう…そんなことを歌ってるんだ」

(へえ…そんな歌だったのか…アレ)

二人の会話を邪魔しないように頭の中で思考するハイド。

やがて、ソーマの言葉に表情を明るくしたシオが口を開いた。

「……………そっか、でも…またあえたな！」

「チツ…こっちが探してやってんだろぅがよ」

文句を言うソーマの口元は、微かに笑っていた。

「帰るぞ…シオ」

「そうだよ、シオ。皆心配してたんだから」

ソーマとハイドの呼びかけにシオは頷いた。

「うん」

「さあ、あとは帰るだけ……」と思いを緩める二人だが、シオが立ち上がったところで彼女の体に異変が起きた。

「っ!!」

「うづうづウウウウ!!」

シオは身の内の苦しみを押さえ込もうと体を縮こませるが、あの青い紋様がくつきりと現れていた。

「シオ! またか……!!」

ソーマが瓦礫の山に近寄ると同時に、シオはエイジスの方へと向かって歩いていく。

「……イカ、ナキヤ……」

夢遊病者のように歩みを進めるシオに、ソーマとハイドが必死で呼び止める。

「シオ!! そっちにいつちや駄目だ!!」

「待て!! 帰ってこい!! シオっ!!」

二人の声に足を止めて、シオは振り返る。

そのままボウツとした表情でシオは二人を見つめていたが、やがて気を失ってその場に倒れ込んだ。

「おい…どうしたんだ！？おい！！」

「シオ！しっかりしろ！」

起き上がる気配はなく、ソーマは悪態をつきながらハイドに言葉を放つ。

「クソツ！！なんだかわからねえが、アナグラへ戻るぞ！」

「ああ！急いで博士に見てもらわないと…！！」

瓦礫の山を登った二人はシオを担ぎ出し、帰投へりに乗り込んだ。

五十一 喰：別れの序章（後書き）

もっと厚みのある話を練り出せないのか！？と自分を叱咤しています。

増やせる箇所を見つけたら徹底して増やすように心掛けます。

それでは皆様、ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966x/>

神を喰らう者～夜明けの開花～

2012年1月3日02時46分発行